
バカとテストとアノ人達

アナザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストとアノ人達

【Nコード】

N1213T

【作者名】

アナザー

【あらすじ】

(旧タイトル 「バカテスの世界に来たアノ人達」)

「バカとテストと召喚獣」の世界に「ゴッドイーター」「魔法少女リリカルなのは」「テイルズオブジァビス」「これはゾンビですか？」「テイルズオブヴェスペリア」インフィニット・ストラトス「IS」「ハヤテのごとく！」のキャラクターが元々いたという形で入った作品です。現在は原作第二巻が終わり日常編です。ちなみに最初にいる原作は「ゴッドイーター」「魔法少女リリカルなのは」「テイルズオブジァビス」です。書いていくうちに後から「これはゾンビですか？」「テイルズ

「インフィニット・ストラトス オブヴェスぺリア」「IS」「ハヤテのごとく！」のキャラが入って来ました！

基本はバカテスです。誤字脱字やいろいろありますがスルーをお願いします。後、まあ、ggdgdな駄文ではありますがそれでも良いなら見てってください。

*アンケートを終了しました。皆様投票どうもありがとうございます。

第0問 振り分け試験

振り分け試験当日

はやてside

「ええ！？フェイトちゃん、風邪で休み！？」

以外や……………あのフェイトちゃんが……………

「うんリンディさんの話によると昨日から二日前からいつもより顔が赤くて今日、学校に行こうとしたら倒れたらしくて熱を測ったら38度ぐらいあったって聞いたよ」

フェイトちゃん無理しとったんかな……………

リュウトside

「……………治りませんでした、すみません……………じほっじほっ……
…頑張ってくださいね……………」

「……………ああ。アリサもお大事に」

ピ。

「どうだった？」

「やっぱり間に合わなかったっぽい。アリサならAクラスになれたろうに」

もったいないが仕方ないな……………

「んじゃ。俺たちも行くか」

「そうですね」

とライガとレンが言った。

「そうだな。じゃあ行くか」

ルークside

「あのティアが風邪か……………珍しいよな……………」

朝、ヴァン先生から電話で「ティアが風邪をひいてしまった。しかし、当の本人はお前のことを心配していたぞ」と言われた。

「お前が春休みだからと言って遊びに連れまわしたんじゃないだろうな？」

「なっ！なんでそうなるんだよ！！」

クツソ〜。アッシュのヤロー、いつかギャフンと言わせてやるからな……………

……………そうだ！！！

「そつえばお前の愛しのナタリアがこね〜よな〜」

「こぶっ！なっ何いってんだルーク！！」

よし。仕返し成功！！

「アッシュ？ルーク？何の話をしていましたの？」

おっ！ナイスタイミング！！

「うおっ！？ナタリア……いつ来た……」

「今さっきですわよ。ところで何の話をしていましたの？」

「そっそれh「なかなかナタリアが来なくて心配してたんだよな」
なっルーク！！」

「あらそうでしたの。ありがとうアッシュ（ニコッ）」

「／／／チツ！サツサと行くぞ！！」

よし。いいストレス発散になった。スッキリしたし振り分け試験で
頑張ってみるか！！

明久 s i d e

「それではクラス振り分け試験始め!!」

カリカリカリカリカリカリカリ.....

「三権分立」は「司法」「立法」ともう一つは何で成り立つか.....

これなら簡単だ...二つまでは絞れる!!

「憲法」か「漢方」のどっちかだったはず!!

難しいと噂の試験だけどこの程度なら、十問に一問は解ける!!

二十点は堅いな……

ガタンッ！！

んっ？誰か倒れた……って！

「ひつ姫路さん！？」

「吉井！！試験中だぞ！！席につけッ！！」

「でも姫路さんが……」

「姫路…体調が悪いなら保健室に行くか？ただし試験中の退室は無得点」扱いとなるがそれでいいかね？」

そんな……

「具合が悪くて退席するだけで、それは酷いじゃないですか！！」

「……………退席します……………」

リュウトside

なんか隣が騒がしいな……………

まっいいか。

今はテストに集中しとかん「ガタンっ!!」なッ!

「オイアンタ!大丈夫か!?!」

突然前の席のやつが倒れだした。

「神崎!!何をしている!席につけ!」

「ふざけんな!いきなり人が倒れたら心配するだろ!?!」

「神崎、貴様ツ!試験中に席を立つなどカンニングとみなすぞ!!」

「勝手にしやがれツ!保健室行くぞ。立てるか?」

「……………(コクッ)」

「……………そうか。先生。俺の事は無得点扱いで構わないぜ」

そういつてこいつを保健室に連れて行こうとすると、

「僕も行きます。先生。僕も彼と同じで構いません」

と言ってレンがこっちに来た。

「いいのか？」

「いいんですよ。あなたのが移ったのかもしれないね」

「そーかもな……………」

第0問 振り分け試験（後書き）

リユウトとライガはゴットイーター側のオリキャラです。

感想などお願いします。

第1問 クラス発表と自己紹介と戦争の引き金 (前書き)

クラス発表と自己紹介のところでは。

第1問 クラス発表と自己紹介と戦争の引き金

フエイトside

「今日がクラス発表……」

「二人とも災難やったね」

「にやははははは……」

はやてから聞いた話だけど、なのはは振り分け試験中に熱を出して倒れてしまい途中退席による無得点扱いになってしまった。

それでなのはを保健室へ連れて行って同じく無得点扱いになった人がいた。

「あっ西村先生がいるよ」

「ホントだ。もう着いたんだ」

校舎のすぐ近くに生活指導の西村先生が居た。

「「「おはようございます。西村先生」「」」

「おはよう三人とも。わかっていると思うが今日はクラス発表の日だ」

そういつて西村先生が持つている箱からそれぞれ三人の名前が書かれている封筒をそれぞれに渡した。

「それにしても残念だったな二人とも。高町とハラウオンはAクラスの実の人の内の一部だったからな」

「にやははは……………」

「あはははは……………」

そう話しているとはやてが、

「ところでなのはちゃんを保健室に連れて行った人ってどんな人やるか？」

「確かに会ってみたいかも」

「そういえばまだお礼を言ってないの」

どんな人が考えていたら、

「ん。噂をすればか」

「「「えっ」「」」

西村先生が見た方向を見ると五人校舎に向かってくる人がいた。

「なあ、なのはちゃん。誰がなのはちゃんを保健室に連れて行ってくれた人や？」

「ええつと、たしかあの髪が青い人だよ」

あれっ、あの人は、

「神崎!？」

「ふえ？フェイトちゃん知り合いなの？」

「うん。一年の終業式が終わった後、買い物に行ったら男の人に襲われそうになったと時に私を助けてくれた人だよ／＼／＼／＼／＼／＼／」

忘れることなんてできない。だって私は……………

「（んっ？フェイトちゃんの顔が赤くなっとな…まさか!……………ふっふっふ……………いい情報ゲットや!）」

何か嫌な予感がした……………

リュウツside

「あつ、校舎につきましたよ」

そういつて俺とアリサとコウタとライガとレンは校門にいた28号の
のところに行った。

「「「「「おはようございます、西村先生（鉄人）（28号）」」」」」

「おはよう。神崎、藤木。お前らは何度言ったらわかる。西村先生と呼べ」

「わかったよマジンガー」

「わかりましたアイアンマン」

「さっきよりひどくなっているぞ!?!」

うん。面白いよね先生。 Sです。

「……………まあいい。ホラ、受け取れ」

とりあえず俺たちは先生から封筒をもらった。

「しかもつたいないな神崎、アミエーラ、雨宮。お前たちはA確定だろうに」

「体調管理を怠った私の責任です」

「僕もリュウトの甘さが移っちゃったかもしれないね」

甘さって……………

「レン。困っているやつを見逃せることなんて俺にはできない。世界中全部は無理だけど、できる範囲なら助けてやりたい」

まあ、これは俺のエゴだけだな。

「それにAかBにはぜってーアイツがいるしな……………(ボソッ)」

アイツと同じクラスは絶対嫌だ。

ソーマも嫌だというだろう。

「ライガは何クラスでしたか？」

そう考えていたらアリサがライガに訪ねていた。

「ん？おっAだわ」

「さすがだな。よっしゃ、次は俺d「「「Fだな」「何！
？俺ってそんなにバカにm「「「見える（な）（ます）（「「
「「んなわけあるか！見てろよ」！」

バツ！ コウタが封筒から紙を出す音

パサツ…… コウタが紙を落とす音

しくしく…… コウタが地面に手をつけて泣いている音

ポンポン×4 俺とアリサとライガとレンがコウタの肩を叩く音

「んじゃ。行くか」

「切り替え早っ!?!」

暫くコウタを慰めてライガが言って校舎の中に入っていった。

それに続いてレンやアリサ、コウタ（まだ泣いてる）も行った。

さて、んじゃ俺も「まっ、待って!」……………ん？

声の主に振り返ってみたらなんか見たことのある二人の女の子と初対面の女の子がいた。

ん……………あのサイドポニーは……………

「あんたは……………振り分け試験の時の……………」

「あっはい！高町なのはです！えっと……」

「ああ、俺は神崎リュウトな。どうしたんだ高町？」

俺、なんかしたっけ？

「えっと……振り分け試験の時はありがとございました！それと……ごめんなさい……」

ああ……そのことが。

「別に。気にしてないから礼なんて言わなくていいって」

「でも……」

「んじゃあ俺からの頼みだ。あの時のことはなかったことにしてくれ」

「えっ……」

「それならいいだろ？」

「……うん、わかった！」

うしっ。これでいいな。

「……ところであんたは？」

俺は茶髪の女の子に問いかけた。

「あつわたしは八神はやて。よろしゅーな神崎さん」

「そうか。よろしくな八神。あと、さんはつけなくていい」

関西弁なのか。

「あんたは……確か……ハラウオンだったっけ？」

「うん。フェイト・ハラウオンだよ。よろしくね（覚えててくれて
たんだ／＼／＼／＼／＼／＼）」

「おお、よろしく」

そうお互いに挨拶していると、

「四人とも。そろそろ教室に上がったほうがいいぞ」

そうマジンガーZが言ってきた。

時計を見ると確かに話しすぎたな。

「んじゃ。教室に行きます」神崎リュウト。至急校長室に来てくだ
さい「……なるほど」

「どうしたの神崎？何かしたの？」

ハラウオンが聞いてきた。

「まーちよつと野暮用だ。先に行つといていいぞー」

はやてside

「それにしても、いい人やったね神崎。あんな簡単に許してくれるなんて。……………ん？」

「なのは？」

「……………(ぽお〜)……………」

顔を真っ赤にして神崎の行った方向をずっと見てる……………

おや……………

「なのはちゃん、神崎に惚れたんか？」

「ふえっ！？／／／／／／／／／／／／／／／／」

「！？」

あつフェイトちゃんまで驚いとる。

「それで？どうなん？」

「……………／／／／／／（コクッ）」

顔を赤くして小さく頷いた。

「いや〜！なのはちゃんにもついに春が来たんか！」

「お、大声で言わないで〜！／／／／／／／／／／／」

「フェイトちゃんどうする？ライバルができたで？」

「ッ！？／／／／／／／／／／／／」

「えっ！？」

おお。顔赤くして驚いとる。

「まさか……………フェイトちゃんも？」

「……………うん／／／／／／／／／／／」

「そっ」

二人が残念そうにうつむく。

そして、

「……………負けないから」

「……………私もの」

二人が決意を秘めた目で宣戦布告した。

……………「いつは面白くなりそうや！」

ルーク side

「ルーク!!なんで貴方はいつも起きるのが遅いの!?!これ完全に遅刻よ!」

「わかってるって!!」

今、俺は寝坊してしまって、幼馴染のティア・グランツと走っていた。

「遅刻だぞルーク、グランツ」

校門の前には鉄人がいた。

ちなみに鉄人が俺を名前で呼ぶのはアッシュとかぶるからだ。

木下は姉と弟で呼び分けられるが俺たちはそうはいかないから名前ですんでいる。

「ルーク。たまにはグランツに迷惑が掛からないように早起きできるようになれ」

返す言葉もない……………

「ホラ、受け取れ二人とも」

鉄人はそう言っただけにそれぞれの名前が書かれている封筒を渡した。

封筒を開けた。

F

ただそう書かれていた。

「アレ？先生！俺かなり解いたはずですよ！？」

あんなに頑張ったのに！

「ああ。確かにあれはDぐらいは行けた。名前を書いていけばな」

えっ？マジで？

「ルーク、あなた……………」

「マジですいませんでした」

謝るしかない。

俺がティアに謝っていたら、

「吉井。遅刻だぞ」

バカの代表者、吉井明久が来た。てか、俺より遅いのかよ……………

「あ 鉄じ…西村先生おはようございます」

おお。いきなりか。

「今「鉄人」って言わなかったか？」

「ははっ、気のせいですよ（汗）」

鉄人に迫られて焦る吉井。

「ん、そうか？まいい…ホラ受け取れ」

「あ クラス分けの…どーもです」

「一応言っておくが頭のいい奴はAクラス悪い奴はFクラスだぞ」

「やだなあ。僕がそんな事間違えると思ってるんですか？」

((間違えそう……………))

俺とティアは同時にそう思った。

「吉井、今だから言うがな俺はお前を去年一年見て「もしかすると吉井はバカなんじゃないか？」なんて疑っていたんだ」

「それは大いなる間違いですね。今に「節穴」ってあだ名にされますよ」

((お前の (あなたの) その考えが間違いだ (よ)))

また俺たちはそう思った。

「ああ。試験の結果を見て先生は自分の間違いに気が付いたよ」

「そういつてもらえると嬉しいです」

吉井は笑いながら封筒の中から紙を取った。

そして、先生も笑いながら言った。

「喜べ吉井。お前への疑いはなくなった」

吉井は紙を見た。

そしたら俺たちにもチラッと中の文字が見えた。

F

西村先生が吉井の肩に手を置いて言った。

「……………吉井。お前は大バカだ」

廊下を歩いて教室に向かっていくと、

「ところで二人ともFクラス？」

と吉井が聞いてきた。

「ああ。ルーク・フォン・ファブレだ」

「ティア・グランツよ」

「僕は吉井明久。よろしく二人とも」

そう自己紹介しながら歩いていくとFクラスの教室についた。

扉を開けると、

「早く座れ！！このウジ虫野郎！！ってルーク！？」

いきなり中学の親友、坂本雄二に罵倒を食らった。

「へえ。俺とティアにそんなこと言うんだ……………」

「あなた……………あまり変わらないわね」

「ねえルーク。今の言い方だと僕はどうでもいい感じって言っている気がするよ」

「お前はどうでもいい」

「雄二もルークも酷くない！？」

明久は半泣きだった。

「ところで雄二何やってんの？」

「先生が遅れてるらしいから代わりに教壇に上がって見た」

代わり……………？

「ってことは雄二お前が……………」

「ああ。俺がFクラス代表だ」

そう話していると、

「えーちよつと通してもらえますかね？それと席についてもらえますか？HRを始めますので」

担任らしき先生が入ってきた。

俺たちはとりあえず空いていた席に着いた。

「リュウト、戻ってきませんね……………」

リュウトさんがなかなか戻ってこないためアリサさんがかなり心配していた。

「大丈夫ですよ。リュウトは戻ってきますよ。それに多分内容は腕輪の事ですから」

「そうですね……………」

まだ心配なようだ。

そしてHRが始まった。

「えーおはようございます。二年F組担任の……………福原慎です。よろしく願います」

黒板にチョークで書こうとしたがチョークが無かったため書くのをやめた福原先生。

チョークさえも用意されないのですかFクラスは……………

「まずは設備の確認をします」

Fクラスの設備は……………

「卓袱台、座布団、えー……………不備があれば申し出てください。必

要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

ここは本当に教室ですか？Aクラスとは雲泥の差ですよ？

「では自己紹介でも始めましょうか。そうですね廊下側の人からお願います」

こうして自己紹介が始まった。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。今年一年よろしく頼むぞい」

木下さんは……女の人の方……いや男の人のだ……
……危うく女の人方と間違えるところだった。

「……………土屋康太」

彼もFクラスだったんだ。

「あつ、レン。君もFクラスなの？」

「うん。ちょっとわけありだね」

明久が僕に気づいて話しかけてきた。

「それにしても女子がないね」

「しかたありませんよ」

学力最低クラスとなるとそうそういないだろう。

そう考えていると、

「　　です。ドイツ育ちで日本語は読み書きが苦手です」

「おお！女子の声！！」

「明久。反応が早いね」

すごい瞬発力だった。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

「誰ッ！？」

そしてすごい趣味だ。

ってそんなの島田さんしかないか。

「はろはろ。吉井。今年もよろしくね」

次は……………コウタか。

「俺は藤木コウタ！！よろしく！！」

「元気すぎですよ……………」

そして、

一瞬で静かになった……………

「ええ。では次の人」

「……………空気読めよ！……………」

先生が一気に空気を壊した。

しばらくして

「高町なのはです。一年間よろしくお願いします……………」

「……………うおおおおおお……………」

「……………」

カオス再び。

「高町さん……………」

「好きだあ……………」

「付き合ってくれ……………」

熱気がすごいな。

しかし、高町さんが、

「ごめんなさい。私、好きな人がいて……………／／／／／／／／／／」

「……………」

この発言で今度は一気に葬式モードになったFクラスであった。

「えー、では次の人」

「……………またか!？」……………」

先生すごいな……………

「フェイト・ハラウオンです。よろしくおねがいます」

「……………うおおおおおおお!!……………」

三度目のカオス。

あと島田さんが少しいじけていたのが見えた。

「ごめんなさい。私もなのと同じで……………／／／／／／／／／／／／」

「……………(シクシク)……………」

今度は泣き始めてしまった。

すると一人が、

「あの……高町さんとハラウオンさんは誰が好きなんですか？」

「ふえツ！？／／／／／」

「えツ！？／／／／／」

いやいや、普通は自分の好きな人を聞かれても答える人はいない。「神崎リュウト（君）のことが好きです（なの）！！／／／／／／／／／／」……いた。

何だろうFクラスのほとんどから黒いオーラが見える。FFFだんが動きそうだ。

「リュウトのヤロー！！」

コウタが怒りに燃えていた。

後ろから炎が見えるぐらい。

まるで活性化したシユウみたいだった。

アリサさんは不機嫌そうな顔をしていた。

アリサさんもリュウトのこと好きだからね。

まだ思いは言ってないけど。

……………あれ？なんだか秀吉もアリサさんみたいな顔をしている。

まさか……………いやいやさすがにね……………

そしてまた先生の空気破壊によって自己紹介が再開。

「ルーク・フォン・ファブレだ。よろしくな！」

ファブレ……………ファブレ家の息子かな？他の人は気づいてなさそうだ。

「ティア・グランツです。よろしく申し上げます」

まずい！…このままでは……………！

「……………うおおおお」お断りします……………(シクシク)……………

……………すごい。一撃必殺だ。

「グランツさんも好きな人がいるんですか？」

「いいえ、いません。ですがいちいちこうしていたら自己紹介が進まないと思って」

「……………もつともです……………(シクシク)……………」

僕とファブレスさんとコウタと秀吉と女性人以外の「ダーリン」コールだった。

これはすごい……。暑苦しい。

その時、

ガラッ

「あの……。遅れてすいま……。せん」

「おいおい……。大丈夫か？瑞希？」

「あっはい！大丈夫ねす！／／／／／／／／」

「瑞希……。噛んでるぞ」

リュウトとピンクの髪をした女の人が入ってきた。

「丁度自己紹介をしているところなのであなた達もお願いします」と先生が二人に行った。

「はっはい！あの、姫路瑞希といいますよろしくお願いします……」

「俺は神崎リュウト。よろしくな」

「はいっ！質問です！」

いきなり一人の生徒が席を立てて手を挙げた。

「んっ？何だ？」

「えーと……二人はなんでここにいるんですか？」

失礼な質問だけどそう思うのは普通だと思う。

二人は僕やアリサさんや高町さん達と違い、1年の時は一年生350人中常に上位一桁に入っていた。

僕たちは上位三十名に入るぐらいだった。

そんな二人がFクラスにいるのは確かに驚きだろう。

「そ、その……試験の最中高熱を出してしまいました……」

「俺は……まあいろいろな」

その言葉にFクラスは、

「ああなるほど。俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに……」

「ああ化学だろ？アレは難しかった」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いてそれどころじゃなくな……」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくてさあ」

「今年一番の大嘘をありがとう」

「……………これは予想以上だ。」

「そう言えば雨宮や高町やルークは、どうしてFクラスに？ルークはDぐらい行けただろ？」

「僕もリュウトと同じようにちょっとね」

「私は姫路ちゃんと同じかな」

「私は風邪で休んだから」

「あつ、私もです」

「私もよ」

「名前を書き忘れてな……………」

上から僕、高町さん、ハラウオンさん、アリサさん、グランツさん、ファブレさんという順だ。

そう話していると先生が、

「はいはい、その人達静かん」ガラガラ……………」え〜〜替えを用意してきます」

教壇の机を叩いたら机が崩れてゴミと化した。

……………ホントに教室ですか？

「雄二、ちよつといい？」

「あ？」

先生が教室から出ていくと明久と雄二が廊下に出た。

「おぬしがFクラスに来るとは以外じゃったぞ、リュウト」

「ん？秀吉か？優子は元気か？」

「……………こんな時ぐらい姉上の話はしないでほしいのじゃ」
ソツ（）」

「？何か言ったか、秀吉？」

「なんでもないのじゃ」

「そうか。しかしホントに女みたいな顔してるよな（ナデナデ）」
そう言っつて秀吉の頭をなで始めた。

「なっ！／／／／子供扱いするでない！／／／／」

二人はじゃれあい始めた。

懐かしいなこの光景。

終業式以来だね。

「ところでじゃが、おぬしと姫路は知り合いか？」

「確かに気になりますね」

「あつ私も知りたいの」

「そつえばさつき瑞希って呼んでたよね？」

「私も知りたいです」

僕、高町さん、ハラウオンさん、アリサさんも会話に加わった。

「えっと……リユウトさんは小学生の時私を助けてくれたんです

／／／

「……………えっ？」「……………」

さっきまで会話に加わってなかったコウタ、ファブレさん、グランツさんも会話に入っていた。

「ああ。確か瑞希の住んでいたマンションが火事の時だったか？」

「……………火事！？」「……………」

「ああ。ちょうどそんな時に燃えてる家の中から声がしてな。聞いてみれば中に俺と同じぐらいの女の子がいるって聞いたときに俺は家の中入ってから瑞希を探してから一緒に外に逃げたっけ」

「はい／／／／あの時は本当にありがとうございました／／／」

「もういいって。無事で何よりだ」

姫路さんは嬉しそうに顔を赤くしている。

まさか姫路さんもかな？

そして雄一は……

「FクラスはAクラスに対し「試験召喚戦争」を仕掛けようと思う！」

試験召喚戦争の引き金を引いた。

第1問 クラス発表と自己紹介と戦争の引き金 (後書き)

次の話の前に少しオリキャラやオリ設定を説明しておこうと思います。

オリジナル設定について

こんにちはアナザーです！

この作品「バカテスの世界に来たアノ人達」を読んでいただきありがとうございます！

今回はオリジナル設定を話します。

まずはキャラクターからです。

ルークについては髪が短髪バージョンということですが。

リュウトとライガについてはこちらです。

名前

神崎リュウト

身長

175?

見かけはFF?のスコールの顔にキズがなく顔と体つきが中性的になり、髪が蒼くなり瞳が薄く透き通った水色になったかんじです。

性格

困った人を見かけるとすぐに助けに行こうとする。

他人のために自分を犠牲にする。

仲間を傷つける奴には容赦はしない。

趣味はスポーツや運動

嫌いな食べ物はキノコと貝

鈍感である。

ちなみに女装をすると意外に綺麗。

名前

村雨ライガ

身長

178?

見た目はTODのリオンの髪が紫で瞳が琥珀色になったかんじ。

性格

冷静。

誰かのサポートをするのが得意

嫌いな食べ物はフルーツ全般

趣味は読書

リュウトの過去の一部

小さいころからコウタ、アリサ、ライガ、レンと一緒によく遊んでいた。

ちなみに雨宮リンドウと橘サクヤは結婚してレンを産んだ。

そして小学二年の頃に火事にあつた姫路を助け小学校で友達になる。

そのまま明久とも友達になる。

リュウトは中学は親の都合でみんなと離れてしまつが高校で一人暮らしを始め再開を果たす。

高校一年の終業式が終わりに少し散歩していたら男に囲まれているフエイトを発見し救出する。

そして、第0問があつて今に至る。

高町なのは

服装はSTRICKERSの時のバトルジャケット

装備も同じ

攻撃は主にスフィアなど

腕輪能力

「砲撃」

デイベインバスターなどの砲撃を点数を消費して使える

フェイト・ハラウオン

服装はなのと同じようにSTRICKERSから

武器も同じく

フェイトはバルディッシュによる近接戦闘が基本

腕輪能力

「形態変化」

ザンバーやソニックに点数を消費して変わることができる

八神はやて

服装も装備も二人と同じ

遠距離攻撃を基本にしている

腕輪能力

「強力魔術」

ラグナロクなどが点数を消費して使うことができる

神崎リュウト

服装の「ゴットイーターバースト」の黒のスイーパーをトップスとボトムス両方着ている

装備はもちろん神器（制御ユニットや強化パーツは無し）

刀身はバスターブレード「アメノムラクモ 秘」

銃身はスナイパー「シヴァ 絶」

装甲はタワーシールド「ユミル 硬」

スキルは

体力 大

神攻撃力

カリスマ

神医

ガード被ダメージ減少

雷被ダメージ減少

器用

刀身による一撃で仕留める戦い方をする

チャージクラッシュはいつでも使える

腕輪能力

アラガミバレット「ハンニバル種」

刀身解放「封印サレシ大剣」「竜殺し」

点数を消費し刀身を一時的に変形させる
リミットを過ぎればアメノムラクモに戻る

村雨ライガ

服装はリュウトと同じで紫のパーカーを両方着ている

刀身はロングブレード「ヘルサイズ 極」

銃身はブラスト「バロール 真」

装甲はバックラー「獣装老陽 硬」

スキルは

オートガード

消音

ハイドアタック

封神大

駆除部隊

補足時間

主にカウンターを狙うような戦い方をする

ちなみにインパルスエッジは使えない

腕輪能力

アラガミバレット「シユウ種」

「死神」

点数が一秒ごとに減っていくが攻撃力がかなり上がる

アリサ・イリーニチナ・アミエーラ

服装と装備は原作と同じ

刀身と銃身をうまく使い分けて戦う

腕輪能力

アラガミバレット「アルダノーヴァ種」

インパルスエッジ「属性変化」

点数を消費しているんなインパルスエッジが使える

藤木コウタ

服装と装備は原作と同じ

アサルトをつまく使って戦う

腕輪能力

アラガミバレット「クアドリガ種」

もう一つはコウタが四百点以上とれるか不明なためわからない

雨宮レン

レンも同じく原作と同じ

小回りの利く戦い方をする

腕輪能力

アラガミバレット「ヴァジュラ種」

「透明化」

かなりの点数を消費して召喚獣を自分の仲間にしが見えなくする

ルーク・フォン・ファブレ

原作の時の服装で武器はローレライの鍵

戦い方も原作どおり

腕輪能力

「超振動」

点数をかなり消費して超振動で攻撃する

ティア・グランツ

ティアも原作どおり

腕輪能力

「譜術」

点数を消費して譜術で攻撃する

アッシュ・フォン・ファブレ

彼も原作同様

ただし武器は教団の剣

腕輪能力

「超振動」

ルークと同じ

それでは引き続き本作をお楽しみください！！

第2問 Dクラス戦始動（前書き）

問題

以下の問いに答えなさい。

「調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい」

姫路瑞希、神崎リュウト、アリサ・エ・アミエーラ、神崎レン、高町なのは、
フェイト・ハラウオン、ティア・グランツの答え

「問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。合金の例……ジュラルミン」

教師のコメント

正解です。合金なので「鉄」では駄目という引っ掛け問題なのですが、みなさんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

「問題点……ガス代を払っていなかったこと」

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

「合金の例……………未来合金（すぐ強い）」

教師のコメント

すぐ強いと言われても。

藤木コウタの答え

「合金の例……………女神血石など」

教師のコメント

そこまでしなくていいかと……………

ルーク・F・ファブレの答え

「問題点………炎がアッシュの「エクспロード」である点

教師のコメント

鍋どころかそこから一帯が燃えてしまいます。

第2問 Dクラス戦始動

リュウトside

Aクラスに対して宣戦布告の提案を出した雄二。

しかし、クラスの反応は……………

「勝てるわけがないだろ」

「これ以上設備を落とされるのは嫌だ」

「姫路さんとアミエーラさんがいるなら何もいらぬい」

「高町さんとハラウオンさんとグランツさんが居れば十分だ」

……………なんか後半からおかしい気がするぞ？

しかし、そう思うのはしかたないな。

ここ、文月学園のテストには百点満点なんていう上限がない。

一時間以内なら好きなだけ問題を解くことができ、それで得た点数が「召喚獣」の強さに反映する。

そのためAクラスとFクラスでは点数の桁が違いすぎて話にならん。

しかし、雄二は、

「そんな事はない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」
と自信満々であった。

しかしクラスはざわつくばかりだ。

「無理に決まってんじゃん」

「そう言われても何の根拠もないしなあ……………」

「根拠ならあるさ。このクラスには勝つことのできる要素がそろっている。それを今から説明してやる」

そう文句を言い合つ中、雄二が言った。

……………へえ。

んじゃ、教えてもらおうかね。その根拠ってやつを。

明久side

根拠？何それ？聞いてないよ？

そこでリュウトが言った。

「おい、ムッツリーニ。お前はいつまで姫路のスカートの中見てんだ？」

「……………！！（ブンブン！）」

「はッはわッ!？」

そうリュウトが驚いた姫路さんがリュウトに抱きついた。

そしてムッツリーニは手を横に振っている。

おのれリュウト!…姫路さんに抱きつかれるなんて!…なんとつら
やましい!…!

「あ〜よしよし」

リュウトは姫路さんの頭をなでている。

リュウト貴様！いつか必ず殺す！！

「土屋康太。こいつがあ有名な「寡黙なる性識者」^{ムツツリーニ}だ」

「……………！（ブンブン！）」

いまだに否定しようとするムツツリーニ。

「馬鹿な……………奴がそうだというのか」

「見る！まだ証拠を隠そうとしているぞ……………」

「ああ。ムツツリーの名に恥じない姿だ……………」

瞬く間にその名は広まっていった。

「姫路とグランツ、高町やハラウオンそれにアミエーラの事はみんなその実力をよく知っているはずだ」

「え？わ、私ですか？」

「私も？」

「にゃはははは……………」

「私もなの？」

「私もですか？」

「ああ。うちの主戦力だ！期待している！」

そういつと、

「そつだ！俺たちには姫路さんたちがいる！」

「彼女たちならAクラスにも引けはとらない！！」

「ああ！彼女たちさえいれば何もいらぬないな！！」

誰だ？さつきから五人に熱烈なラブコールを送っている奴は？

「それに木下秀吉だつている」

「ワシもか？」

「演劇部のホープ！

「ああ。アイツの確か双子の姉が……」

「Aクラスの木下優子だつて？」

クラスがどんどん明るくなつていく。

指揮も上がつてきている。

「さらに秘密兵器にリュウトとレン、そしてAクラスほどではない

「がルークだ」

「そこまでのじゃねーけどな」

「頑張ってみますね」

「やってやるか!」

「秘密兵器だと!?!」

「二人はそれほどの強者なのか!?!」

さらに指揮は上がっていく。

「当然、俺も全力を尽くす」

「確かになんとかやってくれそうな奴だな」

「坂本って小学生の頃、神童とか呼ばれてなかったか?」

「おいおい。じゃあ実力がAクラスレベルが八人もいるのかよ!?!」

「これはいけるんじゃないか!?!」

「よし! やってやろうじゃねーか!?!」

指揮は最高状態だ!!

「それに吉井明久と藤木コウタだっている」

シン……………

指揮が一気にダウンした。

……って！

「なんで僕とコウタの名前出したの!？」

「そつだぜ!!せつかく上がった指揮が台無しじゃねーか!！」

僕とコウタが雄二に向かって怒鳴る。

せつかくかなり上がっていたのに!!

「誰だよ吉井明久と藤木コウタって？」

「それ以前にこのクラスにいたか？」

存在までは忘れられてた!？」

しかし雄二が、

「そうか。知らないのなら教えてやる。こいつの肩書きは、「観察
処分者」だ!!」

そういった。

しかし……

「……………それってバカの代名詞じゃなかったっけ？」

「ちっ違うよ!!」

「そっだバカの代名詞だ」

「オイ雄二！肯定すんな!!」

僕とコウタががんばって否定しようとしたが無理だった。

「とにかくだ!!俺達の力の証明としてまずはDクラスを征服して
みようと思う!皆、この境遇には大いに不満だろう?」

「……………当然だ!!!!」

数分後

「騙されたあつ！……！！……！！」

こっ、殺されるかと思った！！

その言葉を聞いた雄二が、

「やはりそうきたか」

ブチコロスゾコラ。

「そんなことより今からミーティングを行うぞ。明久、姫路、島田、秀吉、ムツツリーニ、あとリュウト、レン、アミエーラ、コウタ、それから高町にハラウオン、ルークとグランツも来てくれ」

そして僕らは屋上に向かった。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」

と雄二の問いに答える明久。

「じゃあ先にお昼ご飯ってことね？」

昼飯か……

「明久。今日ぐらいまともなモン食つとけよ？」

「そう思うならパンでもおごってほしいんだけど」

このバカが。どうやって生きてるんだか。

「ん？明久って昼食べねえのか？」

「いや……一応食べてるよ」

いやいや……

「明久の主食は水と塩でしたよね？」

とレンが言う。

「失礼な！……きちんと砂糖も食べてるよ！」

「それは食べてるとは言わないと思つた……」

「舐めるが正しいよね……」

皆の妙にやさしい目で明久を見る。

「まっ、飯代まで遊びに使うお前が悪いよな」

「こいつはゲームや漫画に金を使い込んでるからな」

料理はできるのにな、コイツ。

「まったく……少しはリュウトを見習ってくださいよ」

おいおいレン……ここで俺を出すなよ。

「えっ？神崎君もお金が無いんですか？」

「まあ親の都合もあってからな。仕送りはあるけど足りない分は自分で稼いでるんだ。それに節約の為に昼飯は極力少なくしてるんだよ」

まあ、いい運動になるからないけどな。

そして瑞希が、

「あのっ、良かったら私がお弁当作ってきましょっか？／／／／／／」

と言った……………

「……………一応聞くけどよ。もう化学薬品を入れたりしてないよな？」

「はい！もちろんです！！」

「……………化学薬品！？」

まあ普通は驚くよな……………

「小1の時に瑞希から手料理をごちそうしてもらった時があつて食べようとしたら飯から塩酸の匂いがしてたんだ。それで料理に何を使ったか聞いたら調味料に化学薬品を入れてたんだからな。これは料理じゃなく殺人兵器だつて言ったら思いっきり泣かれたな」

「もつ。もう！思い出させないでください！！……………」

「それからちゃんとレシピを見てちゃんとした料理を作ろうと努力したんだよな？」

「はいっ！……………」

うん。楽しみだ。

「じゃ、じゃあ私も作ってくるの！！……………」

「わっ、私も！！……………」

「私はお菓子ぐらいなら…… / / / / /」

「んっ？いいのか？」

「うっ、うん！ / / / / /」

「いいよ / / / / /」

「大丈夫です / / / / /」

「そうか？ありがとな、高町、ハラウオン、アリサ」

「うん！！ / / / / /あと、私のことはのはって呼んでほしいの / / / / /」

「わっ、私のこともフェイトって呼んでもいいよ / / / / /」

「そうか？んじゃ、あらためてよろしくな、なのは、フェイト」

「 / / / / / / / / / / /」

なんか二人とも幸せそうな顔して赤くなり始めた。

「とにかく話を戻すぞ。俺たちにはAクラスの上位レベルがすでに7人いる。この時点でEには楽に勝てる。だが、無駄な戦いで7人を使いすぎたら敵に対策を練られてしまう。ちなみにDを選んだのは少し上のクラスを倒すことによって指揮を上げるためにはちょうどいいからだ」

まあ、確かに俺たちの多用は後から危険になる。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。いいか？お前ら。ウチのクラスは最強だ」
なるほどね。

おもしろい一年間になりそうだ………！

「先生！次の問題をください！」

「はい」

「先生、僕もお願いします」

「……………はい」

「先生俺も」

「……………先生をもう一人呼んできてください」

「……………はい」

すごいなこの光景は……………

俺達は無得点扱いを受けたのでまとめて回復試験を受けていた。

しかし、俺以外はものすごい速度で問題を解いている。

ってか、もうカリカリって音がものすごい速度で聞こえる……………

戦況はどんな感じなんだろう？

皆のためにも早く終わらせないと

ピンポンパンポ
ン

「ご連絡いたします。船越先生、船越先生
」

放送？しかもこの声は須川か？

しかも船越先生に？アイツらは何してんだ？

これも雄二の作戦か？

「吉井明久君が体育館裏で待っています」

は？

「生徒と教師の垣根を越えた男と女の大事な話があるそうです」

マジで何やってんだ？

そして、俺たちは回復試験を終えて教室に戻ってからからしばらくして雄二が戻ってきた。

「おつ。終わったのか」

「ああ。しかしさっきの放送はなんだったんだ？」

俺もとても気になる。

「船越先生を防ぐために明久をおと
したんだ」

いや、犠牲に

「意味は変わってませんよ!？」

とレンのツッコミ。

明久

お前のことは忘れない。

多分。

またしばらくして回復試験を終えた明久が戻ってきた。

「雄二。須川君どこにいるか知らない？」

なんだ？明久から黒いオーラが……

「須川？もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

明久？なんか顔面の半分が笑顔でもう半分が殺戮者みたいな顔になっているぞ。

あと靴下に砂を入れるな。包丁どっからパクってきた？

「ちなみにだがだ」

あの放送を指示したのは俺

「シャアアアアアアア!!!!!!!!!!」

恐っ!!!

明久！鏡で自分の顔見てみる!!!

ベヒモスみてーな顔になってんぞ!!!!!!

「……あつ。船越先生」

ダツ!! 明久が掃除用具入れに向かって走る音

バタンツ!!!! 明久が掃除用具入れに入って閉じこもる音

すごい瞬発力だな……

ってかリュウトと雄二だけじゃなくレンまでこんなことするんだな。

「とりあえず明久はほっておきましょう」

レンって意外に冷たいな。

「そうだな。そろそろケリを付けに行くぞ。後、リュウトにレンとアミエーラ、高町にハラウオンとグランツは参加しないように。今、お前らがばれたら後々面倒だ」

レンと雄二がそういうと呼ばれた人たち以外は戦場に戻って行った。

帰り道

リュウトside

今日はレンとライガは仕事があるらしく先に帰って行った。

俺はと言つと

「神崎君とはその時に知り合っただよ」

「私は男の人達から助けてもらった時に」

「そうなんですか」

「リュウトは立派なやつじゃな」

なのは、フェイト、秀吉、アリサと帰っていた。

女子の会話には入りづらいな……

たまに秀吉が助け船を出してくれるのありがたい。

「俺はそんなんじゃないって」

「でも、知らない人の為に体を張るのはすごいと思うの」

「そうだよ。自信持った方がいいよ」

「リュウトは立派ですよ」

「そうなのじゃ」

そう言ってくれると心があつたかくなるな。

「じゃあ、私たちこっちだから」

「またね、三人とも」

「おう、じゃーな」

「また明日」

「また明日なのじゃ」

そう言ってなのはとフェイトと別れた。

そして、帰りの途中、

「ん？……アレ？ヤバツ、教科書忘れてた」

「珍しいですね」

「そうじゃな。リュウトが忘れ物なぞ」

「俺はそんな完璧超人じゃねーからな。じゃーな二人とも」

俺はダツシユで学校に戻った。

「ん？リュウト？」

「明久か？」

なんでこいつがいるんだ？

「まさか、リュウトも忘れ物？」

「お前もか……」

コイツと同レベルとは……

やっと着いて戸を開けたら……………

ガラッ

「えっ？」

戸を開けたら瑞希がいた。

「かつ、神崎君!？」

「瑞希?..どうした?..」

手紙か何かを持っているな。

と書いてあった。

俺はその手紙を拾って瑞希に返した。

「えっ、えっと……………// // // // //」

「変わった不幸の手紙だね」

明久!?

「リュウトもそう思うよね?」

「明久!?!瑞希のラブレターを否定するために現実から逃げるなよ
!?!」

「嘘だつ!?!?!」

「ひぐ○しネタはいいから現実を見る!?!」

「そんなわけあるか!?!それは不幸の手紙だ!?!」

「何を根拠に言っているんだ!?!」

「実際に僕が今、不幸な気分になってるからだ!?!」

「お前だけだろそれ!?!」

「僕だけじゃない！」

だぁぁー！

鬱陶しい！！

「眠れっ！！！」

ドゴオツ！！

「鳩尾ツ！？」

バタツ！

よし。静かになった。

「えっと……その………」

そういえば瑞希の事忘れてたな。

「ああ、気にすんな俺は忘れ物取りに来ただけだからな。手紙のことも誰にも言わない」

そう言って忘れ物の教科書をカバンに入れ教室から出ようとして、

「その手紙うまくいけばいいな」

俺は笑顔でそういって教室から出た。

第2問 Dクラス戦始動（後書き）

感想をお願いします！

第3問 Bクラスと誘拐と警察 (前書き)

問題

以下の文章の () () に正しい言葉を入れなさい。

「光は波であって () () である」

姫路瑞希、神崎リュウト、雨宮レン、アリサ・エ・アミエーラ、高町なのは、
フェイト・ハラウオン、ティア・グランツの答え

「粒子」

教師のコメント

正解です。

土屋康太の答え

「寄せては返すもの」

教師のコメント

君の回答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

「勇者の武器」

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

藤木コウタの答え

「約束された勝利の剣」

教師のコメント

私はあまりF a t eは見ません。

ルーク・F・ファブレの答え

「ホーリー」

教師のコメント

FFは7が好きです。

第3問 Bクラスと誘拐と警察

なのはside

「おはよー二人とも」

「おはようなの」

「今日はクロノ君も一緒なんか？」

「ああ。少し遅く起きてしまったんだ」

今日は珍しくクロノ君がが遅く起きたから一緒に行くことになったの。

「そういえばはやて。昨日帰るのが遅かったよね？」

「ん？それはな……」

「それは？」

「Aクラスに神崎の知り合いがおったから神崎の事を聞いてたんや」

「八神。神崎とは誰だ？」

「ふっふっふっ。それはな、二人の思い人や！」

「はっ、はやてちゃん！」

「それをお兄ちゃんの前で」……………なんだと「あっ……………」

嫌な予感がするの……………

「八神。そいつの本名は？」

「えっ？えっつと……………」
「答えてくれ」(ゴゴゴゴゴゴ)「……………神崎
リュウトって言うんや……………」(ごめんな、神崎……………)

「そうか……………」

クロノ君がなんだか怖いの……………

クロノside

おのれえええ、神崎リュウト!!

貴様のような得体のしれない奴にフェイトは渡さん!!

リュウトside

ゾクウツ！！！！！

「なっ！？」

「どうしたんだよ、リュウト？」

「ん？いや、なんでもない」

何だ？今、ヴァジュラ以上の殺気が……………

今は昼休みで俺たちは屋上で飯を食べていた。

今日は瑞希となのはとフェイトが弁当を作ってきてくれてアリサがお菓子を作ってきてくれた。

結局、俺一人全部食べきれなかったのでみんなで食べた。

なぜか秀吉はむくれていたけど……………

ちなみに瑞希の料理は安定していた。あの時のアレは殺人料理だ。多分、インド象も潰せるレベルだろう。

「ところでだけだよ。次の目標はなんでBクラスなんだ雄二？」

よコウタが聞く。

「正直に言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃAクラスには勝てない」

確かにな……………

それに代表を含むAクラスのトップ10はかなりの実力者らしい。

たぶんアイツもいるだろうな……………

「でもそれはクラス単位という話ですよね？」

「なかなか鋭いなアミエーラ。そのとうりだ。だから試召戦争のルールを使って一騎討ちに持ち込むつもりだ」

なるほどな……………

「じゃがそれも問題はあるじゃろう？一騎討ちよりもAクラスとしては試召戦争の方が確実じゃからな。そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろうか？」

「それに関しては考えがある。心配するな。そしてコウタ」

「何だ？」

「今日のテストが終わったらBクラスに宣戦布告して来い」

「昨日の明久を見て行けるわけねーだろ」

「ごもつともだ。」

「仕方ないな。ジャンケンで決めるか」

「望むところだ。心理戦ありで行こうぜ」

オイコウタ。お前が心理戦で勝ったことあるか？

「俺はグーを出さずぜ」

「んじゃあ俺はお前がグーを出さなかったらぶち殺す」

「へっ？」

ものすごい心理戦だな。

「ジャンケンポン！」

「うおわ!？」

コウタ・ゲー

雄二・パー

「逝って来い」

「逝ってきますー!ー!」

コウタが涙ながら走って行った。

以外に潔いな。

ってかなんか漢字が違ったような……………

コウタ side

あそこまでしたんだからな……………

逃げたらかつこ悪いからな……………

よし！腹をくくるぞ！

「入るぞ!!」

Bクラス皆がこっちを驚いたような目で見る。

「明日の午後に俺たちFクラスはBクラスに試召戦争を仕掛ける！」

「殺せええええええええええええ!!!!!!!!!!」

あつ、死んだな……

「落ち着け」

と、Bクラスのやつが一人そういった。

皆は止まってくれた。

助かった？

「僕はBクラスのクロノ・ハラウオンだ」

「俺はFクラスの藤木コウタ」

「藤木か……このまま帰ってもいいが条件がある」

「条件？」

何だか嫌な予感が。

「神崎リュウトはFクラスか？」

えっ？そんなこと？

「ああ、そうだけど」

「ふむそうか………わかった。代表が来るまでに早く帰ったほうが
いい」

「おう、サンキューな」

いいやつだったな。

クロナサイド

「おいおい。逃がしてよかったのかよ？」

「そつよ。ここでフルボッコに」

「やめておけ。そんなことするとBクラスの評判が落ちるぞ」

「そつ、そつだな」

僕はホントはそんなことは今、どうでもいい。

……フッフッフッ。

後悔するがいい神崎リュウト!!

フェイトをたぶらかした事を!!!

「馬鹿な……無傷だと？」

「オイ雄二。なんでそこに疑問を持つてるんだよ」

いきなりこれはないと思う。

「まあいい………とりあえず全員明日は午前中はテストだからな。早めに帰れよ」

今日は解散となった。

翌日

午後

「さてみんな。総合科目テストご苦労だった。午後はBクラスとの
試召戦争に突入するが殺る気は十分か？」

「oooooooooooo おお

ッ！！！！」

「今回の戦争は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為開戦
直後の渡り廊下戦は絶対負けるわけにはいかない。そこで前線部隊
の指揮をの隊長を姫路、副隊長をルークにやってもらう」

「ガッ頑張りますっ」

「任しとけ！！」

「後、リュウト、レン、アミエーラ、高町、ハラウオン、グランツ
は待機。いざとなれば使うから一応準備はしておけ」

「了解っ」と

「野郎共！！きつちり死んで来い！！」

「oooooooooooo うおおおおお

ッ！！！！！！」

「oooooooooooo

キーンコーンカーンコーン

「よし、行って来い目指すはシステムデスクだ!!」

数分後

明久side

「いたぞBクラスだ!!」

「高橋先生を連れてるぞ!!」

Bクラスは文系が多いから理系を主武器に強化したけど総合科目で
一気に方をつけるつもりか!?

「生かして帰すな!!」

「試獣召喚!!」

「「「「試獣召喚!!」」」」

Bクラス 野中長男

総合 1943点

数学
69点

Fクラス
武藤啓太

V
S

数学
159点

Bクラス
金田一祐子

総合
764点

Fクラス
近藤吉宗

V
S

Bクラス 里井真由子

物理 152点

VS

Fクラス 君島博

物理 77点

なッ!?

なんて強さだ!!

まさに桁が違うッ!!

「止めを刺される前にフォローをするんだ!!」

「明久!俺に任せろ!!」

「わかった!頼んだよルーク!!」

そういつてルークは敵の中心部に行った。

「いくぜっ!! 試獣召喚!!」

「試獣召喚!!」

Bクラス 山崎慎

総合 1483点

VS

Fクラス ルーク・F・ファブレ

総合 1632点

すごい! ルークはBクラス並みだったんだ!!

「んなツ！？お前、本当にFクラスか！？」

「へっ！！毎日ティアに勉強を教え込まれたからな！！くたばれ！！」

ルークの召喚獣が敵の召喚獣の武器ごと首を真つ二つに切る。

ズバツ！！

Bクラス 山崎慎

総合 DEAD

V S

Fクラス ルーク・F・ファブレ

総合 1632点

「戦死者は補修うううう！！！！」

あっ、鉄人。

「嫌だあああああ！！！！」

連れて行かれた……………担がれて。

タッタッタツ……………

「おっ遅れ……………まし……………た……………ごめ……………んなっさい……………はあ……………」

姫路さんが来た！！これで戦況を変えれば！！

リュウトside

「しかし、暇だな」

「我慢してくださいよ。僕たちだってそうなんですから」

「そうですよリュウト」

「でも、神崎君の気持ち少しわかるの」

「せっかくの試召戦争だもんね」

「次になったら出れるわよ」

「でもこれは生殺しだって」

「そう、文句を言う」
「雄二」
「どうした」
「ウタ」

「Bクラスが協定を結びたいって」

「そうだな……………わかった協定を結びに行く」
「雄二！！大変だ！！」
「明久？」

「島田さんが人質に取られた！！」

「何？」

「解放の条件はリュウトを連れて来いって！！」

「そうか……………」

「雄二。行かせてもらおうぞ？」

「わかった。だが奥の手は使いなよ」

「わかってるって」

「よし……………リュウトと明久は島田のところへ行け。アミエーラ、レン、護衛として俺と一緒に来てくれ」

「わかりました」

「了解です」

「グランツはルーク達の援護を、高町、ハラウオンは教室に待機してくれ」

「わかったの！」

「わかった」

「確かにルークは心配ね」

「あと、明久と以外は戦闘で奥の手は絶対に使うな。各自行動！！」

そうして俺は島田が人質になっている場所に向かった。

「島田さんッ！！」

「よっ、吉井ッ！！」

「そこで止まってもらおう」

誰だあの黒髪は？

「吉井、君が連れてきたそいつが神崎か？」

「ああ、そうだけ。なんなら召喚獣でも出してみるか？」

「最初からそれが狙いさ！！試獣召喚！！」

「試獣召喚」

Bクラス クロノ・ハラウオン

現代国語 386点

VS

Fクラス 神崎リュウト

現代国語 394点

ちよつとミスが多かつたな。

「ってか、なんでわざわざ俺を呼び出したんだよ？」

「そんなの決まっている！！貴様がフェイトを……フェイトをおお
おおッ！……！」

そのまま力を込めた横なぎでアイツの召喚獣は上半身と下半身がバ
イバイした。

Bクラス クロノ・ハラウオン

現代国語 D E A D

V S

Fクラス 神崎リュウト

現代国語 1 0 4 点

「まっ、負けた？」

「補修だ、ハラウオン兄」

「くそおおおおおおお！！！覚えていろ神崎リュウトおおおおお
おお！！！！！！！！！！」

ズルズル……………

恨みを言いながら引きずられていくのって結構シユールだな……………

「んじゃ、俺は教室に戻っとくな」

「うっ、うん」

あゝなんか疲れた……………

そう思いつつ教室に入ると

「……………んだよこれは……………」

卓袱台はカッターでやられたのか切れた跡があり、シャーペンなどは破壊されていた。

そういえばBの代表は卑怯姑息な根本恭二くんか……………

……………ん？

「そついやなのは達がいねーな」

トイレかもな。

そう思いつつ協定に向かった雄二に今の教室の状況を言いに行こうとしたら

「ん？」

廊下から狭く倉庫置きになっている裏庭が見える窓から何かが見えた。

それは

確かBクラスらしき男たちが

口と手を縛られたのはとフェイトと倉庫の中に入っていくところ
だった。

フエイトside

「しかし、こんなことしていいのか？」

「ばれたら根本のせいだぞ……」

「まさか、あんな奴に知られているなんてな」

「ああ、俺たちはそれぞれの秘密を守らなくちゃな」

「最初こいつらがいたときはビビったけど根本もひでーよな」

「ああ。「見られたんなら誘拐でもしろ」って」

なのはと私は教室に突然この人たちが入ってきていきなり口を押え

られたと思っただら卓袱台やシャーペンのどを壊し始めた。

一人の男がおそらくBクラス代表の根本って人に電話してもう一人がロープとテープを持ってきて私たちを縛ってきた。

その時はまだ授業中で教師は渡り廊下に集まっているので全然廊下に人がいなかった。

「しかし、こいつら二人とも美人だよな」

「ああ。Fクラスのバカな奴らには惜しいよな」

そういうと他の人達も下心の見えるような笑みを浮かべた。

なのはは恐くて震えていた。

私も気づいたら震えていた。

「どうする？勿体ねーし、ヤツちやう？」

「そうだな。ここまでしといて勿体ねーよな」

男の人達がこっちに歩いてくる。

.....「わい。」

「おい！カッター貸せ！まずは服を脱がす」

「んじゃあ、俺はこっちのサイドポニーで」

「ん~~~~！！ん~~~~！！！！」

なのはッ！！なのはッ！！！！！！

「おいっ！！おとなしくしてろよ！！！！」

「ん~~~~！！！！（ポタポタ）」

なのはの瞳から雫が落ちていく。

「お前もだよ。こいつらを押えとけよ！！！！」

私たちは押さえつけられた。

私も目から涙が落ちが頬を伝うのがわかる。

そしてカッターを私の服に向けた。

「まずはお前からだ」

.....ミツムツ

助けてッ
.....

恐い
.....

「「「「ぐあああああああ！！！」」」」

突然、倉庫の入口から悲鳴が聞こえた。

「なっ！？どうした！！」

一人が様子を見に行った。

「何だてめー!!」

と、見に行つた男が叫んだ。

その瞬間

「テメエに用はねえよ!!!!!!」

バキヤアツ!!

「ぎゃあああああ……！」

男が悲鳴と一緒に飛んできて倉庫の壁に叩きつけられた。

そして一人の人が入ってきた。

「なっ、なんだよオメエは！！？何しにきやがった！！！！」

その人は、

「オメエらゴミに用はねえ」

蒼い髪に空のように澄み切った水色の瞳

「用があるのはなのはたちだ。それとな？テムエら全員

」

一年の終業式に私を助けてくれたとってもとっても

「

ぶっ飛ばす……!」

大好きなリュウトでした。

リュウツside

ふざけやがって……………

俺は倉庫の中で現状を見た。

縛られているのはとフェイト。

フェイトの近くにはカッターを持っている男がいる。

なのはの服はボタンが少し空いている。

なるほど

コイツラ、クライツクシテヤル

「なっ、何ビビってんだ！俺たちは5人もいるしアイツは素手だ！
ぶち殺せ！！」

「「「死ねええええええ！！！！」「」「」

他の4人が鉄パイプやなんやらを持ってこっちに向かってきた。

……………ゴミどもが……………

「ぐがつ!!!?!」

まず鉄パイプを欲横に振ってきたのでしゃがんでかわし顔面に膝蹴りを入れる。

「死ねやああ!!!」

今度は角材を縦に振りおろしてきたが普通に横に避ける。

「シツ!!!」

バキヤ!

「んなああ!!?!」

そのまま角材を踵落として破壊するそのまま、

ドガッ!!!

「ゲエツ!!?」

鳩尾に左アツパーを入れて気絶させる。

「よそ見すんなやああ!!」

「とつたあああ!!」

左右からそれぞれバットを振ってくる。しかし、これでは、

「……バカが」

ヒュン!

ビュン!

ガン!!!!

「グアア!!!!」

「ゴオ!?!」

バタツ!!

軽くしゃがんだだけでお互いのバットが頭に当たり撃沈。

「ん？」

一人いないな……………

逃げたか……………？

まあいい。今は二人の救出が最優先だ。

俺はまず高町の紐ををほどき口にあるテープは幸いにそこまで粘着力は無いので後も残らないやつだったのではがした。

そして、フエイトのところへ向かおうとすると、

「神崎君……！」

なのはが叫んだので振り向くと、

ザクッ！！！

「「?!?!」」

そして、

「オイ……………」

冷めた口調で男に聞く。

「はっ、はいつー!!」

「これを命令したのは根本か？」

「さっ、さささ最初は卓袱台やペンとかをぶっ壊す予定だったんだ。でもこいつらがいて根元に聞いたら「見られたなら誘拐でもしろ」って」

「なんで協力した？」

「おおお俺たちは、ねっ根本に弱みを握られて……………」

「そっか……………」

だが……………」

「先生を呼んで少年院にでも行ってもらっぞ」

「なっ！…！なんでだ！？もとはといえば根本が「じゃあテメエらは俺が来なかつたら何をしようとした！」「……………えっ？」

「えっ？じゃねえよ！…！お前たちはなのはとフェイトを犯すつもりだったはずだ！…！」

「はあ？何言つて……」「んじゃあ何でなのはの服のボタンが空いて
フェイトの服には少し切り跡があるんだよ！！」「それは！！！」

「第一な、本人に聞けば明白なんだよ！！！」

バキヤア！！！！

俺は男を殴って気絶させフェイトを解放した。

二人とも泣いていた。

そして俺に抱きついてきたので俺は二人を受け止める。

「グスツ……………こわかつ……………たよ……………」

「ウツ……………リュウトが居なかったら……………私たち……………グスツ……………」

「ああ、辛かったな。でも、もう大丈夫だ。だから

今は思いっきり泣いとけ」

「ウツ……………うわああああああああああああああああん

！……………！！……………！！……………！！……………！！……………！！……………」

しばらく校舎裏では二人の泣き声が響いた。

ちなみに先ほどの不良は特別になかったことにするため教師達には
言わなかった。

そしたら泣いて謝られた。

俺も甘くなったな。本当なら……………。

ちなみにこの時に根本を追い詰めるために彼らにあることに協力し
てもらえた。

「神崎君！！肩大丈夫なの！？」

「ん？まあ大丈夫だ。でもあの薬は一日腕が使えなくなるからな」

博士の薬はよく効くけど一日か……………

「じゃあ私たちがリュウトの家に泊まるよ！」

……………ハイ？ナニイツチャッテンノコノヒト？

「それがいいの！！」

つてオイ！！なのはまで！？

「イヤイヤ、マテマテ、一般の女子高生が男の家に泊まるな！！」

「でも直すために薬を使うと左腕が明日まで使えないんですよ？」

「いや、それならレンでも呼べば……………」

「助けてくれたお礼じゃダメ……？（ウルウル）／／／／／／／／／／／」

やめろッ！！涙目で上目づかいで俺を見るなッ……………！！

断りづらいだろー！！

……………そうだー！！

「でもさ、そっちの親がいいなんせ」「もしもしお母さん？今日私友達の家に泊まってもいい？わかった！じゃあ、後で荷物を取りに行くね」「早ッー！！」

「いいって」

「私もなの」

逃げ道がない……………orz

「わかった。じゃあ二人は荷物を取りに行ってくれ。俺は***病院にいるから」

「「うんッー！！」」

さてと、行くか。

***病院内

「へえ、君が刺されるなんてね」

「榊博士。俺だってそんなことぐらいありますよ」

この人はペイラー・榊博士。

この病院でのマッド・サイエンティストと有名だ。

いろんな意味で。

「でも珍しいよ？君のような

」

そしてこの人は

「警察特殊部隊「フェンリル」第二部隊隊長神崎リュウトが刺されるなんて」

「統率者からそんな言葉が出るなんてね」

そのフェンリルの統率者だ。

「俺は第一部隊のリンドウさん達みたいに強くはないからね」

「でも誰かを守るときは以上に強くなる。とても興味深い」

「出たよ。マッドの部分が」

そう話しているよ、

「神崎君いる？この人から神崎君はここにいるって聞いたんだけど」

「ああ。入ってもいいぞ」

「失礼します」

なのはとフェイトが入ってきた。

「おや？君たちは？」

「私は高町なのはって言います」

「私はフェイト・ハラウオンといいます」

「私はペイラー・榊だ。よろしく」

「二人とももう来たのか？」

「うん！」

「そっちは終わった？」

「ああ。もういいよな。博士」

「うん。一日はその腕は使えないからね」

「わかっている。んじゃあ行くか？」

「」「うん！」「」

そういつて俺たちは俺の家に向かった。

榊 side

「彼もいろんな意味で罪作りだね……」

このまま何事もなく済めばいいけど………

リュウトSIDE

「ここが俺の家だ」

俺は昔使っていた家に住んでいる。

「和室に布団を敷いとくからな」

「じゃあ私が晩御飯作るの」

「私も。冷蔵庫の中使ってもいい？」

「いいけど、晩飯任せてもいいのか？」

「うん！」

「助けてもらったんだしね」

「そう言うんならごちそうになるか」

二人の作った飯はかなりうまかった。

ちなみに念のため二人が料理中に部屋にあった銃や弾丸などの軍事用品は隠しておいた。

特殊部隊なので「軍装備じゃね？」って思われるのまでである。

M37とかAKシリーズとか……。ヤバいもんばっかだな。

そんなわけで俺たちはそれぞれ風呂などを済ませ就寝した。

ちなみになぜか「一緒に寝ない？」と二人に迫られたが何とかのがれた。

ただの好きでもない恩人にそんなことはしないほづがいいと思う。

第3問 Bクラスと誘拐と警察 (後書き)

半分以上誘拐事件に持って行かれてしまった……

次から気をつけないと。

第4話 終戦と手紙と深まる思い（前書き）

問題

以下の問いに答えなさい。

「女性は（ ）（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める」

姫路瑞希、ティア・グランツの答え

「初潮」

教師のコメント

正解です。

吉井明久、藤木コウタの答え

「明白」

教師のコメント

ずいぶん急な話ですね。

土屋康太、雨宮レンの答え

「初潮と呼ばれる、生まれて初めての整理。医学用語では、整理の事を月経、初潮の事を初経と言う。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43?に達するところに初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される」

教師のコメント

二人とも詳しくすぎです。

雨宮君は進路希望で「医者」と書いてあったので納得しますがこんなに書かなくてもよいです。

アリサ・エ・アミエーラの答え

「初潮（ドン引きです）」

教師のコメント

正解ですがなぜ引かれているのですか？

ルーク・F・ファブレの答え

「初潮（先生……………」

教師のコメント

ルーク君までどうしたのですか？

高町なのは、フェイト・ハラウオンの答え

「
」

教師のコメント

珍しいですね。二人が無回答なんて。

神崎リュウトの答え

「初潮（突然なのはとフェイトの二人が顔を真っ赤にして倒れたので保健室へ連れて行くため0点で結構です）」

教師のコメント

……………（シクシク）

第4話 終戦と手紙と深まる思い

リュウトside

「腕輪の異常？」

「そうさね。あんたと雨宮、藤木にアミエーラに村雨とあと一人は……まあいいか。」

「俺たちの腕輪がどうかしたんですか？」

「ああ、まず全員に共通で右手に赤い腕輪がある。使用すると物理干渉ができる代わりにフィードバックが付く。赤の腕輪の能力を解除するにはその召喚獣をいったんフィールドから外れて消すか戦死するしかない」

「つまり観察処分者みたいになるんですね？」

「そうさね。そしてその能力は「アラガミバレット」」

「何ですかそれは？」

「剣形態や銃形態は知っているね？」

「はい」

「銃形態の時に点数を消費して特殊な弾丸が撃てるのさ。藤木は剣形態が無いからいつも道理だけどね」

「他には？」

「400点を超えたら普通に他の腕輪が付くのさ」

「つまり腕輪が二つということですか？」

「そうさね。でもまだある」

「まだあるんですか？」

「ああそれはね、リスクがあるんだ。それはフィードバックの倍加だよ」

「つまり観察処分者よりフィードバックが強力になるってことですか？」

「そうさね。使えばこれもその召喚獣をいったんフィールドから外れて消すか戦死するしかない」

「それで？それを使うとどうなるんですか？」

「それはね、召喚獣の

」

「んっ？」

夢か………

そろそろおきねーと………

「あれ？」

両腕が動かない!!

足は動くのに！なんで腕限定！？

それで右腕のほうを見ると

「すう……………すう……………」

What?

なんでフェイト様が俺のベッドで俺の右腕にしがみついているんですか？

布団用意したはずだよな！？

イヤマテ！！

落ち着け！！

coolになれ!!そうcoolに!!

.....ん?待てよ.....

まさか左には.....

「んごゆ.....」

予感的中。

なのはがいた。

「ん.....?おはようなの神崎君」

「おはようリユウ」

おっ、起きたな。

「おはよう二人とも。とりあえずなんで俺の布団で寝ている」

「えっと.....実は.....昨日の事を思い出して.....」

「恐くて眠れなかったんだ.....」

「そうか……………」

あゝ、そりゃそうだよな。

あんな体験をしたらそうなるな。

もし俺が居なかったらと思うとぞっとする。

「それでね神崎君のそばにいたら落ち着いたの……………
／／／／／／／／／／
／／／」

「それでね、リュウトと一緒に寝ちゃって……………
／／／／／／／／／／
／／／」

「そうか……………恐かったもんな」

「うん……………でもリュウトと一緒に寝たら恐くなかった／／／
／／／／／／／／／／」

「うん!!…なんだか安心できて……………
／／／／／／／／／／／／／／／」

「そうか。それならよかった。んじゃ、朝飯作っとくから着替えと
けよ」

「「うん!」」

「元気がいいことだ。」

そのあと俺たちは朝食を食べ学校へ登校した。

ちなみになぜフェイトが俺の事をリュウトと呼ぶようになったのか聞いたらなのはもリュウトと呼び始めた。

「何だと！？なんてうらやm……いや、うらやましい」とを……！
なんかおかしいのが混じっている。

「できれば話したくないな」

「悪いが話してもらっぞ。そうじゃないとコイツ等が使い物にならない」

「……なのは、フェイト話してもいいか？」

「うん」

「いいよ」

二人とも若干不安を抱えてるな。

「わかった。話そう……昨日二人は」

「
無用だぞ。学校の名誉と存続にかかわるからな」

誘拐事件を話したらみんなはかなり怒っているのがわかる。

「そうだったのか……………」

「酷い……………」

「……………外道！」

「なんて奴じゃ……………」

「あの野郎ッ……………!!」

「最低ね」

「残酷すぎます……………」

「あんな人もいるんですね……………」

皆はそれぞれ怒りを覚えている。

「わかった……………あの根本の奴を徹底的にぶち殺す為にこの戦争は絶対
対に勝つぞ!!」

「……………おお

「……………!!」

「「「「「「「」

「開戦より三十分前にする作戦はまずCクラスをどうにかする作戦だ。秀吉にはこれを着て「木下優子」としてAクラスの使者を装ってもらおう」

優子にか……………そういえば最近あつてないな。

「というわけで秀吉。用意してくれ」

「うっ、うむ……………」

「大丈夫だ。秀吉は演劇が得意だろ？だから女装も似合ってる」

「うむ……………リュウトがそういうなら……………／／／／／／／／／／」

「「「「「「「」……………「「「「「「「」

あれ？なんで皆様俺に殺気を送ってくるの？

「リュウト……………（ニコッ）」

「あつ、アリサ？眼の奥が笑ってないぞ？」

「リュウト君？O・H・A・N・A・S・I・しよつか？」

「オイなのは？なんで目の色が単色になっているんだ？」

「リュウト……………覚悟はいい？」

「フエイト！？後ろから真つ黒のオーラが見えるぞ！？」

食われる！ヴァジュラ三匹に食われてしまう！！

俺はなのは達から逃げようと後ろを向いた瞬間に両手と首元をつかまれ教室の外に連れ出された後意識を手放した……………

唯一覚えていることは……………O・H A・N A・S I怖いよ……………
…（ガクガクブルブル）

「ウツ……………ツウ……………！」

「あつ、起きた？リュウト君？」

気が付いたら目の前になのはがいた。

「ごめんねリュウト君。感情が抑えきれなくて……………」

「誰だってそんなんあるから大丈夫だ。これから直せばいい」

「うん！ありがとなの！！」

「フェイト。ところでもう始まってる？」

「うん。私たちは待機」

「そうか。ちょっと戦況見てくる」

「戦わないでくださいよ」

「あなたも僕とアリサさんと同じジョーカーなんですからね」

「ジョーカーは普通二枚だけだろ。まあいいか」

そういつて俺はBクラス前に向かった。

秀吉の作戦は成功したらしい。

「明久」

「起きたのリユウト！？参加してくれるの！？」

「いや、戦況を確認だ。どんな感じだ？」

「うん。何とか教室に押し込んでいるけど……………」

「けど？」

「姫路さんの様子がおかしいんだ」

「瑞希が？」

「うん。総司令官のはずなのに指示が一向に出ないし戦闘にも参加しなくて……………」

まさか……………また根本か？

「明久！！」

「どうしたのユウタ！？」

「こっちに来てくれ！押されているんだ！」

「わかった！リユウト。姫路さんを頼んだよ」

「わかった」

そういつて明久とコウタは行ってしまった。

確かに瑞希はなんか表情が暗い。

何より何かに不安を抱いてるように見える。

「右側出入り口教科が原告に変更！！数学教師はBクラス内に拉致された！！」

まずいな……………アイツらは文系だ。このままでは押し返される。

「私が行きます！！」

と瑞希が行こうとしたら、

「あつ……………」

突然、教室を見て行くのをやめてしまった。

そして俺は教室を見たら

根本が瑞希のラブレターを持っていた。

「へえ……………」

なかなかの外道だなアイツ…………

よし。

ピッー

プルルルルルルッ！プルルルルルルピッー！

「もしもし？俺だ。例の作戦頼んだ」

ピッ！！

さあて、煉獄に落ちてもらうぞ根本！！

明久side

えっ！！？

「なっなんだ！？」

「Bクラスが攻撃をやめた！？」

突然Bクラスが攻撃をやめたそして

Bクラスの全員が根本を困んだ。

「なっ！？何のつもりだお前ら！！」

「何ってお前に罰を与えるためだ」

そこに入ってきたのはリュウトと雄二、そして高町さんとハラウオ
ンさんだった。

リュウトside

「俺に罰だと？何の真似だ！」

「お前が一番わかってるんだろうが、クズが」

雄二がそう言う。

「根本恭二。お前には本当は誘拐、窃盗、脅迫などの罪がある」

ザワザワザワザワ……

生徒がざわめきだす。

「本当ですか？根本君？」

「いえつ、俺は知りませ「バキヤツ！！」ぐお！？」

俺は根本をぶん殴った。

「ふざけんな！！現にお前は証拠が盛りだくさんなんだよ！！誘拐だって被害者も連れてきたし脅迫の件もやらされた側からの言葉もある！！窃盗も今とられた側もいるんだよ！！お前はもう逃げられない！！第一なあ……………」

俺はお前が大嫌いだ！」

「私情が混ざってないか！？」

『同感』

俺だけではないんだぞ？

そして脅迫されたBクラスの人となのはとフェイトの証言によって恭二の罪は確定。

「それで先生。こいつの処罰はこちらにさせてください」

俺は先生にそのわけを説明した。学校の存続などで。

「わかりました。今回の戦争はFクラスの勝利として終わりにします」

そうしてBクラスとの戦争は終わりを告げた。

「さてと、根本恭二」

「……………何だ」

「本来なら素敵な少年院でも連れて行ってBクラス設備をもらおう
とと思ってたが条件を守れば特別に免除する」

「……………条件は？」

「まずこのことを自分の親に話すこと。次はクラス代表をクロノだ
っけ？明日からそいつのに変える。最後に雄二？」

「ああ、これを着てAクラスの戦争の意思があると伝えてこい」
そういつて雄二が取り出したのは女子の制服だった。

「ふざけるな！！最初はわかる他のは」

「Bクラス全員で必ず実行させよう！！」

「任せて！！必ずやらせるから！！」

「それだけで教室を守れるならやらない手はないな！！」

これ以外に何をしたんだ？

「んじゃ、決まりだな」

「くつやめろ！！よつ寄るな！！離せ変て」ドッ！！「ぐふうッ！
！」

おお。見事な鳩尾です。

「んじゃ、俺が着させるか」

「いいのか？リュウト？」

「んっ？まあな。俺が勝手に雄二の策を無しにしたんだからな」

「でもお前のほうが被害が少なかったぞ？」

「気にしない」

そして俺は根本に服を着せようとするがかなり精神的に来るなこれは。

だが、こうでもしないと瑞希の手紙は取り戻せない。

でも。これとツバキさんの訓練と比べたらかなりましだな。

辛さに十倍以上の差がある。

「う、うう………」

「もう一度お休み」

ドゴツ……

「がふッ!?!」

しかし……

「女物の制服の着せ方なんてしらねえよな………」

「私がやってあげるよ」

「いいのか?せっかくだし可愛くしてやれ」

「それは無理。土台が腐っているから」

「いまさらだけどな」

「それもそうね」

俺はBクラスの女子に着付けを任せ、根本の制服から……………

「あつた」

瑞希の手紙を取り出した。

ちなみに根本少年の制服はゴミ箱（燃えるごみ）に入れておいた。

しかし……………本当に甘いな。俺は。

教室に戻って……………

「さて、落とし物は持ち主の「神崎君!!」「ゲツ!!」

瑞希が帰ってきた。

タイミング良すぎだろ!?

そして瑞希は俺に泣きついてきた。

「あっありがとうございます……!ございます……!わっ私ずっとどうしていいか……わかんなくて……!」

「わかったわかった!!いいから落ち着け。な?」

俺はそういつて瑞希の頭をなでる。

「はッ、はい。いきなりすいません……」

「じゃあみんなのここに行くから」

ギョッ。

そういつて行くこうとしたら瑞希に服の袖をつかまれた。

「どづした?」

「あの…………手紙、ありがとうございます」

「別に。根本の制服からたまたま手紙が出てきただけだ」

「それってウソ……ですよね?」

バレてる…………orz。

普通に返しとけばよかった。

「やっぱり神崎君は優しいですね。あの時だって知らない私の為に体を張って助けてくれましたし」

「んなことねーよ。俺は。それよりその手紙頑張れよ」

「はい！！頑張ります！！」

「ところでいつ告白するんだ？」

「えッ？ええっと全部が終わったらです……………／／／／／／／／／／」

「そうか。でもさ、そういうのは直接言った方がいいぞ？」

「そっそっですか？神崎君はその方が好きですか？」

「こっつというのは直接言った方が感情が伝わるからな」

「本当ですか？今言ったこと忘れないでくださいね？」

「おっ？おっ」

なんか瑞希の目に新たな決心が宿っているような…………

「こッ、このスカートやけに短いぞッ！？」

ん？なんか聞いたことある声が……

「いいからキリキリ歩け！」

「クソッ！神崎と坂本め！！よくも俺にこんなことを……！！！」

「無駄口を叩くな！！これから撮影会もあるから時間が無いんだ！
！」

「きッ、聞いてないぞ！？」

声の主は根本クンか……

「何でしょうか？」

「知らないほうがまっとうな人生を送れるぞ」

あんなのは女子が見るもんじゃないと思う。

「まっ、頑張れよ」

「はいっ！ありがとうございます……！」

さて、俺もみんなのどこに行くか……

帰り道

今日はバイトが突然休みと聞いて少し長い帰り道を一人で歩いてい
た。

ん？あれは………

「なあいいじゃん。俺たちと楽しいことしようぜ。」

「ちょっと！やめて！！」

「いいじゃん、そんなに嫌がらずにさあ！」

何で俺はこんな場面ばっか遭遇するんだろうか。

ストレス発散相手になってくれ……………

「はいはいそこまで」

と俺は女の子とガラが悪いおっさん達の間に入った。

数は……………たったの3人か。

「誰だテメエ？」

「シャシャリ出てくんなよ！！」

「あゝハイハイわかったから」

「すかしてんじゃねーぞテメエ」「うるせえ！！」
「くぼあ！！」

とりあえず顔面にストレート。

「今さあ……ゴミの相手したからかなりイラついてんだ………今すぐにそのゴミ連れて失せる」

「「はっ、はいいい！！」」

おお、よかった。物わりのいい人たちで。

でもそこまで逃げなくてもいいじゃないか。

ちよっつっつと殺気をぶつけただけなのに。 実際はかなり

もう少し殴っておけばよかったな。

「あの………ありがとうございます！」

「ん？気にすん………」

助けた女の子の顔を見て声が止まった。

「優子!?!」

「リロウアア!?!」

「いやゝ久しぶりだな」

「まったく。今まで顔を見せないで」

「「めんめん」

「まあいいわ。ねえ」

「ん？なんだ？」

「今から家に来ない？さっきのお礼にご飯食べない？」

「ん？いいのか？」

「どうせバイトが休みでお金が無いでしょ？」

「……………なぜわかった？」

「あなたはこの時間にあまり帰らないからね」

「そうですか……………んじゃっ、おじやましますか？」

「うん！…嬉しい！（やったあ！！）／／／／／／／」

そうして俺は木下家でうまい夕食をいただき秀吉と優子と少し話をしてから家に帰った。

家に帰って俺は寝る前に少し思った。

（多分明日はAクラス戦になる。そうなるとアイツが居るかもな。ここら辺は雄二がうまく一騎打ちに持ちこんでくれれば免れることができるな。頼むぞ雄二！俺はあいつと戦うことになること

アラガミになるかもしれないからな）

その時俺の机には

「召喚獣バグ・神崎リュウト
ると召喚獣が

「コード「アラガミ化」使用す
になる」「

と表紙に書かれたレポートがあった。

第4話 終戦と手紙と深まる思い（後書き）

ようやくBクラス戦編が終わった……………

結構アレンジが加わっていたんですがどうでしたか？

ちなみにリュウトが何にアラガミ化すると思えますか？

では、また次で会いましょう！

第5問 開戦Aクラス！ (前書き)

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 「(1) 得意なことでも失敗してしまうこと」
- 「(2) 悪いことがあった上にさらに悪いことが起きる喩え」

姫路瑞希、雨宮レン、アリサ・エ・アミエーラ、ティア・グランツ
の答え

- 「(1) 弘法にも筆の誤り」
- 「(2) 泣きつ面に蜂」

神崎リュウト、高町なのは、フェイト・ハラウオンの答え

- 「(1) 猿も木から落ちる」
- 「(2) 弱り目に祟り目」

教師のコメント

両方とも正解です。

他には(1)なら「河童の川流れ」、(2)なら「踏んだり蹴った
り」などがありますね。

土屋康太の答え

「(1) 弘法の川流れ」

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

「(2) 泣きつ面に蹴ったり」

教師のコメント

君は鬼ですか。

藤木コウタの答え

「(2)スサノオと戦闘中にホールドにした瞬間にもう一体からの不意打ち。(ミッション・一対の捕食者にて)」

教師のコメント

形は間違っではありませんがことわざではありませんので不正解です。

ルーク・F・ファブレの答え

「(2)ダウンされた後のグランドダッシャー」

教師のコメント

かすかに「ジエイドのヤロー!」と書いてあったのが気になります。

第5問 開戦Aクラス！

レ n s i d e

「まずは皆に礼を言いたい」

Bクラス戦が終わった後に補給テストを終えた二日後の朝、いきなり雄二がそういった。

「どうしたんだよ雄二。らしくねーな」

「ああ自分でもそう思う。だがこれは偽らざる俺の気持ちだ」

確かに今までAランクは姫路さんと一回だけだけどリュウトだけで何とかしのいでいたからね。

「ここまで来た以上絶対Aクラスにも勝ちたい……勝って生き残るには勉強が全てじゃない現実を教師どもに突きつけるんだ!!」

「oooooooooooooooooooo おお

ッ!!」「」「」「」「」「」「」「」「」

さすがにここまで来たら指揮はすげい。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だがこれは一騎打ちで決着をつきたいと考えている。やるのは当然俺と翔子だ」

「馬鹿の雄二が学年主席の霧島さんに勝てるわけがな」シユカツ！
「……………（汗）」

「次は耳だ」

ものすごい速さで雄二が投げたカッターが明久の頬を掠る。

正直見えなかった。

「まあ明久の言うとおりに確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれないな」

確かにそうだ。

実際に霧島さんはAクラスの代表になるほどの力を持っている。

しかし、戦闘になるとあの人の方が強いと思う……………

「だがそれはDクラス戦も同じだったろ？まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかった。今回だって同じだ。俺は証拠に勝ちFクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない。俺を信じてくれ。過去に神童とまで言われた力を今皆に見せてやる」

神童の力が……………どんなのだろうか？

「具体的なやり方だが一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。ただし内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり。召喚獣勝負ではなく純粹な点数勝負する」

わざわざ小学生のテストで上限あり……………

「何か策がありますね雄二？」

「正解だレン。翔子なら小学生レベルなら何の問題もない。だが俺がこのやり方をとった理由は一つ。「ある問題」が出ればアイツは確実に間違えるからだ。その問題は「大化の改新」だ」

「もしかしてだけども、何年に起きたとかそういう感じの？」

「ビンゴだルーク。その年号を問う問題が出たら俺達の勝ちだ」

そういえばなんで雄二はこんなことを知っているんだろうか？

「ちなみに大化の改新が起きたのは645年だ。こんな問題なら明久やコウタですら間違えない」

以外にコウタは世界史が得意なんですよね。

覚え方がめんどくさいですけど。

そして明久？

なぜ後ろを向いて泣いているのですか？まさか……………

「なあ、雄二」

「ん？何だコウタ？」

「お前、霧島と仲いいのか？」

「そういえば雄二は霧島さんの事を翔子と言っていましたね。」

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

「総員狙ええっ！！」

ガバアッ！

「なっ！？なぜ明久の号令で急に構える！？」

「黙りやがれ男の敵が！Aクラスの前に貴様を殺す！！」

「までコウタ！！俺がいつたい何をしたと！？」

明久とコウタが中心に雄二に攻撃体制を取っている。

もちろん僕とリュウトとルーク以外の男子が。

「ねえ、アキ」

「んっ？何、美波？」

「アキは霧島さんみたいな人が好み？」

「そりゃあまあ美人だし……ッて美波！？なんて危険なものを投げようとしてるの!？」

おお、教卓を投げようとしている。

「ねえ、リュウト君」

「どうした、なのは？」

「リュウトは霧島さんが好み？」

「ん？そっぴや女性の好みなんて考えたことなかったな……」

「そうなんですか？」

「ちょっと驚きですね」

「ワシも知らなかったのじゃ」

リュウトはそんなことを考えたことがないほど鈍感なんでしたね。

「とにかく。俺と翔子は幼馴染で小さいころに間違えて嘘を教えたんだ。アイツは一度教えたことは忘れない。だから今年トツプの座にいる。俺はそれを利用してアイツに勝つ。そしたら俺たちの机は

システムデスクだッ！！！！

Aクラスにて

リュウトside

「一騎打ち？」

そう優子が言う。

「ああ。Fクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎打ちを申し込む」

「うーん。何が狙いなのか？」

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせるのはいいけど、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな」

「賢明だな。ところでCクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけれどそれだけだったよ？何の問題もなし」

さすがはAクラス様ってか。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって昨日来ていたあの……………」

優子の顔が青くなっている。

思い出してから気持ち悪くなったのだろう。

「でもBクラスはFクラスと戦争したから三か月たたないと試召戦争できないはずだね？」

確かにそうだがそれは勝敗が決定した時だ。

俺たちは

「実情はどうあれ対外的にあの戦争は「和平交渉にて終結」ってなっているんだ。規約には何の問題もない。もちろんBクラスだけでなくDクラスもだ」

「……………それって脅迫？」

「人聞きの悪い。ただのお願いだよ」

いや、世間一般これは脅迫だろ……………

「うーん……………わかったよ。何をたくらんでいるか知らないけど代表が負けるなんてありえないからね。それにあんな格好をした人がいるクラスと戦争なんて嫌だもん……………（ガクガクブルブル）」

確かにあれはトラウマもんだ。

「でもこっちからも提案。代表同士じゃなくてそうだね……………お互い9人ずつ選んで一騎打ち9回で5回勝った方の勝ちっていうのならいいよ」

「雄二。この条件で行きましょう」

とレンが言った。

「レンの言うとおりですね。これは競争ではなく戦争ですからあまり人の言葉は鵜呑みできません」

アリサがさらに助言をする。

「そうか……わかった。その条件を呑んでもいい」

「ホント？嬉しいな」

「ただし、勝負の内容はこちらで決めさせてもらう。そのくらいのハンデはあってもいいはずだ」

「え？うーん………」

そう優子が考えていると、

「……受けてもいい。……雄二の提案を受けてもいい」

Aの代表、霧島翔子がきた。

「あれ？代表いいの？」

「……その代り条件がある」

「条件？」

「……負けたら何でも一つ言っことを聞く」

「……わかった」

「じゃ、こうしよう。勝負内容は9つの内5つは決めさせてあげる。4つはうちで決めさせて？」

「交渉成立だな」

「ゆッ、雄二！！まだ姫路さんが了承してないのにそんな勝手な！」

え？何で瑞希の許可を取らなきゃいけないんだ？

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

そうして放課後

2 - A 内

「両名とも準備はいいですか？」

と高橋先生が聞く。

「ああ」

「…問題ない」

「それでは一人目の方、始めてください」

「じゃあアタシからいくよ」

向こうは木下さんが。

「ワシがやるっ」

「それじゃあ任せた」

最初は秀吉になった。

「それでは始めてください」

「ところで秀吉」

「何じゃ？姉上」

あれ？気のせいかな？木下さんの後ろから黒いオーラが……

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

「じゃーいいや。その代わりちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？廊下で何の用じゃ姉上？」

木下姉弟がログアウトしました。

ごほうぐお待ちください

木下姉（制服に赤いシミ付き）だけログインしました。

「秀吉は急用ができたから帰るってさ。代わりに人を出してくれる？」

「い、いや……うちの不戦敗でいい……」

1回戦は木下さんの勝利で幕を閉じた。

ちなみにそのあとすぐに僕とリュウトが秀吉をリンクエイドさせた。

2回戦

「では次の方どうぞ」

そこで出たのは、

「俺が出よう」

ルークに瓜二つの兄、アッシュ・F・ファブレだった。

「俺が出る!!」

ルークが出ようとするが、

「やめておけ。お前では俺には勝てん」

とファブレ兄が言った。

「なッ!? 何だと!!」

「貴様と俺の実力の差は知っているはずだ。無意味な戦いをしてFクラスを不利にするつもりか？」

「グッ!」

ルークは悔しそうだった。

あの人……… ああいつてるけど油断もしてないし慢心もない。

確かにクラス戦である以上、敗北はクラスに悪い。それが私闘だとしたらなおさらだが、

「行って来いルーク」

と雄二が言った。

「いいのか？」

「おお。負けても誰もお前を責めたりはしない」

「そうだそうだ!!」

「兄に一発かましてやれ!!」

「Fクラス舐めんなよ!!」

と、Fクラスのみんなが言った。

「皆………ありがとう!!」

「教科は何にしますか？」

「俺が選ぶぜ」

「かまわん」

「言ったな……現国でお願いします」

「わかりました。それでは始めてください」

「「試獣召喚!!」」

Fクラス

ルーク・F・ファブレ

現代国語

386点

VS

Aクラス

アッシュ・F・ファブレ

現代国語

419点

「ほお。なかなかやるな」

「こっちは相当なんだけどな……行くぞッ!」

ルークの召喚獣がアッシュさんの召喚獣に剣を構え突撃する。

「くらえッ!」

「甘い!」

ルークはアッシュさんに連続攻撃を仕掛けている。

アッシュさんは防戦一方。

「いいぞー!」

「そのままやっちまえ!」

「Fクラスの意地を見せろ!」

Fクラスは盛り上がっている。

……僕とリュウトとアリサさん、そしてグランツさん以外
は……

なぜなら

「まだまだ!」

「(フッ)……」

アッシュさんは笑っている。

普通は攻撃を止めてもルークの攻撃なら少しくらいダメージがあるはずだけど、アッシュさんは上手くないなしている。

おかげで全然点数は減らない。

「どづしたアッシュー!!もう終わりかよー!!」

「……………フッ」

「ッ!?何がおかしいんだよー!」

「……………調子に乗るなよー!」

ガキーン!!

「なッ!？」

ルークの剣がアッシュさんの一撃ではじかれた。

まずい!今のルークは隙だらけだ!!

そして、アッシュさんの召喚獣の腕輪が光った。

まさか、これが狙いか!？

「雑魚が!牙の餌食になるがいい!!」

「なッ!」

アッシュさんが剣を上に掲げた瞬間にアッシュさんの周りに方陣らしきのがあらわれて光が二人を包む。

「砕け散れ！！絞牙鳴衝斬！！」

二人の召喚獣は光にのまれた。

そして現れたのは

Fクラス

ルーク・F・ファブレ

現代国語

0点

VS

Aクラス

アッシュ・F・ファブレ

現代国語

149点

戦死したルークの召喚獣だった。

「勝者！Aクラス！」

第5問 開戦Aクラス！（後書き）

リュウト「さあ
くしゃあ
ッ
！……………！」

ドカ
ンッ！！

アナザー「ぎゃあああああああああッ……………！」

どきッ！！

リュウト「更新が遅すぎだよなあ。言い訳を聞こうか？」

アナザー「すいません。少し油断していて勉強が……………」

リュウト「なるほど」

アナザー「おお！わかってくれ！お前がバカなだけだろ
がああ
ああああ！！！！」「ぶおおおおお！！？」

リュウト「ったく……………こんな作者で申し訳ありません。ではまた次回もお願いします（ぺこり）」

アナザー「……………（チーン）」

第6問 AクラスVS Fクラス！ 現れた因縁（前書き）

問題

以下の問いに答えなさい。

「バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい」

姫路瑞希、神崎リュウト、雨宮レン、アリサ・エ・アミエーラ、高町なのは、
フェイト・ハラウオン、ティア・グランツの答え

「リトアニア・エストニア・ラトビア」

教師のコメント

そのとおりです。

ルーク・F・ファブレの答え

「エストニア・ラトビア・サウジアラビア」

教師のコメント

惜しいですね。ですが今までの回答よりかなり良いです。

土屋康太の答え

「アジア・ヨーロッパ・浦安」

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

「香川・徳島・愛媛・高知」

藤木コウタの答え

「京都・青森・新潟・東京」

教師のコメント

キミたちは正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう。

第6問 AクラスVS Fクラス！ 現れた因縁

明久 s i d e

「……………ごめん……………負けた……………」

ルークが申し訳なさそうに戻ってきた。

「気にするな。まだ次がある」

「そつだよ。ね、リュウト？」

「……………」

あれ？リュウトがなんだかそわそわしてる。

顔つきも真剣だ。

誰かを探してるように見えるけど……………

「どつしたのリュウト君？」

「……………」

「リュウトー！」

「ッ！？何だなのは、フェイト？」

「どっしたの？さっきから」

「いや、なんでもない」

僕にはそうは見えないけど……………

「とにかくだ。ルークはよくやった。気を取り直して次だ」

「僕が行きます」

「レンか。頼んだ」

「わかりました」

そう言ってレンは中央に向かった。

「ほんなら、わたしが行くわ」

「はやてちゃんか。雨宮君勝てるかな？」

「？？どっ言うことだ高町」

と雄二が聞く。

僕も気になる。

「はやてちゃん情報は情報収集が得意なんだ。だからもしかしたら雨宮君の苦手科目がばれてるかも……………」

「何ッ!？」

「どうしたの雄二？」

「レンには唯一の苦手科目があるんだ。それがばれたら……」

「科目はどうしますか？」

「私が決めるな？」

歴史で

「!？」

レンが驚いている。

もしかしてばれたの!？

Fクラス
雨宮レン

歴史
294点

V
S

Aクラス
八神はやて

歴史
472点

「「「「「「「「「「「「ええッ!?!」」」」」」」」」」」」

この差は大きい!

「……もしかして最初からこれが狙いで！」
「そっすやで。それじゃ」

Fクラス 雨宮レン

歴史 0点

V S

Aクラス 八神はやて

歴史 304点

「勝者Aクラス!!」

さすがにこの差は埋まらなかった。

「すみません。油断していました」

「気にするな。相手が相手だ」

そして、今は0対3で追い込まれている。

「次だ。誰が行く？」

「……………(スクツ)」

「行けるか？ムッツリーニ？」

「……………任せろ」

「よし。頼んだ」

こっちはムッツリーニ。

向こうは、

「じゃ、僕が行こうかな。一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

工藤さんか…

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

やっぱりか…………

「土屋君だっけ・随分と保健体育が得意みたいだね？でも、僕もかなり得意なんだよ？…………キミと違って…実技でね」

なんだかとっても問題発言！？

でも、僕とコウタは今すごくときめいてる！

ちなみに、レンとリュウトはため息をついて、ルークは何のことだかわからないような顔をしている。

「そっちのキミ吉井君だっけ？勉強苦手そっだし保健体育ならボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フツ、望むところ」「アキには永遠にそんな機会来ないから保健体育の勉強もいらないわよ！」「シクシク」

「島田さん。明久が死ぬほど哀しい顔をしていますよ？」

「それじゃあ、そっちのキミは？ 雨宮君だっけ？」

「僕は遠慮します」

「そっか、じゃあそこの藤木君は？」

「いや、やめとこっか」

「意外ですねコウタ」

「ノゾミがな」

「なるほど」

ノゾミだと……！

「コウタ！ 僕たちを差し置いて彼女か！」

「ちげーよ。俺の妹だ」

「何だ……」

勘違いか……

もしかして姉さんみたいなのかな？

いや、あんなのがたくさんいるわけないか。

「それじゃあ、そこの蒼い髪の……」

「神崎リュウトだ」

「神崎君。キミはどうかかな？」

「リュウト……？」

「そんなことしたらO・H A・N A・S Iするよ……？」

「大丈夫だよなのは。ねえリュウト……？」

「神崎君はそんなことしませんよね……？」

「リュウト？ワシは信じておるからな……？」

「恐っ！？」

「アミエーラさんや高町さんにハラウオンさんに姫路さんと秀吉がなんだか以上に怖い！！」

「何でお前らそんなに殺気立ててんだ？後、O・H A・N A・S Iはやめてくれ（ガクガクブルブル）。まっいいや。とりあえず遠慮する。そういうのは自分の本当に好きな人とやるべきだ。あんたみたいな可愛い女の子がそんなことあまり言わないほうがいいぞ？」

「えっ……！？可愛いって………／／／／／／／／／／／／」

「どうした？顔が赤いぞ？」

「いつ、いやッ何でもないよ！？／／／／／／／／／／（今までそんなこと面と向かって言われたことが無いから恥ずかしいよ……）」

「「「「「……「「「「」

「ん？どうしたんだ三人とも」

「「「「「何でもない（よ）（）（）ありません（の）（の）（の）（の）（の）（の）（の）（の）（の）」

「「「「」

「？そうか？」

クッー！リュウトがぐらやましいー！！

「そろそろ召喚してください」

高橋女史は疲れたような顔をしていた。

「あっ、はい。試獣召喚」

「……………試獣召喚」

Fクラス 土屋康太

保健体育 ***点

V S

Aクラス 工藤愛子

保健体育 446点

「なッなんだあの巨大な斧は!？」

「腕輪付きですね……」

「実践派と理論派。どっちが強いか見せてあげるよ。それじゃバイバイ。ムツツリーニ君!」

工藤さんの召喚獣が大きくジャンプしてムツツリーニの召喚獣に襲いかかる。

ムツツリーニの武器は小太刀が二つ。

受け止めることはできない!

「ムツツリーニー!!」

しかし、

「……加速」

ヒュン!

「えっ?」

ムツツリーニの召喚獣が消えた!?

いや、工藤さんの召喚獣の後ろにいる。

その時の格好は小太刀を振りかざし終えていた。

そして、

ドサッ!

「……加速終了」

工藤さんの召喚獣がいきなり倒れた。

Fクラス

土屋康太

保健体育

572点

V
S

Aクラス

工藤愛子

保健体育

0点

「そ……そんな……！この……ボクが……！」

「っ、強い！」

「下手すると僕の総合科目の点数だ！」

「ん？今、お前が「バカなだけだ」って言われた気が……」

「これで1対3ですね。次の方は？」

「はっ、はいっ私ですっ」

「次は姫路さんか。」

「それなら僕が相手をしよう」

「あっ、あの人は……」

「やはり来たか久保利光。ここが一番の心配どころだ」

雄一の言うとうり久保君と姫路さんの実力はほぼ互角。

点数差は20点程度しかない。

「科目はどうしますか？」

先生がそう聞いたら

「総合科目でお願いします」

と、久保君が言った。

「構いません」

「それでは始めてください」

「「試獣召喚」」

久保君の召喚獣は槍を二つ持っていた。

姫路さんはいつものように大剣を持っている。

二人の召喚獣は相手に向かって駆け出す。

そして

総合科目 4409点

VS

Aクラス 久保利光

総合科目 3997点

一閃！

姫路さんの召喚獣が久保君の召喚獣を真っ二つにした。

「マッ、マジか!？」

「いつの間にこんな実力を!？」

「この点数、霧島翔子にも匹敵するぞ……!」

Aクラスはあわてている。

それもそうだ。

点差が500点ぐらいもあるのだから。

「ぐっ……! 姫路さん! どうやってそんなに強くなったんだ!？」

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命になる皆がいるFクラスが」

「Fクラスが好き?」

「はい! だから頑張れるんです」

姫路さんにはこやかにそういった。

「これで2対3です。次の方」

よし! 追いついてきてるぞ!!

ルークside

だんだん持ち直してきたな。

このまま追い越せるか？

「次は私が行くの！」

「わかった。頼んだぞ高町」

次は高町か。

相手は誰だ？

「私が行きますわ」

「……ナタリアか」

アイツもなかなか点数がいいんだよな。

「教科は何にしますか？」

「英語Wでお願いしますわ」

ナタリアが選択した。

やっぱり一番得意な科目で来るか。

「では始めてください」

「「試獣召喚！」」

Fクラス

高町なのは

英語W

468点

V
S

Aクラス

ナタリア・L・K・ランバルディア

英語W

511点

差は40点程度か……

しかしハイレベルだな。

「行きますわ！」

ビュン！

「くっ！」

ガキーン！

ナタリアが放つ矢を高町が弾く。

しかし、

「まだ行きますわよ!!」

ナタリアは連続で矢を放つ。

その速さはかなりのものだ。

「くっ……!!」

高町は防戦一方で少しずつ点数が削られていく。

Fクラス 高町なのは

英語W 386点

V S

Aクラス

ナタリア・L・K・ランバルディア

英語W

511点

「それでは終わりにしましょう！」

ナタリアはそう言って弓を上に向けて矢を放った。

そして、

「降り注げ星光！アストラル・レイン！！」

「！！！」

上から大量の光の矢が高町の召喚獣を襲う。

だが、高町の目からはまだ希望が見える。

「プロテクション!!」

そう高町が言った瞬間に高町の周りを結界のようなものが包んだ。

それは、

「何ですって!?!?」

アストラル・レインを全て無効化した。

Fクラス 高町なのは

英語W 302点

V S

Aクラス ナタリア・L・K・ランバルディア

英語W 511点

さっきの結界のせいか少し点数が減っている。

「お返しに今度はこっちからの！」

高町が武器の先をナタリアに向ける。

さっきの反動かナタリアは動けないようだ。

「これが私の全力全壊！」

アレ？今、漢字のミスみたいなのが見えたような……………

「スターライト……………ブレイカア
ツ!!!」

高町の武器から放たれたピンク色の光がナタリアを包み、

Fクラス
高町なのは

英語W

83点

V
S

Aクラス

ナタリア・L・K・ランバルディア

英語W

0点

一撃でケリをつけた。

「勝者Fクラス！」

やっぱりこのクラスは少しおかしいと思う。

「次はどうする?」

「私が行くよ」

「フェイトちゃん!頑張ってね!」

「うん!ありがとう、なのは!」

こっちはハラウオン。

向こうは誰だ?

「俺が行こうか」

紫色の髪をして琥珀の瞳が特徴なヤツだ。

「ライガですか……」

「レン?知り合いか?」

「ええ。そして彼は危険な腕輪を持っています」

「危険な腕輪?赤い腕輪じゃないほうか?」

「はい。赤い腕輪も危険ですが普通の腕輪も厄介です」

どんな奴だろうか。

「教科は何にしますか？」

「もちろんどつどつぞ」

「わかりました。化学をお願いします」

「では、始めてください」

「「試験召喚」「」

Fクラス

フェイト・ハラウオン

化学

435点

VS

Aクラス

村雨ライガ

化学

461点

「点数差はそこそこだな」

「ッ!？」

レン？

「ハラウオンさん！早くライガを攻撃してください!!」

「えっ!？」

「急いで！じゃないと腕輪が」もう遅いぜレン「くっ!」

「どうしたんだレン!？」

「ライガの腕輪能力は一秒ごとに点数が減る代わりに攻撃力を上げるんです」

「それだけ？」

「いえ、彼の召喚獣は元々はスピードを生かしてカウンターや奇襲を得意とします」

「ッ!？まさか…!」

「はい………まさに腕輪を使えば姫路さんの召喚獣がかなり早くなつたような感じですよ」

「まずい……!ハラウオン!今すぐ防御に徹しろ!」

「えっ？えっ！？」

「……遅いッ！！」

一瞬にして村雨の召喚獣が消え

「あっ！」

ハラウオンの後ろにいた。

「ハアッ！！」

ガキイン！！

「クッ！」

Fクラス

フェイト・ハラウオン

化学

348点

V S

Aクラス

村雨ライガ

化学

452点

「なっ!?!」

「受け止めたのにすごいダメージ!?!」

「このままでは危険です!」

多分俺以外も感じるだろう。

村雨の召喚獣の背後に

死神が見える。

「……終わりだ！ハラウオン！」

斬！！

Fクラス

フェイト・ハラウオン

化学

0点

V
S

Aクラス

村雨ライガ

化学

439点

「勝者Aクラス！」

「僕もそう思います」

「そうだよフェイトちゃん！」

「アリサ、雨宮、なのは……ありがとう」

「でも、このままじゃまずいわね」

「そーだよなー……」

あのコウタまで雰囲気にもまれていた。

そのとき姫路が、

「だっ、大丈夫ですよ！次は神崎君ですよ！」

と言った。

「そっ、そうだよ！リュウトなら勝てるよ！」

「そうだよねリュウト君！」

しかし、肝心のリュウトは……

「……………」

真面目な顔をして何かを考えていた。

「リュウト？」

「……………」

「リュウト君！！」

「ッ！？……………何だ、なのはか……………。どうしたんだ？」

「リュウト！どうしたの？」

「それは……………」
「ようやくだな……………神崎リュウト」「ッ！？」

「！！」

「その声は！！」

その声の主は、

「私は……………貴様を許さん！」

「レゲルス……………」

明久 s i d e

「……………レゲルス……………お前はまだ俺を憎んでんのか……………」

「当たり前だ。貴様は私から楽しいことや嬉しいことまですべて奪った！」

「お前はただ会社のいいように利用されているだけだ！なんで気づかねえんだよ！」

「そんなことはない！彼らは親のない私の事を考えて言ってくれている！」

親がない！？

そんなことが……

「リュウト君。あの人は？」

「私はレグルス・ベルカイズ。神崎リュウトの幼馴染であり全てを奪われたものだ！」

「……一つ言うぞ。お前が持ちこまれそうになったお見合いは政略結婚の一部だぞ！そんなのお前のためと言えるかよ！？どう見ても会社のためじゃねーか！！」

「あの人は家族のない私の事を考えて言ってくれた！その言葉は真のはずだ！それなのに貴様は……ッ！」

「アイツはお前の事なんて物としか見てねーよ！お前は……ッ！」

「……もういい。どうせ今からケリをつけるのだ。勝てば官軍負ければ賊軍だ」

「わかった……」

リュウトはまだ納得していないみたいだ。

「科目は何にしますか？」

「……総合科目で」

「わかりました。それでh「待ちな」ッ！？学園長！？」

「……ええッ！？」

なんで学園長がこんなところに！？

「アンタら二人は使うんだろ？」

「もちろんだ」

「……多分」

「やはりねえ。普段はなしにしてたけど……高橋先生」

「はい。なんでしょう」

「この二人の戦いは体育館で行う」

「……はあッ！？」

「なっ、何ですか学園長！」

「ん？あなたは確か………観察処分者の吉井明久か」

「はい………じゃなくて！どうしてこの二人は体育館で戦わなきゃダメなんですか！」

「それはね………見ればわかる」

どういふことなんだろうか………

「それじゃあ頼んだよ高橋先生」

「はっ、はい！わかりました。では二人とも、行きますよ」

そう言って高橋先生と二人は体育館に向かった。

「大丈夫でしょうかリュウト……」

「多分、かなりすごいことになるね……」

「ああ……」

アリサとレンとコウタはリュウトの心配をしていた。

「神崎君とベルカイズ君はどんな関係なんですか？」

「……………あの二人は昔は仲良しでした。それも親友と呼べるほどに」
「それじゃあ何で今はあんなに対立してるの？」

「それは……………レグルスはさっき言っていたように親が居ませ
んでした。その代わりに親戚の人に育ててもらいましたがまったく
心を開かずに僕たちだけに開いてくれました」

そして、レンは大きく深呼吸して言った。

「彼は中学のころにその親戚の都合で引っ越してしまい完全に心を
閉ざしてしまいました。親戚のせいでもた一人になってしまったか
ら。しかし、その親戚は彼にいつも優しくしていました。その
おかげで彼は完全に親戚を家族と思わされてしまった」

「思わされてしまったってどういふこと？」

「多分、僕の両親が警察だからです」

「！？まさかッ！？」

「そうです。あの親戚は汚職政治家でした。おそらくは僕の両親から逃れる為に引越したんでしょう。そして、その親戚は彼を政略結婚の材料として使うつもりでした。その時の彼は親戚に騙されたんでしょうね。でも彼は親戚の役に立つのがうれしくて楽しかった。犯罪の片棒を担がされていても。しかし、その親戚はやがて逮捕されました。神崎リュウトの報告により」

「……………ッ！？」

「リュウトはその時、親がたまたまレグルスのいた所に旅行に行きました。そして偶然にも散歩中にお見合い会場の近くを通りかかった時にレグルスを利用してお金を稼ぐことが聞こえたので持っていたMP3プレイヤーで内容を録音していたらそれ以外のことも録音していました。彼はその時は以上に正義感が強く犯罪を見逃すことができずに通報。結果レグルスは楽しいこと、嬉しいことがリュウトによって消されたと思えば彼を恨んだ。そして今に至るんです。リュウトもこの時に「自分のせいでレグルスを傷つけた」と感じあまり食事もとらずについては病気にかかるほどにまでなりました。その時からでしょう、彼が自分の身を削っても誰かを守りたいと思うのは。それから次第にリュウトの方からも今のレグルスを避けていましたが、彼を昔のレグルス・ベルカイズに戻す為に説得も試みていました」

「そして今、また対立してるってわけか……」

「はい……………」

沈黙がおとずれる。

「神崎君は…………彼を取り戻そうとしているんですね……………」

「うまくいってほしいよな」

「ええ……………」

「リュウト君……………」

「一人で…………こんなことを抱えて……………」

その時、

「これより、神崎リュウト対レグルス・ベルカイズの試合を始めます！」

Aクラスの巨大ディスプレイから体育館にいる高橋先生、そしてリュウトとベルカイズ君が映る。

「それでは

始めてください」

「試獣召喚!!」

因縁の対決の火蓋が切って落とされた。

第6問 AクラスVS Fクラス！ 現れた因縁（後書き）

後書き

今回はAクラス戦クライマックス！

長かった！

レン「宿題に手間取ってる日が多かったですけどね」

レンくん。

そういうことは言わないでくれ。

アリサ「ですがあなたが真面目に宿題に取り組めばよかったですよ
うに」

ゴメンナサイ……

リュウト「んじゃ、今日はここまでにするか」

3人「次回もよろしく

」！

第7問 Aクラス戦 終戦！ そして新たな住人（前書き）

問題

以下の文章の（ ）に入る正しい物質を答えなさい。

「ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である」

姫路瑞希、神崎リュウト、雨宮レン、アリサ・？・アミエーラ、高町なのは、
フェイト・ハラウオン、ルーク・F・ファブレ、ティア・グランツ
の答え

「水酸化カルシウム」

教師のコメント

正解です。

土屋康太の答え

「塩化吸収剤」

藤木コウタの答え

「塩化消滅剤」

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように。

吉井明久の答え

「アンモニア」

教師のコメント

それは反則です。

第7問 Aクラス戦 終戦！ そして新たな住人

リュウトside

「…………レグルス…………」

「……………」

レグルスの召喚獣は本人と同じように冬に被るようなもこもこした帽子とそこからはみ出るやや白が多い水色の髪にトップスとボトムス両方F武装のブラックを着ていた。

（服装についてわからない人は原作をプレイしてみよう）

神器の刀身は「グランディオソ」

銃身は「シレンツィオ」

装甲は「ケーニヒスシルト 堅」

どれも生々しい形をしており黒や紫で染まった武器と服装には若干憤怒や憎しみが混じっているように見える。

「……さあ、始めようか。神崎リュウトオオツ!!!」

「ッ!」

レグルスが言葉と同時に赤の腕輪が光り出し腕輪能力を解放した。

そして、レグルスは俺めがけて突撃してきた。

それと同時に俺も開放する。

理由は観察処分者はフィードバックが来るが神経がつながる分操作がしやすくなるからだ。

明久は慣れだけだな。

しかし、この戦いは避けられない。

俺は………どっすねばッ！

明久 s i d e

二人はまだ動かない。

二人の点数はまだ表示されない。

とてもピリピリした空気が張りつめているのがよくわかる。

「リュウトはどうするんだろう……」

「あの人の更生はとても難しいかもしれませんがね」

「リュウト君……」

「頑張つて……リュウト……」

二人はいろんな思いがあつてそれぞれがかなり対立しあっている。

それにリュウトがしたことは正しいけどベルカイズ君にとっては家族を奪われたのも当然なことだった。

「リュウトは……恨まれてもレグルスを助けたかつたんでしょね。でも、思ったよりそれが大きすぎてしまった。多分まだリュウトは心の底では助けを求めている。けど、他人に頼ったら自分が許せなくなってしまうでしょう。リュウトは自分のしたことは自分だけで何とかしようとする人ですから。彼は本当に甘い。でも、彼ならなんとかするかもしれません」

「……そうだよね。リュウトなら！」

そう話していると、

「おっ、点数が出るぞ」

と、雄二が言った。

そして点数があらわれた。

総合科目

6073点

Aクラス

レグルス・ベルカイズ

V
S

総合科目

6172点

Fクラス

神崎リユウト

「
「
「
「
「
「
「
ええ

ツ!
「
「

FクラスとAクラスは同時に驚いた。

「なっ、何だこの点数は!?!」

「霧島翔子よりかなり上回っているぞ!?!」

「ホントにこんな点数とれるのか!?!」

「すいっ……」

「いつけえ〜リュウト君!」

「これは驚いたな……」

「すごいすぎなのじゃ……」

「……異常」

そして、ベルカイズ君がリュウトに向かった。

「ハアッ！」

「クッ！」

早い………

「死神」を使ったライガ程じゃねーけど十分きつい。

俺は大剣だがそれなりのスピードや連続攻撃もできる。

だけど……

「どうした！？守ってばかりか！！」

「……ッ！」

そしてレグルスが距離を取って剣形態から銃形態に変える。

マズイッ………！

「いくぞ！アラガミバレット・ウロヴオロスカノン！！」

レグルスの銃口から七色に光るレーザーが発射された。

「これなら……ッ！」

このレーザーは一直線上に発射されるハズだ。

俺はとっさに横に避けたがそれは失敗だった。

「かかった……！スペキュラーカノン！！」

今度は六つの拡散レーザーが放たれた。

俺は避けようとしたが、

「！」

今いる場所は体育館の端っこの隅だった。

それにバレットの範囲が大きすぎる！

「クソッ！」

この数は装甲で防ぐことはできない。

俺はすぐさま右へ飛んだが、

「グウッ！？」

足に当たったようで俺の足に痛みが走る。

Fクラス

神崎リュウト

総合科目 5668点

VS

Aクラス レグルス・ベルカイズ

総合科目 5974点

結構減ったな……

「まだまだ……私の味わった痛みはこの程度ではないぞ!!」

怯んでる隙に今度は剣形態で切りかかってくる。

一発目はかるうじて受け止めたが

「そこだッ!」

ザシュツ!!

「ツッ!」

二回目は防げずに少し横腹を切り裂かれる。

俺はいったん距離を取った。

「…………チツ」

Fクラス 神崎リュウト

総合科目 5186点

VS

Aクラス レグルス・ベルカイズ

総合科目 5974点

「どつした？まだまだ続くぞー！！」

クン……マジでムジする……

攻撃すればいいって普通は言うだろう。

だがッ………

『お前のせいだッ………お前のせいだッ………』

昔言われた言葉と同じことを言うレゲルス。

クソッ……

明久side

『そこだッ!』

『ッ!?!?』

「……ねえ。おかしくない雄二?」

「ああ……………」

みんな同じことを思っているはずだ。

どうしてリュウトは攻撃しないのか……

「勝てないことはないのによっつしたんでしょっつ……………」?」

「僕にもわかりません……」

「私もです……」

「アイツ……どうしたんだよ……」

そう考えていると、

『……もういい。興が冷めた。最後に神の力の痛みを喰らわせてやる』

『ッ！……まさか……？』

神の力……？

「ッ！？まさかレグルス！」

「使う気みたいですね……」

「まさか……学園長は知ってたから体育館で……」

「使うだと……まさか！」

えっ？えっ？

「どづいつことですか？」

と姫路さんが訪ねる。

レンは

「見ればわかります……」

そういった。

そして、

「いくぞ

『アラガミ化』!!!」

その瞬間に体育館を映すディスプレイがベルカイズ君の召喚獣から出る光で見えなくなり、光が消えた時にいたのは

「なっ……………」

「何……………これ……………」

「化け物……………」

「いいえ……………違います……………これは……………」

「これは……………何なのじゃレン」

「アラガミ」

「ウロヴオロス」

木が集まってたくさんの触手をもった化け物だった。

ウロウオロスか……

「お前………そこまでして俺が憎いか……」

「ああ！憎くて憎くてたまらないね！お前のせいで私は楽しいことや嬉しいこともすべて奪われたのだからな！ましては家族も！！」

「アラガミ化は点数が回復するがフィードバックが二倍になる！点数が増えた分ダメージも増えるんだぞ！なんでそこまでして俺を憎むんだよ！お前は……」

「黙れ！！楽しめるものを失った私の気持ちが悪様なんぞにわかるものか！！」

楽しめるものを失った？

「………本当にそうか？」

「………何が言いたい？」

「気づいてねーなら教えてやるよ。今さっきの戦ってる時にお前は自分の顔を見たか？」

「どづいづことだ？」

「お前さ……楽しそーに笑ってたぜ。昔のように」

「ッ!？」

「あの笑顔はお前が楽しんでいるときにする笑顔だ。今でも覚えて
いるさ親友」

「黙れ!そんなことがあるわけ」俺が見たんだよ。実際に」!？」

「お前は昔から変わってねーみてーだな。お前はゲームやバスケット
か対決とかになる楽しくてと笑ってプレイする。おかげで昔は結構
怖かったぜ?」

「そんな…そんなことは……」

「何なら今からでもビデオとかでとってやろうか?」

「黙れ!私は……私はッ!」

「もういい加減に現実を見るよ!いつまで偽物の家族に惑わされて
んだよ!!お前の本当の家族の墓ならもう建てられてる!今からで
も遅くない!その家族に墓参りして言ってやれよ!!」元氣です
ッて!!!」

「墓……?いつの間に……」

「お前が引つ越した時だ!」

「そ……そんな……じゃあ……私には……」

「いい加減に目を覚ませ!!」

「私は……私には……わからないッ!!」

そして、ウロヴオロスからレーザーカノンがレグルスの叫びとともに発射された。

「うああああああッ!!」

明久 s i d e

Fクラス

神崎リュウト

総合科目

2518点

V S

Aクラス

レグルス・ベルカイズ

総合科目

10306点

リュウトはウロヴオロスが放った光によって大幅に点数を削られてしまった。

そして、

「もしかしてリュウトは……話し合いだけでケリをつける気か？」

多分そうだろう。

さっきレンに聞いたけど「赤の腕輪」は使用すると僕と同じようにフィードバックが付く。

それにあの「アラガミ化」はリュウトが今さっき二倍になると言っていた。

「はい。多分レグルスを傷つけないからでしょう……」

「それにアイツは知ってたんだな。レグルスの家族がちゃんとしたこと。確か両親はレグルスが三歳の時に亡くなったんだっけ……」

アミエーラさんとコウタが悲しそうに言った。

「でも、このままじゃあ……」

「ああ、リュウトはいたぶられて負ける」

「そんな……」

高町さんがあることに気が付いた。

「あれっ？雨宮君は？」

「あっ、そういえば……」

レンがいない……

どこに行ったんだろうっか……

その時、

『あなたは何をしているんですかリュウト!?!』

「「「「「「「「「「えっ?」「」「」「」「」「」

レンがディスプレイに映っていた。

もしかして、体育館に向かったの!?

『雨宮君!なぜここに居るのですか!』

と、高橋女史が言うがレンはそれを無視して続ける。

『あなたはなぜ戦わないのですか!?!』

『……それは』

『今レグルスが戦いを楽しんでいるといったのはあなたでしよう!?
?それなのになぜ君は彼と戦わないのですか!?!』

『……………』

「雨宮君がこんなに必死なの始めてみたの……………」

「私もですよ……………」

「俺も……………」

「レンってこんな奴だったか……………?」

「すごく必死なのじゃ……………」

「でも、気持ちはすごくわかる……………」

『何で黙るんですか！なんで……………レン……………もついい……………えっ?』

その、時口を開いたのは、

『……………彼は……………悪くない……………私が……………悪いんです……………』

さっきみたいな怒りの顔をではなく申し訳なさそうな顔をしたベル
カイズ君だった。

レグルス side

私は……逃げていたのか？

あの人が犯罪をしていることは知っていた。

でも、家族がいないからと
思っていたからその人を「イツワリノカソク家族」にした
んだな……

私の「ホンモノノカソク家族」はしっかりいたのに……

墓まで立ててくれた……

それなのに……

U
T
S
S
R
e
a
d
s

すこいギリギリだな……

しかも、全身いてえ……

どうする？どうやってレグルスを……

「リュウト……」

レグルスが突然話しかけてきた。

顔を見ると……

「じっ……ごめん……な……さい……」

泣いていた。

泣かさないと決めたはずなのに。

駄目だな俺は……

「わたし……し……ずっと……一人……グスッ……ぼちちと……ヒック……
おもっ……ててから……」

俺は……

「もっいいい……」

レグルスを優しく抱きしめた。

「よく……頑張った」

明久side

「グスツ……よかったぁ……本当に……よかったのぉ……」

「うん……うん!……」

今、Aクラスではほとんどの人が泣いている。

それは両方のクラスだった。

男も女も関係なく泣いていた。

「これで……もとに戻ったんですね……」

「ああ、……ホントに良かった……」

アミエーラさんとコウタも泣いていた。

他には秀吉や姫路さん、高町さん達だけでなくAクラスの人もだ。

『わかってくれたらいいんだよ……』

『うん……うん……ありがとう……リュウト……』

二人の声が聞こえる。

でも、なんだかベルカイズ君が女の子に見える……

そしてリュウトは

『ところでだけども』

『何？』

『お前いつまで男装してるんだ？あと声も』

えっ？

『あっ、それもそうかもね。今の見られちゃってるしね』

そう言っベルカイズ君(?)は帽子を取った。

そして帽子の中に隠れていた長い髪が下された。

ちなみに彼(?)の声はかなり透き通った声をしていた。

その姿はまさに女の子だった。

「
「
「
「
「
「
「
「
「
「
ええ

ツ!
「?

「うっ、嘘!?女の子!？」

「アミエーラ知ってたか!？」

「いいえ……私も初めて聞きました……」

「俺、ずっと男かと思ってた……」

「コウタも気づかないなんてな……」

「……………恐るべき男装!? (ブバァア!!)」

「ムツツリーニ!? オイ! 大丈夫か!？」

「ム……ワシも見抜けんかったぞ……」

ちなみにこの試合はベルカイズさんから棄権することになった。

Aクラスの皆もいいと言っていた。

だって、あんなことがあった後に戦うことなんてできないよね。

でも、リュウトのアラガミ化が少し気になった。

「ごめんねアリス。コウタやレンにライガも」

「いって、気にすんな」

「そうですよ。少し驚きましたけど」

「コウタの言うとうりだ」

「ありがとう」

やはり睨み顔は男のようだが素は女の子の顔だ。

コイツには笑顔が似合ってる。

「なんだあの可愛さはッ！？さっきまでとは別人じゃないか……！」

「天使だ………天使が見えるよパトラッシュ……！」

「この時代に産んでくれてありがとうございます神様……！」

なんか騒がしいな……

「これで4対4ですね。最後の方お願いします」

と、高橋先生が言った。

あの人そういえば泣いてたな、目元が赤い。

「……はい」

「俺の出番だな」

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史。内容と方式は小学生レベルで百点満点の上限ありだ！」

ザワツ！

Aクラスがざわつく。

それもそうだよな。

「上限ありだつて？」

「しかも小学生レベルって満点確実じゃないか」

「注意力と集中力の勝負になるぞ……」

「わかりました。そうなる問題を用意しなくてはいけませんね。筆記試験ですので視聴覚室で行うことにしましょう」

そういつて先生は問題を取りに行った。

「雄二！」

「明久が雄二に駆け寄る。」

「後は任せたよ」

「ああ、任された」

二人は強く握手をした。

「……………（ビツ）」

ムツツリーニはVサインを雄二に向ける。

「お前の力にはずいぶん助けられた。感謝している」

「……………（フツ）」

「頑張れよ雄二！！」

「任せたわよ」

「頑張つてね坂本君！」

「力になれなかったけど頑張つて！」

「頑張ってください代表」

「頑張れよ！」

「後は頼みましたよ」

と皆が雄二に言つと雄二がこちらに来る。

「ほとんどお前に助けられっぱなしだったな」

「そう思つんなら頑張れよ」

「ああ！」

『では最後の勝負、日本史を行います。今から問題を配りますが始まるまで見ないように。制限時間は五十分。満点は100点です。不正行為等は即失格になります。いいですね？』

『……はい』

『わかってるぞ』

『では、始めてください』

「いよいよだな……」

「そうですね……」

ここまで来たんだ。

雄二には絶対に勝ってほしいな。

「でも、もしあの問題が出なかったら……」

と、明久が言う。

「延長戦とかで負けるな。だが逆に……」

「はい。もし出ていたら……」

「ああ、俺達の勝ちだ」

俺と瑞希とルークはそういった。

ディスプレイには問題が映っている。

大化の改新がでれば………

ん？

まてよ……

何かを忘れているような……

あ！

まさかッ！！

明久side

あつ……

今問題に……

えっ？

「どうしたのリュウト君？」

「何かあったの？」

「ああ！大有りだ！」

「どう言うことですか神崎君？」

「確かにアイツは「神童」だ！でも、それは「元」なんだよ！！」

「つまり、どっいうことなのさ？」

「アイツは「今」^{げんき}はFクラス並みのバカなんだよ！！」

日本史

Aクラス

97点

霧島翔子

V
S

日本史

Fクラス

53点

坂本雄二

U
T
S
I
D
E

Fクラスの卓袱台がミカン箱になりました。

視聴覚室

ドタドタドタ バンツ！！

「雄二ツ！！これじゃあシステムデスクじゃなくてミカン箱デスクになるじゃないか！！」

明久とコウタそしてそのほかのモブキャラ男子は鬼の形相で視聴覚室に突入。

それ以外のFクラスメンバーとAクラスはそのあとに入場。

「5対4でAクラスの勝利です」

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「いい度胸だ殺してやる！歯を食いしばれ！！」

「今日が貴様の命日だ！！」

マジで殺そうとする明久とコウタをルークとレンが取り押さえる。

ちなみにああ見えてレンはかなり強い。

もちろんコウタなんて目じゃないくらい。

「落ち着け明久！」

「コウタもですよ！」

「だいたい53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとか思っ
けどこの点数だと！」

「いかにも俺の全力だ」

「このバカヤローがああ！！！」

「吉井！あなたでしたら30点も取れないでしょう！」

「それについては否定しない！」

「それなら坂本君を責めちゃダメですっ！」

「というか二人とも今回何も役に立ってねーのに文句言つなよ！」

「ルークだって負けたじゃないか！」

「そうかそうか。そんなにヴァン先生仕込みの剣を喰らいた「すい
ませんでした」よろしい！」

「何でレンやハラウオンは何も言わねーんだよ！？」

「私達は負けちゃったし……」

「人の事は言えませんからね。言う気もありませんが」

「んじゃありユウトや高町さんは!？」

「私も雨宮君と同じかな。いろいろ文句は言わないの」

「俺はあいつが元に戻ってくれたからいいんだよ」

「くっ!なぜみんな止めるんだ!？」

「そうだぜ!このバカには喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに
!!!」

「それは体罰じゃなくて処刑よ吉井」

グランツもかなり呆れているな。

「……でも危なかった。雄二が所詮小学生並の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

「……ところで約束」

「……………!」

カチャカチャ……………!

おお、なんかムツツリーニがものすごい速さでカメラの整備を始めたぞ。

そしてなぜ明久とコウタは手伝っている。

霧島がどんな約束を持ち出すと思っているんだ？

「わかってる。何でも言え」

「……それじゃ

雄二、私と付き合って

へえ。

「やっぱりな。お前まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと雄二の事が好き」

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合っ気はないのか？」

お前はすごいな。

こんな話を何度も持ち出されるほど好かれるなんてな。

そして、よく断り続けたな。

ある意味すごいぞ。

「……私には雄二しかいない他の人なんて興味ない」

つまり霧島の異性に興味がないうって噂は一途に雄二を思っていた結果か。

「拒否権は？」

「……ない。約束だから、今からデートに行く」

霧島、一つ言っておくがデート前に相手の顔面をロックするのはおかしいと思う。

ズルズル……

あっ、雄二が引きずられている。

「ぐあっ！！放せ！！やっぱこの約束はなかったことに

」

バタンツ！

おお。引きずられていった。

「さて、Fクラスの皆、お遊びの時間は終わりだ」

ん？この声は、

「何の用ですか、西鉄先生？」

「神崎、いちいち会うたびにへんな呼び方をするな。西村先生だ。そして用事は我がFクラスに補修について説明しようと思ってるな」

何？

我がFクラスだと？

「おめでとつ。お前らが戦争に負けたおかげで福原先生から俺に担任が変わるそつだ。これから一年死に物狂いで勉強できるぞ」

「「「「「「「「「「「「なにイツ!?」「」「」「」「」「」

おいおいマジかよ……

「確かにお前らはよくやったがいくら「学力が全てではない」からといって人生を渡っていく上で強力な武器の一つなのにないがしろにしてはいけない。特に吉井と坂本に藤木は念入りに監視してやる。なにせ開校以来初の観察処分者二人とA級戦犯だからな」

「「そうはいきませんよ！（いくか！）なんとしても監視の目をかいくぐって今まで通りの楽しい学園生活を過ごして見せます！（やるぜー）」「」

「……あなた達には悔い改めるといふ発想はないんですか？」

アリスの言うことももつともだな。

「さあ〜でアキ。今日は約束通りにクレープでも食べに行きましようか？」

「え？それは週末って話じゃ……」

「週末は週末！今日は今日！！」

このままだとコイツは趣味に金を使いすぎて餓死するんじゃないか？

「にッ西村先生！補修今日からやりましょう！思い立ったが仏滅ですよ！」

「明久。「吉日」ですよ？」

「レン！今はそんなことはどうでもいいから！」

「うーん。お前がやる気なのは嬉しいが………無理することはない。今日だけは存分に遊ぶといい」

西鉄も敵でした。

「おのれ鉄人！僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バットを持って貴様を待つ！！」

「すげー斬新な告白だな明久」

「アキ！そんな事言っただけで逃げようってそうはいかないからね？」

「ち、違つよ！本当にやる気が出てるんだって！」

「言い訳無用！アキ！いいから来なさい！！」

ゴキイ！

「あがあッ！美波！首はやばいから！！」

明久も連れ去らわれていった。

南無。

「ねえ、キミ」

「ん？」

なんか緑色の髪をしたボーイッシュな女の子が声をかけてきた。

「どうした工藤？」

「あれ？何で知ってるの？」

「戦争で自己紹介をしてたじゃんか」

「あっ、そうだったね。キミは神崎君でいいかな？」

「ん？別に」

「そっか。じゃあさ、今日ボクと一緒に帰らない？」

そう工藤が言うと、

「ちょっと愛子！…？ナニ言ってるの！…？」

なぜか優子が突っかかってきた。

どうしたんだ？

「いや〜なんとなくかな?」

「なっ、それじゃあ私が付いて行ってもいいわよね?」

「うん。別にいいよ〜」

「……なにニヤニヤしてるのよ」

「うっん別に〜」

そう話していたら、

「わっ、私もリュウト君と一緒に帰るの! / / / / /」

「私も! / / / / /」

「私も行きます! / / / / /」

「三人ともずるいです! 私も行きます! / / / / /」

「ワシも行くのじゃ! / / / / /」

「わっ私も行きます! / / / / /」

なんかすごいことになったな。

しかし、こんなに女子ばつかのガールズトークに入ることなんてできない。

正直何を話せばいいかわからない。

そう考えていると、

P r r r r r r !

ん？メールだ。

「ちょっと失礼」

メールを見ると、

「……………え？」

驚くしかなかった。

「時間は！？」

俺は時計を見た。

まだ間に合うな……………

「悪い！今日ちょっと急用ができたから一人で帰るから！」

「……………えっ？」

「じゃあなッ！！」

俺はダッシュで教室を出てバス停へ向かった。

時間的にまだ間に合う！！

「どうしたんだろつリュウト君？」

「何かものすごく焦ってたよね？」

「……あっ」

「どうしたんですかレグルス？」

「彼女との待ち合わせかもよ……」

「それはありませんよ」

「?どうしてですかレン？」

「あの人が約束の時間に遅れると思いますか?それに無理ならキツパリと無理って言いますし」

「「「「「「「「「「「」

「じゃあ何だろう?」

「明日聞いてみましょう」

「ワシが聞いておくのじゃ」

「(リュウト。あなたも苦労してますね。それにしてもレグルスもリュウトが好きなんです。モテモテじゃないですかリュウト)」

「間に合ったか……」

何とかバスにも間に合いそのまま空港に到着。

しかし、

「まさか俺を指名かよ……」

そう思いながら空港の出口にいると、

「あれ？神崎なんでここにおるん？」

八神がいた。

「ああ、ちよつとお迎えにな」

「へえ、実は私もなんよ」

「そうなのか？」

「そうそう。楽しみやな」

そう八神と雑談していると、

「「「「はやて（ちゃん）！！」「」」」

空港の中から四人の女の人達がこっちに来た。

どうやら八神の待っていた人だろう。

「四人とも久しぶり。しばらくはここにいるんやろ？」

「はい。しばらくはここに住むことになりました」

「相変わらず固いな、シグナムは」

「そうですね。もっと喜んだらいいのに」

「はやてー！ー！ー」

「シヤマルもヴィータも元気そうですね何よりやー！」

「私もいますよー！ー！」

「ごめんごめん！リインも元気やな」

「えへへ」

「ザフィーラはどうしてるんだはやて？」

「大丈夫やでシグナム！ザフィーラはそこら辺の番犬より強いで！」

「狼ですよ。ザフィーラは」

とても仲がいいことで。

つてか狼飼ってんのかよ……。法律的にいいのか？

……アレ？

よく考えればこの人たち見たことあるような気が……

「ん？ツ！あゝ！お前！」

「ん？もしかして神崎か？」

「ああ、思い出した！久しぶりだな四人とも。2年ぶりだな」

「えっ？神崎、四人のことしっとなるん？」

「ああ。俺は中学の頃親の都合でここを離れたんだ」

「やっぱりリユウトだ〜！」

「久しぶりです〜！」

いきなりヴィータとラインに抱きつかれた。

「二人とも久しぶりだな。元気そうで何よりだ」

ナデナデ……

「ん〜／／／／」

「えへへ〜／／／／」

頭をなでると二人とも気持ちよさそうに目を細めた。

「てか、一応ヴィータは小柄っていつても同じ高校二年生なんだから不用意に抱きつくなよ」

「リュウトだからいいんだよ！／／／／」

「そうか？」

そういう問題なのか？

「久しぶりだなリュウト」

「よっ、シグナム。一応言っておくけど剣道の練習で俺は使っなよ」

「いいではないか。他に強者がおらんのだ」

「はあ……お前も可愛い女の子なんだからあまり無茶すんなよ？」

「なっ……！可愛いだと…… // // // // //」

アレ？なんかシグナムがものすごく顔を真っ赤にしてうつむいてる。どうしたんだ？

「シャマルも久しぶりだな。料理は上手になったか？」

「はい！リュウトさんのおかげです！」

「何！？シャマルの料理が安定してるんか！？」

「そこまで驚きなのはやてちゃん！？」

「ああ。あの頃が嘘のようだよはやて。むしろかなり旨くなっていく」

「リュウトはホントにすごいよな〜！」

「あのシャマルのポイズン・クッキングを直すとは……ありがとうな神崎。これでまだ生きていけるわ」

「はやてちゃん酷いですよ……（シクシク）」

「ははははは……でも食べてみればそんな認識もなくなるだろ」

そう話していたら、

「遅くなりました」

こっちの待っている人が来た。

「よっ、セラ、それにユーとハルナも」

「お久しぶりですリュウト」

「久しぶり！」

サラサラ…

『久しぶり』

相変わらずユーは俺ん家以外では紙に書くのね。

この癖はのちに直してもらわないとな。

「あれ？あと三人は？」

「ああ、あの子たちは「「おとーさーん！（パパー！）」」来たようですね」

「よっ。久しぶりだなエリオ、キャロ、ヴィヴィオ」

「「「「お父さん！？パパー！？」」」」」

ん？なんか勘違いされているような……

後ヴィータ。なんで世界が終わったような顔をしてるんだ？

「まつ……まさか……！リュウトは……もう……」

「待てヴィータ。年齢を逆算して考えてみる。無理があるだろ」

「ハッ！？そつ、そつか……」

正気を取り戻したか。

「この三人はちょっとした事情で俺の養子だ。ほら、挨拶して」

「神崎エリオです！よろしくお願ひします！」

「神崎キャロです。よろしくお願ひします」

「神崎ヴィヴィオです〜！」

「私は八神はやて。よろしゅ〜な」

「八神シグナムだ。よろしく」

「八神ヴィータだ！よろしくな！」

「八神シャマルです。よろしくね」

「八神リンです！よろしくお願ひします！ところであなた達は？」

「申し遅れました。神崎リュウトの従妹の神崎セラです。以後よろしくお願ひします」

「従妹の神崎ハルナだ！よろしく！」

サラサラ……

『ユークリウッド・ヘルサイズ』

「ああ、ユーのことは深く突っ込まないでくれよ。んじゃあ、返ろ
うぜ。途中まで同じだろ？」

「そつやね。んじゃあ帰るか？」

俺たちはバスの中で少し話した後目的地に着くまで眠ってバスの中
を過ごした。

「よし。ついたぞ」

ガチャッ

「「「ただいま」」」

「んじゃあ俺が飯を作っておくから荷物の整理や部屋の整頓をしていてくれ。あつ、掃除は毎日きちんとしてたから大丈夫だ」

「「「はい！」」」

ちなみに部屋の割合は俺とエリオの部屋、ハルナとセラとユーの部屋、キャロとヴィヴィオの部屋、後リビングと少し小さい和室にゲームなどが置いてある（銃なども）部屋ぐらいだ。

なのは達が泊まりに来たときは和室に布団を敷いてからハルナ達の

部屋への侵入は固く禁じた。結局俺の部屋に来てたけど。

「風呂沸かしておくぞー！」

「おう、頼んだ！」

ハルナは相変わらず元気がいいな。

「そういえば友紀はどうしましたか？」

「ああ。アイツは歩と同じ高校に行った。アイツは歩の事が好きだからな」

「そうですね。それで話があるんですが」

「ん？なんだ？」

俺、何かしたっけ？

「私は文月学園に行くことになりました」

.....

「What?」

「なぜ英語なのですか?」

「イヤイヤ、おかしいだろ!?!」

「決定事項です。学園長殿からも許可をいただきました」

「嘘だろ!?!あのババア!?!」

「ちなみにFクラスです」

「なおわりーよ!?!」

「どうしてですか……………そんなに私が嫌ですか?(ボソッ)」

「ん？なんか言った？」

「いいえ、何も」

「そうか？まあいいや。とりあえずいろいろあんだよ。まあ仕方ね
ーか。わかった。ところでハルナ達はとうするんだ？」

「彼女たちも行くところは決まっています。それについては後程」

「わかった。けどユーは？」

「ご心配なく。我々とともに文月学園に行きます」

「うん。ストップ」

「何でしょう？」

「無理だろ！確かにユーは色々とすごいけど！」

「これも学園長殿の許可をいただきました。大歓迎と言っていますし
た。もちろんFクラスです」

「あのクソババアがああああああッ！！！！」

余計なことばっかしやがって！

確かにユーは飛び級だ。けどなぜピンポイントで文月でFクラス
！？

「あなたの任務は彼女の護衛でしょう」

グサッ

「うっ！」

「まさかですが職務放棄ですか神崎リュウト隊長」

ザクッ

「ぐふっ！」

そう色々とセラに言われ続けていると、

「やめてセラ。リュウトがかわいそう」

とユーが言った。

彼女はこの家の中で暮らしか口でしゃべらない。

声はかなり綺麗な声なのにな。

「うっ……ありがとうユー……。さてと飯がそろそろできそうだな。みんなを呼んできてくれ」

「わかった」

「わかりました」

久しぶりにみんなで食べた飯はいつもよりかなり旨かった。

第7問 Aクラス戦 終戦！ そして新たな住人（後書き）

アナザー「何と！レグルスは女の子でした！！そして今回から『これはゾンビですか？』のキャラクターを追加することになりました！！！」

リュウト「しかもシグナム達まで増えてるし・しかもザフィーラはペット設定かよ……こんなにキャラを増やして大丈夫か？」

アナザー「確かに一話に全員は無理かもしれないな……でも出したかったんだよな」

ライガ「まさかだがティアナやスバルも追加する気か？」

アナザー「うん。考えておくよ」

リュウト「ところでなんでハルナ達を出そうと思ったんだ？」

アナザー「うん。ちょっとした興味かな」

ライガ「興味？」

アナザー「この小説は『もし*＊が居たら』って感じの小説だからね。でもあまり知らないキャラは出さないけどね」

ライガ「では、まだ増えるかもしれないのか？」

アナザー「一応そのつもりだよ。それにやっと原作一巻が終わったから少し番外編を混ぜてみようかな。二、三個位」

リュウト「まあ、とりあえずあんたに任せた」

アナザー「できないなりに頑張ってみます！」

ライガ「それじゃ。また次回でな」

番外編 過去・ヴィータ達との出会い (前書き)

リュウトとヴィータ達の出会いを書いてみました。

番外編 過去・ヴィータ達との出会い

リュウトside

中学三年生・4月始業式後

「あと一年か……」

俺は親の都合で小学六年生の卒業式の後、瑞希やアリサが居るところから引越した。

だが、親は「一人暮らしができるなら好きなどころに行ってもよい」といった。

俺はすぐさま高校を探し面白そうな学校を見つけた。

文月学園

試験召喚獣なんて面白いのがあるなんてね。

すぐに志望校にこれを選ぶことにした。

そしてただいま

ぐぎゅるるるるるるるるるる……

「はっ、腹減った……………」

空腹と絶賛格闘中であつた。

「油断した…………たかがアイス屋と……思っていたがここまで長蛇の列と
は……………」

なぜかこの日はとても暑かった。

春なのに夏並みだ。

そして、たくさんの人がデパートのアイスにがつついていた。

ちなみに今日は昼飯を抜いている。

えっ？何でって？

金がないからさ。

後、親は仕事があるから食べてもらうために一人分、つまり俺の分を無しにしている。

「おかげでお小遣いは一応あるが野口さんはたいてい一人ぐらいしか住んでない。

樋口さんがいたためしなんてない。

はははははははははははは………

笑うしかねえ………

「ん？」

なんか俺の前の小柄な子がものすごくくうなだれてる。

この世の終わりみたいな顔をしてるな。

「どづしたんだ？」

とりあえず聞いてみるか。

「……金が……足りないんだ……」

あゝ。

確かにこんなに並んでるのにいきなり金がないは厳しいよな。

その気持ちはよくわかるぞ。

「どのくらい足りないんだ？俺が払ってやるよ」

「いいのかッ!？」

テンションがいきなり上がりやがった!!

ってか近い!顔近いから!!

「あっ、ああ。足りない分は俺が払うから」

「ありがとーマジで助かった!」

という事で俺が払うことになった。

わらばー！ー！野口君！ー！君の事は忘れないッ！ー！

で……

「キミも＋＋＋中学なのか？」

「へっ？そうだけだよ。何で知ってた？」

「制服だよ。ホラ」

「あっそうか。アタシは八神ヴィータ。よろしくな！」

「俺は神崎リュウト。よろしく」

元気があるな。

アイスで復活したか？

そう話していると、

「ここにいたかヴィータ」

ピンク色の髪をのポニーテールをした女の人と金髪の女の人、そして銀髪の小さな女の子が来た。

八神の友達か？

「シグナム！シャマルとリインも！」

「探しましたよヴィータちゃん」

「やっと見つけましたよ」

四人とも美人だな。

ピンク色の髪をした方と金髪は同じ中学の制服を着てるな。

そう考えていると

「ヴィータ。そのさっきまで話していた男は？見たところ同じ中学のようだが」

と聞かれた。

「ああ。俺は神崎リュウト。よろしく。あんたらは？」

「私は八神シグナムだ。よろしく」

「八神シャマルです。よろしくお願いします」

「八神ラインです！よろしくお願いします！」

はっ？

「全員八神家？」

「ああ。そうだが」

「うーん。呼びづらいから名前でもいいか？」

「それもそうだな。別にかまわんぞ」

「サンキュ、シグナム」

「ところでヴィータちゃんはこの人とどこで知り合ったんですか？」

「アイス買いに行つてたら金が足りなくなつて……それでリュウトがおごつてくれたんだ！」

「ヴィータ。財布の中はよく見ておけつて言つておけるだろ？」

「ヴツ！」

「ははははははは……」

「でも、ありがとございませう。多分神崎さんが居なければヴィータちゃんはいくらも落ち込んでました」

「えっ？そんなに？」

「はい」

そんなにアイスが好きなのか……

確かに今も「ギガつま〜」って言いながら食べてるけど。

「なあ」

「ん？どうしたヴィータ？」

「お礼がしたいんだけどさ」

「別にいいつて。礼なんてさ」

「いいから！ホラ！ついて来いって……」

「おっ、オイ！ちょっと待てよ！」

「シグナム達も来いよ〜！」

「わかった……」

「ふふっ。ヴィータちゃん楽しそうですね」

「待って〜」

ヴィータによって店がたくさんある中央広場に連れて行かれた。

「ふう。疲れた」

俺はちょっと手洗いに行っていた。

しかしヴィータが、

「なんか食べないか？」

と言ってくれた時はヴィータが救世主に見えた。

これで俺の胃袋は救われた。

ありがとうヴィータ！！

ちなみにシャマルとシグナムはやはり同じ中学だった。

シグナムは剣道部に所属しており部長らしい。

そう思いながらそこにあるエスカレーターを降りて丁度そこにある
ヴィータ達がいる広場に向かおうとした瞬間

「動くんじゃねえ……」「いらんを殺すぞ……」

パン！パン！

えっ？

ちょっと待てよ。

何？このよくあるアニメや漫画的なもの。

普通現実にあるの？

しかも犯人よくある強盗みたいに覆面してるし。

アレ痛くないのか？

ん？

アレ？

人質をよく見てみると

「マジかよ……………」

ヴィータ達だった。

シグナム
side

まさか私たちが人質になるとはな……

犯人の数は丁度4人。

人質には私たち八神家の4人が囚われてる。

神崎がこの場にいらなくてよかった……

もしいたらアイツも人質になってしまう。

そう考えていると、

「しかし、よく見ると美人だなこいつら」

「ホントホント！いい体してんじゃねえか」

「シグナム……」

「大丈夫だリイン」

まずいな……

「オイ！何でこんなことするんだよー！」

「黙れ！今の状況がわかんねえのかこの餓鬼！」

バシっ！

男がヴィータのアイスを落とした。

「！！テメエ！せつかくの期間限定のアイス「黙れ（ジャカ……）」
っ!?!?」

「人質がワーワー騒ぐんじゃねえよ。殺されてえのか？」

「うっ………」

ヴィータもだんだん恐がって来てるな。

いくら強気でも女だ。

それは当たり前だ。

そう考えていると、

「ちよっぴん」

「！」

「「「「「「「「「「「？」

2階から、

ドオンー！

「いっつ……足いてえ……」

神崎が落ちてきた。

リュウトside

今、2階からシグナム達が居る所へジャンプして降りた。

マジで足がいてえ……………

現状は……………

犯人は4人

それぞれ持つてる銃はソフトハンドガン

犯人は一人ずつを人質にしてるな

後、俺が買ってやったアイスが落ちてる

こんなところか……

ちり……

「何だ貴様は」

「イヤイヤ。単なる一般人ですよ」

「普通は一般人は2階から飛び降りんぞ……」

「シグナム。今ツツコミ必要？」

「こんな時によくいえるな。」

「何か用か」

「ああ。言いたいことが4つある」

「何だ？」

「リンを人質に取っている男が銃を俺に向けつついう。」

まずはコイツだな……

「まずは一つ………始業式の後ぐらいいゅっくりとせろやあああ
ああッ！……！」

バキヤ！！

「ぐふうおー！！」

「………はい？」「………」

驚くのが普通だ。

アッパーで人が飛んでるんだもん

次はシャマルを人質にしてるやつに

「ふたあああつ！！」

「へっ？あつ！」

おせえ！

銃を向けるが、

ドカツ！

「な！？」

左足の蹴りで落とす。

そのまま、

「限定アイスは買ったら落とすなああああああ！！！！」

メキイ！

「ゴオ！？」

右手の裏拳で顔面。

止めにシグナムを人質にする奴に

「最後にひとおおおおおつ!!!!!!!!」

「死ねえ!!」

俺に向かって撃とうとした瞬間に犯人の一人からすぐさま銃を奪い。

ガチャ!

パン!

歓声が響いた。

「大丈夫か？」

俺が4人に呼びかけた瞬間、

「神崎ー！」

「神崎さん〜！」

ヴィータとリインが抱きついてきた。

「無事か？」

「うん！……うん！」

「恐かったです〜！」

二人は泣いていた。

それもそうだよな。

「シグナムとシャマルも無事だな？」

「ああ。助かった。ありがとうございます神崎」

「本当にありがとうございます」

うん。

全員無事だな。

これで一件落着。

と思った。

「それで？神崎。貴様は何者だ？一般人が銃をいとも簡単に使うことなどありえん」

シグナムウウウウ！！！！

ここで余計なことを！！

しかも、同じ中学だから逃げれん！

「……わかった。お前らにだけ話すけど絶対に他言無用だからな？」
「わかった。約束しよう」

結局、ツバキさんの許可を得て俺が「フェンリル」の隊長であること
とを話した。

ちなみに俺は中学一年の事件の後に「フェンリル」に入隊した。
その話をしたらヴィータとリインが目をキラキラさせていた。

俺が二人の頭をなでるとヴィータが

「ん〜？えいつ」

俺に抱きついてきた。

「どうしたヴィータ？」

「なんかリユウトってあったかいよな。それに何だろう……とって
も優しいし……」

「まるでお兄ちゃんみたいですね」

「兄か……それもいいかな」

それから色々あった。

ラインと遊んだり。

ヴィータと一緒にアイスを食べたり。

シグナムの剣道の試合につき合わされたり。

シャマルの料理(?)で死にかけたり。

色々あった。

そして………三年の卒業式が終わり………

空港

「グスツ……リュウトオ……」

「リュウトさん……」

「あーあー。泣くな二人とも。また会えるって。な？」

「ヒグツ……本当に……？」

「ああ。本当だ。だから笑ってくれ送ってくれ」

「……うんー」

「行ってらしゃいー」

「シグナムとシャルも元気だな」

「お前が居なくなると齒ごたえのあるやつが減るんだがな。まあいい」

「リュウトさん本当にありがとうございました」

「シャルは料理をマスターしろよ？」

「はい！ー」

俺は文月学園に向かうためにこの地を離れることになった。

最後にヴィータ達が見送ってくれたのがうれしかった。

「じゃあ、またな」

「おう！」

「またね！」

「楽しかったぞ」

「ありがとうございました」

はぢてside

「へえ〜」

「そのあとにここに向かうと聞いたヴィータがかなり喜んでいた」

「だってさ〜ちょっとリュウトに会えるんだぜ」

「そうですよ〜」

「私も楽しみでしたね」

やっぱりみんなは、

「皆、神崎の事好きやろ?」

「」「」「えっ?／／／／／」「」「」

おっ！赤くなつとる赤くなつとる。

「え〜っと……多分／／／／／」

「ラインもです……／／／／／」

「…………／／／／／」

「私も……／＼／＼／＼」

「どつゆうつコが好きになったんや？」

「よくアイスをおごってくれたりしててから／＼／＼」

「日曜日とかに遊んでくれてからです／＼／＼」

「剣道の練習などに参加してくれたり、私を女の子として見てくれるところですよ／＼／＼」

「料理を覚えてくれたりしててからですね／＼／＼」

やっぱり人気やなりユウト君。

ただでさえカツコイイのに性格もええからな。

「ちなみに神崎は競争率高いで？なのはちゃんやフェイトちゃんも好きみたいやし」

「「「「ええ〜！」「」「」

頑張れや〜

「ところでシグナム達はどこの高校に行くん？リインの小学校はきまってるけど」

「それはな

「

番外編 過去・ヴィータ達との出会い (後書き)

次回も番外編です。

番外編 転校生と暴徒とラブレター（前書き）

番外編二回目です。

今回はセラ達の入学です。

番外編 転校生と暴徒とラブレター

リュウトside

「はあああゝ」

「どうしたのじゃリュウト？大きいため息なんぞついて」

「いろいろあんだよ」

そう、俺は今人生の危機にさらされるまでの時間になるまでどうするか考えていた。

理由は一つ

セラだ。

今日、セラとユーは先に職員室へ向かうために早く登校した。

しかし、あの二人はFクラスに入ると言っていた。

ユーは問題ないがセラだと危険だ。

アイツと俺の苗字は同じだからだ。

多分、従妹と言ってもFFF団が攻めてくるだろう。

どうしたものか……

そう思いながら玄関の靴箱に到着。

靴を履きかえようと下駄箱を開けようとしたらしたら、

「なっ、なんじゃこりゃああああああっ!!!?!?」

どっかの某刑事ドラマみたいな叫び声をあげるバカが居た。

「どうした、明久?」

「おわああああっ!」

おっ、雄二だ。

「あ、ああ。雄二か。おはよう」

「おっ」

おお。焦ってる焦ってる。

「い、いや、良い朝だねっ！すごくイイコトがありそうな朝だねっ！」

「？何を動揺している？」

「べべべ別に動揺なんて……！」

わかりやすいことこの上ないな。

「まさか、さっきチラッと見えた手紙のようなものは

」

「た、ただのプリントだよ！」

「嘘に無理があるじゃろ」

「右に同じ」

「ひっ、秀吉にリュウト！？……いつからっ？」

「お前が「なんじゃこりゃあああっ！？」って言ってから下駄箱からラブ「それよりもそろそろHRが始まるから急ぐっ！」「チッ！」

あと少しだったのに！

ま、いいか。

そう思って下駄箱を開けると

「…」

俺にもラブレターらしき手紙があった。

「…………でも、やめとくか」

「どづしたの…………じゃ…………」

ん？なんだ？

秀吉から黒いオーラが…………

「リュウトよ…………その手紙はなんじゃ？」

「ラブレターらしいな。断るけど」

「？ どうしてじゃ？」

おお。黒いオーラが消えた。

「とりあえずどづやって断るか…………」

「そづじゃな…………」

「どづするんだ？」

誰が書いたかは書いてはなかった。

「となると…………開けるか」

「そづじゃな」

「早く開けるリュウト」

とりあえず中を見た。

「ん？なんだ……」

「どうしたリュウト？」

「何でもないよ雄二。俺の赤い腕輪について学園長からだ。やっぱアラガミ化は治らないって」

「そうか。まあいいか」

「そうじゃな。そろそろ教室へ上がるかの」

Fクラス教室

「席に着け!!」

担任が本当にアイアンマンになるとはね。

「今日からこのFクラスに転校生が来る」

ヤバイ。

どうする。

「先生！女子ですか！女子すよね！？」

どんだけ必死なんだよ。

「静かにしろ！五人とも女子だ」

「……………俺たちの時代だあああああつ！！！！！」
「……………」

は？

五人？

セラとユ一だけじゃねーのか？

「それでは、入っていいぞ」

ガラッ！！

俺は目を疑った。

なぜならそこに

が居たからだ。

シャマルとヴィータとシグナム

「自己紹介をしてくれ」

と、アイアンマンが言う。

「はい。私は神崎リュウトの従妹、神崎セラです。得意技は「秘剣・燕返し」。特技は「秘剣・燕返し」。趣味は「秘剣・燕返し」です」

全部「秘剣・燕返し」じゃねーか！！

サラサラ……

『ユークリウッド・ヘルサイズ』

「彼女はとても恥ずかしがり屋なんだ」

アイアンマンナイスフォー！

「八神シグナムという。よろしく頼む」

いたって普通だ。

「リュウトぐらい剣の腕が立つ奴は私と試合をしてもらっ

全然普通じゃねえ！？

何いきなり宣戦布告してんだよ！

しかも、俺の名前出すな！！

「八神ヴィータだ！よろしくなりリュウト〜！」

頼む。

笑顔でこっちに呼びかけるな。

FFF団が動くかもしれん。

「八神シャマルです。よろしく願いします」

シャマルは普通だな。

信じてたよ俺は。

「質問などは後にするように。それでは出席を取る」

毎朝の高齢事例がスタート。

しばらくして

「近藤」

「はい」

「斉藤」

「はい」

「坂本」

「……明久がラブレターをもらったようだ」

「……………殺せええっ！……！」……………

バトロワスタート。

「ゆ、雄二！いきなりなんてことを言いだすのさ！」

Fクラスは

「どういうことだ！？吉井がそんなものを貰うなんて！」

「それなら俺達だって貰っていてもおかしくないはずだ！自分の席の近くを探してみる！」

「ダメだ！腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！」

「もっとよく探せ！」

「……出てきた！未開封のパンだ！」

「お前は何を探してるんだ！？」

見事にトチ狂っている。

「お前らっ！静かにしろ！！！」

シン

アイアンマンの一喝で見事に静かになったな。

これで一日平和だな。

「それでは出席を続けるぞ。手塚」

「吉井コロス」

アレ？

「藤堂」

「吉井コロス」

「戸沢」

「吉井コロス」

これは戦争の前触れだな。

「皆落ち着くんだ！なぜだか返事が「吉井コロス」に変わっているよ！」

「吉井、静かにしろ！」

「先生、ここで注意するべき相手は僕じゃないでしょう！？このままだとクラスのの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！」

「新田」

「吉井コロス」

「布田」

「吉井マジ殺す」

「根岸」

「吉井ブチ殺す」

「ハラウオン」

「頑張つて吉井」

「ファブレ」

「明久頑張れ」

「藤木」

「吉井撃ち殺す」

ツツコミを見事にスルーしたな。

ルークとフェイトは心配してるな。

合掌もしてるし。

後、コウタ。

お前が言うとお前にしそうだからやめてくれ。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉強に励むように。後、神崎。教室の外に五人のミカン箱を置いているから運んでくれ」

そう言ってアイアンマンは出席簿を閉じ教室から出ようとする。

てか、ミカン箱ぐらいアンタが運んでくれよ。

卓袱台ならわかるけどさ。

「待つて先生！行かないで！可愛い生徒を見殺しにしないで！」

「吉井、間違えるな」

「そうだぜ明久」

アイアンマンとルークが言った。

明久は何が間違いなんだって顔をしてるな。

「お前は不細工だ」

見事なコンビネーションです。

つてかルークはさつき明久の心配してたよな？

「不細工とまで言われるとは思わなかったよ！？」

「授業は真面目に受けるように」

「先生待つて！せんせい！」

明久の叫びもむなしく先生は教室を出た。

そして俺は教室の外にあるミカン箱×5を持って教室に入ると、

グワシ!

島田に関節を外される勢いで肩をつかまれている吉井が居た。

「アキ、ちよ〜つと話を聞かせてもらえる?」

恐いです。

顔が怖いですよ島田。

釣り目がさらに吊り上がっているぞ。

「あ、あはは……美波、顔が怖いよ?」

「手紙を貰ったの?誰からなの?どんな手紙なの?」

恐いです。

あなたの背後から活性化したボルグ・カムランだ墮天が見えます。

ポニーテールがああ針に見えます。

今にも明久が一突きで戦闘不能になりそうです。

「あー、えつと、そのー」

焦ってるな吉井。

「いいからおとなしく指の骨を
を見せなさい」

じゃなくて、手紙

断ればどんなことになっていたんだろうか。

パンパン

「皆、ちよつと落ち着け」

と、雄二が言った。

「今問題なのは明久の手紙を見ることじゃない」

明久は助かったような顔をしている。

しかし、実際は、

「問題は、明久をどうグロテスクに殺すかだ」

こんな感じだ。

「前提条件が間違ってたんだよ畜生！！」

あつ、荷物を持って逃げた。

「逃がすなあつ！追撃隊を組織しろ！」

「手紙を奪え！吉井を殺せ！」

「サーチ&デス！」

「そこはせめてデストロイで！！！」

明久、お前以外に余裕だな。

そしてこっちは聞きたいことがある。

「なあ、シグナム」

「何だリュウト。剣道の試合か？」

「違うわ！何お前は転校早々ドンパチ起こそうとしてんだよ！ってか今まで俺から申し込んだことなかっただろ？聞きたいのはそうじやなくてどうしてここにいるかだ」

「はやてと同じ高校だからに決まってるだろっ？」

「そっですか……………」

「それにここに「神崎がいるで〜」とはやてが言ってからヴィー
タが食いついてな。それでここにしたんだ」

あの狸がああああああ!!!!!!

そう話していると

「ヴィータちゃん久しぶりなの〜」

「なのはも久しぶりだなー!」

「久しぶりシャマル。リンも元気?」

「はい。元気ですよフェイトちゃん」

どうやらなのは達とヴィータ達は知り合いのようだ。

「ところでリュウト。その二人は?」

とアリサが聞いてきた。

「セラについてはさっき自己紹介で言ったな? ユーは色々あってな。
二人とも俺んちに住んでんだ」

と言った瞬間、

「……………なんだってええええええ!!!!」「……………」

「「「

と、FFF団が怒声を上げた。

何で？

「貴様……このような美人二人と同じ家で住んでいるだと………」
しまった！

そこか！

「貴様のような輩は始末してくれる！！」

「戦略的撤退！！」

俺も明久と同じように荷物を持ち脱走。

「待て！逃がすな！必ずしとめるぞ！」

「吉井に出した戦力の半分を戻せ！神崎にあてるぞ！」

だああああクソ！

何で俺がこんな目に！！

なのは s i d e

リュウト君が突然逃げ出したの。

雨宮君が言うに神崎さんとヘルサイズちゃんと住んでるのが羨ましくて追いかけてるんだって。

リュウト君の事だから何もしてないと思うけど。

もししてたら O・H A・N A・S I I なの…………… 魔王モード

「ところであなた方は？」

「あつ、僕は雨宮レンです」

「私はアリサ・イリーニチナ・アミエーラです」

「高町なのはです」

「フェイト・ハラウオンです」

「ルーク・フォン・ファブレだ。よろしく」

「ティア・グランツよ」

「わかりました。私の事はセラとお呼びください。神崎だと紛らわしいでしょう」

「リュウトが名前で呼ばれればいいのでは有りませんか？」

「いいのです」

「そうですか。それでは改めてよろしくお願いいたしますセラさん」

「「ちら」そよろしくお願いします」

サラサラ……

『よろしく』

そういえば何でこの子はしゃべらないんだろう。

「ユーは先ほど西村教諭が言ったとおり恥ずかしがり屋なのです」

「そうですか」

どんな声かが気になるの。

「とところでリュウトを助けに行かなくていいのか？」

とファブレ君が聞いてきたの。

「大丈夫ですよ」

「そうですね」

「どうしてなの二人とも？」

「……だって」

雨宮君が外を指差した。

それで外を見てみると、

「うわぁ……………」

「これ、リュウト一人で？」

「すごいですね……」

「やっぱりリュウトはすげーよなー!!」

「ふむ。また強くなっているな。今度勝負してもらおうか」

「シグナムはそればかりですね」

Fクラスらしき人達が積み重なって山になっていた。

リュウトside

「はあっ……はあっ……」

「死ねえ！神崎リュウト！！」

「っ！？しつこいんだよお前ら！！」

おかしい。

従妹だから一緒に住んでいるだけなのに！

あっ、もしかしてユーの方が。

あれは弁解不可だな。

そうか……諦めるしかないか……

って！

「んなわけあるかああああ!!!」

バキヤッ!

「ぐふっ!!」

今、俺を追いかけてきた奴にダブルリアット（顔面）

こんな風に倒しながら逃げてるけどもう疲れたな。

そう思いながら屋上に逃げると、

「明久。お前は知らなかったらうが」

「なに!? なんでもいいから早く水を持ってきて!」

「俺はお前の幸せが大嫌いなんだよ」

「知ってるよバカ! ちくしょー!」

なんか手紙らしきものが燃えておりそれを必死に消化しようとする
明久にそれを見て居る島田と雄二。

今の会話から明久の手紙が燃やされたんだろう。

ドンマイ明久！

しかし、島田は手紙を見て少し残念そうにしてるな。なんでだ？

ちなみに俺は瑞希たちの活躍により生き延びることができた。

エリオside

「……………ただいま」

「お帰りお父さん。どうしたの？そんな疲れたような顔をして」

「エリオ……………生きてるって素晴らしいな」

ホントにどうしたんだろ……………

「ただいま帰りました」

「あつ、セラさん。お帰りなさい。お父さんどうしたんですか」

「大丈夫ですエリオ。リュウトはそんなに脆くはありません」

高校ってそんなに疲れるところなのかな？

「とりあえず今から飯を作るから風呂沸かしといてくれ」

「はい、お父さん」

今日のお父さんの作ったご飯はなぜかいつもよりおいしかった。

高校生って大変なんだ……………

番外編 転校生と暴徒とラブレター（後書き）

そろそろ原作二巻を始めようと思います。

ヴィータ達が追加されたFクラスでどんな清涼祭がおこなわれるのでしょうか。

シグナム「そのためにも課題などはしっかりやっておけよ」

ヴィータ「また放置したらゆるさねーぞ！」

わかった。

わかったから二人ともデバイスを構えるのやめて。

シャマル「それではまた次で会いましょう」

セラ「これからもよろしくお願いします」

サラサラ……

『よろしく b y u n o o』

第8問 清涼祭前日！ 瑞希の転校！？（前書き）

アンケート

学園祭の出し物を決める為アンケートにご協力ください。

「あなたが今欲しいものはなんですか？」

姫路瑞希の答え

「クラスメイトとの思い出」

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そう言った出し物も良
いかもしれませんね。

神崎リュウトの答え

「皆が笑っている平和でいること」

教師のコメント

そんな学園祭も楽しそうですね。神崎君がどんな学園祭にするかが
楽しみです。でも、学園祭のアンケートとしてはどうかと思われる
答えですよ？

高町なのは、フェイト・ハラウオンの答え

「リュウト（君）の作った料理」

教師のコメント

確か神崎君の料理は絶品と聞きましたね。他の教師も「ぜひ食べてみたい」と言っていました。喫茶店なんてどうでしょうか。

レグルス・ベルカイズ、八神ヴィータの答え

「リュウトとの思いで」

教師のコメント

二人とも神崎君とともに学園祭を過ごしたいようですね。ベルカイズさんも今までより接しやすくなっているのも神崎君のおかげですね。

工藤愛子の答え

「神崎君」

教師のコメント

この回答には神崎君の貞操の危機が感じられます。

土屋康太の答え

「Hな本（取り消し線）成人向けの写真集」

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか。

吉井明久の答え

「カロリー」

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

第8問 清涼祭前日！ 瑞希の転校！？

「……………雄二」

「なんだ？」

「……………「如月ハイランド」って知ってる？」

「ああ。今建設中の巨大テーマパークだろ？もうすぐプレオープン
って話の」

「……………とても怖い幽霊屋敷があるらしい」

「廃病院を改造したアレか？面白そうだな」

「……………日本一の観覧車とか」

「おお、相当デカいみたいだな。聞いた話だけでも凄そうだな」

「……………世界で三番目に速いジェットコースターも」

「早い上に色々な方向を向いたり、ぐるぐる回ったりするってヤツ
か。どんなモンなのかかわからんが、考えるだけでワクワクしてくる
な」

「……………他にも面白いのが沢山ある」

「それは凄いな。きっと楽しいぞ」

「……それで、今度そこがオープンしたら、私と」

「ああ、お前の言いたいことはよくわかった。そこまで行きたいなら
ら

「……うん」

「今度友達と行ってこいよ」……握力には自信がある（ミシミシ）
ぐあああっ!?! アイアンクローはよせっ!?!」

「……私と雄二、二人で一緒に行く」

「オープン直後は混みあっているから嫌だ（メキメキメキ）ぐぎや
あああっ!?!」

「……それなら、プレオープンのチケットがあつたら行ってくれる
?」

「プ、プレオープンチケット? ケホッ、あれは相当入手が困難らしいぞ?」

「……行ってくれる?」

「んー、そうだなー、手に入ったらなー」

「……本当?」

「あーあー。本当本当」

「……それなら、約束。もし破ったら

」

「大丈夫だったの。この俺が約束を破るようなヤツに見えるか」

この婚姻届に判を押してもらおう「命に代えても約束を
守ろう」

「……………清涼祭か……………はあ……………」

リュウトがなぜかとても疲れてるようだ。

何かあったのか？

「どうしたのリュウト君？ため息なんてついて」

「ああ、なのはか。なんか友達に頼まれて清涼祭で歌を歌うことになってさ。俺なんかを誘って何になるんだか」

「そう言いますがリュウト。あなたは以前カラオケで90点台をたたき出したじゃないですか」

スゴッ！どれだけ上手いんだ！？

「たまたまだつての。それにレンだって俺が人前でそんなことをしたくないことぐらい知ってたんだろ？」

普通たまたまで90点はめったに出ないぞ。

ティアも90点ランクな時もあるけど。

「これを機会にもっと人前に出るべきです」

「言ってくれるな……………」

「と言いつつも断れなかったようだが？」

「シグナム。考えてみてくれ。男四人に囲まれて土下座されて」引き受けてくれるまで土下座をやめない」って言われたんだぞ？」

「……………すまない」

「わかってくれるならそれでいい」

それは厳しいな。

苦労してるなリュウトも。

「でも、リュウトの歌うところ見てみたいな」

「フェイトやめてくれ。期待するだけ損だから」

「私も見てみたいです」

「シャマルもやめろ。俺はそんなんじゃない」

「絶対大丈夫だって！」

「ヴィータ。何を根拠に言ってるんだ？」

「リュウトだからだ！」

「……………はあ……………」

サラサラ……………

『頑張り』

「ユーまで……」

追い詰められてるな。

そう話しているよ、

ガラッ！

「ん？なぜ女子と神崎と雨宮とルークしかいない。他の奴らはどうした？」

そついうと俺たちは一斉に窓の外を指差した。

アイツらは

「さあこい！明久！」

「勝負だ、コウタ！」

野球をしていた。

「あのバカどもがあああああああ！……！！！」

西村先生が怒声を上げながらグラウンドに向かった。

リュウトside

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが」

野球を西鉄により中断された後に雄二がダルそうにそう言う。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを指名する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

この野郎……

興味ねーからって他人任せにしゃがった。

戦争の時と比べると雲泥の差だ。

「神崎君。坂本君って学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

と、小声で瑞希が言ってきた。

「見てのとーりめんどくさいって感じだな。興味があつたら戦争の時みたいになるからな。今を見るとどうでもいいって感じだな」

「そうなんですか……ちょっと寂しいです……神崎君も興味が

ないですか？」

「俺は……どうだろうな。あんま深く考えたことはないな」
ただ楽しければ俺はそれでいいけどな。

「私は……神崎君と一緒に、学園祭で思い出を作りたいです」
「？ どうしてだ？」

「その、神崎君は知ってますか……？うちの学園祭ではとっても
幸せなカップルが出来やすいって噂が
ケホケホッ」

「おい瑞希。大丈夫か？」

「は、はい。すみません……」

やっぱり今の設備に問題があるか……

今の設備はミカン箱に傷んだぞさだ。

これでは体調を崩すのがおかしい。

戦争まではあと二か月たたなければならぬ。

……確か学園祭の稼ぎで設備を向上できるって聞いたな。

……よし。やるか。

「んじゃ、学園祭実行委員は俺にやらせてくれ雄二」リユウト？

わかった任せた」

すげ〜ダルそうだなオイ。

「それじゃあ俺が議事進行をする。レン！板書をしてくれ！」

「わかりました」

「うし。真面目に決めろぞ。何かしたいのがある奴は手を挙げてくれ」

俺がそう言つと結構な数の手が挙がった。

一応やる気はあるのか。

「んじゃ、ムツツリーニ」

「……………（スクツ）……………写真館」

「お前の言つ写真館はかなり危険のような気がするぞ……………まあいいか。レン」

「はい」

カッカッカッ……………

「次だ。はい、横溝」

「メイド喫茶 と言いたいけど、流石に使い古されていると思うので、ここは斬新にウエディング喫茶を提案します」

「却下」

「何でだよ!？」

「ハイリスクハイリターンなんてそんな可能性は薄い。それにそのウエディングドレスの調達はどうするんだ?そもそも女子が着るかどうかも分からないのか?」

「……それもそうだな」

「ってなわけでこの案は無しだ。次は? はい、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

「……オイ、一応聞くけどよチャイナドレスでも着せようってか?」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉がある

ことからわかるように、「こと」「食べる」「という文化に対して中華」
わかった。わかったからストップ。これ以上言われると進まないか
ら」……わかった」

須川は意外に詳しいな。

本当は聞いてみたいが今はやめておこう。

「レン。書いてくれ」

「はい」

カッカッカッ……

候補・2 中華喫茶

とレンが書いた瞬間、

ガラガラ…

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

西鉄が入ってきた。

「今の所この二つです」

と、レンが言うと西鉄は黒板に目をやった。

候補・1 写真館

候補・2 中華喫茶

「ふむ、まともだな。バカなことをしたら補修の時間を倍にしてやるうかと思っていたが」

あぶね〜。

ウエディング喫茶書いてたら終わってたな。

「ところでバカなこととはたとえばどういふことですか？」

「うん。司会を吉井にしたり、吉井を司会にしたり、吉井に板書をさせることだ」

全部明久じゃねーか。

「とにかくだ。知ってるとは思うがこの文化祭でうまく稼いだ金で設備を向上できるからな。しっかり取り組めよ」

そんなのみんな知って「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」その手があつたか！

！！」「」「」「」「」「」……マジか？

「なにも試召戦争だけが設備工場のチャンスじゃないよな！」

「いい加減この設備にも我慢の限界だ！」

おお。

やる気がかなり上がっている。

「み、皆さんっ！頑張りましょうっ！」

瑞希もやる気が上がってるな。

「出し物はどうする？利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？」

「いや、初期投資の少ない写真館の方が」

「けど、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ」

「中華喫茶ならはずれはないだろう」

「それだと目新しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、その特徴のなさは致命傷じゃないか？」

「……………コイツ等はなんで勉強以外でこんなに考えれるんだ？」

学校は勉強する場所だぞ？

「ストップストップ。静かにしてくれ。時間がもうあまりない。この二つから決めてもらうぞ。はい、まずは写真館がいいと思うやつ
拳手。次、中華喫茶」

フム。

「はい。僅差で中華喫茶に決定した。全員協力するように」

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

と須川が立ちながら言う。

「……………（スクツ）」

そして何故かムツツリーニも立つ。

「お前、料理なんてできるのか？」

「……………紳士の嗜み」

どうせコイツの事だ。

チャイナドレスが見たくて中華料理店に通ってるうちにできるようになったただけだろうな。

「それでは厨房班は須川とムツツリーニの所へ。ホール班はリュウトの所へ集まってください」

レンがそう言つと、

「それじゃあ私は厨房班にしますね」

「私もそうしましょう」

「私も厨房班にしますね」

元、重要なのもう一度「元」危険物生成組の瑞希、セラ、シャマルが厨房班に行こうとする。

だが

「悪いけど三人にはホールをしてほしい」

と言っ。

「どっ、どっしてですか？」

「理由をお願いします。リュウト」

「はやてちゃんも私の料理を食べて「おいしい！ホントにシャマル

が作ったんか!?」と言っていましたよ?」

あゝ、やっぱり俺が料理の心配をしてると思われてるな。

「違う料理の問題じゃなくな、Fクラスではただでさえ女子が少ない。こんな古臭い旧校舎で男ばつかのむさ苦しい教室で料理なんて食べる気がしないだろ?だから三人とも可愛いんだからホールをしてもらいたい。暇があればたまに厨房も頼む。いいか?」

「ッ!? / / / / (可愛い!?)」

と俺が言っていると三人は顔を真っ赤にし始めた。

……………なんか殺気をかなり感じるんだけど。

「か、可愛いだなんて…………… / / / / 神崎君がそういうなら、ホールでも頑張りますねっ! / / / / /」

「わっ、わかりました / / / / / そう仰るならホールにします / / / / /」

「わ、私もホールにしますね / / / / /」

三人とも顔がまだ赤いけど納得してくれたようだ。

「それじゃあ私は厨房にしようかな? (チラッ)」

なぜかなのはがこっちをチラ見してそう言う。

「なのにもホールに行ってもらおう。でも、たまに厨房も頼む。な

のはの料理はかなり美味かったからな。期待してる」

「うん！わかったの！／＼／＼／＼／＼／＼（期待されてるの！）」

「私も厨房にしようかな」（チラッ）」

「私も（チラッ）」

なぜフェイトとアリサも俺に対してチラ見をする？

「もちろん二人もホールだ。二人とも料理もできて綺麗だからな。きついと思うがホール兼厨房で頼む。頑張ってくれ」

「わかった！／＼／＼／＼／＼／＼／＼（料理もできて綺麗か）」

「わかりました／＼／＼／＼／＼／＼（そんなに褒められたら……）」

「私も厨房にするか（チラッ）」

「アタシもそうするかな」（チラッ）」

……………なぜシグナムとヴィータまで俺をチラ見するんだ？

俺、何かしたか？

「失礼だけど二人はあまり料理は得意じゃないだろ？でも二人は美人だからな。ホールを頼むぞ。皆と同様期待してるからな」

「う、うむ。わかった／＼／＼／＼／＼／＼（期待には応えねばな！）」

「任せろ！／＼／＼／＼／＼（美人だつて〜！）」

なんか皆顔を赤くし始めたな。

風邪なのか？

トントン

「ん？」

後ろから肩を叩かれたので振り向いたらユーが居た。

『私は？』

と書かれていた。

「……ユー。お前も可愛いからホールにしたいけどオーダーとか取る時に喋らなかつたらできん」わかつた喋る」決断早ッ！？」

「「「「「「「「「「ヘルサイズちゃんが喋つた！？」「「「「「「「「

「「「

おお。

みんな驚いてる。

「これでいい？」

「あつ、ああ。じゃあ、ホール、頼むぞ」

俺はそう言っただけでユ一の頭を撫でる。

「……………／／／／／／／／／／」

ユ一の顔がなぜか赤くなっていく。

ホントにどうしたんだ？

「アキ。ウチは厨房にしようかな？」

「うん。適任だと思う」

「……………」

「なあ、ティア。お前はどつするんだ？」

「私は……………厨房にするわ」

「何で？綺麗なのにな」

「なっ……………！？／／／／／／／／／／バカ言わないでよ！」

「へっ！？……………ゴメン……………また無神経なこと言って……………」

「……………こちらこそごめんなさい。突然怒鳴って……………私、ホールにするわ」

「へ？いいのか？」

「ええ……………／／／／／／／／／／」

そう皆が話しているよ、

「それならワシも厨房にしようかの〜(チラッ)」

秀吉までチラ見してくる……………

「秀吉、何をバカなこと言ってるのさ！そんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まって「ドゴオッ！」みぎゃあぁっ！み、美波様！折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨が！」

なんか明久が死にかけてるな。

「確かに秀吉は可愛いけど男だ。秀吉は女と思われてもいいか？いいならホールに入ってほしいんだが……………」

「ワシは別によいのじゃ！……………(可愛いと言われたのじゃー)！」

「いいのか？」

「任せるのじゃ！タイタニックに乗ったつもりで安心するのじゃ！……………」

「秀吉、焦りすぎて船の選択をミスしてるぞ。それはむしろ沈む方だ」

「う、うむ……………すまぬ……………」

とりあえず秀吉はホールになりました。

「……ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね……。それが、いいと、思います……」

元からそのつもりだったが死にかけた明久の推薦により島田もホールになった。

秀吉 side

「それにしてもリュウトが祭り事で気合を入れるなんぞ珍しいの」

「ん？そうか？」

普段は祭り事なぞ「めんどくさい」で終わらせるのじゃがな。

じゃがこれはリュウトと清涼祭を楽しむチャンスじゃ！／／／／／
／／／

「の、のうリュウト／／／／／」

「ん？どうしたんだ、秀吉？」

「その……………清涼祭で……………ワシも誰が雄二なんかと！だったら僕は、断然秀吉の方がいいよ！……………あ、明久？」

その声の主は明久であった。

こ、これはっ、ここに告白か！？

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、わっワシはリュウトと……………
／／／／／／／／／（ブツブツ）」

「ひ、秀吉！違っただ！もの凄い誤解だよ！さっきのはただの言葉のアヤで！……………後、なんか聞きたくない言葉が聞こえたような……………」

「明久……男に告白してどうすんだよ……」

……リュウトはまだワシを男として見ておるのか……

……皆にワシを女と思われるのは嫌じゃがリュウトには必ず女として見てもらうのじゃ！／／／／／／／／／／

「ところでお二人さん何の話をしてたんだ？」

「え？ああ、どうして清涼祭で坂本が動かないかってことよ」

「うん。多分そういうことになると思うよ」

「確かに。アイツは興味が無いことにはとことん無気力状態になるからな」

確かに。

雄二はとてモダルそうだったからのう。

「なんとかできないの？このままじゃ喫茶店が失敗に終わるような……」

「どうやら真面目に深刻な問題らしいな。事情を話してくれるか？
できる事なら協力する」

「うん。本人には誰にも言わないで欲しいって言われてたんだけど、
事情が事情だし……」

「わかった。この話は秘密にする」

「ありがとう。実は瑞希の事なんだけど」

「姫路さん？姫路さんがどうかしたの？」

「あの子、転校するかもしれないの」

「ほえ？」

「何……？」

リュウトの目が真剣のモノになった。

リュウトは他人の為に頑張る男だからの。

……ん？

「む。マズイ！明久が処理落ちしかけてるぞ！」

「このバカが！不足に事態に対して弱すぎだろうが！」

「明久、目を覚ますのじゃ！」

ガクガクガクガク……

「秀吉……、モヒカンになった僕でも、好きでいてくれるかい……」

………？」

「………どーゆー処理をしたら瑞希の転校からソレにたどり着くんだ？」

「ある意味、稀有な才能かもしれんのか……」

何を考えていたのじゃ、明久？

「ハッ！美波！姫路さんが転校つてどういふことさ！」

おお。

正気に戻ったか明久！

「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「このままだと………？」

「島田よ。その姫路の転校と、さっきの話が全然つながらんのか」

「そうでもないのよ。瑞希の転校の理由が「Fクラス的环境」なんだから」

「なるほど、そういふことか」

「？ どういふことじゃリュウト？」

「まずは瑞希にこの設備がふさわしくないからだ。アイツは本来ならAクラスだったんだからな。さらに老朽化したこの教室だ。健康に害のある状況だからな。最後にレベルの低いFクラスの人間だ。瑞希自体に非がないのにこんな環境だったら普通は転校を選択する

な。それにまず瑞希は体が弱いからな」

「そうだよな。それが一番マズいよね……………」

「なるほどのう。じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたいのじゃな」

「うん。瑞希も抵抗して「召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおう」とか考えていたみたいんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと」

「なるほど。そうすると雄二の力が必要だな。明久。雄二に連絡を取ってくれ」

「うん。わかった」

そうして、明久は雄二に連絡を取り始めたのじゃが、

「あ、雄二。ちょっと話が

え
雄二！

？雄二。今何してるの？

？もしもし！もしもーし！」

なんじゃこの会話は？

「坂本はなんて言ってた？」

「えっと、「見つかった」とか「鞆を頼む」とか言ってた」

「……………なにそれ？」

なるほどのう……………

「大方、霧島翔子から逃げ回っているのじゃろう。アレはああ見え
て異性には滅法弱いからの」

そろそろ諦めて付き合えばよいのにおの。

「そうすると坂本に連絡を取るのには難しいわね」

「いや、これはチャンスだ」

「？ どういうことじゃ明久？」

「雄二を喫茶店に引つ張り出すにはちょうどいい状況なんだよ。う
ん。ちょっと三人とも協力してくれるかな？」

「それはいいけど……………坂本の居場所はわかっているの？」

「大丈夫。相手の考えが読めるのは、なにも雄二だけじゃない」

「なんか考えがあるみたいだな」

「まあね」

リュウトside

「やあ雄二。奇遇だね」

「……………どういふ偶然があれば女子更衣室で鉢合わせするのか教えてくれ。そしてリュウト。お前が居たのも驚きだ」

「明久に来てくれって言われたんだ」

明久が雄二のいる場所に行くと言っていたので連れて行かれたらまさかの体育館の女子更衣室に連れてこられた。

一瞬、明久を殺しそうになったが行ってみたら雄二が居たので少々驚いた。

「やだな。ただの偶然だよ」

女子更衣室で会う偶然は天文学的にどのぐらいの確率が教えてくれ。

「嘘をつけ。こんな場所で偶然出会うワケが「ガチャッ」……………」

突然、音を立ててドアが開いた。

そこには、

「えーっと……………アレ？Fクラスの問題児コンビにリュウト？」

「……、女子更衣室ですけど？」

「やあ木下優子さん。それにレグルス・ベルカイズさん。奇遇だね」

「秀吉の姉さんにベルカイズか。奇遇じゃないか」

「あ、うん。奇遇だね」

「奇遇ですね」

………優子とレグレスが入ってきた。

もう嫌な予感しかしねえ………

「先s「ちよおおおつと待つてくれええええええええええ!!」（ガシツ!）「………ツ!?!?/// /// /// /// ///」

何か言われる前に二人の口を手で塞ぐ。

「助かったぞリュウト!」

「早くどっかに行け!」

「ありがとう!」

二人は窓から逃げだ「待たんか貴様ら!なぜ今女子更衣室の窓から出てきたのか説明しろ!」って!西鉄いたのかよ!?

「待つてください先生!リュウトも女子更衣室に居ますよ!」

「しかも女子二人を襲ってるぞ!」

アイツら!

俺を売りやがったな!?

「馬鹿者! 神崎はそんなことをするほどバカではない! 嘘ならもつとマシな嘘をつけ!」

「ちくしょおおおおおおおッ!!!!」

良かった……

とりあえず……

「いいか二人とも? これは霧島から逃げる雄二を探していてから明久が「雄二はここにいる」って言ったからここに居たんだ。決してそういうことのために来たんじゃないんだ。わかってくれたか?」

「……(コクコク)……………」

二人とも納得してくれた。

ってか、二人とも顔が赤いな。

……ああそうか。

口を塞いでたままだったな。

「プハッ!……………」

「リュ、リュウト……………大胆すぎるよ……………」

……俺が何かした？

「とりあえず。俺は戻るから。この事は誰にも言わないでくれ」

「うん……………// // // // //」

まだ二人は顔が赤いがこれ以上は見つかったら厄介なので誰もいないことを確認して窓から脱出した。

しばらくして……

「目をつぶって歯を食いしばれ」

雄二に殺されそうになった明久が居ました。

作戦は成功っばいな。

Fクラス

明久side

「そうか……姫路の転校か……とりあえず問題点はリュウトの言った三つだな」

と、姫路さんの転校について話し合っていた。

「ああ。まず、設備。これは喫茶店の成功でどうにかなる。でも教室自体には足りないかもな。最後は島田と瑞希が対策を練ってくれたしな」

そっか。

美波と姫路さんは召喚大会に出るんだっけ？

「翔子が参加するようだと優勝は厳しいが、アイツはこういった行事には無関心だしな。姫路と島田の優勝は十分ありえるだろう」

「そっちな。瑞希と島田なら問題ないな」

「本当なら姫路抜きでが望ましいがのう」

「それは言いつこなしたよ」

「瑞希と島田が優勝すれば、喫茶店の宣伝にもなるからな。まさに一石二鳥だ」

確かにそのとおりじゃの。

「で、坂本。それはそうと、二つ目の問題はどつするのよ？」

教室の改修はワシらだけでは難しいの……

「どつするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ？」

雄二は何故さも当然のように言うのかの……？

「それだけ？僕らが学園長に言ったくらいでなんとかしてくれるかな？」

「あのな。ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？いくら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼす状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

「うまくいけば三つとも全部解決ってことだ」

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

「そうだな…学園長室に乗り込むか。秀吉と島田とリュウトは学園祭の準備計画でも考えておいてくれ。それと、鉄人を見つけたら俺たちは返ったと言っておいてくれ」

「あゝ悪い。俺は今日すぐに帰らなきゃいけないんでね」

「？リュウト。何かあるの？」

「まゝな。んじゃっ後はよろしくな？」

「うむ。任せるのじゃ」

「アキもしっかりやりなさいよ」

しばらくして今日は解散となった。

リュウトは何の用事があったのかのう？

「ただいま」

「おかえりパパ〜！」

「ヴィヴィオ。今帰ったぞ」

ナデナデ

「えへへ〜」

とりあえずヴィヴィオの頭を撫でてみた。

なんか癖になってるな。

「遅いぞリュウト！」

「悪いなハルナ。今、飯作るから。みんなは？」

「もう帰ってきてますよ」

「そうか。ありがとセラ」

そう言いながらリビングのキッチンに向かい料理を作った。

「……………いただきます！」「……………」

最近までは一人で食べていたが急に7人で食べることになり食事が楽しくなった。

「……………お父さん」

「ん？どうしたキャロ？」

「明日はお父さんの学校の学園祭があるんですよ？」

「ああ。そうだけど」

「僕たちも行っていないですか？」

「はい？」

いきなりだな。

「学校は？」

「明日は全学年四時間で給食は無しなんです」

「そ……そうか。わかった、いいぞ」

「本当ですか！？」

「ああ。場所はわかるか？」

「はい！私とエリオ君が知っています！」

「ヴィヴィオも行く」

「わかった。じゃあ、仲良く三人で来てくれ」

「」「」「はい！」

「アタシも行くからな！」

「ハルナもか？」

「明日は多分エリオ達と同じぐらいに来れるぞ」

「そうか。なら四人とも着いたらまずFクラスの教室に来てくれ」

「わかった！」

そう話しつつ夕食を食べ終えた。

そして夜。

エリオ達が寝た後のリビング

「セラ。頼みがある」

「わかってます。あの四人の事ですね？」

「ああ。何が来るかがわからねえからな。後、ユーも同行してくれ」

「了解しました」

「わかった」

「そうか。じゃあ、お休み」

「お休みなさい」

「お休み」

そう言っただけで俺たちはそれぞれの部屋に行った。

俺はベットに寝転がりながらこう思った。

(とりあえず召喚大会は明久たちに任せておくか。……しかし、まさかあのクソババアからあんなメールが来るとはね。多分、後の五人にも届いてるはずだな。エリオ達はセラとユーに任せるとしてFクラスメンバーを巻き込めないなんて保証はないよな。さて、どうするか)

そう考えながら俺は眠りについた。

夢の中の家

「……………またここか？」

目が覚めたらまずはここに居る。

パツと見は俺とエリオの部屋だが、色が白と黒でしかない。

まさにモノクロの世界だ。

俺はなぜか学生服を着ているがもう慣れた。

リビングへのドアを開けたら、

「やつほぐ。また来たねリュウト」

俺の顔をして長い長髪をした俺とは肌以外真逆の色をした女の子がいた。

彼女の名前は神崎カエデ。

コイツは突然俺の夢の中に住みだした住人らしい。

ちなみにここで少しけがをしたとき目が覚めて体を見ても同じ場所に同じ傷跡があったのは驚いた。

彼女は紅蓮のような髪をして瞳はルビーのような感じだ。背は若干俺より低い。

顔が俺と同じだがなぜかとても女としていえる。（女だけどな）

これを見るとなぜか悲しくなる。

俺ってこんな女顔だったっけ？（半泣き）

「大丈夫大丈夫！リュウトは私が認める男の娘だから！」

「オイ待て！今絶対男の子じゃなくて男の『娘』って言っただろ！？」

「うんそうだよ。だって僕は君と目の色は違うけど同じ顔だよ？それなのに僕は女の子に見えるんだよね？女の子だけだ」

「腹立つ！正論だけど腹立つ！」

恨むぞこの顔！（そうは言うが結構イケメンだ）

「仕方ないよ。君は僕、僕は君なんだからね」

「初めてそれを聞いたときはペル○ナかと思ったぞ」

「それは『我は汝、汝は我』だよな？」

そう思うのは不思議ではないと思う。

ちなみに彼女は俺の記憶を共有しているため何があったのかわかっている。

「それはそうと明日は学園祭だね。頑張ってね〜喫茶店」

「あゝハイハイ頑張りますよ」

「それにしても君はこんなにかっこいいのに何で彼女ひとつ作らないかな〜。僕が彼女になろうか？」

「拒否。ってか夢の中の人間を恋人にするか？周りに言えばただの妄想野郎だぞ？」

「……………本気なのにな（ボソツ）」

「何か言ったか？」

「ううん、何も。で、彼女は作らないの？」

「俺がモテると思うか？久保やライガがモテるのは納得いくけどな。レンはこーゆーのには興味がなさそうだし」

「……………ハア（鈍感すぎるよ。ハーレム状態なのにな）」

「何でため息？」

「何でもないよ」

正論だと思うんだが。

そうしてしばらく話しているよ、

……………

「時間だね」

「そうだな。じゃあな」

「うん。君も」

仕事を頑張っ
てね」

「わかっているわ」

今回、学園長から依頼があり榊博士からメールが来た。

『教頭の竹原が何かを起こそうとしているみたいだ。文月学園の存続の為に頑張ってくれるかな?』

送信したメールにはもちろん、

『任務了解。明日より行動する』

第8問 清涼祭前日！ 瑞希の転校！？（後書き）

フエンリルがとうとう動き出す！

どうするリュウト！？

シャマル「それを考えるのがあなたですよね？」

カエデ「オリキャラ出してくれたのは嬉しいけどコレもうバカテスじゃないような気がするよ？」

いや……こんなのも面白そうだなーって思ったんだけど。

レン「しかし、かなり投稿が遅くありませんでしたか？」

ゴメンナサイ。

あまり時間がなかったんです。

シグナムとヴィータにも言われましたが無理でした。

本当にすみません！

ライガ「だが土曜日日曜日ぐらいは大丈夫だろう？」

はい！

頑張ります！

第9問 再開と妹と喫茶店（前書き）

アンケート

学園祭の出し物を決める為アンケートにご協力ください。

「喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？」

姫路瑞希の答え

「家庭用の可愛いエプロン」

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

高町なのは、フェイト・ハラウオン、レグルス・ベルカイズ、アリサ・エ・アミエーラのの答え

「リュウト（君）の好みによる（）の（）ます（）」

教師のコメント

あなた達に好かれる神崎君が羨ましいです。神崎君もそろそろ彼女たちの思いに答えるべきと思います。

ルーク・F・ファブレの答え

「メイド服（ティアが来てた時に似合ってたから）」

教師のコメント

メイド服は定番と言いますが女子の意見は聞いておきましょう。無理やりはだめですよ？

土屋康太の答え

「スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の調整をしながら保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀色で照り返しが得られるぐらいのものを用意し裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを」

教師のコメント

裏面までびっしり書き込まなくても。

吉井明久、藤木コウタの答え

「ブラジャー」

教師のコメント

二人の回答がブレザーの間違いだと信じています。

神崎リュウトの答え

「店による。（明久が真剣に書いていましたが何か知りませんか？」

教師のコメント

吉井君……………

第9問 再開と妹と喫茶店

リュウツside

さてと……

昨日任務が出されてけどあまり動かないほうがいいな。

多分、向こう側から来るだろうしな。

出来る限り穩便に済ませますか………

???side

「清涼祭ねえ……」

「面白そうじゃないですか！彼もいますし行きましょーよー！」

「ボクも行きたいな。楽しそうだし！」

「私も。楽しいのは好きだもの」

「おっさんは別にいいよ〜」

「○○○○が行くならウチも行くのじゃ〜！」

「僕も行ってみたいです。彼とも会いたいですし」

「**はどうします?」

「…………アタシも行く…………」

「**はあの人に

」

「ッ! / / / 吹っ飛べガキンチョ! !」

ドカツ!

「いたっ! 酷いじゃないか!」

「フンッ!」

「でも、会いたいですよね?」

「…………うん…………お兄ちゃん…………」

いくら義の兄でも**にとっては大好きなお兄ちゃんですもんね。

早く会わせてあげたいです!

後、彼の驚く顔を見てみたいです!

* * s i d e

お兄ちゃん……………

家族がないあたしの唯一の家族。

あたしは「天才少女」と呼ばれてから友達が居なくなつた。

でも、お兄ちゃんはそんなあたしにこう言ってくれた。

「家族にならないか？」

九歳にのあたしは泣いた。

今までつらかったから。

お兄ちゃんはあたしが泣きやむまで抱きしめてくれた。

お兄ちゃんはあたし以外にもわけありの子を家族にしていた。

お兄ちゃんの家は貧乏であまりお金が無かった。

けど、お兄ちゃんは警察で働いていてお金は自分の為になんかほとんど使わずにあたし達の為に使ってくれた。

それでも楽しかった。

気づいたら今みたいにたくさん仲間ができていた。

でも、あたしが十一歳の時にお兄ちゃんは高校と警察の為に故郷に戻ってしまった。

あたし達はお兄ちゃんが知り合いと話してから別れた後にお兄ちゃんと話した。

泣きそうだった。

けど泣かなかった。

「一生会えなくなるワケじゃないんだからさ。せめて笑ってくれな？」

そう言ってくれたからあたしはお兄ちゃんに泣かずに笑顔を見せることができた。

そして今。

この文月学園である清涼祭。

お兄ちゃんが居る学校。

お兄ちゃん………驚くかな？

あたし達、「フェンリル」に入ったんだよ？

ルークside

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

清涼祭初日の朝。

俺達Fクラスの小汚い教室は一新して、中華風の喫茶店に姿を変えていた。

ホントに雄二の統率力は凄いな。

「このテーブルもパツと見じゃあ本物と見分けがつかなくなってるしな」

とコウタが教室のいたるところに設置されているテーブルを見て言った。

実はこのテーブルは俺たちの設備のミカン箱を巧く積み重ねて綺麗なクロスをかけたただけでの物だったりする。

しかし、もはやテーブルそのものに見える。

「確かこれは秀吉が作ってくれたのよね？どこから綺麗なクロスを持ってきてから手際よく」

ティアが秀吉を見てそう言う。

なるほど、このクロスは演劇部で使っている小道具か。

「見かけはそれなりです。ですがその分、クロスを捲るとこの通りです」

レンがそう言うってクロスを捲る。

そこには見慣れたミカン箱が。

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

ティアが俺の隣から覗き込んでくる。

確かにこんなのを見られたらイメージは大幅にダウンする。

でも……

「ま、大丈夫だろわざわざクロスを外す奴なんかないだろ」

「そんなことをする人が居てもそれは営業妨害になりますね」

「室内の装飾も完璧だからうまくいくと思うの」

確かに学園祭のレベルにしては十分すぎる完成度だ。

「……飲茶も完璧」

「うおっ！ムッツリーニ、いつの間に……」

コウタの後ろにいつの間にかいたムッツリーニ。

「ムッツリーニ、厨房の方もオーケー？」

そう明久が言うと厨房からリュウトが木のお盆を両手に持ち陶器のティーセットと胡麻団子がそれぞれ17人分載っていた。

「味見用に作ったんだ」

「わぁ……美味しそう……」

「リュウト！これ食べてもいいのか！」

「ああ、いいぜヴィータ。瑞希やなのは達の食べるか？」

「食べるの〜！」

「私もいただきますよ」

「僕ももらいますね」

そう言つて俺とティア、高町にハラウオン。レンとアミエーラ、姫路と島田に秀吉、八神家の3人にセラとヘルサイズが胡麻団子を食べた。

おっ、これは……

「うまいな！コレ！」

「ええ、ホントに美味しい」

「とってもおいしいの〜」

「すごくおいしい！」

「お店よりも美味しいです！」

「リュウトやムツリーニもすごいですね」

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

「ギガうま〜！」

「これは美味しいな……！」

「本当に美味しいです〜」

「さすがリユウトですね」

「美味しい」

ホントにうまい！

これは結構いけるんじゃないか？

「お茶も美味しいです。幸せ……」

「本当にね〜」

「にゃ〜」

「美味しい〜」

「ギガうまあ〜」

一部の女子がトリップしてる……

「それじゃ、僕も貰おうかな」

「あつ、俺も」

「ああいいぜ」

と言って明久とコウタが胡麻団子食べた。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ」

「うん。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても

んゴパっ「んゴパっ」

なんだ!?

今、明久とコウタからありえない音がしたぞ!?

あつ!二人ともどうした!まるで過去を振り返ってるみたいな目だぞ!?

まさか……!走馬灯か!お前らの16年間の軌跡が今お前らの頭の中で再生されてるのか!?

あつ明久が復活した。

コウタは

「あつ……じいちゃん。今、じいちゃんに話したいことが沢山あるんだぜ。今この列車を渡ってそっちに行くから待ってるよ。」

「コウタ！？駄目ですよ！そっちに行ってしまったらもう2度とこちに帰ってこれなくなりますよ!？」

天への片道切符を買おうとしている!？

「あつ！コウタの口から何かが出てきた！これは……まさか魂!？
コウタ！今すぐ口の中に魂を戻してください！コウタ

「!！」

やばくないかアレ!？

マジで口からコウタの顔をした白いのが出てきてるぞ!？

「あ、それはさつき姫路とシャマルとセラが作ったものじゃな」

「!!! あつ明久あああああ！食べ！今すぐ口の中にバイオ兵器を入れこめえええええ!！」

「……………!!!(グイグイ!!)」

「ちよつ！ルークにムツツリーニ！どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの！？無理だよ！食べられないよ！コウタみたいになっちゃんよ！」

もう知るかあああああ！

生き残るのが優先だ！一番のバカを犠牲にするべきだ！！

「おいその3人！正直に答えろ！瑞希は化学薬品。シヤマルはヤモリのとかを。セラは魔界からのお取り寄せみたいなのを入れただろ！？」

「えっ？えっつと……………」

「その……………ね？」

「あの……………その……………」

……………3人ともリュウトから目をそらしてる……………

「……………これからお前らは決められたもの以外使うことを禁じる」

「……………ええ

「わ・か・つ・た・な・？……………」

……………はい……………」

あつ、あぶねえー！

まさに17分の3ロシアンルーレット！

ハズレは化学薬品、ヤモリなど、魔界の物質的のモノの3つ！

となると……………

あの残り一つは確実なドボン！

「オイ待てよ。片道で何でこんなに必要なんだ？完全な詐欺じゃ

ハッ！？」

「コウタ！よかった、生気がちゃんとある」

なんとかコウタの蘇生に成功したようだ。

一体どれだけの威力があるんだろうか……………？

試したくはないけど。

ガラガラ

あっ、雄二が戻ってきた。

「うーっす。戻ってきたぞ！ん？なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？（パクッ）」

あのバイオ兵器を躊躇いなく食べただと！？

「……………たいした男じゃ」

「雄二。キミは今、最高に輝いてるよ」

「墓は立ててやる。『悪鬼羅刹の元神童 坂本雄二 ここに眠る』
つて」

「？ お前らが何を言っているのかわからんが……。ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとつても
んごぱっ」

まさに既視感。
デジャブ

「おい。雄二？」

床に倒れ伏した雄二。

たまにピクピク動くのがあの胡麻団子の殺傷能力を物語っている。

「ふつ。何の問題もない
」

おお！生きてたのk「あの川を渡ればいいんだろっ？」訂正！やっぱり危険な状態！

三途の川が見えるほどに！！

「オイ雄二待て！その川は渡るな！2度と戻れなくなるぞ！！」

「オイ明久！レン！手伝え！4人で雄二を蘇生するぞ！心臓マッサ
ージだ！ムツツリーニは念のために電気ショックの装置を！」

「……………任せろ！」

素晴らしき男子のコンビネーションだと思っ。

「あれ？坂本君、どうしたの？」

「何でリュウトそんなに必死に心臓マッサージしてるんだ？」

先ほどの当たりの胡麻団子によってトリップしていた女子たちが復活した。

「スマン。今、忙しいんだ。死者蘇生に」

死んではないぞ……………

「……………今戻った！」

ムツツリーニが帰還した！

これでどうにかなるか！？

「六万だと？バカを言え普通渡し賃は六文だと相場が決まつて」「インディグネイション！！（バリバリバリ！）」「ぐ

おおおおおおお！！ はっ！？俺は！？」

蘇生成功！

ちなみにあの掛け声はリュウトだ。

「大丈夫か雄二？スマン、管理不足だった」

「ああ……………何とかな……………生で三途の川を見たぜ……………」

「じゃあ装置を戻してくる。行くぞムッツリーニ」

「……………（コク）」

あの三人には注意が必要だと思う。

「ところで坂本はどこに行っていたんだ？」

「ああ、ちよつと話し合いにな」

なんか雄二にしては齒切れの悪い返事だな。

まあいいか。

「そうですね。それはお疲れ様でした」

「いやいや、気にするな。それより、喫茶店はいつでもいけるな？」

「バツチリじゃ」

「さっきのようなミスは起きないようにリュウトが釘は刺しておいたからな」

アレが当たれば店の評判はかなり下がるからな。

「よし。少しの間、喫茶店はリュウトとレンを中心に頑張ってくれ。俺と明久は召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

「あれ？アンタたちも召喚大会に出るの？」

俺も初めて知った。

「え？あ、うん。色々あってね」

……何か隠してるのか？

……いや、聞くのはやめておこっつ。

「もしかして、商品が目的とか……？」

……島田様？

目が怖いですよ？

「うん。一応そういうことになるかな」

「……誰と行くつもり？」

「ほえ？誰と行ってくつて言われても……」

「明久はリュウトと行くつもりなんだ」

ええっ！？

「なっ！？ちよつと雄二！？」

「吉井君？どついつつもりですか？」

姫路恐いぞ！

目が特に！

「え？リュウトとペアチケットで『幸せになりに行くの……………？』」

「昨日帰り道に明久に『ペアチケットをどうするんだ？』って聞いたんだ。そしたら明久は『リュウトと一緒に幸せになりに行くんだ！』って言ってたな」

「明久。確かにリュウトは中性的な顔をしてますが……………」

「アキ。アンタやっぱり、そっちの気の人なの……………？」

「ちょっと待ってレンに美波！それに美波は『やっぱり』って言葉が凄く引つかる！」

ゾクウ！！

な！？

背後からかなりの殺気が！

振り向くと……………

「吉井君？どういふことなのかな？かな？」

「吉井。少しO・H A・N A・S I Iしようか……………」

「覚悟はできてますね、吉井？」

まずは魔王たかまちに夜叉ハラウオン、そして鬼アミエーラが居た。

「……」

「吉井……リュウトをどうするつもりだ？回答によっては……」

「リュウトは渡さねえぞ！」

「うふふふ……覚悟はいいですか？」

まさにリュウトの守護騎士が居た。

「リュウトに近づかないください。気持ち悪いです」

「同感」

「明久は冗談がうまいのお（ゴゴゴ……）」

セラとヘルサイズ、秀吉まで参加。

秀吉は顔は笑ってはいるが背後からドス黒いオーラが見える。

なんか効果音も聞こえるし。

「吉井……あなたも男なんだからそっちに走らないほうがいいわよ……」

「それができれば明久だって苦労はしないぞグランツ」

「雄二、もつともらしくそんなことを言わないで！全然フォローになってないから！姫路さん達も殺気を収めてよ！」

「っと、そろそろ時間だ。行くぞ明久」

「……くっ！と、とにかく、誤解だからね！」

まるで小悪党の捨て台詞みたいなことを言って二人は教室を出た。

そのあと、リュウトとムッツリーニが戻ってきた。

「ただいま……ってなんだ皆。どうしたんだ？」

「リュウト君安心して！私が守ってあげるの！」

「リュウト。帰り道は必ず誰かと帰るんですよ？一人で帰らないよ
うに」

「安心しろリュウト！私が付いてるから！」

「必ずリュウトを魔の手（吉井）から守って見せる」

「家では私とユーが見張っていますので安心してください」

「はあ？」

皆、すごく心配してるな。

「なあルーク、レン、コウタ。どうなってんだ？」

「「「気にするな（しないでください）」」」

「……………何か聞きたくなるけど……………まあいいか。よし！お前ら！絶対成功させて設備を向上させるぞ！！！」

「「「「「「「「「「「「「「「おおおおおおッ！！！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」」

とにかく今は喫茶店だな！

どうも神崎リユウトです。

ただいま喫茶店「ヨーロッパ」で頑張ってます。

「ヨーロッパ」は後程決めたこの喫茶店の名前です。

え？口調が違う？

それはですね……

「すみませ〜ん！注文お願いします〜す！」

「あつ、その店員さんこっちも！」

「はい。わかりました」

喫茶店でお客さんの接客のためです。

……つて無理！

せめて心の中はもう口調を戻す！

ストレスがたまる！

つてか何でさっきから俺をわざわざ呼んでんだ！？

他にも店員がいるだろ！

(注：リュウトはなかなかのイケメンの為にを呼んでいるのは女性客ばかりです。ちなみにルークもそれなりに女性客に呼ばれています。レンは厨房です。リア充モゲロ！)

……………なんか今変な電波を受信した気がする……………

しかし、この調子だとなかなか稼げるんじゃないか？

でも、調査の方もあまり気が抜けない。

何らかの行動アクションが来るまで気をつけないとな。

「すみませ〜ん！」

「はい」

あ、呼ばれた。

「胡麻団子を二つお願いします」

「かしこまりました(ニコッ)」

そして胡麻団子を取ってきてからその席に届けた。

「お待たせしました」

「あっ、ありがとうございます／＼／＼」

わざわざ礼なんていいのに……

……何で顔が二人とも赤いんだ？

この営業スマイルが駄目なのか？

そうしてしばらく厨房に努めていると……

「リュウトさん。大変です」

「どうしたんだシヤマル？何かあったのか？」

「はい。三年生の二人組が机の事をばらして……」

教頭の手先か？

いや、わからないな……

「シグナムが今にも切りかかりそうなんです」

『落ちて着いてシグナム！どこからその木刀出したの！？』

『離せハラウオン！奴らに一太刀浴びせんと気がすまん！』

色々やばい状況に！？

このままでは血に染まった喫茶店になってしまっ！

「わかった。で、どいつだ？」

「その席の人達です」

その席には、

「マジでできたねえ机だな！これで食い物扱っていいのかよ！」

丸坊主な先輩とちよびモヒカンな先輩がいた。

よし、シバく！

「秀吉。雄二を一応呼んできてくれ」

「任せるのじゃ」

さてと……

俺はその先輩の席まで行った。

「すみませんお客様」

「あん？誰だアンタ？」

「俺は中華喫茶「ヨーロッパ」の責任者である神崎リュウトです」

「あなたが責任者か。このきたねえ机はどういうことだ？」

「この文月学園でのFクラスでは接尾に問題があることぐらいは知ってますね？私たちはこの清涼祭を盛り上げたいんです。しかし、こんな汚い設備では逆に不評につながると思い仕方なくこうしたの

です。こちらだってできれば清潔なものにしたかったのですがこれが精一杯なんです。それなのにあなた達は知っててこんなことをするんですか？あなた達のせいでこの清涼祭が悪い思い出になるかもしれないんですよ？そんな事にはしたくないので文句があるならお引き取り願います」

と言っ。

あんまり俺はこんなキャラじゃないんだけどな。

「そつだそつだー！」

「この人たちだって必死なんだぞ！」

「嫌なら出てけー！」

味方が増えた。

客もこの人たちのことが嫌だったのか。

「なっ！??どうする常村？」

「こつちが不利だな。逃げるぞ夏川」

なるほど。坊主が夏川でちょいモヒカンが常村って言うのか。

一応覚えておくか。

常夏コンビで。

「リュウト。クレーマーが居るって聞いたが」

雄二たちが戻ってきた。

ナイスタイミングだ。

「雄二。この二人の先輩だ。坊主の方が夏川先輩。モヒカンの方が常夏先輩だ。今ちようど営業妨害についてお話ししようと思うんだ」

決してO・H A・N A・S Iではない。

「そうか。じゃあちよつとこつちに来てもらおうか先輩方」

「ちっ！逃げるぞ夏川！」

「お、おう！」

あっ逃げた！

後は客に謝罪しないとな。

「お騒がせして申し訳ありませんお客様。先ほども言いましたがこれが私たちの限界です。どうかこれからもよろしく願います」

と言って頭を下げる。

「いいっていいって」

「がんばってるもんね」

Fクラス ティア、島田以外の女性陣

「……………あの笑顔は凄いいい（の）（です）（！）（！）」
「……………」

ほぼ私情が入っていた。

「客が減ったな……………」

とルークがポツリとつぶやく。

たしかにさつきは大繁盛まではいかないがそこそこの人がいた。

まさか、これも教頭か？

でも、判断材料が足りないな。

「ただいまー……っ、あんまりお客さんがいないなあ……」

「戻ってきたか明久」

「無事勝ってきたよ」

「それは何よりだな。雄二はどうした？」

「うん。トイレに寄ってくるってさ」

暢気だな。

「それよりリュウト、これはどういうこと？お客さんがいないじゃないか」

「俺にもわからねえ。クレーマーも来てねえのに変だな」

「ってコトは、教室の外で何かが起きているのかな？」

「かもしれんのう」

そう三人で考えていると、

『お兄さん、すみませんです』

『いや。気にするな、チビッ子』

初対面にそれは酷くねえか？

声から察するにどうやら雄二と小さな女の子が話してるみたいだな。

『チビッ子じゃなくて葉月ですっ』

『んで、探してるのはどんな奴だ？』

教室の扉が開き雄二の姿は見えた。

だがもう片方は小柄なのか雄二が邪魔でわからない。

『お。坂本。妹か？』

『可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？』

「俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ」

警告警告！

ここにロリコンが居ます！ここにロリコンが居ます！

至急警察を呼んでください！

……あ、警察俺だ。

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ』

『お兄ちゃん？名前はなんて言うんだ？』

『あう……。わからないです……。』

『？ 家族の兄じゃないのか？それなら、何か特徴は？』

『えっと……。バカなお兄ちゃんでした！』

『……。沢山いるんだが？』

否定できないな……

『あ、あの、そうじゃなくて、その……。』

『うん？他に何か特徴があるのか？』

『その……。すつごくバカなお兄ちゃんだったんです！』

『……。そのお兄ちゃんは黄色い帽子をつけてるか？』

『？ つけてなかったです』

『『『『『『吉井だな』』』』』』

明久が泣いてるぞお前ら。

つてかすごいバカ！明久かコウタって式が出来てるのか？

「全く失礼な！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対

に人違い「あつ！馬鹿なお兄ちゃんだつ！（ガシッ）」……人違いだと、いいなあ……」

抱きつかれたためもう認めるしかない明久。

「つて、キミは誰？見たころ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはいないよ？」

顔を見る為か女の子を引きはがす明久。

つて女の子涙目だぞ！？

泣きそうだぞ！

「え？お兄ちゃん……。知らないつて、ひどい……」

オイオイ明久……小学生泣かしてどうすんだよ！

「バカなお兄ちゃんのバカあつ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』つて聞きながら来たのに！」

泣きながら物凄いこと言ってるな。

「明久　　バカなお兄ちゃんがバカでゴメンな？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

「君はバカなお兄ちゃんの為に頑張つて探したのにごめんね？バカ

なお兄ちゃんて

雄二と秀吉にまさかなのはまでそんなことを言うとは思わなかった。

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに

」

「アキイイイ！」

「じぶあっ!?!」

おゝ島田の一撃が見事に決まったな。

あっ、さらに首まで折ろうとしてる。

「瑞希に美波お帰り。勝ったみたいね」

「ありがとうございますフェイトちゃん」

「お疲れ瑞希」

「お疲れ様です瑞希ちゃん」

「皆。明久殺されかけてますけど……」

「諦める、レン」

「そうですねリュウト……」

こんな感じだからな。

「ちょっと待って！結婚の約束なんて僕は全然

」

「ふえええんっ！酷いですっ！ファーストキスもあげたのにーっ
」！
」

「藤木は包丁を持ってきて。五本あれば足りると思うから」

「お願いしますっ！話を聞いてくださいっ！」

「仕方ないわね。二本刺したら聞いてあげるからちょっと待ってな
さい」

「知っているか島田。包丁と言うのは一本でも刺されば重症だぞ？
なぜシグナムが知っている……」

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

と島田を見て言った女の子。

なるほど、

「島田の妹か？」

「そうよ。ホラ葉月。挨拶して」

「島田葉月ですっ！」

「元気な子供だな」

「ありがとうございます！真つ赤なお兄ちゃん！」

「まっ、真つ赤なお兄ちゃん？俺の事か？」

「はいですっ！」

「うん」

「納得できませんか？」

「いや。ただ……アッシュに対してはなんていうんだろって思った」

「両方とも真つ赤なですね」

確かに。

「ああっ！あの時のぬいぐるみの子か！」

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった？」

「はいですっ！」

「うんうん。それは良かった。それにしても、よく僕の学校がわかったね？」

「お兄ちゃんがこの学校の制服を着てましたから」

「あのツンツン頭で「不幸だ

！！」って叫ぶ人？」

「アリサ、あまり不気味なことを言うな。フェイト、俺はあの人には敵わないから」

上〇さんには敵いませんマジで。

そう話していると、

『あの……すみません。中華喫茶『ヨーロッパアン』ってここですか？』

と声が聞こえた。

Fクラスのモブキャラが邪魔でよく見えないな。

でもこの声……聞いたことがある気が……

「ああそうだが」

と雄二が返す。

『そうですか！では失礼します。ほら、入りましょう！』

「ちよっ、待ちなさいよ！」

そう言うてはいつてきた。

そして、

「え……………」

ある少女が俺の顔を見て驚いていた。

俺も驚いていた。

彼女は見た感じ十三歳ぐらい。

オレンジ色の髪で彼女の胸には俺が買ってやったブレスレットがある。

そう、彼女は……

「リタ……………？…………リタ・モルディオか？」

「……………」

彼女、リタ・モルディオは小さく頷いた。

そして俺は笑顔で言う。

「久しぶりだな。二年ぶり、リタ」

「……お兄ちゃんッ!」

そう言っでリタは俺に抱きついてきた。

「お兄ちゃん……やっと会えた……」

「うん。よく来たなリタ」

家族を失ったリタにとって義でも肉親と二年も会えないのはさびしいはずだ。

「お兄ちゃん……お兄ちゃんッ……」

「……今は泣いとけ。スッキリするまでな?」

数分間俺はリタの小さな体を抱きしめ続けた。

「スッキリしたか？」

「うん……」

リタは泣き収まったようだ。

「それにしても。久しぶりだな皆」

そう言って俺は目の前の懐かしいメンバーを見た。

「久しぶりだなリュウト」

「そうだなユーリ。ラピードは元気か？」

「おう。今度会わせてやるよ」

「久しぶりですねリュウト」

「エステルも来てるとはね。カロールも少し背が伸びたな」

「へへ……そうかな？」

「レイヴンやジユデイスも久しぶり」

「青年3号も元気そうで何よりだわ」

「ホント久しぶりねリュウト」

「リュウト。久しぶり」

「フレンか。ユーリの仕事はどうしたんだ？」

「大学行きながらバイトしてるよ。おかげで授業中爆睡だけどね」

「オイ、フレン！余計なこと言うなよ！」

「でも真実だ」

「まあフレンもそこまで攻めない。パティも久しぶり」

「久しぶりなのじゃリュウト！」

「ところでよく俺がここに居るってわかったな」

「そりゃあそうだぜ。榊に言われたからな」

「そうなのか？」

「ああ。後な。俺達フェンリルに入ったんだぜ（ボソッ）」

「！！………そうか」

「何だ？てつきり追いつめると思ったのによ」

「人の覚悟は踏みにじらねえよ」

「リュウトはそんな人だもんね」

そう話していると、

「ねえリュウト。この人達は知り合い？」

「ああまあな。八神家とセラ達は知ってるだろ？」

「ああ、もちろんだ。ジユデイス。今度手合せしないか？」

「ええ、喜んで」

「とりあえず自己紹介だな。俺はユーリ・ローウェルだ」

「私はエステリーゼ・シデス・ヒュラツセインと申します」

「あたしはリタ・モルディオ。お兄ちゃんはお兄ちゃんをアタシを引き取ってくれたから自分からお兄ちゃんって呼んでる」

「僕はカロル・カペル！よろしく！」

「俺様は世界一のダンディ」「おっさんだ」「酷い青年一号！まだダンディしか言っていないのに！とにかく！俺様はレイヴンだ。よろしく若人よ！」

「私はジュディスよ。神崎リュウトの妻」「O・H・A・N・A・S・I・す・る・か・？」もちろん嘘よ」

「うちはパティ・フルールじゃ！」

「フレン・シーフォです。よろしく」

こうして俺は新たなフェンリルの仲間と再会した。

第9問 再開と妹と喫茶店（後書き）

リュウト「結局先週の土曜日曜にはできなかったな」

申し訳ございません。（ガタガタブルブル）

レン「さっきのシグナムとヴィータの攻撃がかなり堪えてますね」

ってなわけで！ヴェスペリアメンバーの参加が決定！

リュウト・レン「復活早ッ!?!」

ゲストのユーリ・ローウェルにリタ・モルディオ！

ユーリ「ところでだけだよ。どうしてリタをリュウトの義妹にしたんだ？」

いや、なんか思いついちゃって。

リタ「アタシは別にいいけど……（「こによこによ」）

ユーリ「これさ」「こんなのリタじゃない!」「って苦情が殺到するんじゃないの?」

……あ。

レン「考えてませんでしたね」

はい……………思い付きでした。

リュウト「それじゃあ第9問は「」まで！」

リタ「次もよろしく！」

『「バカテスの世界に来たアノ人達」のOPみたいなものを書いてみました』は以下の文章は7月29日に書きました。

突然ですがすみません。このopを消さないとその作品が私、アナザー自体が消されるかもしれないので消すことにしました。

突然なのでビビりました。なのでリュウトの清涼祭で歌うのは歌詞なしの「〜」でしますので想像をお願いします。

それから、これからもう一つ作品を書こうと思っています。

多分またいろんなキャラがもとの原作に入ってからハーレムをするやつかもしれません。

書くかどうかはわかりませんがこれからもよろしくお願いします！

第10問 メイドと女装と第4の性別！？（前書き）

アンケート

学園祭の出し物を決めるアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？

【？可愛らしさ？統率力？行動力？その他（ ）】

また、その時のリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え

「？可愛らしさ 候補…… 姫路瑞希、島田美波、高町なのは、フェイト・ハラウオン、アリサ・エ・アミエーラ、八神シグナム、八神ヴィータ、八神シャマル、神崎セラ、ユークリウッド・ヘルサイズ、ティア・グランツ」

教師のコメント

確かにFクラスの女子は美人ばかりですね。

吉井明久の答え

「？可愛らしさ 候補…… 姫路瑞希（斜線）木下秀吉（斜線）高町なのは（斜線）島田美波」

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるどころです。

坂本雄二の答え

「?その他(結婚相手) 候補……霧島翔子」

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか。

神崎リュウトの答え×13

「?可愛らしさ 候補……姫路瑞希」

高町なのは

フェイト・ハラウオン

アリサ・E・アミエーラ

八神シグナム

八神ヴィータ

八神シャマル

神崎セラ」

ユークリウッド・ヘルサイズ」

木下秀吉」

工藤愛子」

木下優子」

レグルス・ベルカイズ」

教師のコメント

何故神崎君の回答をあなた達が持つてくるんですか。

そして神崎君は13人もいません。

第10問 メイドと女装と第4の性別!?

明久 side

リュウトが知り合いと義妹と再開してから数分たった。

というか何でリュウトに知り合いは美人な女の子が多いんだろう?

クソッ!羨ましいぞリュウトっ!!

「ところで、この客の少なさはどうということだ?」

と雄二があたりを見渡して言った。

「そつえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ?」

「そつえばおっさん達も聞いたぜ」

「ん?どんな話だ?」

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かないほうがいい、って」

僕は思わずつめき声をあげそうになった。

「なるほど……例の連中かもしれんな」

「誰かはまだわからんが見つつけ出してシバき倒すか」

「例の連中とは坊主頭と小さいモヒカンの先輩の事か？」

「シグナム。あの人達もそこまで暇ではないと思いますよ？」

「わからないぞシヤマル。ひとまず様子を見に行く必要がある」

「リュウトの言うとおりです。とりあえず噂がそこから広がっているのかを確認しなければなりません」

こんなに小さな葉月ちゃんが聞いたくらいだから、もしかするとなりの勢いで広まっているのかもしれない。

「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びにいこう」

ギュッと葉月ちゃんに手を握られる。

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしてもこの喫茶店を成功させなきゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

「む。折角会いに来たのに」

葉月ちゃんの頬は不満げに膨れてしまった。

「それなら、そのチビツ子も連れて行けばいい。飲食店をやっている他のクラスを偵察する必要があるからな」

そこで雄二のフォローが入る。

「ん。そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」

「うんっ」

膨れ顔が一転して満面の笑みに。

表情豊かで面白いな。

天真爛漫ってこういう子のことを言うのかな？

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」

美波の口調がいつもと全然違う。

妹に対しては優しいお姉ちゃんんでいるんだなあ。

「ああ。ちょっと待ってくれ」

と突然リュウトが言った。

「どうしたのじゃリュウト？」

「いや。もうすぐヴィヴィオ達に来るんだが……」

「ヴィヴィオ？誰のことリュウト？」

「ああそうか。明久たちは知らないんだっけか？多分もうすぐ」

「「お邪魔します！」「」「あつ、ちょうど来たか」

とリュウトが声のしたドアの方を向いた。

そこには小学生らしい4人が居た。

「よく来たな4人も。こっちに来る途中なにもなかったか？」

「はい！大丈夫でした、お父さん！」

「……………お父さん!?」「……………」

えええっ!?

リュウトもう結婚してたの!?

「パパ」

「ん?なんだヴィヴィオ?(ナデナデ)」

「えへへ」

……正直リュウトには保育園の先生とかが似合つと思つ。

「神崎君?その子供たちは何ですか?」

ひ、姫路さん?

なぜ紫色のオーラを出しながら笑っているんですか?

正直恐いです。

「リュウト君?その子供たちは何でリュウト君の事を「お父さん」って呼んでるのかな?かな?」

高町さんも目の色が単色になりつつある！

これが噂の魔王「魔王じゃないよ、吉井くん………？」心を読まれた！？

「ん？ああ。ヴィヴィオ達は4人は俺の養子だ。なんか俺がお父さんっぽいからお父さんって呼んでるらしい。年齢的には複雑だけだな。セラとユーと八神家とユーリ達は知ってると思うけど、ホラ挨拶、挨拶」

「神崎エリオです！よろしくお願いします！」

「神崎キャロです。よろしくお願いします」

「神崎ヴィヴィオです！」

「神崎ハルナだ！」

とそれぞれ挨拶をしてくれた。

「ということだ。雄二、この4人も連れて行っていいか？4人も今日はまだ昼飯を食ってないんだ」

「わかった。いいぜ、リュウトお父さん？」

「嫌味がコラ」

「それなら後は8人ぐらい休憩を入れたほうがいいわね。たまには休まないと効率が悪いわ」

「そうだな。よし！ジャンケンで決めるか！」

「絶対に勝ってリュウトと……………」

「リュウトと学園祭を楽しむのも悪くは……………」

「リュウトと一緒にあんなことやこんな……………」

なぜかそれぞれ願望がダダ漏れた。

「よしいくぞー！」

「……………ジャ

ンケ

ンポン！

！……………」

勝者

高町なのは、八神シグナム、姫路瑞希、フェイト・ハラウオン、八神シヤマル、アリサ・エ・アミエーラ、雨宮レン、藤木コウタ。

「やったの!」

「無念じゃ……………」

「クソ…………シグナムウ、シヤマルウ、変わってくれよ……………」

「クツ…………いや…………家でから……………」

「無理だな」

「無理ですね」

「…………Orz」

「……………」

うん、混沌^{カオス}だ。

セラさん。

家でなにをする気だろうか？

「…………リユウト」

「どついたユー？」

「……帰ってから私が好きなものを作ってほしい」

「ああ。いいぜ」

「……」

ヘルサイズさんは少し機嫌がよくなった。

「んじゃ。俺達も行くか」

「そうですね」

とローウェルさん達が言った。

「何ですか？」

「何でって仲間が困ってんのに見捨てるか？普通」

「困ったときはお互い様です！」

「おっさんも別にいいわよ」

「私もよ」

「ウチも行くのじゃー！」

「ありがとな、皆」

ローウェルさん達は優しいな。

「それでチビツ子、さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるか？」

「えっとですね……短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店」

「パキイイーン！」

種割れ（四人）

「なんだって！？雄二！コウタ！それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！我がクラスの成功のためにも綿密に（低いアングルから）調査しないとな！」

「このおっさんもアンタらのクラスの為に全面協力させてもらう！」

「よし！出陣だ！！！」

聞いた瞬間僕たち四人は全力ダッシュ！！

「アキ、最低」

「お兄ちゃんのバカ！」

「コウタ……ドン引きです……」

「おっさん……………」

「あ、あはははは……………レイヴンですもんね……………」

「あきれるしか言えねえよ……………」

「ルーク……………その気持ちよくわかる……………」

背後からの罵倒なんか気にしない！

リュウトside

雄二たちがダッシュで葉月の言った場所に向かって俺たちはゆっくり歩いて向かった。

途中でリタが「手をつないでもいい？」と涙目＋上目遣いという強力コンボで言ったため手をつないだ。

周りの視線が痛い上になぜかなのは達が殺気を立てていた。

そして葉月の言った場所に着いたら……

「明久、コウタ、おっさん、ここはやめよう」

「ここまで来て何を言っているのさ！早く中に入るよ！」

「そうだぜ！早くしろよ！」

「いい加減に覚悟を決めるツ！ホラっ！入った入った！」

「頼む！ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

雄二がAクラスに入るのを拒んでいた光景があった。

さっきダッシュで向かった時とはかなり気迫に差がある。

「そういえばここは霧島翔子がいるクラスでしたね」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

「そつだ坂本。いい加減腹を括れ」

「諦めるべきですよ坂本」

と追い打ちをかける俺達。

「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだか」「……！！（パシャパシャパシャパシャ！）」「……………ムツツリーニ？」

物凄い勢いでシャッターを押しているムツツリーニが居た。

つてかお前は残るメンバーだっただろ。

「……………人違い」

それには無理があるだろ……………

「どこからどう見ても土屋でしょうが」

「何をしてるんですか……………？」

「……………敵情視察」

最近の敵情視察はローアングルから女の子を撮影することなのか？

「ムツツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことをしたら撮られている女の子が可哀想だっ……一枚百円」「2ダース貰おう
可哀想だと思わないのかい？」

「そうだぜ土屋。俺は1ダースで」

「そうだぜ少年。俺様は20枚で」

「三人とも普通に注文してますが……」

「レイヴンはホントにこういうことに目が無いよね……」

「カロル。今更じゃぞ」

よくコイツ等は写真で1,000円以上を使えるな。

「……そろそろ当番だから戻る」

と3人に写真も渡して戻っていった。

いつの間にプリントアウトされていたんだろうか？

「まったく、ムツツリーニにも困ったもんだっ」「アキ、その写真をどうするつもりなんですか？」はははは、やだな。もちろん処分するに決まってるじゃないか。それよりそろそろお店に入ろう？もうすぐおながが減っちゃったよ」

と腹を押さえて演技をする明久。

こんな子供だましが通用するわけ

「それもそうね。早く入りましょ」

あつたよオイ。

「うんうん。早く敵情視察も済ませないと

写ってるのは男の足ばかりじゃないか畜生！」

「やっぱり見てるじゃないっ！」

「い、ごめんなひゃい！くひをひっぱらないで！」

島田と葉月にそれぞれ口と腿をつねっている。

流石、姉妹と言うべきか。

「レイヴンさん！あのスケベを殺しに行きましょう！！」

「もちろんさ少年よ！パーチ タイムだ！！」

あの馬鹿コウタとレイヴン二名はムツツリーニを殺しに行ってしまった。お前らも騙されてたんかい。

飯はいいのか？

「それじゃ入るうりユウト？」

「そうだなフェイト」

「じゃあお邪魔しまーす」

と島田が一番手でドアをくぐる。

「……おかえりなさいませ、お嬢様」

出てきたのはクールなメイド、霧島翔子だ。

「わぁ、綺麗……」

と瑞希が感嘆の声を洩らす。

確かに長く黒い神に白のエプロンドレスはよく似合う。

黒のストッキングも霧島の美脚をさらに際立てている。

なぜ雄二はこんな美人に好まれているのに拒否するんだろうか？

もう心に決めたやつがいるのか？

「ねえパパ。ヴィヴィオもこの人みたいに綺麗になれるかな？」

「なれるさ。キャロとハルナもな。エリオもそう思うだろ？」

「えっ？はっ、はい！僕もそう思います」

「えへへ」

「もう、エリオくんったら」

「りゅ、リュウト！何言ってたっ！とっ当然だ！／／／／」

と三人のコメント。

キャラはエリオの事が好きだからな。

「それでは僕達も入りましょう」

「そうだね」

「はい。失礼します」

レンと明久、ユーリ達になのは達、瑞希は葉月を連れて入る。

「……おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

と出迎えた。

「ホラ。渋ってないで入るぞ雄二」

「……チッ」

と雄二と入る俺。

霧島は先ほどと同じように

「……（……）おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

アレンジの加わった二人の声が聞こえた。

って待て！

霧島はわかるがもう片方は誰だ！？

「ボクだよ」

心を読むな！

って、

「工藤か？」

「うん どう似合ってる？」

クルリと回ってきている服を見せる工藤。

「おお。似合ってるぞ工藤」

「うん。ありがとう」

と言って工藤は俺の腕に抱きつく。

何で！？

「な！？オイ工藤！？」

「ただいまならメイドをお持ち帰りも可能です。いかがなさいますか？」

「誰が持って帰るか！自分は大切にしろよ！」

「……リュウト。少しくらいわかってあげた方がいいですよ?」

「? 何がだ?」

「いえ……なにも……（鈍感を通り越して病気じゃないですか?）
なんか今侮辱されたような……」

そう考えていたら工藤がレグルスの所へ行つた。

「ホラ、レグルス。出てきなよ」

「えっ……でも……恥ずかしい……」

「大丈夫だって……エイツ!」

「へっ……? キャツ!」

かわいらしい悲鳴とともにレグルスの姿が見えた。

「へう／＼／＼／」

かなり恥ずかしがってるな。

でもかなり可愛い。

まるで小動物みたいだな。

「可愛いじゃんレグルス。似合ってるぞ」

「へっ！？ほ……本当に……？」

「本当だって。俺が嘘でこんなこと言うか？」

「……………／／／／／」

レグルスまで顔を赤くして俯いてしまった。

「リュウトってすごいよね……」

「あんなことをさらっと言えるのが凄いですね」

「うちもいつかユーリに言ってもらおうのじゃ！」

「でも彼は……」

「ああ……超が付くほどの鈍感だ」

「あらユーリ。あなたも人のことが言えないわよ？」

「はあ？何だよ？」

「その自覚がないところがだよ……」

「わけわかんねえ……」

とユーリ達が言う。

普通かわいいとか言えるだろ？

「……………席にご案内いたします」

と霧島が言って席に向かった。

ちなみに席はユーリ達とは別にした。

リタがなぜか唸ってたけど。

俺が席に着いた瞬間に、

「……………ジャンケンポン！……………」

瑞希、アリサ、なのは、フェイト、シグナム、シャマルがジャンケンを開始した。

だからなぜに？

結果

勝者

フェイト、シャマル

「うふう…リュウトの隣」

「よかった」

「ううう悔しいの……」

「残念です……」

「今回は譲るが次は必ず勝つ！」

「……（シクシク）」

瑞希は何で泣いてるんだ？

そして何故三人はがっかりしてるんだ？

「では、メニューをどうぞ」

と俺達の所には霧島、ユーリ達の所には優子がメニューを置く。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー！」

「僕は『水』で。付け合せに塩があると嬉しい」

「僕は『レモンティー』で」

「私は『チーズケーキ』がいいの！」

「私は『ティーセット』で」

「私もそれにするか」

「じゃあ私はなのはちゃんと同じで」

「私もそれをお願いします」

「僕もそれをお願いします」

「ヴィヴィオは『シユークリーム』がいいな」

「私も『ティーセット』で」

「あたしは『チーズケーキ』で！」

ちなみにユーリ達は……

「んじゃ俺は『チーズケーキ』に『ショートケーキ』に……おっ
！『フルーツタルト』も頼むな」

「…ユーリ。いつか君は糖尿病になるよ……」

「今更じゃない？」

「本当にユーリは甘いものが好きだよ」

「見た目と裏腹にね」

と甘党ユルが甘いものをたくさん注文していた。

しかし、なぜリタは俺以外にはあんなに厳しいんだ？

「んじゃ、俺は「……ご注文を繰り返します」ってオイ！」

雄二の注文を遮るように言う霧島。

って俺もまだ頼んでないぞ！

「……『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『水』を一つ、『レモン
ティー』を一つ、『チーズケーキ』を4つ、『ティーセット』を4
つ、『シュークリーム』を一つ、『メイドとの婚姻届』が一つ、『メ
イドのお持ち帰りセット』が一つ。以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねえぞっ！？」「」

俺の第六感が告げている！

最後のは俺が注文したことになっていると！

「……では食器をご用意します」

女子の所にはフォークが、明久の所には塩が、雄二の所には実印と
朱肉が、俺の所にはまたメニューが用意された。

しかしそのメニューには『お持ち帰りメイドメニュー』って待て！

「しよ、翔子！コレ本当にうちの実印だぞ！どうやって手に入れたんだ！？」

「霧島！なんだこのメニューは！なぜ工藤と優子とレグルスの名前が商品にある！ってかこんなのさっきのメニューにもなかったし！頼んだ覚えもないし！！」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」

「神崎君は誰を持って帰るかを考えながらお待ちください」

「工藤おおおツ！お前か！お前の仕業か！！」

クソツ！

あのヤロオ……！！

「んで、葉月ちゃん。君の言っていた場所ってここで良かった？」

「うんつ。ここで嫌な感じのお兄さん二人がおっきな声でお話してたの！」

嫌な感じの二人組ねえ……………多分またアイツらか……………。

と考えていたら、

『お帰りなさいませ、ご主人様』

『おう。ふたりだ。中央付近の席は空いてるか？』

あの二人が入ってきた。

「あ、あの人達だよ。さっき大きな声で『中華喫茶は汚い』って言うてたの」

なるほど。

あの常夏コンビか。

さっきもってことは何回か来ては悪評を流してるのか。

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな!』

『そうだな。さっきいった中華喫茶は酷かったからな!』

『テーブルが腐った箱だったし、虫も湧いてたもんな!』

……

「あれ?どうしたのリュウト?」

「…………… コロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロス
スコロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロス……………
……………」

「ちよっ!?!リュウトどうしたの!?!」

「お父さん!?!」

「リュウトが壊れた！」

「コロスコロス……ハッ!?」

「あつ戻った」

危ない危ない……少しぶっ飛んできた。

「さて、リュウトが落ち着いたところでどうする？」

「殴り倒す……は論外ですよ。そうすれば悪評はさらに広まります」

「けど、だからってこのまま指をくわえて見ているなんて……!」

「いや、やるなら頭を使えということだ おーい、翔k」

「……何?」
「うおっ!」

ものすごいスピードで霧島があらわれた。

忍者かアンタは。

「あの連中がここに来たのは初めてか?」

「……さっき出て行ってまた入ってきた。話の内容もさっきと変わらない。ずっと同じようなことを言っている」

霧島にとっても愉快的客じゃないようだ。

少し顔を歪めている。

「そうか……よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ」

何お前は問題発言をサラツと言ってんだよ。

「……わかった」

と霧島は言っつて服を脱ぎ始めた。

……っつて待て!!

「き、霧島さん!?!こんなところで脱ぎ始めちゃダメですっ!」

「そうよ!ここにはケダモノが沢山いるのよ!?!」

「着替えるなら更衣室で着替えてください!」

「わあゝ。お姉さん、胸おっきいですゝ」

「……雄二が欲しいっつて言ったから」

と瑞希、島田、アリサの3人が止めに入る。

ちなみに俺は霧島がボタンに手をかけた瞬間とっさにフェイトの方
向を向いた。

「リュウト……そんなにじっと見つめないで……恥ずかしいよ……
／／／／／／／／／／」

しまった!

気づいていたら俺はフェイトの顔をじつと見ていた。

「いつ、いや！その……すまん……」

ぐっ……！

なんだか恥ずかしいんだが……

そしてなのは達は何故不機嫌なんだ？

「お、俺がいつお前の来ているメイド服が欲しいと言った！？呼びのヤツがあれば貸してくれって意味だ！」

と顔を真っ赤にして雄二が怒鳴る。

「……今、持ってくる」

と霧島が服を元に戻して去る。その顔は少し残念そうだった。

『あの店、出している食い物もヤバいんじゃないか？』

『言ってるな。食中毒でも起こさなければいいけどな！』

『2・Fには気をつけるってことだよな！』

……「クロスクロスクロスクロス……ハッ！？」

また少しトリップしてた……

「雄二！なんでもいいから早く連中を！」

「吉井。気持ちはわかるが落ち着け。お前が怒鳴っても状況は変わらん」

とシグナムが諭す。

「つてか、俺の記憶が正しかったらお前、木刀であの二人組に殴り掛かるうとしなかったっけ？」

「そういうことだ。とりあえず女子。櫛は持ってないか？」

「持ってるけど……」

「ちょっと貸してくれ。他にも身だしなみ用の物があれば全部」

「いいですけど……」

と瑞希やなのは達がポーチなどを出す。

「悪いな。あとで必ず返す」

「……雄二、これ」

今度は霧島がメイド服を持ってきた。

「おう。すまないな」

「……貸しーっ」

「だ。そうだ。明久」

「わかったよ。御礼に今度雄二を1日自由にしていよいよ」

「……ありがとう。吉井は良い人」

雄二はモノですか？

「ちょっと待て！どうして俺が！」

と雄二の講義も虚しく、霧島は嬉しそうにその場を離れて行った。

雄二、ご愁傷様です。

「ところで坂本君。これをどうするの？」

となのはが聞く。

「……着るんだ」

雄二が明久を睨みながら言う。

「だってさ、姫路さん」

「え？わ、私が着るんですか？」

「バカを言うな。姫路が着ても攻撃なんてできないだろうが」

メイド服を着て攻撃って斬新なアイデアだと思う。

「それじゃあ、美波？でも、胸が余っちゃうと（ドゴォー！）ぶべら

あっ！」

「ツギハ、ホンキデ、ウツ」

ものつ凄い殺気が出ているぞ島田！

「パパ……怖いよ……」

「エリオ君……（ブルブル）」

「だっ、大丈夫だよ……キャラは僕が守るから……（ブルブル）」

「ああよしよし」

ヴィヴィオがものすごく怯えている。

エリオとキャラはお互いを抱き合って震えている。

ハルナに至っては無言で体がものすごく震えている。

「島田でもない。と言つか女子だと面が割れる」

「……まさか」

「着るのはお前だ明久」

「いやあああっ！」

確かか明久は女装をすれば顔はバレないだろう。

「それならレンやリュウトが着ればいいじゃないか！」

「明久！リュウトはともかく僕を巻き込まないでください！」

「オイこらレン！俺はともかくって何！？」

「リュウトは知らないと思いますが小学六年生のころにあなたの家に泊まりに行きましたよね」

「ああそうだけど」

「その時、あなたが寝た後にコウタがふざけてあなたに女装をさせ
たんです」

「……………は？」

「僕も一瞬誰かわからない程でした」

「私もです」

コウタアアアアアアアアアアアア！！

何時か絶対にクロス！！

つてかアリサも見たんかい！

「ほう。レンとアリサのお墨付きか。よし、リュウトお前が着ろ」

「何でだよ！？理由を言え！」

「誰かもわからない程ならそっちの方がいいだろ？」

「うぐっ……………」

確かに正論だ。

確かにバレないほうが良いが……………

「後はふざけ気分だな」

「やっぱり絶対に着ない！！」

この野郎楽しんでやがるな！？

「大丈夫なの！」

「なのは？」

「絶対に似合うの！」

「そっちかよ！」

「わ、私もそっと思う……………」

「フェイト！？」

「リュウト……………」

シグナム！

お前だけでも

「人生経験の一つと思え」

コイツもグルだった!!

「リュウト」

「なんだレン？」

「もし着なかつたら………を言いふらしますよ?」

「ッ!？」

なっ!？

これがばれたら絶対に明久達にからかわれる!

「デメエ……」

「……(ニコニコ)」

腹立つ!そのニコニコ顔腹立つな!!

明久 s i d e

結局リュウトが着替えることになった。

しかし、リュウトの秘密ってなんだろう？

知ったら今までの恨みでからかってやるぞ。

フッフッフッ………

「あつ。リュウト君が戻ってきたの！」

と高町さんが言う。

そこには

「うわぁ……………」

「綺麗です……………」

「まさかここまでとはな……………」

「なんか複雑なの……………」

「私も……………」

「なぜだろうか……………すごい敗北感が……………」

「シグナムもですか？私もです……………」

「嘘……………アレ本当に神崎……………」？

「ヒーローのお兄ちゃん綺麗ですっ!」

「お父さん凄いね……………」

「うん……………」

「わぁ〜パパがママになっちゃった!」

「すっ、すごいなアレは……………」

「相変わらずに似合いますね。本当に」

「リュウトの特技じゃないですか？」

出てきたのは男の時とは違いストレートに綺麗に伸びている蒼い髪で元々のリュウトの中性的な顔つきや体つきもあつてか、とてもきれいな美女がいた。

「……ポタポタ………（パシャパシャパシャパシャパシャパシャ
！）」

なぜかここにムツツリーニが居る。

そして鼻血を出しながらもシャッターを高速で押す。

僕にはその気持ちがよくわかる！

僕もカメラがあればすぐにとっているだろう！

後で写真を分けてほしい。

「なんかボク、悔しいんだけど……」

「愛子、私もよ……」

「……似合ってる」

「本当にリュウト……？」

「ホンマに綺麗やな」

「すごいなこれは」

そしてこれは工藤さんに木下さんに霧島さん、そしてベルカイズさんにいつの間にかいた八神さんと村雨君のコメント。

「八神さんとライガさんはいつからそこにいらしていたのですか？」
とリュウト？は女口調で話す。

声も女声に代えているため本当少し背の高いに女の子にしか見えな
い。

「いや〜。なんか面白そうなネタがあったからな〜。これは特ダネ
やな〜！」

「『女装の似合う男の娘！？神崎リュウト！』ってか？面白そうだ
な」

「……………なぜ私が新聞部のお二人の記事に乗らなければならないので
すか……………。そんな事よりライガさんお願いします」

「「なんだ（や）？リュウーちゃん？」」

「……………何ですか二人そろってリュウーちゃんって……………私があので二人が
私に何かしたと叫ぶのでその時に攻撃をお願いします」

ため息をつく表情も絵になるなあ。

これは第三の性別『秀吉』に次ぐ第四のせいでツ『リュウーちゃん』

じゃないかな!?

「でもどうするんだ? 叫ぶだけじゃあ無理だろ? 周りの人もいるしな」

「その点は心配なく。お任せください」

と言ってリユーちゃんはあの常夏コンビの所にまで向かった。

「すみませんお客様」

「なんだ?

へえ。こんなコもいたんだな」

「スゲエ可愛いな」

と二人が舐めるような視線でリュウトを見る。

貴様ら! リユーちゃんに何かしてみる! 速攻でこの世に生まれたことを後悔させてやるぞ!!

「お客様、足元を掃除しますので少々よろしいですか?」

「掃除? さつさと済ませてくれよ?」

二人が席から立ち上がる。

そしてリユーちゃんがしゃがんで掃除をする。

すると突然

「おわっ!？」

坊主先輩が情けない声を出してリユーちゃんに倒れ込んだ。

それでからリユーちゃんも倒されはたから見れば坊主先輩がリユーちゃんを襲ってるように見える。

「キヤッ! たっ、助けてくださいッ!！」

とリユーちゃんが叫んだ。

それと同時に、

「ちよっとお客様! 何をしているんですか!？」

と驚いたように二人に駆け寄る村雨君。

演技なのにすぐくうまい。

「むっ、村雨さん! この人が突然私を押し倒してきて……」

「なっ……! 違っ……! 勝手に前に倒れ込んだだけで……」

『ふざけるな〜!』

『俺は見たぞ! その子をお前が押し倒すところを!』

『こんな奴の言うことなんてどうせ嘘じゃないか?』

『こんな奴信じるだけで損だ!』

『最低〜!』

『女の敵!』

『好きだリユーチちゃん!』

……なんか罵声に混じって変なのが聞こえた……

「どうした村雨?」

「坂本か? ちようどいい。こいつらに社会のマナーを物理的に教えるよ! と思ったんだ。手伝ってくれ」

「わかった。公衆の目の前での痴漢行為の罰だな?」

と雄二が参加。

「チツ! 良くぞ夏川!」

「わっ… わかった!」

なぜか坊主先輩はちよくちよくリユーチちゃんを見ながら去って行った。

それを追う雄二と村雨君。

そしてリユーチちゃんがこっちの席に戻ってきた。

「リユーチちゃん。今さっきどうやったんですか?」

とアミエーラさんが聞く。

「先ほどはしゃがんだ後にロングスカートの長さを利用して足が見えない位置で素早く先輩に足払いをしかけて前のめりに転ばせました」

そこまで計算していたとは……

「大丈夫リユーちゃん？どこもけがしてない？汚されてない？綺麗なまま？」

「……明久さん？なぜそんな風に心配するのですか？」

「えっ？だつてさつき先輩に襲われてたじゃないか」

「私は元は男ですよ？」

「何言ってるんだよ。リユーちゃんは第三の性別『秀吉』に次ぐ第四の性別『リユーちゃん』じゃないか！」

「なんですか『リユーちゃん』って。性別にしては語呂が悪いと思いますよ？あと、秀吉と私は男です」

こんなに綺麗な人が男なんて僕は認めないぞッ！

そして、食事を終えて会計に向かう。

ローウェルさん達は先に僕らの教室へ戻って行った。

「……お会計は夏目漱石を二枚か、坂本雄二、神崎リュウトの二名どちらかとなります」

「霧島さん。坂本雄二を二回分をお願いします」

「……ありがとうございます」

雄二がリュウちゃんの代わりに二倍となり払われた。

・おまけ

なのは「ええ

っ！もう着替えちゃうの!？」

リユーちゃん「当たり前です。私は女装趣味はありませんしこの口調も嫌です。そして何故表記がリユーちゃんになっているのでしょうか？」

瑞希「お願いです！もう少しだけでも

「

リユーちゃん「お断りします」

シヤマル「ねえリユーちゃん」「断固拒否します」「酷いっ!」

ゴホンッ

シグナム「さすがに今回はリユーちゃん！リユウトが可哀想だな」

リユーちゃん「今、确实『リユーちゃん』って言いそつになりましたよね？」

ヴィヴィオ「ママ〜！」

リユーちゃん「ヴィヴィオ？私はパパですよ？」

エリオ「正直違和感ないよね……………」

キャロ「もういつそのことお母さんに……………」

リユーちゃん「キャロ？ニンジンを丸ごと食べさせますよ？一週間ぐらいい……………」

キャロ「ごめんなさい……………」

リユーちゃん「それでは着替えてまいります」

タッタッタツ……………ガシッ！

リユーちゃん「なんですか明久さん」

明久「お願いもう少し！もう少しだけ！」

リユーちゃん「離してください」

明久「お願いリユーちゃん!!」

リユーちゃん「H A ・ N A ・ S I ・ T E ・ K U ・ D A ・ S A ・ ?

」

と、他にもフェイトやアリサに止められるリユーちゃんでしたが、最終的には逃げられてしまった。

ちなみに先ほどムツツリニが撮った「リユーちゃん」の写真は莫大な売れであったという……

第10問　メイドと女装と第4の性別！？（後書き）

はい！なぜか女装が似合う神崎君でした！

リュウト「……………（シクシク）」

レン「しかしなぜ女装をさせたんですか？」

いや〜、面白そうじゃん？これから。

エリオ「さすがにお母さん……………じゃなくてお父さんが可哀想だと思っ

リュウト「エリオ？今、俺の事お母さんって呼ぼうとしたよな？」

ヴィヴィオ「そうだよ！ママをいじめないで！」

リュウト「……………ヴィヴィオちゃん？そんなにピーマンが食べたいかな〜？」

ヴィヴィオ「ごめんなさいパパ！だからやめて！」

リュウト「わかってくれればいいんだ……………」

ナデナデ……………

ヴィヴィオ「えへへ〜」

今回はここまでです！

キャロ「次回もよろしくお願いします！」

遅れましたがPVアクセス30,000突破記念！王様ゲームIN文月学園（前

ようやくPVアクセスが30,000突破しました！

ホントは10日ほど前に突破しましたがテスト期間でしたので中断させていただきました。

こちらの都合で突然休んでしまいました。

そしてその記念で原作のバカテスの特典5巻に会った王様ゲームを書きました！

それでは始めます！

遅れましたがPVアクセス30,000突破記念！王様ゲームIN文月学園

こちらはFクラス。

今、ここで35人の戦士たちによる聖戦ジハードが行われようとしていた！！

* F
クラス内

レグルス・ベルカイズ、高町なのは、フェイト・ハラウオン、八神はやて、八神シグナム、八神ヴィータ、八神シャマル、ルーク・F・ファブレ、ティア・グランツ、アッシュ・F・ファブレ、ナタリア・L・K・ランバルディア、ユーリ・ローウエル、エステリーゼ・シデス・ヒュラツセイン、カロール・カペル、リタ・モルディオ、レイヴン、ジユデイス、フレン・シーフォ、パティ・フルール、神崎セラ、ユークリウッド・ヘルサイズ。

この35人の戦士たちだ。

雄二「明久！ルールの説明を頼む！」

明久「OK！」

ここに1から34までの数字と「王」と書かれたクジがあります。

この「王様」のクジを引いた人は他の番号を引いた人に命令ができます。

たとえば、1番が王の肩をもむとか。

2番が3番にしつぺをするとか。

そして、王様の命令は

「

全員『絶対!』』

雄二「それじゃあ始めるぞ!」

全員がクジを引いた。

雄二「よし……。お前ら覚悟はいいか？」

コウタ「はっ!かかってこいよ!」

ルーク「ってか何でアッシュが居るんだ？」

アッシュ「チツ!なんだ?俺が居たら悪いのか？」

ルーク「いや……。なんかさ……。キャラが合わないというか……。何と
言うか……」

アッシュ「……。俺だって好きで来たわけじゃない」

ルーク「ナタリアか?(ボソツ)」

アッシュ「……」

ティア「……ホントにアッシュはナタリアに甘いわね」

アッシュ「……うるせえ」

ライガ「さて、どんなふうになるか楽しみだな」

はやて「むふふ いいリアクションを期待してるぞ」

レン「……あなた達はそのために来たのですか？」

ライガ・はやて「もちろん」

アリス「最近ライガのキャラが壊れてきてるような気がします……」

カロール「僕はユーリが参加するのに驚きだよ」

ユーリ「なかなか面白そうじゃん」

フレン「課題から逃げるための口実だけだね」

リュウト「ユーリ……」

ユーリ「ってオイ！お前はどつなんだよ！あの量だぞ！」

フレン「僕は君とは違い早めに終わらせたぞ」

ユーリ「……マジ？」

フレン「大マジだ。……これが終わったらちゃんとするんだぞ」

ユーリ「ったく。お前は俺の母親か……？」

フレン「とても大きな子供だな」

レイヴン「おいおい青年。ちゃんとやる時はやらないと」

リタ「おっさんみたいになるわよ」

レイヴン「ちよつとリタっち!」

ユーリ「よし!これが終わったらすぐに取り組もう!」

レイヴン「青年!?!そんなにおっさんみたいになるのが嫌!?!」

フレン「さすがの僕も……」

レイヴン「………(泣)」

セラ「………哀れですね」

雄二「そろそろ行くぞ。

せ のッ!」

全員『王様だ〜れだッ!〜!』

第一ラウンド結果

王様、坂本雄二

雄二「それじゃあ命令だ。そうだな……………」

5番と！」

明久「グツ！」 「5番」グサツ

雄二「17番と！」

コウタ ドスツ「17番」 「なっ！」

雄二「21番が！」

「21番」

ザキユツ

ムツツ「……………」

雄二「鉄人に「好きです付き合ってください（雄二女声）」と告
つて来い」

明久・コウタ・ムツツ「……………」ガクッ O T L

貴様ああああああ

ああッ！！！」

コウタ「なんて命令しやがるんだ！！！」

明久「そうだ！そんなことしたら完全に誤解されるじゃないか！！！」

ムツツ「……………不名誉な！（ギリギリッ）」

美波「駄目よアキ！さっき自分で説明したばかりでしょ！」

フェイト「そうだよ三人とも」

三人以外『王様の命令は！？』

三人『絶対……………！』

だあああああああチクシヨオオオオオオツ！！！！』

ダツ！！ 三人が走る音

愛子「いつてらっしや〜い」

数分後……………

『私たちは教師をからかった事を反省しています』 三人にかける
れてる木の板

明久「……グスツ……二回戦……いくぞお……!!」

三人『イエエエエエエイツ!!!!』

明久「せえええええのツ!!」

全員『王様だ〜れだツ!!』

第二ラウンド結果

はやて「あっ、わたしやな」

八神はやて

はやて「それじゃあ……

19番に！」

シグナム「クツ！」

12番が！」

リュウト「……！」

はやて「ほっぺにチュウを」

シグナム「何イイイイイツ！？」

その他リュウト好きの皆様『そんなあああああつ！？』

△少し桃色空間展開中……△

シグナム「その……リュウト……リュウトのケジの番号は……12番か……？// // // //」

リュウト「シグナム………」「1」

シグナム「…… // // // // //」

リュウト「違うんだが……」

ピラッ 「13番」

シグナム「何………？」

チョンチョン

シグナム「ん？」

フェイト「……………（ニコッ）」 「12番」

シグナム「な……………あ……………」

フェイト「いらっしやい……シグナム」

数分後……

ムッツ・レイヴン「……（ピクピク）」

優子「見事に鼻血で池を作ってるわね……」

セラ「二人と気持ち悪いです」

ユーリ「その前にフェイトがスゲー恐かったんだけどよ……」

ジユデイス「女の嫉妬は怖いのよ？」

シグナム「そうか………多少いやらしいこともありなのだな………
それならもう私だって
赦はしないッ!!」

容

レン「普通女の子はいやらしい罰ゲームは嫌がるものじゃありませんか？」

ユ一（紙）『時と場合による』

カロル「そういうものなのかなあ……」

ジュデイス「あら。時として女は大胆になるのよ？」

シグナム「行くぞツ！！せええええええええええのっ！！」

全員『王様だっ！！』

第三ラウンド結果

村雨ライガ

ライガ「よし、命令だ。」

…………… 30番!」

明久「また僕!？」

ライガ「明日出す新聞の為にコメントを貰おう」

明久「へっ?何だ、インタビューか。よかったよかった」

ライガ「よし、はやて。準備はいいか？」

はやて「もちろんやっ!」

ライガ「それでは一つコメントを貰おう。「あなたが何かの一番になった」その時に君はなんと言う?」

明久「……………僕が小さな頃、祖父がよくこう言っていました。『明久。泥棒でも何でもいい。一番を目指して精進しなさい』今、僕は天国にいる祖父にこの事を教えてあげたいと思います。爺ちゃん……………これで、いいかい……………?」

ライガ「ふむ……そのコメントでいいのか？」

明久「うん」

はやて「それじゃあ写真を一つとるで？一応参考には三枚ぐらいとるけどええか？」

明久「うん、良いよ」

はやて「よっしゃ！ほな撮るで！」

数分後……

ライガ「はやて。写真はどつだ？」

はやて「ばつちりやで！」

ライガ「よし。いや、本当に良かった。丁度吉井が当たるなんてな。

お前の記事を何時か張り出そうと思っていたんだ。まさにナイス
イミングだ」

明久「えっ？何？観察処分者以外で有名なの？」

ライガ「ああそうだ」

はやて「よかったやん。これでさらに有名になるで？」

明久「やったね！ちよつとした自慢だ！」

ライガ「ああそうだな。

以上

【女装が似合いそうな男子ランキング？1】

【こいつにだけはバカとは言われたくない生徒？1】

【モテそうな男子（同性愛編）ランキング？1】

の三冠を達成した吉井明久さんからのコメントでした」

明久「ちよつとおおおおおお！！どう見ても悪い方面に有名
じゃないか！！」

はやて「よっしゃ！明後日に掲載するから楽しみにしとき？」

雄二「よかったじゃないか明久。祖父へ知らせてやれ」

明久「無理に決まってるじゃないか！！」

ライガ「尚、女装が似合いそうな男子にノミネートされていた木下
秀吉さん、神崎リュウトさんは審議の結果『第三、第四の性別であ
る二人ではアンフェアである』との結論に達した為除外されていま

す」

リュウト「オイ待て！別にこんなのに載りてえわけじゃねえけど俺も秀吉も男だ！！決して第三、第四の性別なんかじゃねえ！！」

はやて「ア

ア

聞こえない聞こえない」

リュウト「腹立つなオイ！！」

明久「クソツ！今度こそ！せええええええのツ！」

リュウト「何！？無視！？」

全員『おつさまだくれだつ！！』

全員『……………』

雄二「……………ん？」

ヒヨオオオオオオオオ.....

第四ラウンド結果

翔子「.....」 「王」

霧島翔子

雄二「.....!!」

スマンが急用がっ!!」

ダッ!!」

明久・コウタ・ムッツ「逃がすかあああああつ!!」

ガシッ
×3

ルーク「さあ王様!ご命令を!」

ムッツ・レイヴン「……………！（ブシャー！）」

カロール「レイヴン……………ン！…！」

レイヴン「グフツ……………我が人生に……………一片……………の……………悔いなしっ！
……………せめてジュディスちゃんとあんなことやこんなことをした
かった……………ガクツ……………」

パティ「未練タラタラじゃな」

エステル「ちよつとカツコ悪いですね……………」

なのは「いや。ツツコムところが違つと思えますよエステリーゼさ
ん……………」

瑞希「でもダメですよ霧島さん」

優子「そうよ代表。ちゃんと番号で宣言しないとルール違反になる
わ」

雄二「そうだ。二人の言うとおりだ」

翔子「……………じゃあ……………8番」

………チツチツチツチツチツチツチツチツチツ！

ダッー！！

ガバツ！
×3

数分後

雄二「……………」

ヴィータ「いったい何があったんだ？」

なのは「まるで拷問の後みたいなの……………」

フェイト「凄いぼろぼろだしね……」

アリサ「手を縛られていますしね」

島田「多分気にしたら負けよ……」

レグルス「その前によく坂本君の番号がわかったかについては突っ込まないんですね……」

愛子「気にしちゃダメだよ。きつと。……それじゃあ次！」

全員『王様だ〜れだっ!』

第五ラウンド結果

秀吉「うむ。わしか」

木下秀吉

リュウト「秀吉はどうするんだ？」

秀吉「そうじゃな。丁度演劇の相方がケガをして出れない状態なのじゃ。26番。代わりに手伝ってくれんか？」

リュウト「ん？あつ、俺が26だ」

リュウトグループ『（しまったあああああッ！！）』

秀吉「そつ、そうか……それじゃあこれが終わり次第『二人』練習をするのじゃ！／／／／」

リュウト「おう！やるからには全力だな！頼りにしてるぞ、秀吉」

秀吉「任せるのじゃ！／／／／／（リ、リュウトが頼ってくれたのじゃ！）」

優子「（秀吉……家に帰ったら覚えときなさいよ……！）」

アッシュ「……そろそろ時間が近いな。ラストだ」

雄二「ほれほほうはは（訳：それもそうだな）」

フレン「何を言ってるかわからないよ……」

ユー『仕方ない』

ジユデイス「口をふさがれてるもの」

カロール「もうそろそろはじめよう！よし！せえええええのッ！！」

全員「王様だ！れだっ！！」

『……………』

よし！

明久「僕だ　　！！」

最終ラウンド結果

吉井明久

明久「それじゃあ…………… 1から34番までの全員が……………」

買開くし持つてる僕らの助走写真を焼き捨てる」

一部女子「そ、そんな

！！」

ッ

リュウト「ナイスだ明久！！」

瑞希「そんなの酷いです！あんまりです〜！」

美波「そうよアキ！そんなことをすると木下の写真まで燃やすことになるわよ〜！」

ヴィータ「リユーちゃんの写真も焼かれちゃうんだぞ!？」

リュウト「おいコラヴィータ！今俺の事を確実にリユーちゃんって言っただろ〜！」

シグナム「リユーt…………ゴホン！リュウトの写真を燃やすなど私にはできん〜！」

アリス「そうです！リユーt…………ゴホン！リュウトの写真を燃やすなんてもつたいなさすぎです〜！」

リュウト「真面目そうな二人もグルだった!？」

明久「大丈夫。僕が持ってない二人の写真なんて存在しないから」

リュウト・秀吉「待て！テメエ（おぬし）今なんて（なんと）

」

明久「さあ！おとなしく写真を渡すんだツ〜！」

一部女子「いやあああああああああああつ〜！！！！」

戦後の風景

一部女子『……………（シクシクシクシク……………）』

雄二「……………むっっ……………！む！……………むっ！……………」
翔子に膝枕をしてい
る？（やらされているが正しい？）

ムッツ・レイヴン『……………（ピクピク）』

リュウト・秀吉「……………グスッ……………」

明久「1枚……………2枚……………」

ジユデイス「あら　すごい光景ね」

パティ「笑い事じゃないと思うのじゃが……」

ティア「黒いオーラが凄いわね……」

ナタリア「そういえばレグルスさんも神崎さんの女装写真を持って
ましたわね」

アッシュ「リユーちゃんとか言ってたな」

レン「アッシュさん！それ言っちゃ

リウト「いいよ、もう。どうせ俺は男の娘だよ。ハーフだよ。人
間のクズだよ。皆さんと同じ大地を歩いてすいません……」

アッシュ「……すまん」

ルーク「ここまでへこむリウトは初めて見たぞ……」

ライガ「その前に木下と工藤もへこむんだな……」

はやて「二人ももつとんたんやな……」

レン「僕はセラさんとユークリウッドさんに驚いています」

コウタ「二人ともOTLのポーズなんてとるとは思えないからな……」

……」

ユーリ「にしてもこの光景は誰かに見られたら誤解されそ「ガラッ
は？」

鉄人「……その……何だ……スマン……」

ガラッ

『解散!!!!!!』

遅れましたがPVアクセス30,000突破記念！王様ゲームIN文月学園（後

次からまた本編に戻ります。

これからもこの作品をよろしく願います！

第11問

チャイナドレスとタキシード？えっ？合わなくね？BYルーク（前

燃えたよ・・・燃え尽きた・・・ネタがな・・・

はいスミマセン調子になりました。

そのとりにバカテストの学園祭篇はネタが尽きてしまいました。

書けたら書こうと思います。

まことにスミマセン。

それでは本編をどうぞ！

第11問

チャイナドレスとタキシード？えっ？合わなくね？BYルーク

リュウトside

「はあああああ〜」

なんかどつと疲れたな……

先ほどAクラスにてFクラスの偽の悪評を流す先輩たちを止めるとはいえ女装をするなんて……

……これもすべてコウタのせいだ！！

後でシバくか……

とりあえずFクラスに入る

『ちよっ……！お願い、許して！リュウトならともかく僕が来ても絶対に似合わないからー！』

入る前にトイレに行くk「あっ、神崎、

戻ってたの？」……島田……退路を塞ぐな。

「もう着替えちゃったんですか？残念です……可愛かったのに……」

「葉月ももう一回見てみたいです」

「俺は男だ。決して女ではないからな？」

「わかってますよ。神崎君は男の娘です！」

「ちょっと来い瑞希。お前に新しい科目の『常識』を叩きこむから」

俺はなぜか漢字が違うことに気付いた。

なんか耐性が付いたみたいだな。

嬉しくないけど。

「と、とにかく教室に入りましょう！」

チッ！

逃げたな瑞希。

ガラッ

「今戻ったぞ」

「あつ、お帰りリユーちゃん」ん？なんだ？この頭が悪いのか？（
メキメキ）「いだだだだだだだッ！」

コイツ今リユーチャンって呼びやがったな？

とりあえずお仕置きのアイアンクローをプレゼント。

「まあ冗談で。悪いがリユウトを含めた三人とも、クラスの売り上げの為に協力してもらおうぞ」

と言って明久と雄二とおっさんとコウタがチャイナ服を片手に俺達を囲む。

ってかどこからそのチャイナ服を手に入れた。

「な、なんだか四人とも、目が怖いですよ……？」

「凄く邪悪な気配がするんだけど……」

二人のその考えは間違っではない。

「やれ、コウタ！明久！」

「オーケー！」

「任せな！」

と二人が俺達に襲いかかる。

「へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替え「行くぞ、島田！俺はコウタ！」ウチはアキに行くわ！」（ドゴォッ！（グハッ！！？）」

「ってか「ひでぶっ!？」って……」

北〇の拳じゃあるまいし……」

「……おっさんモブキャラ？」

「で？雄二。何でいきなりチャイナ服？ってかなのは達は？」

「店の宣伝に明久の趣味だ。高町達は「恥ずかしい」って言ったからだな。……後は店の評判のためだ（ボソツ）」

なるほど。

店がヤバイと瑞希が転校だからか。

「ところでリュウトは高町達のチャイナ服を見たくないか？」

「……………!（ピクッ）」

なんか今動かなかったか？

「まあ……見てみたくはあるな。俺も男だし」

「……………着替えてくる!（きます!）（の!）」

「……………」

ダダダダダダダ……」

突然なのは達がチャイナを片手に着替えに行ってしまった。

どうしたんだ？

「……よし。うまくいった」

「はい？」

「気にするな、リュウト」

いや、気になる。ものすごく気になる。

まあ結果オーライってことで。

「ルークや明久も見たいだろ？特に明久はチャイナドレスが好きだよな？」

「大好

愛してる」

「明久。お前本当に嘘がつけないよな……まあ俺も見たいけど……」

「し、仕方ないわね。店の売上げの為に、仕方なく着てあげるわ」

「そ、そうよね。店のためよね」

何で二人はあんなに言葉に詰まってるんだ？

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い……？あ、うん！手伝うから、あの服葉月にもちようだ
い！」

「パパ」

「どうしたヴィヴィオ？」

「ヴィヴィオもほしい〜！」

「ん〜。どうする明久？」

「気持ちは嬉しいけど二人の分は数が……！！（チクチクチク
チク）」ってムツツリーニ！どうしてそんな勢いで裁縫を！？つ
ていつかさつきまでいなかったよね！？」

「……俺の嗅覚をなめるな」

格好良い台詞のはずがとても格好悪い。

「そつだ島田。言い忘れてたが「宣伝の為にこれを着たまま出場し
てくれ」って姫路に言っておいてくれ。もちろんお前もだ」

「こ、これを着て出場しろって言うの………？」

「恥ずかしいと思うけど仕方ないと思うぞ？今着ても誰も知らない
からな。来た客が宣伝でもしない限り広まらない。だから二人がそ
のまま大会に出ればFクラスの良い宣伝になる。俺達も何とかする
から。俺は着ないけどな」

「……チツ……」

「明久とムツツリーニは後でO・H A・N A・S I・な」

「……（ガクガクブルブル）」

何でコイツらは人が嫌がることをするんだ？

「……わかったわ。瑞希のためだし」

「それならスグに着替えて会場に向かってくれ。大会では自分たちの所属のクラスがFクラスであることを強調するんだぞ」

瑞希と島田がFクラスであることが人の口に上れば、喫茶店の宣伝とFクラスのレベルのPRの二つの目的が果たせるな。

「わかったわ。瑞希にも伝えてくるわね」

「頼んだ」

チャイナドレスを抱えて島田も更衣室へと向かった。

「……できた」

「わ、このお兄ちゃん凄いです！」

「わ、すごい！」

ムツツリーニがチャイナ服を6着作り上げていた。

……ん？

「オイ、ムッツリーニ。その4着は誰のだ？」

「……………」

そう言つてキャロとハルナ、リタとパティを順番に指差す。

「ほう……………いくら養子とは言え勝手に人の娘にチャイナ服を着せるなんて……………しかもパティまで巻き込むのか……………」

「……………本人が言った(汗)」

「ホントかキャロ、ハルナ、リタ、パティ？」

「あつ、はい。ちよつと着て見たくて……………／／／／／」

「あ、アタシも着てみたい……………／／／／／」

「アタシも……………少し……………／／／／／」

「あつ！リタが照れてる〜！」

「黙れガキンチョツ！！」

「わっ！ちよつりタ！本の角は危険！！」

「ウチはユーリに見せるからの〜」

「ハイハイ……………」

なるほど……キャラはおそらくエリオにね……

だがハルナは何故だ？

それにリタもそんなキャラじゃないだろ……

「そうか。すまんムツツリーニ。疑って」

「……リユーちゃんになれば許す」

「やっぱ死ね」

まだ諦めてなかったのかコイツ！

「じゃあ四人とも着替えてきてくれ」

「僕が案内するよ」

「？ 更衣室の場所を知ってるのか？ フレン」

「うん、まあね。……後は護衛のためだよ（ボソッ）」

「……そうか。頼んだ」

「うん。じゃあ行こうか」

「はい！」

そう言って五人は更衣室へ向かった。

フレンなら安心できるな。

もし襲われても遅れはとらないし。

まだ教頭は動かないから何が来るかがわからない。

あの先輩たちもそうだ。

普通はあんなにFクラスに突っかかる必要はない。

ミカン箱についてはまだわかるがAクラスでわざわざ悪い噂を流すなんてよっぽどのが無ければしない。

多分、あの二人は黒だ。

警戒は必要だな。

そう考えていたら雄二が

「リュウト、レン、ルーク。お前たちはこれを着てもらおう」

と言って三着のタキシードを渡してきた。

「って、何でタキシード？」

「念には念をだ。いくら女子ががんばっても呼べるのは男性客だ。お前ら三人には女性客を呼び寄せてもらう。お前たちは顔がいいからな」

() (別にかっこよくないと思うけどなあ) (います) () ()

俺達三人は今同じことを考えているだろう。

作者「そういうけど三人とも容姿端麗だと思っが……」

……なんか変な電波を受信したような気がする……

「ちよつと待つてよ雄二！ 僕のは！」

「あるわけないだろ明久。お前は別に美少年じゃないし」

「はつきり言つて不細工だしな」

「コウタに雄二も失礼な！ 365度どこから見ても美少年じゃないか！！」

「5度多いですよ明久」

「実質5度の微少年だな」

「皆なんて嫌いだッ！！」

明久が泣きながらログアウトした。

1分後に戻ってきたけど。

そしたら瑞希以外の女子たちがチャイナ服を着て戻ってきた。

「どっ？？似合っかな？」

と黒を基準にしたチャイナドレスを着たフェイトとが聞いてきた。

正直かなり色っぽい。

ムツリーニと明久とレイヴンは鼻血をジェット噴射のごとし勢いで出している。

「ああ。似合ってる。フェイトと黒があってるから凄く似合っぞ」

「うふふふ………／／／／／／／」

「ねえねえリュウト君。私は？」

「えっと……私も着てきました………／／／／」

「私もどうでしょうか………？」

「……………」

今度はなのはとアリサ、セラとユーが聞いてくる。

なのははピンクでアリサは赤と黒で二人ともスカートの短いチャイナドレス。

セラは黄色でユーは青くて短いスカートのチャイナドレスだ。

「うん。4人とも凄く似合ってるぞ」

「えへへへ、ありがとうなの！／／／／／／／／」

「あっ、ありがとうございます……／／／／／／／／」

「そ、そうですか……／／／／／／／／」

「……………／／／／／／／／」

「リュウト！あたしたちは？」

「ど、どうだろうか？変なところでもあるか？」

「どうでしょうか？」

と、今度は八神家の3人。

シグナムはなのはのスカートが長く少し深い色のピンクになったよ
うな感じだ。

ヴィータは赤く短いスカートで、シャマルは緑色のチャイナドレス
を着ていた。

「3人とも自分の色の服も着てるから似合ってるぞ。ってかお前ら
皆美人だし似合わない服を見つける方が無理じゃないか？」

「ありがとな、リュウト！／／／／／／／／」

「せ、世辞などいらん……／／／／／／／／」

「うふふ、ありがとうございます／／／／／／／／」

皆は正直Fクラスには似合わない程の美人たちだ。

Fクラスの全員のテンションが上がる気持ちが少しだけわかる。

「リュウトー！」

「ん？」

いきなり誰かに声をかけられた。

声の主に振り向くと。

「どうかのう……………似合ってるか？／／／／」

緑色で短いスカートのチャイナドレスを着た秀吉が居た。

「似合うけどさ……………悪いとは思っけど最近お前がホントに男か？って思ってしまうな」

「そっ、そうか……………／／／／／／／／（リュウトがワシを少しだけ女として見てくれておるな！）」

顔を赤くして秀吉は俯いてしまった。

やっぱり女みたいなんて言われたらいやだよな。

「ルーク……………どうかしら……………？／／／／」

「あ、ああ。似合ってるぞ……………／／」

「…………… / / / / /」

ルークたちもそんなやり取りをしていた。

ガラッ！

「今戻ったよ」

フレン達が帰ってきた。

「お帰り。みんな似合ってるぞ」

「えへへ。ヒーローのお兄ちゃんありがとうございます…」

「ありがとう、お兄ちゃん…………… / / / / /」

「えへへ〜」

「ねえエリオ君。似合うかな？」

「う、うん。似合ってるよキャラ…………… / / / / /」

「あ、ありがとう、エリオ君…………… / / / / /」

と、話していたら、

「よし。じゃあ三人とも着替えてきてくれ」

雄二から指令が出た。

「わかった」

その後、着替えてきたリュウトを見てリュウトが好きな女性陣は全員見惚れてしまったとか。

ちなみにその時のチャイナドレス組と資金調達用のリュウト達タキシード組をムツツリーニが写真を撮こっそりとしてそれぞれ男性客、女性客にバカ売れしたのは余談だ。

「じゃあ俺たちはいろいろ回る。何かあったら報告する」

「頼んだぞユーリ」

「任せな」

「(さて……………教頭からどんな妨害が来るか。ユーリ達もいるけど気をつけとくか)」

そう考えていた時、

「そうだ。明久にリュウト。誰か3人ぐらい女子を連れて校舎内を歩き回ってくれないか？」

と、雄二が言った。

「何でだ？」

「この学園祭でチャイナドレスを着る人がいるのはここだけだ。だから宣伝みたいなもんだ」

なるほど……確かにそれはいいな。

「わかった。でも誰を連れて行くか……」

キュピーン!! ×11

な、なんだ？

今、なんか怪しい眼光が見えたような……

「私が行くの！」

「ずりーぞなのは！あたしが行く！」

「グイータはいいよ！私が行くから！」

「フェイトちゃんはまだもうAクラスで神崎君の隣に座ったじゃないですか！私が行きたいです！」

「私も行きたいです！」

「シャマルも隣に座っていたではないか！私が行く！」

「シグナムは結構です。従妹である私が行きます！」

「妹のあたしが行くわよ！」

「私が行きたい」

「やっと勝てたの!」

「やったのじゃ!」

「……(グツ)」

「また負けた……OTL……」

「剣道の試合で負けるより悔しいんだが……」

「なんで勝てないの〜!」

「また負けてしまいました……」

凄いことになってるなオイ。

「葉月も行ってもいですか?」

「うん? いいぞチビッ子」

「わ〜いですっ!」

葉月も行くことになった。

「それじゃあ行ってきてくれ」

「わかった。行くぞ3人とも」

「うん!」

「わかったのじゃ！」

「……………」

「わかった」

俺達はそんなわけで校舎内を回ることにした。

「……やっぱり視線が強いな……」

「そ、そうじゃな……」

「予想はしてたけど……」

「……恥ずかしい……」

「大丈夫かユー？」

「私も恥ずかしいの……」

「バカなお兄ちゃん楽しいですか？」

「うん。楽しいよ」

「何であの二人は平気なんだ？」

そう今俺たちは廊下を歩いている。

なのは達はやはりかなりの男性の目を引いている。

男のはずの秀吉もだ。

あまりいい気分じゃないはずだ。

(注：リュウトは女性客の目を引いています)

そんなことを考えつつ6人で話しながら歩いていたら。

「あつ！なのはさーん！」

と、声がした。

「あつ、スバル！」

「こんにちは、なのはさん！」

スバルと呼ばれた女の子は短く青い髪をして明るい性格と思える子だ。

文月学園の制服を着ているが彼女は2年生にはいなかったはずだ。

1年生か？

「ちょっとスバル！」

今度はオレンジ色の髪でツインテールの女の子が彼女の名前を呼びながらこっちへ来た。

「スバルアンタ！いきなり走って……ってなのはさん！？こんにちは！」

「うん。こんにちはティアナ」

彼女はティアナと言うのか。

しかし、なのはを見た瞬間にかしこまるといふことは1年生か。

確かなのははテニス部だったな。

その後輩か？

「ところでなのはさん。そちらの人達は？」

と、聞かれた。

「木下秀吉じゃ。よろしくのう」

「……ユークリウッド・ヘルサイズ」

「島田葉月です！よろしくですっ！」

「よろしく葉月ちゃん！」

スバルと葉月は気が合いそうだな。

「僕は吉井明久。よろしく！」

「え！吉井明久って……」

「この人が！？」

「えっ？どうして二人とも僕の名前知ってるの？」

「だって……」

「吉井明久って……」

もう大体の見当は付いた。

「「世界一のバカって有名……………」」

「せめて町内って言って……………」

だと思った。

「あれ？あなた、もしかして……………神崎リュウトさんですか!？」

いきなりスバルが俺の名前を言い出した。

はい？

「そうだけど……………何で知ってた？」

「校内新聞見てないんですか？確か……………『真の学園主席』とか『救世主』とかで載ってましたよ？」

「何そのラスボス的表現と世界史に出てきそうな単語」

「『真の学園主席』はある学校記者が学園長から聞き出したとか。

『救世主』は困ったときに彼が居ると必ず助けてくれるということ
です」

「……………一応聞くけどその記者の名前は？」

「確か……………村雨ライガと八神はやてて書いてありました」

「あの狸共があああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

「ありがとな久保」

どうしたんだろうな……

リュウトside

「……すまん。突然大声あげて」

「だ、大丈夫です……」

「ヒーローのお兄ちゃん声大きいですっ！」

「マジでスマン……」

いきなり怒声を上げるのはまずかったな。

「あっ！遅れましたが私はスバル・ナカジマって言います！」

「あたしはティアナ・ランスターです。よろしくお願いします」

「よろしくな二人とも。後、そんなにかしこまらなくていいぜ。めんどくさいだろ？」

「いやいやいや！駄目ですよそんなの！」

「そうか？じゃあまあいいか」

人によるしな。

「ところで神崎さんはなのはさんの恋人ですか？」

「は？」

「ふえっ！？／／／／／」

「……（ピキッ）」

いきなり何を言ってるんですかティアナさん？

後、秀吉とユーがものすごいオーラを出しているんですが……

「え〜と……その…ね？……リユウトなら嬉しいというかなんというか（モゴモゴ……）」

ね？の後から何か言ってる気がしたがよく聞き取れなかったな。

「ってか俺となのはじゃあ不釣り合いだろ？」

「……それって私なんかじゃありユウトには合わないってことなの？」

「ちげーよ。俺なんかなのはみたいな美人には合わないってことだよ」

「美人は嬉しいけど何か複雑なの……………」

あれ？逆に落ち込んだ？何で複雑なんだ？

「……………ハア……………」

「何でユ一と秀吉はため息をついてんだよ」

「……………別に……………」

「何でもないのじゃ」

なんか不機嫌だなオイ。

「リュウト……………さすがにそれはないよ……………」

「明久まで!？」

「なのはさん。神崎さんは元からこれなんですか？」

「そうなの……………」

「頑張ってください、応援してます」

「うん。ありがとうティアナ、スバル」

俺が何をした……………

「あつ、スバル。そろそろ行くわよ」

「うん、そうだね。なのはさん、また後で行きますから！」

「うん。じゃあね二人とも！」

と言ってスバルたちはどこかへ行った。

なのはは性格もあってか後輩にも人気があるな。

そういえばフェイトもテニス部だっけ？

俺も何か部活でもするか？

あつ、金がないや…………orz

「どうしたのリュウト。いきなり落ち込んで」

「いや…………何でもない…………」

バイト頑張ろう…………

「たっだいまー」

「ただいま戻りました」

俺達が回り終えて数分後、瑞希と島田が帰ってきた。

「丁度良かったよ。二人とも疲れているところ悪いけど、ホールに回ってくれる？」

「結構客が埋まり始めてるんだ」

俺達の宣伝で少し客が増え瑞希たちの試合が終わった後からさらに増えた。

今のところは順調だな。

「良かった。だんだんと持ち直してきたのね」

「良かったです」

「女性客も増えてるんですよ。リュウト達の宣伝と味についての噂が広まったおかげでしょう」

その瞬間に突然瑞希から黒いオーラがあらわれた。

恐っ!!!?

「……………雨宮君」

「はい。なんでしょ……………う……………か……………」

レンの顔がだんだん青くなってる。

俺の顔も多分青ざめているだろう。

何故だ？震えが止まらない。

「リュウト君たちの宣伝は何をしたんですか？（ゴゴゴゴゴゴゴゴ）」

「え、え〜っとですね？リュウトが高町さん、秀吉、ヘルサイズさんに明久と葉月ちゃんを連れて校内を回ることです」

「そっですか……………」

瑞希が笑いながらこっちへ来た。

スミマセン。目の奥が笑ってないです。正直逃げ出したいです。多分、犯罪者も裸足で逃げ出すほど怖いです。

「リュウト君はどうしてそんなにライバルを増やしていくんでしょ
うね……………」

「は、はい？ライバル？」

「……………そういえばリュウト君はそういう人でしたね」

「ん？なんか言った？」

「いいえ、気にしないでください。後、良いですか？」

「は、はい？」

「その……………私の格好……………似合ってますか？」

「へ？あ、ああ。似合ってるぞ。その髪飾りもな」

「ふふふ ありがとうございます。それじゃあウエイトレスに行っ
てきますね」

「ああ。行ってらっしゃい」

今度は機嫌をよくして行ってしまった。

ホントに良くわからないな……………

「君。注文しても良いかな？」

「あ、はい」

近くの客に呼ばれたので振り向いてみると……

………教頭の竹原ッ！

まさかターゲットがここに居るとはね。

その前にコイツはこういう祭り事には縁がないような奴だったはずだ。

とりあえず、気を付けるか。

「ご注文をどうぞ」

「本格ウーロン茶と、胡麻団子を」

「かしこまりました。本格ウーロン茶と胡麻団子ですね？」

メモを取り注文内容確認のため竹原にうかがう。

「ありがとうございます。後ほどお持ちしますので、少々お待ちください」

そう言って厨房に向かおうとするが、

「それと聞きたいことがあるんだが、いいかね？」

と、呼び止められた。

マズイ！

もうばれてたのか！？

いや、ばれるにしたら早すぎる。

相手が何を言うかで決まる。

とりあえず今は平常心だ。

「はい。なんででしょうか」

「このクラスね吉井明久という生徒がいると聞いたのだが、どの子かな？」

「え？明久、ですか？」

明久に？

一体何が目的だ。

とりあえず明久を呼ぶか。

「オーイ明久！」

「ん？どうしたの？」

「竹原先生がお前を呼んでたぞ」

「竹原先生が？ありがとう」

「行ってら〜っと」

俺は厨房に戻るふりをしてバレないように二人を監視する。

少し遠くに離れすぎてよく聞こえないな。

二人が話していたら、島田が明久に何かを話した。

その後、廊下に出てどこかへ行った。

「ルーク。これを教頭先生の机に持って行ってくれ。俺はちょっと用事がある」

「？ わかった」

そう言っつて俺は島田の所に行く。

「島田。明久に何を話した？」

「アキに？土屋が茶葉が無くなったからストックを置いてる空き教室から持っつてきてほしいって言っつてたからアキに頼んだのよ」

「そうか。あんがと」

そして教頭を見ると

電話？

いや、まさか！！

「悪い島田！俺、用事できたから少し抜ける！」

「えっ？わ、わかった」

俺はダッシュで空き教室へ向かう。

まさか教頭！

狙いは学校の破壊か！

召喚大会には自信のある奴しか出ないはずだ。

確か商品で「白銀の腕輪」があつたな。

ババアはそれを「高得点者が使つと暴走する可能性がある」ってほざいてたな。

しかも、この大会ではその腕輪を大会優勝者が使用するデモンストレーションがある。

竹原はそれを利用するつもりだ。

明久達のような低レベルを消して高得点者に優勝させて腕輪を暴走させる。

そうすれば学園の評価はかなり落ちる。

明久……！無事でいろよ！！

明久Side

どうも、久しぶりの視点になった僕のこと吉井明久です。

僕は今

「お前に恨みはねえけど、ちょっとおとなしくしててくれや！」

いきなり空き教室に閉じ込められて知らない人に殴り掛かれた。

って危なっ!？

「ちょっと待った!人違いじゃないの!？」

屈んで拳をかわし、立ち位置を入れ替えて扉を背にする。

最近なんだか殴られることが多くて避けるのがうまくなった気がするなあ……………

主に美波とか、リュウトとか、美波とか、リュウトとか……………

アレ?二人しか名前が上がらない?

「逃げんなコラ!おとなしくしてろ!」

「いや、そんな事言われても!」

扉側だから逃げるのは簡単だけど、それだと喫茶店にこの連中が来てしまう。

さて、どうしようと考えていたら

ガラッ

「明久いるか？」

タイミングよくリュウト函が来た。

「明久？今、函と書いて何と呼んだ？」

「地の文にツツコまないですよ………」

何でわかったんだらう？

「とりあえずリュウトと喧嘩がしたいに對なんだ。だから、あとは宜しくね」

「わかった。とつとと茶葉を持って教室に戻れ」

「うん、わかった」

そう言っつて僕はリュウトを空き教室に残して教室へ戻った。

でもなんでリュウトはどうしたんだ？つて様子もなかったんだらう？

リュウトSide

「はい、終了な」

「クッ……」

「いつてえ……」

とりあえず今不良三人をボコし終わりました。

えっ？早すぎる？

気にすんな。

実際に一分ぐらいかかった。

「さて……………質問がある……………これを指示したのは誰だ？」

おそらくは教頭だと思っがな。

「オイ。早く答えるよ。つぶされてえのか？」

ヤバイ。少し暴力口調になってきた。

ガラッ

「オイ、リュウト。用事があるって聞いたがここで何してんだ？」

雄二が来た。

「ああ。まあ色々」ヒ……………ヒイイイ！！」あっ！？」

しまった！情報源が逃げた！

追いかけたいけど追いかけたら雄二に怪しまれるな。

「で？何してたんだ？」

「ああ。トイレに行った後にこの空き教室から明久の声がしたからな。様子が変だったから入ってみたら明久がああ三人に絡まれてるな。それを助けたってことだ」

実際に明久の「そんな事言われても」って聞こえたから嘘ではない。

トイレ以外。

「そうか………売れ行きがよくなったFクラスの妨害でもしに来たんだろ」

その一応教頭の狙いの候補に入れとくか。

「とりあえず戻るか」

「そうだな。後、あんこ持っていくの手伝ってくれ」

「了解つと」

教頭………アンタが何をするかはわかんねえけど俺の仲間に手え出してみる。

テメエをありとあらゆる方法で八つ裂きにしてやる。

第11問

チャイナドレスとタキシード？えっ？合わなくね？BYルーク（後

7月29日にて

この作品が私、アナザーが消されるかもしれないのでここのが
きは削除しました。

PV50000記念！エイプリルフルは人による。 (前書き)

PVアクセスが50000を超えました！

今まで投稿できなかったのはすみませんでした。

また頑張ります！

それではどうぞ！

PV50000記念！エイプリルフルは人による。

4月1日

それは、ある者には娯楽に、ある者には

地獄となる日だ！！

そしてここに……………

「明久知ってるか？今日は食堂の食券が全部タダな日なんだぜ？」

「ホント雄二！？ありがとう！！」

地獄へ誘われた観察処分者よしいあきひなが一人。

明久 s i d e

「騙されたあああああああ！！！！」

雄二のヤツ！何がタダだ！いつも道理有料じゃないか！食堂に居た皆から「何コイツ？」みたいな目で見られたし！

そう考えながら廊下を歩いていたら前に第三の性別「秀吉」を持つ木下秀吉が居た。

相変わらず可愛いなあ〜。

「む？明久ではないか。どうしたのじゃ？そんなに疲れたような顔をして」

「秀吉……………雄二が食堂の食券がタダって言ったのに有料だったんだよ……………」

「……………明久。今日は何月何日じゃ？」

生きなり何を聞いてるんだろう秀吉は。僕でも日付ぐらいは覚えてるよ。

「4月1日でしょ？それがどうしたの？」

「ふむ……………明久よ。知っておるか？」

「うん？何が？」

「今さっきじゃが誰かがおぬしの下駄箱に手紙を入れていて

」

「ちょっと用事がっ！！！」

今すぐ下駄箱に向かうという用事が！！

僕はすぐさま下駄箱へ向かった。

秀吉 side

明久よ……日付を覚えているのになぜその日のイベントを覚えていないのかのう……

む？そうじゃ！リュウトを騙すと面白そうじゃの！

この演劇で磨いた演技力を使えば……フッフッフ……

……今、無駄な活用じゃと思つた者は後でちよつとつとつとO・

H A・N A・S I・があるのじゃが……（黒笑）

さて、どうリュウトを騙すk「騙されたあああああつ……！」

……明久はこれで気づけばよいのじゃが。

明久 side

秀吉にも騙された……

僕、何かしたかな……？

「なあ、もう何人騙した？」

「4人ぐらいだ。エイプリルフルってな」

廊下で横切った人の話が聞こえた。

エイプリルフル？

あつ！そうだ！今日はエイプリルフルじゃないか！だから二人とも僕を騙したのか！

くそっ！こうなったら僕も「アキ！」ん？

声の主はポニーテールと釣り目が特徴の島田美波。

「どうしたの美波？」

「ねえ、知ってたアキ？」

「な、何を？」

気を付けるんだ！美波は必ず僕に嘘をついてくるはず！！

「今日はリュウトが弁当をアキの分まで作ってくれたんだって」

「ありがとうリュウトオオオオオオオオ！！」

リュウトの弁当がタダ！これほどの幸福はない！！

数分後……………

「……………もう誰も信じない」

また騙されたよ……………

リュウトの少し生暖かい視線がつかった。

そう考えつつ教室へ戻った。

ガラッ！

「……………何をしてるの二人とも？」

某蛇みたいに段ボールに隠れているものの二人の長い髪の毛が見えてカモフラ率が明らかに0の高町さんとハラウオンさんが居た。

「吉井！静かにしてほしいの！」

「そっだよ！」

「二人の方が大きい気がするけど……………」

「とにかく声を小さくして！もし見つかったら誰に見つかったら？」「……………ッ！！？」「」

今多分「フォアン！」って効果音がして二人の頭の上に「！」が付いているように見えるのは僕だけだろうか。

「見つかったの！逃げるよフェイトちゃん！」

「うん！」

あっ！逃げた。

「なっ！待ちや、二人とも！……………チツ！逃げ足の速いやっちゃん……………」

八神さん？二人は親友ですよね？その舌打ちは何ですか？

「まあええは……………。吉井で遊べばええし

」

「撤退！」

逃げないと！このままだとヤバイ！

「逃がさへんで吉井！」

僕と八神さんの鬼ごっこスタート。

リュウトside

エイプリルフルで大騒ぎだな。この学園。

あんまり人に嘘をつくのはいい気分じゃないからやらないけど。

一部は例外で。

「はあ……はあ……ここまでくれば……」

なんか明久が息を切らしていた。

「どうした明久？」

「ああ、リュウト。実は八神さんから逃げてきたんだ……」

八神さんってことははやてか。

シグナム達は名前で呼び合うことにしてる。紛らわしいからな。

しかし相手ははやてねえ……

アイツは新聞部だからネタやらいろいろ持つてるから危険だな。

ライガも新聞部だけどアイツはこういうことには参加しない。

「あつ！吉井発見や！ライガ！行くで！」

「了解。楽しそうだなオイ」

「当たり前や！」

はやてが頼まなければ。

「もう来たの！？じゃあね、リュウト……」

「今度こそ逃がさへんで！」

鬼ごっこスタート。

「お疲れライガ」

「おう、リュウトか……………」

「大変だな、お前も」

「意外に楽しいかもな。お前に嘘は効かないけどな」

「そうか？」

「無自覚な分余計に騙せなかったダメージがデカいぞ？」

「そんなものか？」

「ところで……………」

「ガンッ！」

俺は近くにあつた掃除用具入れを蹴った。

「……………」

「5秒以内に出てこなかったらガムテープで強力に固定して塩酸を流し込むぞ？」

「……………人でなし！（ボタンー！）」

ムツツリー二事、土屋康太が掃除用具入れから出てきた。

「で？何をしてるんだ？」

「……………隠れている」

その台詞さえ嘘に聞こえるのはムツツリー二の目ごろの行いが悪いからだと思う俺は間違っではないはずだ。

「多分本当だな。工藤らへんだろ？」

「……………正解」

どんな嘘かが何となく見当がついた。

「そうか。すまん、ムツツリー二。疑って」

「……………わかってくれればいい」

そう言ってムツツリー二は忍者のごとしスピードでどこかへ行った。

アイツ忍者じゃねーの？

秀吉 side

むっ…………結局リュウトが見つからん…………

一度教室へ戻るかのう…………

ガラッ！

……………（シクシクシク）「ルーク、ヴィータ、コウタが体育座
りで泣いている」

ポンポン 「グランツ、シグナム、レンがそれぞれの肩を叩く音」

何があつたかは一目瞭然じゃな。

「そろそろ泣き止んだ方がいいですよ？」

「だってさ……はやくて達に騙されたのにあたしは誰も騙せてねーんだぜ……？」

「アツシュだけじゃなくてナタリアまでに騙されるなんて……」

「アリサやレグルスに騙された……」

「ルーク……あなた嘘をつくとき顔に出てるわよ？」

「ヴィータもだぞ？」

「コウタ。あなたもですよ？」

「」「」「……マジで？」「」「」

「「マジです(だ)(よ)」「」

「「「(ズーン)」「」

今度は負のオーラを出し始めたのじゃ……

「どうします？レグルス……」

「下手な慰めは危険だと思います……それに……空気が……」

「重いですね……」

アリサとレグルスは少し疲れてるように見えるのじゃ。

「ところで、セラとユーは大丈夫じゃったか？」

「レベルが低すぎて話になりません」

サラサラ……

『同感』

二人とも厳しいのう……

「それよりもアレをどうにかしたいのですが……」

そう言ってセラが指をさしたのは、

今度はリュウトと雄二が帰ってきた。

「多分、工藤、はやて、ライガ辺りだろうな」

「なるほど」

それは確かに納得じゃ。

「ところでリュウト達は騙されなかったのですか？」

とセラが聞く。

「あんな嘘に騙されやしないって。レベルが低すぎ」

「逆に俺は騙してやったがな」

「雄二は売られた喧嘩を買いすぎだ」

一体どれだけ嘘を言われたのじゃ？雄二はどんな嘘を言ったのかも
気になるのじゃが……………

……………そうじゃ！

「のっ、リュウト」

「ん？どうした秀吉？」

「実は、今度演劇で彼女役をすることになったのじゃ。それでデートの部分が難しくての。手伝ってくれんか？」

フッフッフッ……………「こういう頼みならリュウトは疑わぬはずじゃ！
実際はもう完璧じゃがリュウトが騙されたらどんな顔をするかが気になるのじゃ！」

「ん？いいぞ」

来た！！！

「デートに行くか」

……………はい？

「……………今なんと？」

「だから、お前さつきデートの部分が難しいって言ってたじゃん。それなら実際にやってみればいいんじゃないかね？」

そ、そういえば思い付きで言ってしまった……………／／／／

しかし……………

「……………なぜ嘘と疑わぬのじゃ？」

「秀吉は演劇が大好きだろ？どんな役でもこなそうとするだろ？でも、デートとかしたことないだろ？俺もないけど。それならレッツ実戦！その方が早く覚えれるだろ？」

………そうじゃな。リュウトは正直者じゃからな。嘘をつくべき相手ではない。

「それなら今日の帰りに少し頼みたいのじゃが」

「おう。デートとかしたことねーけど任せな」

男じゃが、ワシはそんなリュウトを好きになったのじゃからな。

今日はデートを少し楽しむかの

そしていつかリュウトに女として見てもらうのじゃ……

PV50000記念！エイプリルフルは人による。(後書き)

秀吉が乙女思考になってますね……

第12問 誘拐事件再び！しかし1日目はまだ続く……………（前書き）

昨日、夏休みに入りました。早いと思う方もいると思いますがこちらの高校は昨日からなんです。課題を終わらせつつ小説を投稿していこうと思います！

それでは、本編をどうぞ！

第12問 誘拐事件再び！しかし1日目はまだ続く……………

明久side

「明久。そろそろ四回戦だ」

「え？もうそんな時間なの？」

時計を見て確認する。午後二時過ぎだ。

喫茶店に夢中になっていているうちに随分と時間が過ぎていたみたいだ。

そういえばリュウトからまだ聞いてなかった。

どうしてなんの恨みもないのに僕を攻撃してきたのか。

リュウトが何であんな状況だったのに驚くこと一つなかったのか。

最後のが一番気になる。

「あれ？アキたちもそろそろなの？」

「そうなんですか？実は私たちもそろそろ出番なんですよ」

姫路さんと美波がトレイを置いている。

「お兄ちゃん、葉月を置いてどこか行っちゃうの？」

葉月ちゃんにズボンのすそを握られてしまった。

「葉月。あき　　バカなお兄ちゃんは今からとつても大事の用事があるんだ。だからおとなしく待ってないとダメだぞ？」

と、リュウトが葉月ちゃんの頭を撫でながら説得する。

「うゝ。でも……」

不満げに膨らむ葉月ちゃんの頬。

「その代わりな、いい子にしていたら
なお兄ちゃんが大人のデートを教えてくれるらしい」

バカ

「葉月お手伝いしてくるですっ！」

いきなりリュウトが超弩級の爆弾を投下した。

「って！違うんだよ葉月ちゃん！僕には君が期待するような財力はないんだ！ねえ、聞いている！？」

葉月ちゃんはものすごい勢いで厨房に消えてしまった。

ガシッ！

「アキ、ちよつと校舎裏まで来て？」

お姉さんの怖い声。

？まれた肩は今にも外れそうな勢いだ。

「オイ待て島田」

ここでリュウトの声。

もしかして助けてくれるの！？

「お前たちの次の対戦相手は明久だ。アイツはフィードバックがあるから召喚獣で叩きのめしてやれ。瑞希も明久を叩きのめしてくれ」

「そうね。ありがとう神崎。頑張りましょう瑞希」

「えっ？は、はい」

まさかの裏切り！！

「ちょっと待って！僕の召喚獣はさっき言ったとおりフィードバックつきなんだよ！・姫路さんの召喚獣に攻撃されたら僕も酷い目に「フン、望むところだ」雄二！お願いだから勝手に僕の生命を左右しないで！それにリュウトは何「いい仕事をした！」みたいな顔してるのさ！！」

「忘れたとは言わせんぞ明久！貴様が俺を

リュウちゃんと呼んだことを！！！！」

「まだ根に持ってたの！？」

「ふはははははは！！苦しむがいい明久！！瑞希！遠慮はいらねえ！！全力で明久を殺れ！！」

「わかりました！」

「姫路さんもそこはわかっちゃだめだよ!？」

最近彼女もFクラスに毒されてる気がする。

「さあて、早く会場に向かいますしょうか。アキがどんな声で啼くのか楽しみだわ」

「いいだろう。そこまで言うなら、明久にどこまで大きな悲鳴を上げさせられるのか、じっくりと見せてもらおうか」

僕の味方はどこにもいなかった。

リュウトside

つてなわけで、明久達の試合を見に来ました！

流石に一般公開になると召喚獣見たさで客が大勢来るな。

みつともない試合をするなよ明久？

『四人とも、そろそろ良いですか？』

先生が苦笑いしながらそう言う。

あの四人は何を話していたんだ？

「「「「試獣召喚！」「」」」」

四人の掛け声とともに召喚獣があらわれる。

こちら、観客席から少し歓声があがる。

正直うるさい。

これ以上うるさくなったら鼓膜が破れるな。

ちなみに点数は特別に設置されている大型ディスプレイに表示される。

今は情報処理に時間がかかっているようだ。

『では、四回戦を………はい？何かありますか？』

雄二が何か先生に話している。

雄二、先生が不満そうな顔をしてるぞ。

雄二、先生はまだ貸すとも言っていないのにマイクを奪うな。相手は先生だぞ？

『清涼祭に御来場の皆様こんにちは』

と、雄二が挨拶を始めた。三人が並んでるところを見ると宣伝か？

『ここに居る僕ら四人は、本格飲茶を提供する2・Fの中華喫茶で働いています。このように可愛い女子も一生懸命頑張っていますので、よろしければどうぞお立ち寄りください』

「「「よろしくお願いします！」「」」

雄二がお辞儀するのに動きを合わせて三人もお辞儀をする。

って召喚獣までお辞儀してる………いつの間にそんな高等技術を？

まあ、とりあえず印象には残るだろうな。

雄二はお辞儀をした後先生に軽く頭を下げてマイクを返した。

『
お時間に余裕がありましたら、出場選手たちのいる2・Fに立ち寄
つてみてください』

先生は苦笑いしながら宣伝に協力してくれた。感謝だな。

ピロピロピロ！ピロピロピロ！

ん？こんな時に電話かよ……

席を立つて迷惑のかからなそうな場所で電話に出る。

「もしもし？」

『もしもしリュウトですか？レンです』

「どうした？」

『いえ。ヴィヴィオ達が出店を見て回りたいていまして』

「ん？じゃあセラとユーを同行させてくれ」

『わかりました。それと

任務の事ですが』

なるほどね……………

「なんだ？」

『一度集まりましょう。場所は体育館裏もつすでに全員には連絡を入れてます』

「わかった。今行く」

そう言って電話を切った。

そして、目的の場所へ向かった。

体育館裏

「着いたぞー」

「遅かったですね」

集合場所の体育館裏。

そこにいるのはフェンリルのメンバー

俺とレンとアリサとコウタとライガとレグルスだ。

「で？何の呼び出しだ？」

と、ライガがレンに聞く。

「明久が襲撃されたのはリュウトから聞きましたね」

「はい。聞きました」

「それで敵の狙いはおそらく学園の崩壊だと思われます」

「なんでここを壊そうとするんだ？」

「わかりません。ですが、明久を狙ったのはおそらく召喚大会に参加させる為でしょう」

「ボコボコにして病院送りですか……………」

「はい、そしてまずは常夏コンビです」

「あの？狙いは」

「はい。あの二人は教頭の手先でしょう。彼らは僕たちFクラスをまるで目の敵のように突っかかってきます。普通はこちらに突っか

かる必要性はありませんがこれは教頭の差し金と見ればわかります。おそらく明久達、召喚大会に出る組のコンディションを崩すのが狙いでしょう。そして彼らも大会に出てる。狙いは」

「優勝賞品の腕輪。そしてその腕輪は欠陥品で狙いはデモンストレーションでの暴走」

「リュウト、ビンゴです。おそらくそれが狙いでしょう。そうすれば学園長の失脚を狙えます。まさにそれを望む職は教頭。学園長になるのが目的の可能性の一つです。そして、もし教頭がこちら側だったら……………」

「それはない。それならこの学園をつぶさないはずだ。第一、召喚システムは学園長がリタぐらいしか詳しく知らない」

「そうですね……………それではこちら側ではないとわかりました」

「とりあえず俺とレグルスはAクラスから休憩を貰ってるから探索可能だ。そっちは？」

「リュウトの分までもらってます」

「いつの間……………」

「そついうのは聞かないほうがいいですよ？」

「……………そつだなアリサ」

「では、また後でここに集合しましょう」

そう言って俺たちはわかれて探索に行った。

さて、どうなるか……

明久side

「卑怯者……」

「二人とも酷いです……」

「あ、いや。あれも勝負だったからさ」

姫路さん達との試合は雄二の策略によって勝ったけど僕は代償にダンブカーにひかれたぐらいに痛みを喰らった。

交通事故って痛いね。

「二人ともそう言うな。お前らの代わりに俺達がしっかり優勝してきてやる」

騙した本人は悪びれた様子がない。こいつにもダンブカーの痛みを味あわせてやりたい。

とりあえず美波には葉月ちゃんの事の誤解を解いておいた。

そうして教室に戻ってきた。

「ほう。なかなか盛況じゃないか」

「そうだね。結構いい感じだね」

「良かった。宣伝の効果があつたみたいですね」

「そうでなきゃ、こんな恥ずかしい格好で大会に出た意味がないものね」

さっきの試合での立ち回りは無駄じゃなかったようだ。

「あ！バカなお兄ちゃん！お客さんがいっぱい来てくれたんだよ！」

葉月ちゃんがこっちにトトトツと駆け寄ってくる。

「そつだね。葉月ちゃん、お手伝いどうもありがとうね」

ナデナデ。

「んにゃ〜……」

頭を撫でたら猫みたいに気持ちよさそうに目を細めた葉月ちゃん。

『お、あの子たちだ!』

『近くで見ると一層可愛いな!』

『手伝いの小さな子も他の子たちも可愛いし、レベルが高いな!』

やっぱりチャイナドレスには男を惑わす効果があるね。それに高町さん達のような美人もいるし効果は高いな。

「明久。戻ってきたようじゃな。どちらが勝ったのじゃ?」

秀吉がトレイを片手に寄ってくる。ヤバい。やっぱり秀吉は危険なほどに色っぽい。

試合の結果は……

「雄二、かな?」

「そつね。坂本の一人勝ちね」

「ですね」

「？ 明久は同じチームなのに負けじゃったのか？」

さっきの試合をかいつまんだ回想で表そう。

~~~~~回想~~~~~

雄二「明久！今回の科目は数学じゃなくて実は古典だ！だから島田は弱い！」

明久「ごめん雄二！僕もそれぐらい弱いから！」

雄二「チツ！つかえねえ！オイ！島田！明久はグランドパークにおまえの妹を誘おうとしているんだ！」

美波「瑞希はアキの召喚獣！ウチはアキ本体をボコす！」

瑞希「わ、わかりました！」

雄二「明久！島田から逃げながら自分の召喚獣で姫路の召喚獣を取り押さえる！」

明久「なんか僕だけ負担が大きい気がするけど了解！」

ガシッ！

明久「よし！捕まえた！雄二次は！？」

雄二「姫路とともにくたばれ！！！」

ドカッ！！（明久はダンプカーに正面衝突並みのフィードバック）

瑞希「キャッ！」

明久「ダンプッ！！！！？」

明久、瑞希、戦闘不能

美波「瑞希！？」

雄二「ハッ！よそ見とは余裕だな島田！」

ドゴッ！

美波、戦闘不能

先生「姦計をめぐらせ、味方もろとも相手を葬った坂本雄二君の勝利デス！」

回想終了！

と、こんな感じだった。と思う。

「そんな事よりも、数少ないウエイトレスが固まっていたら客が落胆するぞ。今は喫茶店に専念してくれ」

雄二の言うこともそうかもね。女子は少ないんだから動かないと。

……ってあれ？

「なんか少くない？神崎とかいないし」

美波の言うとうりだ。リュウト、アミエーラさん、レン、コウタ、セラさん、ヘルサイズさんにリュウトの子たちもいない。

「確かにな……オイ、ルーク」

「ん？どうした雄二？」

「リュウト達がどこに行ったか知らないか？」

「ああ。セラとヘルサイズはリュウトの子たちと学園祭を回ってる。」

二人は子守って感じてな。リュウト達は用事があるって」

「そうなのか？ならいい」

そっか。子供たちも遊びたいからね。特にヴィヴィオちゃんは遊びたさそうだったし。

「それじゃあ、仕事にもどろっか」

「そうですね。喫茶店のお手伝いをしないといけませんよね」

「はいっ。葉月も頑張りますっ」

「ワ、ワシも頑張るのじゃっ」

「？ 秀吉やる気だね。いつもは女装が嫌だとかいうのに」

「こ、今回は別じゃ！」

「そっなんだ」

何が別なんだろう？

「（リュウトに女として見てもらうように頑張るのじゃ！）」

僕と雄二も喫茶店を手伝う為に用意されたエプロンを身に着けた。

リュウトSIDE

「……………ハア……………」

何も見当たらないな。動くそぶりもねえ。

今、召喚大会は準決勝が終わったぐらいだな。

……………もう一度回って探してみるか。

ん？あ、だめだ集合時間まで五分ぐらいしかねえ。

そう考えながら廊下を歩いていたら。

「……………十分考えられた事態のはずだよ？」

「ぐっ。それを言われると反論できん……………」

明久と雄二が居た。なんか文句を言いあってるな。

その時、ムツツリー二とルーク、アッシュにランバルディア霧島が走って明久達に向かっていた。

「……………雄二」

「ムツツリー二にルーク、アッシュにランバルディアに翔子までか。何かあったのか？」

まさか……………

「……………ウエイトレス達が連れて行かれた」

「他にも偶然店に居たAクラスの八神や木下に工藤。高町の後輩もだ！場所は\*\*\*\*\*カラオケボックスだ！」

それを聞いた瞬間、俺は走っていた。

レ n s i d e

「……………遅いですね」

リュウトが来ない。

彼は本来こういう時間は守る人なのに。

「何かあったんでしょうか？」

「可能性はありますよね？」

女子二人が心配してる。

prrrr! prrrr!

電話？僕の携帯からですか。

相手は………雄二？どうしたんでしょう。

「はい。雨宮レンです」

「レンか？手伝ってほしいことがある」

「どうしたんですか？材料が足りなくなりましたか？」

ウェイトレスが

「いや違う。  
さらわれた」

「!?!?!」

この瞬間にリュウトがどこに居るのが見当がついた。

「……………早くいきましょう。場所は？」

「\*\*\*\*\*カラオケボックスだ。わかるな？」

「はい。大丈夫です」



「そうか。早くついても突入するなよ」

「了解しました。では切ります」

P.i!

「どんな電話だった？」

と、コウタが聞く。

「ウエイトレスが誘拐されました」

「「「「「なっ!?!?」「「「「「」

驚くでしょうね、連中がそこまでするとは。

でも……

「……オイ、まさか……」

「はい。おそらくリュウトが行ったでしょう」

「そうか……あ」

「どうしました?ライガ」

「いや、もし相手が……俺たち知ってたらどうする?」

「「「「「は?」「「「「「」

ライガの答えに僕たちは意味が分からなかった。

「いや……。おそらく教頭が雇ったんだろうけど、もしかしたら……」

「……………あ！」「」「」

そうかもしれない。もし雇ったのが……………暴力団ならば。

僕たちがばれてしまうかもしれない。

暴力団には僕たちが知られていてリュウトは特に有名だからだ。

### 第三者 side

\*\*\*カラオケボックス。

そのパーティールームにいるのはなのは達十三人と暴力団が十五人程度だ。

暴力団は葉月を人質にしてなのは達をここまで連れてきたようだ。

「さてどうする？坂本と

吉井だったか？そいつら、

この人質を盾に呼び出すか？」

「待て。吉井つてのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしいからな」

「坂本つて、まさかあの坂本か？」

「ああ。できれば事を構えたくないんだが……」

「気持ちはわかるがそうもいかないだろ？依頼はその二人を動けなくすることなんだから」

「お、お姉ちゃん……」

「アンタたち！いい加減葉月を話しなさいよ！」

「お姉ちゃん、だってさ！かわいー！」

『ギヤはははははー！』

その瞬間……

ドガアアアアン！！

『なっ！っ？っ？』

驚きもする。ドアがあつた場所には足を前に突き出して蹴り合えたような状態の蒼い髪の男性。その前にはドアの留め具が外れていて落ちている。

「よお、三下ども」

そう言って男性は顔を上げた。

その顔はなのは達もよく知ってる……

『リュウトノ神崎（君）（さん）！？』

神崎リュウトだ。

「な、なんだテメエ！！」

「チツ。ドア壊しちゃったか。後で弁償するか」

「人の話聞けやゴラァ！！」

「どうするかな。何円するかな？」

「シカトしてんじゃ「黙れ」ッ！！？？！！？」

なのは達は少しだけだが暴力団は強力な殺気を向けられ冷や汗が出る。

葉月を人質としていたのは恐怖で腕に力が入らずに葉月を解放してしまう。

葉月はその隙に美波の所へ向かう。

その時、暴力団の一人が言う。

「あ、あああああ！こいつ……警察特殊部隊の……！」

「『蒼穹の真月』神崎リュウト……!」

蒼穹の真月。

この名は大罪を犯した暴力団や団体などが夜に蒼い髪で薄く透き通った水色の瞳の男がつぶしに行くということから名づけられた名だ。

「警……察……?」

なのは達の誰かがそうつぶやいた。

リュウトはこの時「なのは達にはれたか……」と思っていた。

「……全員、今すぐに学校に戻ってくれ」

「え……?」

「事情は後で話す。今は逃げろ」

「あ、はい!」

なのは達はすぐに学園へ戻るためにこの部屋を出た。

「さて……」

そこには少し顔を青ざめながらもリュウトを倒そうとする暴力団が居た。

「さてさてゴミ共?小便は済ませたか?神様にお祈りは済んだか?この部屋の隅でガタガタ震えて命乞いをする準備はOKか?それができてなくてもお前ら全員」

ホネマデノコサズクライツクス

明久side

レン達と合流してレンから信じられない言葉を聞いた。

「リュウトが向かってる」

ムツツリー二の情報だと十四人ぐらい居たらしいのに一人なんとかするなんてムチャクチャだ！

そう思いカラオケボックスに向かっていると。

「ん？あれ……姫路達じゃないか？」

ルークが指をさす方向を見ると、

「あ！吉井君！」

「アキ！？」

「坂本君まで！」

「どうしてここに？」

人質にされていたはずの人達が全員いた。

「姫路さん達！？大丈夫だった？」

「はい！それよりも早く！神崎君が！」

「！！わかった！」



ホントにレンの言うつおり一人で………！

僕たちは全員はカラオケボックスに向かい、姫路さん達が居た部屋に向かうと……

「……嘘」

「凄い………」

「リュウトがここまでやるなんてな………」

そこには倒れていて気を失っている十五人の男とそこに立っているリュウトだけだった。

そこでフェイトさんが言う。

「ねえ、リュウト。……警察って何？」

と、聞いていた。

警察？どういこと？リュウトは警察なの？

「ばれたんですかリュウト？」

「……………ああ。コイツらが喋りやがってな」

レンも関係者なのか？

そして、僕たちみんな見向いて言う。

「八神家ははやて以外は知ってるな？セラ達も呼ぶ。……………ついてきてくれ。話がある」

僕たちはリュウトに付いて行くことにした。

一体何をリュウト達は隠しているんだろう。

第12問 誘拐事件再び！しかし1日目はまだ続く……………（後書き）

次は少しシリアスな感じになりますね？多分、警察じゃなくね？って思つかもしれませんがそこは知識不足の俺の責任です。申し訳ございません。

**第13問 特殊警察の存在と学園の危機（前書き）**

少々、シリアスとボケとネタが混じっている回です。

ではどじろー！

### 第13問 特殊警察の存在と学園の危機

明久SIDE

僕たちは姫路さん達の誘拐事件の後、リュウト、レン、コウタ、アミエーラさんにAクラスのベルカイズさんや村雨君に「ある場所行くからついてきてくれ。そこで話す」と言われたのでついてきた。

確か、リュウト達が警察って話だったけ？

ちなみにセラさんとヘルサイズちゃんはヴィヴィオちゃん達と一緒に家に帰った。

今、僕たちは、

「警察署……？」

そう、目の前の警察署にいる。

この事かな。

「そうだ。入ってくれ」

そう言われた僕たちはリュウトを先頭にして入った。

中に入るとリュウトはエレベーターの方へ向かった。

エレベーターは二組に分かれて入った。

そしてリュウトはカードらしきものを出しエレベーターのボタンの所のカードをスキャンするところにスキャンした。

『認証しました』

その言葉と同時にエレベーターは動き出した。

どろぢら地下に向かっていているようだ。

そして、止まりドアが開くと、

「なっ……」

「凄い……」

地下にはとても広い空間があった。（原作ゴットイーターのエント

ランスと考え下さい)

「おかえりなさい、皆さん。……その人たちは？」

前の受付？の女の人が声をかけてきた。

「ヒバリ。ブリーフィングルームを貸してくれ」

「はい。了解しました」

そうヒバリと呼ばれた女の人とリュウトが喋っていると、

「リュウト！今日こそは！！」

突然、隣から緑色の服を着て赤色の短い髪で帽子を逆にかぶっている男の子がリュウトに奇襲してきた。

何事！？

「甘い！」

ドォン！！

「ゴハッ！？」

見事な一本背負いです。

「くそつ。奇襲も無理か……」

「声出しながら奇襲は愚策中の愚策だぞシユン」

「こりませんねシユンも……」

「いや、だつてさ。全然組手で勝てねーもん」

「頑張ってください」

なんか警察とは思えないんだけど……。イメージが。

ドガァン！

「アニスウウウウウウウウ！……」

「はっあああああ！……」

今度は上から何！？

そして一人の女の子が落ちてきた！？

そしてヒバリさんの上にあるところから足をかけて木刀を構えている黒髪で赤い服を着た人が居た。





「いや、お前のせいだろうがああああああああああ！！！！！！」

二人は命がけのリアル鬼ごっこを開始した。

本当に警察？

「クツクツクツ。二人ともこりませんね」

「ジェイド？どうしたんですか、あの二人は」

レンがロングの茶髪で眼鏡をした大人の人に訪ねた。

「何、アニスがまた訓練をさぼったせいでタツミが始末書を書かされたんですよ」

「またですか？もう何回目でしょうね」

「さあ？まだ続くと思いますよ」

「ですよね……………」

あのレンが諦めた。どれだけサボったんだろう？

「またアニスが追いかけてられましたね。それはそうとお帰りなさ

いませ、リュウト様」

今度は茶髪で左右にそれぞれ短く縛っている髪の毛をして眼鏡をかけている女性がリュウトに声をかけた。

「ただいまクアットロ。あれはもう日常だよな」

そんな鬼ごっこ、僕は嫌だ。

「否定はできませんね。それはそうとフェデリコ様を見かけませんでしたか？」

「見てないけど、多分訓練場じゃね？」

「そうかもしれませんわね。ありがとうございます」

っそう言っつてクアットロと呼ばれた女性はどこかへ向かった。

と言っつかりユウトの知り合いって美人が多いような……………

「ん？何でお前ら居るんだ？」

「あれ？吉井さん達は何故いるんですか？」

今度はユーリさん達！？

「ユーリ達も警察なのか？」

雄二、目上の人には敬語を使おうよ。

「なんだ？ばれたのか？」

「ああ……………」

「まあ、状況が状況だったからな……………」

「後でツバキさんに絞られるかもよ？」

「カロール君？シャレにならないからな？」

「うん……………ゴメン……………」

ツバキさんってどんな人なんだろう……………？

「リユー兄……………！！！！」

「ん？うおっと……………！！」

今度は濃いピンク色の髪をした女性に抱きつかれたリユート。

だから、羨ましいって！

「ウエンディ、いきなり抱きつかない。そして離れる」

「え、良いじゃないっすか？」

「はあ……………」

「お、いいウエンディ、どこに行った……………って！何してんだよ！」

「何ってリュウ兄に抱きついてるんすよ」

「そんなの見ればわかる！いいから離れろ！」

「ん？ノーヴェ、羨ましいっすか？」

「なっ……………！！／／／／」

なんだろう、ホントに警察なのかな？

「リュウト兄さん。今日、ご飯を作ってほしい」

「ズルいぞディエチ！私にも作ってくれリュウト！」

「何々？リュウトがご飯を作ってくれるの？」

「それは楽しみだな」

なんかたくさんの人が集まってきた。なにこれ、家族団らん？

リュウトはお父さん？

「あゝはいはい。ディエチにチンク。その他大勢も、ちゃんと作ってやるから。しかし、何にするか……………」

「私はオムライスがいいわ。ケチャップでハートを書いてほしいんだけど」

「ドゥーエの案は却下。次」

「はいはいー！鍋がいい！！」

「セインはまず季節を考えて言え。次」

「んじゃあクレープで」

「それはデザートだユーリ。しかも一般の食卓にはでないし。次」

「肉じゃがなんてどうかしら？」

「初めていい案が出たな。ナイスだジユデイス。とりあえず保留な。次」

「サラダも必要だと思いますリュウト兄様」

「よし、またまとだ。いいぞデイド。次」

「あたしはかき氷がいいな」

「二度あることは三度あってほしかったぞアギト。次」

なにこれ？これは警察のすること？すごいイメージが違うんだけど？

「ん？ルークにアッシュ、ティアやナタリアまで。なぜここに？」

「なっ！？」

「ヴァン先生！！」

え！？この人がヴァン・グランツ！？

「兄さん！？どうしてここに！？」

「え！？グランツさん。ヴァンさんの妹なの！？」

「え、ええそうよ」

ホントだったんだ……。剣道の有名なヴァンさんの妹って……。

「ルーク？それにアッシュやティアにナタリアまで？」

「ガイ！？お前も警察なのか！？」

「ああ、そつだよ」

「……知らなかった」

「ルーク、この人は」

「ああ、コイツはガイ・セシル。俺の友達だ」

「ガイ・セシルだ。よろしく　　っ！？」

え！？突然、セシルさんが後ろにとんだ。どうしたの！？

「ああ、そういえばガイは女嫌いだったっけ？」

「とういよりは女性恐怖症みたいじゃのう……」

何があっただらう……

「待てやアニス！」

「斬られそうなのに待つ人なんていないよ!!」

「おゝ、あにすがおにこっこしてるぞ！シオもまざるゝ」

「……騒がしいな」

「ソーマにシオか」

「リュウト、戻っていたか。……後ろの奴らは？」

「まあ色々とな？」

「……お前の色々は大きすぎるだらうが」

「否定はできん……」

そんなこんなでいろいろ騒いでいたら。

「リュウトさん。ブリーフィングルームの使用の許可が出ました」

「ああ、わかった。ついてきてくれ。じゃあな、みんな。ちょっと用事があるから」



そう言ってあの人達と別れてリュウトに付いて行った。

ブリーフィングルーム

「今来ましたっ」と

ブリーフィングルームらしきところに来て、リュウトがドアを開けて言う。

中には紫色の長い髪をした人が居た。

「やあ、よく来たね。ところで後ろの子たちが？」

「ああ、そうだ」

「そうか、初めまして。私はジェイル・スカリエツィだ。よろしく。とりあえず好きなところに座ってくれ」

そう言ってくれたので僕たちは適当に座った。

「それじゃあ、警察について話そうか」

「俺が言うからいい。じゃあみんな聞いてくれ」

皆がリュウトに注目する。

「俺達は警察の特殊部隊「フェンリル」だ」

「フェン……リル……」

「その前になんだ？警察の特殊部隊って」

「雄二、いい質問だな。俺達は警察では普通は行えない支援活動を行っている。ようは便利屋みたいなものだ。制服なんてものもないが、その分、普通の警察より探索範囲が広いんだ」

なるほど……警察の服を着てうろろしていたら犯人とかも警戒するもんね。

「仕事の内容は様々だ。が、たまに犯罪者逮捕に動くこともある。そのためもちろん訓練とかもある。とりあえずかいつまんで言えば

こんなもんだな」

そうか……………

「それで……………みんなに聞きたいんだけどさ……………」

なんだろう……………リュウトにしてはよそよそしい。

「こんな俺達でもお前たちは俺達を友達って言うてくれるか？」

……………え？

「俺達は警察だからさ。みんなからいろんな目で見られそうだし、なんとというか……………恐いんだよな。関係が崩れそう。だから「ふざけるな！！」「っ!？」」

もう我慢できない！

「警察がどうしたのさ！そんなの関係ないよ！リュウト達はリュウト達じゃないか！そんなんで僕たちは友達じゃないなんて言えるわけがない！リュウト達とはいつまでたっても友達だ！」

ただ警察だからなんかで友達にならないわけがない！！

他の皆も頷いている。高町さん達も八神家もナカジマさん達もルーク達も皆頷いている。

「リュウト。僕の言ったとおりでしょう？皆はこんな人だって」

「……………そうだな。俺がバカだったな。悪かった。みんなを信用して

なくって。ありがとう、みんな」

僕たちは今日、一段と絆が深まった気がした。

リュウトSIDE

皆のおかげですっきりしたな。

今、ブリーフィングルームに居るのは俺とレン、そして雄二と明久だ。他の皆にはそれぞれの護衛を一応つけている。

「それで？話ってなんだ？リュウト」

「ああ。今、ゲストを呼んである」

「ゲスト？」

そう。今回の騒動を一枚かんでいる……

「今来たよ」

学園長だ。

「えっ！？学園長！？」

「……なるほど、そういうことか」

おっ、雄二は理解できたようだな。さすが元神童。

「とりあえず、今までの状況を説明する」

学園長に今日あったことを話した。

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったか……すまなかつたね」

と、学園長が俺達に向かって頭を下げる。

「アンタらの点数だったら集中力を乱す程度で勝手につぶれるだろうと最初は考えていたのだろうけど……決勝まで進まれて焦っていたんだろっね」

「さて、こちらの種明かしはこれで終わりだ。今度はそっちの番だ」

「はあ……。アタシの無能をさらすような話だから、できれば伏せておきたかったんだけどね……」

「そうもいかないと思う。こちらは被害者だしアンタの都合で決めれることじゃないだろ」

「それもそうか……。アタシの向く敵は如月ハイランドのペアチケットなんかじゃないのさ」

「ペアチケットじゃない！？どういうことですか！？」

「アタシにとっちゃあ企業の企みなんかどうでもいいんだよ。アタシの目的はもう一つの賞品の方なのさ」

「もう一つというと『白銀の腕輪』とやらか」

「ああ。あの特殊能力がつくとかなんとかってやつ？」

そう、一つは点数を二分し二体の召喚獣を同時に呼び出せる腕輪。もう一つは先生の代わりに立会人になって召喚用のフィールドを作ることができる腕輪だ。

「そうさ。その腕輪をアンタらに勝ち取って貰いたかったのさ」

「僕らが勝ち取る？回収して欲しいわけじゃなくて？」

「明久、回収が目的ならわざわざお前たちに依頼しないだろう？そ

「そもそも、改修なんて極力避けたいだろうしな」

「なるほど………って！どうしてそのことをリュウトが知ってるの！？」

「いや、俺達も学園長に依頼されたからな。そんなぐらいい話は聞いている」

「そ、そうなんだ」

「とりあえず、できれば回収なんて真似はしたくない。新技術は使つてナンボのものだからね。デモンストラーションもなしに回収なんてしたら、新技術の存在自体を疑われることになる」

最悪の場合は回収をするしかないな。

「それで、何でその『白銀の腕輪』を手に入れるのが僕らじゃないとダメなんですか？」

「腕輪に欠陥があつたんですよ」

「その欠陥は俺達であれば問題ないのか？」

「はい。雄二たちが使うなら暴走が起こらずに済みます。不具合は入出力が一定水準を超えた時だけです。だから、学園長は他の生徒に頼めなかつたんですよ」

「なるほどな。得点の高い優勝候補を使えないわけだ」

流石雄二だな。すぐに理解してくれて苦笑いしている。

「えーっと、つまり……?」

「アンタらみたいなのは『優勝の可能性を持つ低得点者』ってのが一番都合が良かったってわけさ」

「よくわからないけど、とりあえず褒められているってことでいいのかな?」

「いや、お前らはバカだと言われているんだ」

「なんだとババア!」

「説明されないとわからない時点で否定はできないと思いますよ、明久」

その通りです。

「二つある腕輪の打ち片方の召喚フィールド作成用はある程度まで耐えられるんだけどねえ……。もう片方の同時召喚用は、現状のままだと平均点程度で暴走する可能性がある。だからそっちは吉井専用にと」

「雄二、リュウトにレン、これは褒められていると取っていいんだよね?」

「いや、物凄い勢いでバカにされています」

「なんだとババア!」



「いい加減自分で気づけ！」

なんでこいつはこんなにバカなんだ！脳細胞はどうなってやがる！！

「そうか。そうなると、俺達の邪魔をしてくるのは学園長の失脚を狙っている立場の人間  
他校の経営者とその内通者といったところだな」

「正解です雄二。さすがですね」

「ねえ、そうやって僕を会話から置き去りにするのはやめて欲しいな？」

「されたくはなかったらもう少し理解力を上げる。お前たちの邪魔をするってことは、腕輪も暴走を止められたら困るってことだ。そんな学園の醜聞をよしとするヤツはこっち、文月学園に生徒を取られた他校の経営者ぐらいしかいない」

「ご名答。身内の恥を晒すみたいだけど、隠しておくわけにもいかないからね。恐らく一連の手引きは教頭の竹原によるものだね。隣の私立校に出入りしていたなんて話も聞くし、まず間違いはないさね」

「後、先ほどの誘拐犯から竹原からの差し金という証言を得ました。完璧な証拠までもう少しですね」

「それじゃ、僕らの邪魔をした常夏コンビとかは」

「そつちも教頭の差し金だな。常夏の協力する理由はおそらく受験関係が高そつだ。推薦状とかな」

「あのさ、コレって

かなりマズい話じゃない？」

「そうじゃなかったら俺達は動かないぞ？とりあえず文月学園の存続がかかっている。そして、召喚システムのことを問われる可能性もある」

「あ、でも。いざとなったら優勝者に事情を話して回収したら

」

「残念ですがそれもいきませんよ明久。決勝戦の対戦相手を知っていますか？」

レンはそう言ってトーナメント表を見せる。

「常夏コンビ……！」

「そうだ。アイツらはおそらく教頭側だ。優勝すれば観客の前で腕輪の暴走を見せるだろうな」

「悪いが、アンタたちには何としてでも優勝してもらうしかないんだよ」

「まさかこんなことになっているとはな」

「まあ、普通は予想できないことだな。教頭の行動には俺達がどうにかする」

また何かしかけてくるかもしれないからな。

「学園長、質問です」

「なんだい？」

「腕輪の暴走って、総合科目で平均点にいかねければ起こらないんですか？」

「そうさ。一つや二つの科目が高得点でも、その程度なら暴走は起きないよ」

「そうですか。それは良かった」

……どうやら明久には何か狙いがあるみたいだな。いい目をしてる。

「質問はもうないか？ ないなら今日は解散したほうがいい」

明日

「それもそうか。家に帰ってやることもあるしも早いしな」

「それじゃ、アタシは学園に戻るとするかね」

「よし、明久、雄二。明日は頼んだ」

「任せてよ」

今日、長かった学園祭初日はようやく幕を閉じた。

リュウト宅

「ただいま」

「おかえりパパ」

「おう、ただいまヴィヴィオ」

「リュウト、お帰りなさい。どうでしたか？」

「セラか。後は明久達に頼むしかないな。俺は教頭の監視だ」

「そうですか……」

「大丈夫だろ。アイツらはやる時はやる奴だ。任せておけ」

「……それもそうですね。私たちが信用しなければ」

頑張れよ、二人とも。

・夢の中の家

「とりあえず、なぜ馬乗り？」

夢の中の家に入ったらなぜかカエデがベットに居る俺に対して馬乗

りになっていた。

「いいじゃん別に」

そう言っただけ俺の胸に頬擦りするカエデ。くすぐったいんだが。

「とりあえず。後は明久達に任せるしかないね」

「ああ。でも大丈夫だろ。アイツらなら」

「そうかもね。……はあ。君が羨ましいよ」

「？ 急にどうした？」

「いや、さ。僕は君の夢の中に突然できた人格でしょ？君から皆を見てるとき……楽しそうで……羨ましくって……」

突然、カエデが泣き始めた。気持ちはわかる。この世界に居るのは俺とカエデだけ。カエデは話せる人が俺しかいない。こいつにとっでは俺以外に話をできる人はいない。コイツは眠ることができない。常に起きて俺の目から世界を見ている。だからこそ寂しいんだろ。

「僕も……僕もさ……皆と……バカやったり……遊んだり……話したりしたい……料理を食べたり……色々……したい……したいよお……」

俺は無意識のうちにカエデを抱きしめた。

「……ごめんなカエデ。俺がいるせいでお前がつらい思いをしてる……」

「うっん……リュウトは…悪くないよ……僕が勝手に思っただけ  
ねえ、しばらくを……このままいさせて………?」

「好きだけいればいい。いつまでも相手をしてやるからさ……」

俺はしばらくカエテを抱きしめ続けた。

「……ごめんね。ずっとこんなことしてもらって」

「別にいいさ。我慢なんてしなくても良い」

「そ、それじゃあれ………」

~~~~~

「あっ、時間か………」

「………」

「どっした?」

「……うん。何でもないよ。……今は、まだいいよね？」

「何か言ったか？」

「う、うん！なんでもない！」

「そうか？……じゃあな。また今度」

「うん、じゃあね」

俺は夢の世界を後にした。

やっぱり優しいよね、リュウトは。

そんな性格だから皆が惚れちゃうんだよ。僕もだけどね？

思えばリュウトと出会ってから数年たつね。

……頑張っ
てね、リュウト。僕はいつでも君の中から君を見守って
いるよー！

……できれば、このまま鈍感でいて欲しいな。

後、リュウトは2つ皆に言っていないことがあるよね。

神機の存在と君達のもう一つの仕事のこと。

きれいなまなざしと心
表と裏の世界を行き来すること。

第13問 特殊警察の存在と学園の危機（後書き）

いろんなキャラクターが集合！

タツミさんキャラ完全崩壊（苦笑）

一応これからナンバーズやジェイド達も絡ませる気です。

少々お待ちください。

最後の事についてはその話を書く予定はありますが、まだ先の話です。

どこに居れるかは未定ですが。

それではまた次回！

サラバツ！！

第14問 清涼祭2日目 事件の最後（前書き）

本来なら歌の所を付ける予定でしたが消されるのが怖いのでやめました。

後、歌うところを「」にする予定でしたが……リア友からいろいろ言われたのでやめました。

それでは本編をどうぞ！

第14問 清涼祭2日目 事件の最後

リュウトSIDE

「よお、瑞希、島田、なのは、フェイト」

「おはようございます、神崎君、セラさん、ユーさん」

「おはよう、神崎、セラ、ユー」

「おはようなの、リュウト君、セラちゃん、ユーちゃん！」

「おはよう、リュウト、セラ、ユー」

学園祭二日目の朝。瑞希、島田、なのは、フェイトの四人がそろって登校していた。

俺はセラとユーと登校している。同じ家に住んでるし。

ちなみにいつの間にか「ユー」ってあだ名は広まっていた。

「とりあえず、よく眠れたりしたか？朝飯は？」

「リュウト君、心配しすぎなの！」

「ふふっ、そうですね。それに、不思議なくらい落ち着いてますから」

「何かあってもまたリュウトが助けてくれそうだしね」

「その「また」はないことを祈るぞ、俺は」

「そうかもね」

心配しすぎたか、みんなに笑われた。普通は心配すると思っけどな。

「そう言えばアキと坂本は？」

ああ、アイツら？

「今は屋上で寝てるぞ。何でも朝一番にテストを受けていたらしい。十一時までには起きなかつたら起こしてくれだよ」

「そうなんですか？」

「かなりやる気が入ってましたよ」

サラサラ

『見違えるほど』

ユ一はやっぱり必要以上には喋らずに紙に書くらしい。

「そつだ。ところで今朝以上は」

「

「ありませんでしたよ」

「不審な連中はおらんかったぞ」

「そうか、サンキュー」

秀吉、ムツツリーニ、ルーク、グランツ、Fクラスのフェンリルが一緒に登校してきたようだ。

これだけの数で大丈夫だったなら問題ないな。

「皆早いですね？」

「何かあったのか？」

「いや、なにも。ところでシグナム達は昨日の夜とか大丈夫だったか？」

「大丈夫だぜ！」

「ヴィータの言う通り、心配いらない。とても落ち着いている」

「そうか。それならよかった」

八神家も今、登校してきたようだ。

「よし！それじゃあ、今日も頑張るか！」

「そうですね。それでは準備しましょう」

全員揃ったところで二日目の準備を始めた。

「さてと。行こうか雄二」

「そうだな。リュウト、俺達は抜けるが大丈夫か？」

「なに言ってるんだか。行かなきゃなんねーだろうが。勝利以外は認めんぞ？」

「それもそうか」

後はコイツら次第だ。勝つか負けるか。それで結末が決まる。

「後で私たちも応援に行きますね」

応援には俺、瑞希、ムッツリーニ、島田、セラ、なのは、シグナム、ヴィータ、ユー、ヴィヴィオが行くことになった。

後の養子の三人は働くらしい。ハルナは唸ってたけど。

ところでなぜ女子はジャンケンをあんなに必死にしてたんだ？負けてるやつとかすごい落ち込んでるし。

ちなみにユーリ達は今日は来れないみたいだ。

「ここまで来たんだ。負けんなよ？悪友」

「ハッ！誰に言ってんだよ、ルーク」

「……………優勝」

「わかってる。試召戦争の時みたいなハマはしないよ。それじゃ、行ってくる」

二人はそう言って教室を出た。

そして、試合開始前。

スバルたちが参加した時のリュウトラバーズの考え。

（昨日の影響でまたライバルがつ……！！）

助けに来た事でスバルとティアナにフラグを立てたリュウトでした。

結果。

右・スバル。左・ヴィータ。

「し、失礼します…… / / / /」

「よっしゃあー！」

「ううー……」

「……また負けました」

「……」

「悔しいです……」

「スバルに負けるなんて……………」

どうしたんだよ、お前ら……………。

「えっと、神崎さん。昨日はありがとうございました！」

「いやいや、気にすんな。こっちもちょっとキレてたしな」

「いえ！やっぱり神崎さんは『救世主^{メシア}』ですね！」

「それやめてくれない？ 恥ずかしいから」

正直、嬉しくない。

「えっと……………それですね……………名前でもいいでしょうか？
／／／」

「別にいいって。そんなかしこまらなくてもいいし。なら、俺もスバルって呼んでもいいか？」

「はい！！ありがとうございます、リュウトさん！／／／／／／
名前でも呼んでもらった……………」

「スバル……………」

何でランスターはスバルに殺気のコもったを向けてるんだ？無茶苦茶怖いぞ？

「どうしたんだ？ランスター」

「へっ！？い、いえ！なんでもありません！えっと……私も名前で呼んでいいでしょうか？／／／／」

「別にいいつてば。そんな確認取らなくても」

「そ、そうですか。ありがとうございます、リュウトさん。私の事も名前で呼んでください／／／／」

「わかった。よろしく、ティアナ」

「……／／／／／」

物凄く顔を真っ赤にしちまつてるけど大丈夫か？爆発しそうだぞ？

「（また、神崎君はフラグを立てて……………」

「（何でこんなに増えるの！？リュウト君、少しは抑えて欲しいの！）」

「（このままではライバルが増える一方ですね。私が言えることではありませんが、なぜあんなにモテるんでしょうか？）」

「（クツ……………！またライバルが増えたか！仕方ない。こうなったら、はやてから……………／／／やっぱ無理だ！あんなことできるか！／／／／／／）」

「（コイツラもリュウトか！？クツソ……………このままじゃあ……………」

「（また増えた……………ハア……………」

少女たちの悩みは増えるばかりだ。

どうやら、席が足りないようだ。ユーとヴィヴィオが座れてない。

……どうするか。

『心配ない』

「そうなのか？」

ユーに紙を見せられてからユーはこっちに歩いてきてちょこんと俺の膝の上に座った。

……とりあえず、なぜ？

『「こに座ればいい』

「いや。顔赤いし。体調悪そうだし無理しなくてもいいぞ？」

『問題ない』

「……そうか」

しびしび許可した。なんとというか……ユーが俺に背中を預けてくるから長い髪の毛が当たってくすぐったいんだが……。

「……………（あたしもそこがよかった……。こうなったら！）ていつ
！」

今度はヴィータが左腕に抱きついてきやがった！

「何してんだよ……………」

「いいじゃん別に」

「……………もう何も言わねえ……………」

諦めよう。何言っても離さない気がする。

ムニユッ。

はい？

ナゼミギウデニコンナヤワラカイカンシヨクガアルンデシヨウカ？

「えへへ……………／＼／＼／」

スバル様。顔を真っ赤にするぐらいなら抱きつかないでください。

「あー……………スバル？」

「いいじゃないですか」

「……………さいですか」

俺って女子には甘いよな……………（泣）

『（後でO・H A・N A・S I）』

皆様からの殺気が怖いです。後でなぜかO・H A・N A・S Iを受けそうな気が……………（汗）

アレは嫌だ！O・H A・N A・S iくらってトラウマにならない奴がいたら俺はそいつをほめたたえるぞ！？いればな！！

「ねえ、パパ。ヴィヴィオは？」

「ん？ん……………。なのは、ヴィヴィオを膝に座らせてあげてくれないか？」

「へっ？私？」

「ああ。頼む」

「うん、いいよ。おいで、ヴィヴィオ」

「わーい」

ヴィヴィオはなのはの膝の上に座った。

『さて皆様。長らくお待ちいたしました！これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

ん？そろそろか。

『出場選手の入場です！』

そのアナウンスの声と共に最初に出てきたのは明久と雄二。

『二年Fクラス所属・坂本雄二君と、同じくFクラス所属・吉井明久君です！皆様拍手でお迎えください！』

凄い拍手が起こる。見ただけでも満員だ。

『なんと、最高成績のAクラスコンビを抑えて決勝戦に進んだのは、二年生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！これはFクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしれません！』

あの司会、なかなか嬉しいことを言ってくれるな。

『そして対する選手は、三年Aクラス所属・夏川俊平君と同じくAクラス所属・常村勇作君です！！皆様。こちらも拍手でお迎えください！』

「なっ!?!」

「あの時のクレーマー！」

「Aクラスでもいましたよね？」

「やっぱりこんな反応するわな。」

「？ どういうことですか、なのはさん？」

「あの人は私達の店のクレームを流した人達だよ！」

「あたし達は何もしてねーのに！」

「……嫌がらせ」

「嘘っ！？ そんなことをするんですか！？」

まあ、二人の反応が普通だな。何も因縁が無いのに嫌がらせなんてな。

『出場選手が少ない三年生ですが、それでもきっちり決勝戦に食い込んできました。さてさて、最年長の意地を見せることができるでしょうか！』

同じ拍手を受け常夏コンビが明久達の前に立つ。

『それではルールを簡単に説明します。試験召喚獣とは
』

「大丈夫かな、アキ達」

「まだわからん。吉井達は朝来てテストを受けていたからな」

「まだわかんねえぜ。目の下に隈ができるほどだったからな。」

その通り。明久達は目の下に隈を作るほどに勉強に取り組んでいただろう。

だから結果はまだわからない。

「ねえパパ、なのはママ。どっちがつよいの?」

「はい?」

「ふえっ?」

今、なんと仰いました? ヴィヴィオ様?

「わ、私がママ!? / / / /」

「うっ……だめ?」

「い、いや、むしろ嬉しいけど……で、でもまだ付き合ってもいないのに…… / / / / / / / /」

なんかなのはが壊れている。顔なんか爆発しそうなほどに真っ赤だし。

「ズルいですよ、なのはちゃん! ヴィヴィオちゃん! 私の事もママ
って
「!」

「何をどさくさに紛れて言っているんですか。ママならリュウトと同じ家に住んでいる私が」

『それなら私でもいいはず』

「い、いや！ここは胸の大きい私が」

「シグナム！テメーこういうときだけそんなの無しだぞ！あたしが

「！」

「え、え〜っと、ママかぁ……………」（スバル、妄想世界へトリップ中）

「え？いやでも……………ママ……………」（同じくティアナも妄想世界へ突入）

「……………皆、母親に憧れているのか？」

皆、美人だから簡単に彼氏なんてできるだろ。

「……………なんか、瑞希たちが不憫になってきたわ……………」

「……………羨ましい！」

「ヒーローのお兄ちゃんモテモテですっ！」

なんか三人に言われた気がしたがよく聞こえなかった。まあ、ヴィオオも母親って言う甘えることができる人物が欲しい頃だろうな。

「悪いけど、なのは。こいつに母親って呼ばれてくれないか？こいつも母親って言うのが欲しいんだろうな」

「ふえっ！？う、うん！私でいいなら………／／／／／」

「そっか、ありがとな」

「えへへへ。なのはママ〜！」

「何かなくヴィヴィオ？」

「えへへ〜 ママだ〜」

ヴィヴィオはなのはの膝の上で甘えている。そんなに嬉しかったか。

「（こ、これでリュウト君と夫婦気分を味わえる！幸せなの〜！／／／／／）」

なのはは心の中ではとっても満足していた。

「ヴィヴィオちゃん！私の事もママって呼んでいいですよ？」

「ふえっ？……瑞希ママ？」

「はい！なんですか？」

「わーい！ママが増えたー！」

「なっ！？ズルいですよ、瑞希！ヴィヴィオ、私の事もママでお願いします」

「セラも何をどさくさに紛れて言っている！ヴィヴィオ！私の事も母親と言ってくれ！」

「シグナムも同じじゃねーか！あたしも！」

『ヴィヴィオ、私も』

「……ハッ！そうだ！ヴィヴィオちゃん！私も！」

「スバル！何アンタも言ってるのよ！あたしも！」

「セラママ？シグナムママ？ヴィータママ？ユーマママ？スバルママ？ティアナママ？すごい！ママが沢山！」

「よ、よかったな、ヴィヴィオ」

「うん！」

そんなに母親になりたかったのか？

『（なぜか、すごい誤解を受けてる気が……）』

間違っではない。

『それでは試合に入りましょう！選手の皆さん、どうぞー！』

説明が終わり、試合に入るようだ。

「……試獣召喚」

掛け声をあげて四人が召喚獣を呼び出す。

Aクラス

常村勇作

日本史 209点

VS

Aクラス 夏川俊平

日本史 197点

「さすがにAクラス所属ではあるな」

「でも、私たち比べると低いですね」

「さりげなく酷いことを言っちなよセラ……………」

さて、明久達の点数は

Fクラス 坂本雄二

日本史 215点

VS

Fクラス 吉井明久

日本史 166点

「おおっ！」

「凄いです、吉井君！」

「アキがここまで取れるなんて……………」

「……………予想外」

ああ、予想外だ。あいつ、この教科に絞っていたな？でも、これならあいつらが何とかしてくれるかもしれない。

召喚獣のそれぞれが獲物を構えた。

モヒカンは雄二。坊主は明久となった。

流石は明久。観察処分者のおかげで召喚獣がうまく操れる分一直線的な攻撃をする坊主をよく避けてる。坊主の攻撃は掠りもしない。

雄二は素早い動きでモヒカンと互角だ。

突然、坊主の召喚獣が大きく飛び退って坊主本人からも距離を取っ

た。そして、剣を腰だめに構えた。まるで力を溜めるように。

「何をする気だ？シグナム、わかるか？」

「いや、ヴィータ。召喚獣で居合ができるとは思えんし」

「何か、策があるとか？」

策……？

そして、明久の召喚獣が坊主に向かって突撃する。

「なっ！？」

「どうしたんですか？リュウト」

セラが聞いてくる。

「あの召喚獣は囷だ！本命は明久本人だ！」

「えっ！？」

「あの坊主！砂利か何かをもってやがる！」

もう遅い。坊主が右手を明久に向かって振った。明久は目を閉じている。やはりか！

あの召喚獣を目立たせて客の目をさらに召喚獣に集中させて本人に

妨害をする。明久は今、目が見えないからどこに避ければいいかわからないはずだ。

そこまでするのか！？下手すれば砂利でも失明するかもしれないんだぞ！？

「卑怯な……………！」

「最低だろ！」

「……………鬼畜！」

それぞれが感想を口に漏らす。

そして、明久は嘔んでか横に飛ばすが坊主の攻撃が当たってしまった。

さらに顎に拳を叩きこまれる。

マズイ！観察処分者が今度は仇になったか！明久のヤツ、意識が少し飛んでやがる！

が

「明久っ！てめえ根性見せろやっ！」

雄二の観客席にも届く喝で踏みとどまった。ナイス、雄二！

そして、痛みをこらえるような顔をしながら明久は美味しく召喚獣を動かし坊主の脇をすり抜け背中に蹴りを放つ。威力はあまりないみ

ただが坊主は体勢を崩した。

雄二は明久の様子を確認して召喚獣をモヒカンに突っ込ませる。

迎え撃つようにモヒカンは剣を振り下ろす。

が、その剣は明久の投げた木刀によって軌道を変えられた。おかげで今のモヒカンは隙だらけだ。

そして、雄二の大威力の拳が叩き込まれ、モヒカンは戦闘不能になる。

その瞬間に会場は歓声が響いた。

「雄二は凄いな……！」

「坂本君、すごいです！」

「後は……」

坊主は明久に迫る。今の明久は素手だ。三年相手には厳しい。

だが、一瞬でも注意がそれれば最初は避けれる。

坊主の召喚獣の動きが鈍る。原因は雄二の飛ばしたモヒカンの召喚獣が坊主本体の視界を遮っているからだ。

その隙に明久が召喚獣を前に出す。狂った間合いのおかげで坊主の剣を振り下ろすタイミングがずれた。それをかわし、頭突きを喰らわせる。

雄二が明久の武器である木刀を蹴り飛ばし明久に渡す。

その木刀を拾い上げる。

そして、二人がお互いを斬った。

明久は左腕。

坊主は喉。

『坂本・吉井ペアの勝利です!』

『やったああああっ!』

こちらの女子たちが歓声を上げる。

俺は誰にも聞こえないように、

「よくやったな、二人とも。ありがとう」

と、つぶやいた。

明久SIDE

「お兄ちゃん！すっっごい格好よかったよ！」

「ぐふっ！は、葉月ちゃん……。今日も来てくれたんだ。」

授賞式と簡単なデモンストラーションを終えて教室に戻ると凄い勢いで葉月ちゃんに飛びつかれた。

迎えに気来てくれたのは嬉しいけど身長差で鳩尾にクリーンヒットしている。痛いけどそこはお兄さんのプライドでグッと我慢だ。

今、プライドなんてあったのか？って思った人は後程こちらへ……

「お疲れ、二人とも」

「お疲れ様。凄かったわね」

「あはは。そうでもないよ」

「お兄ちゃん、凄いですっ！」

「葉月ちゃん。明久が困ってますよ？」

ルークと美波がほめてくれて、レンがボクの鳩尾にぐりぐりと頭を押し付けている葉月ちゃんを見て苦笑いしながら言ってきた。

流石にのままだと致命傷になりかねないので、やんわりと彼女の体を遠ざけた。不満げな表情をしていたが従ってくれた。

「よくやったな、明久！」

「ああ。頑張ったな」

コウタとリュウトからも褒めてもらった。なんか、嬉しいな。

「パパ、なのはママ。すごかったね！」

「ああ、そっだな」

「うん、そっだね」

『……………』

えっ？

『ま、ママアアアアア！！？！？！？！』

どういうこと！？？何でヴィヴィオちゃんが高町さんの事をママって呼んでるの！？

「ちょっと、なのは！どういうこと！？」

「え？えっと、ヴィヴィオにママって呼んでもいい？って聞かれたから……／＼／＼／＼／」

「あだし達も呼ばれたぞ！」

「ヴィヴィオちゃん！誰がママですか？」

シャルルさんがヴィヴィオちゃんに聞く。

「えっと、なのはママに、瑞希ママ、セラママ、シグナムママ、

ヴィータママ、ユーママ、スバルママ、ティアナママだよ！」

そんなに！？しかも、最後の二人って高町さん達の後輩じゃん！それに姫路さんまで！？

「ねえ、なのは。スバルとティアナって……」

「うん、そっだよ……。昨日ので……」

「また、増えたんだ……」

若干葬式ムードの皆様。なんでリュウトはモテるんだろう？永遠の謎だ。

「って！ヴィヴィオ、私の事もママって呼んでくれない？」

「ズルいですよ、フェイトちゃん！私もお願いします！」

「両方です！私もお願いします！」

「フェイトママにシャマルママにアリサママ？わ〜い！また増えた」
「

「わ、わしも頼むのじゃ！」

「う〜？秀吉パパ？」

「ママで頼むのじゃ！」

えっ！？秀吉、とうとう女として認めてくれたんだね！！

「秀吉ママ?」

「うむ。なんじゃ? ヴィヴィオ」

「わい。抱っ」

「そうかそうか。ほいっ!」

「ママ」

秀吉はやっぱり女だったんだ! でも、何でリュウト!?

『(しまった! 言わないようにしておけばよかった!)(』

『(これで平等!)(』

恋する乙女は本当に大変である。

「ところで、店を手伝ってくれないか？あなた達の優勝のおかげでたくさん来ています」

レンの言葉で僕たちは店の中を見渡す。すごい繁盛している。

「それもそうですね」

「ほらアキ！もう大会もないんだから、きっちり手伝ってもらおうからね！」

「うん。今まであまり手伝えなかった分頑張るよ！」

「やれやれ。かつたるいな」

「雄二。気持ちはわかるけどよ、手が足りねーんだよ」

「ったく、仕方ねえな」

「ちゃんと働かねーと」

「なんだ？何をするんだ？」

「霧島を呼んでFFF団を動かす」

「よし！やろう！全身が砕けるまで！！」

ルークの頼み方はやや脅迫じみた行為だと思つ。

「悪いな。俺、ちょっと用事があるから抜けるな」

「ああ、歌だっけ？行ってこい」

リュウトは歌を歌うんだっけ？

「坂本君！神崎君はどこで歌うんですか！？」

「お、おう。落ち着け姫路。確か……もうすぐ体育館だったな」

『行きましようー！』

「待て。女子が全員行ったらダメだろうが。そうだな………六人はいいぞ」

『ジャンケンポンー！』

この時の姫路さん達の判断力は凄いと思つ。

結果

フェイト、シャマル、アリサ、なのは、シグナム、秀吉

「やった！」

「今度は私です！」

「良かったです……」

「また勝ったの！」

「今日は運がいいな」

「今度は勝ったのじゃ！」

「なんでこんな時に……ハッ！リュウトの隣に座ったからか！」

「負けましたけど、全敗というわけではないのでまだ……」

皆は必至です。

「ねえねえ、ヴィヴィオもいきたい！」

「あ、僕もいいですか？」

「私もお願いします」

「あたしも！」

と、リュウトの養子四人衆が言った。

「どうするのじゃ？雄二」

「んー、まあいいだろ。行ってきていいぞ」

「わーい」

「そうだな……一応だ、レン、頼む」

「わかりました」

一応？もう終わったよね？

それで勝った人たちはリュウトを見に行った。

負けた人はまだ凹んでたけど……

三人称SIDE

体育館

既に色々な出し物が出されているのですでにたくさんの方が集まっていた。

「す、すごい人の数ですね」

「ところでリュウトは何時なのじゃ？」

「もうすぐだな」

「あー！出てきたの！」

ステージにはリュウトとリュウトに頼んだという四人のモブが居た。

『ブルッ……』

「?どうした?」

『俺達が今、モブって言われた気が……』

「はい?」

ステージにいる四人にその言葉は伝わっていた。

「まあ、いいか。それじゃあ……」

『みなさん、本日は来てくれてありがとうございます』

と、リュウトがマイクを使って挨拶をする。

『本日俺達は急で他の人達とは違い一曲しか歌えません。でも、一生懸命詠うのでよろしくお願いします！』

頭を下げるリュウト達。それに拍手が起る。

『ありがとうございます。それじゃあ……お願いします。』D - t
e c c n o l i f e 『……………」

歌詞について厳しく取り締まるようになっていきますので、本来なら「」でするはずでしたが、リア友に「そんなんじゃあ表現無理じゃね？お前現国何点だよ（笑）」と言われたので軽く落ち込み歌うところをはしよることになりました。

誠に申し訳ありません。頭の中か実際の曲を聴いてご自分の想像でお願いします。

「……………」

歌い終わった。そして、そこに響いたのは、

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ……！！

惜しみなく、大きな音で鳴る拍手だ。

一方、なのは達は

『……………／／／／／／／／』

「あははは……みなさん硬直してますね……」

「でも、それほどお父さんが凄いつてことですよね？」

「そうですね、キャロ」

「パパす……い！」

リュウトラバーズの皆様は顔を赤くしながらフリーズ中でした。

そして、これを機にファンクラブが非公式で作られたとか。

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「お、終わった……」

「まあ、さすがに疲れたな」

「そうですね」

「客が増えすぎです……」

「セラも疲れるんだな……」

「そう言うシグナムもですよ……」

「ってか、客増えすぎだろ……」

放送の途端、僕たちの足から力が抜けていく。ウェイターってすごい疲れるね……。ものすごい勢いで客が来るし。

後、リュウトを見に行った人たちは顔を赤くしながら帰ってきたけど、どうかしたのかな？

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

な、なんだったって!?

「ええっ!?!どうして!?!」

「どうして、って言われても……恥ずかしいの……// //」

「すみません。すぐ戻りますので」

「待つて!皆、考え直すんだ!カムバアーク!」

僕の説得も虚しく皆は着替えに向かってしまった。

ちなみに葉月ちゃんはそのままの格好で帰ってしまった。ヴィヴィオちゃん達はムツツリー二に頼んで持つて帰ることにした。

「ふむ。ならばワシも」

「させるかっ!せめて秀吉だけは着替えさせない!」

せめて！せめて秀吉ぐらい！！

「なっ！？何をするのじゃ明久！」

「……………（フルフル）」

「ムッツリーニもかよ……………」

「なんとというか……………息があっているというか……………」

流石はMY同志よ。

「オイオイ、秀吉が困ってるだろ。離してやれよ。秀吉男だし」

「リュウトは本当にわかっていない！！」

「……………その通り！」

「いや、間違つて無くな？」

十分間違っている！秀吉は女を認めたじゃないか！！

「おい明久。遊んでないで学園長室に行くぞ」

「学園長室じ？二人とも学園長に何か用でもあるのか？」

「いや、ルーク。ちょっとした取引の清算だ。喫茶店が忙しくて行けなかったからな。遅くなったが今から行くことと思つ」

僕らなら問題なく動くとは言え、最低限報告ぐらいはしておかない

といけないし。」

「ならばその間にワシは着替えを」

「そうはいかない！秀吉も一緒に連れて行く！」

「……………（クイクイ）」

「あ、ムッツリーニも来る？」

「……………（コクコク）」

やはり同志だね。

「ハア……………秀吉。悪いけどめんどくさいからそのまま置いてくれ」

「う、うむ。わかった」

何故、リュウトには従つんだらう。僕らの時には嫌がっていたのに。

僕と雄二とムッツリーニと秀吉とリュウトとルークは学園長室へ向かった。

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

「お前らは全然敬意を払ってないよな」

「そう？きちんとノックをして挨拶したけど？」

「というより、雄二よりはマシなはずだ。」

「アタシは前に返事を待つようにいったはずだがねえ」

「あ、学園長。優勝の報告に来ました」

「いやいやいや、明久。んなこと知ってるだろ。お前らに誰が賞状を渡したんだ？」

「アレ？どうしてみんな憐みの目で僕を見るの？」

「ん？」

「どうしたの？リユウト」

「いや、ちょっと待ってな」

そう言っただけでリュウトは部屋の本棚を調べ始めた。そして、手に何かを持ってきてそれを地面に捨て踏みつぶした。

「盗聴器だな。気を付けておいた方がいい」

「そうかい、助かったよ。それにしても、随分と仲間を引き連れてきたもんだねえ」

「こいつらもババアのせいで迷惑被ったからな。現況の顔くらい拜んでもばちはあたらなはずだ」

「……ふん、そうかい。そいつは悪かったね」

「それで、白銀の腕輪は返却した方がいいですか？」

「いや、それは後でいいさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」

「む？明久、不具合とはなんじゃ？」

「ああ。俺も知らないんだけどよ」

「あ、そっか。秀吉とルークは知らなかったんだね。この白銀の腕輪はちょっと欠陥品でね、得点の高い人が使うと暴走しちゃうんだよ」

「そっじゃったのか。……む？どうしたのじゃ雄二にリュウト？」

雄二が考え込むような仕草を見せている。リュウトは何か落ち着いていない。

「だから、教室の改修と交換条件で僕と雄二がこれをゲットするっていう取引を学園長と」

「ッ！？待て明久！ベラベラ喋りすぎだ！！」

「その話はマズい！」

「え？」

突然リュウトと雄二が真剣な顔で怒鳴りだし、リュウトは廊下へのドアを蹴り飛ばした。

「クソッ！逃げやがった！」

「え？え？どういうこと？」

「盗聴されていたんだよ！あの連中、ボイスレコーダーが何かもってやがった！このままだと俺達の話が録音なんてされていたらマズイ！」

「録音！？冗談じゃない！」

そんなものが公開されたらこの学園がピンチだ！

「クソッ！今すぐ……いや、いいか」

「何を言っているのさリュウト！！早く」

「いいんだよ。ホラ」

目の前には突然動きが止まっている常夏コンビが。

え？どういうこと？

「クソツ！動かねえ！どうなってんだ！？」

「なんだ！？金縛りか！？」

「違うな、先輩方」

先輩たちの前には村雨君とベルカイズ君が居た。

「最初から手を打ってんなら言ってくれよ……」

「悪いな。敵を騙すにはまず味方からだ」

「あははは……すみません、リュウト」

「テメエ！俺達に何をしゃがった！」

「何って、鋼糸ワイヤで拘束しただけですよ。大丈夫です。下手に抵抗したりしなければケガはしない」

鋼糸って……そんなの学園に持ってきていいのかな？

「とりあえず……これにてGAME OVERだな。先輩方？」

「元凶を吐いてもらおう。さもなければ……」

村雨君が少し右手を強く締める。

その時、坊主先輩の持っていたテープレコーダーが真っ二つになった。鋼糸でテープレコーダーって真っ二つになるのかな？

「これみたいになるぜ？」

「わ、わかった！言うから勘弁してくれ！」

先輩たちの証言で犯人が竹原先生とわかった。すでに誘拐の時に証言を得ているのでどうにかなっただろう。

これにて学園をかけた清涼祭での戦いが幕を閉じた。

第14問 清涼祭2日目 事件の最後（後書き）

とりあえずスバル、ティアナには無理やりかもしれませんがフラグを立てておきました。

まあ、ハーレム要員はできる限り欲しいです。でも、1年ですから出番はあまりないかもしれません。

そしてゴッドイーター組で困った、レン君のヒロインはどうしようか……

原作主要キャラは全滅。オリキャラかと、思ったけどどんなキャラにするか……

コウタについては、

「コウタはノゾミで良くね？」

リア友の一人よ…… コウタをシスコンにする気か？ いや、ありそうだけ。

ライガについては…… 大体はわかると思いますね。

それでは今日はここまでです。

次回もよろしく願いします！

第15問 打ち上げ騒動(前書き)

今回は短いです。

でも次からは強化合宿前の日常が書けるのでうれしいです。

さてさて、みんなにどんな事をさせようか……………

それでは本編どうぞ！

第15問 打ち上げ騒動

リュウトSIDE

学園祭での事件は犯人の竹原と確定し、事件は完結。文月学園は守られた。

そして今は近所の公園でFクラスの皆で打ち上げをしている。特に店を取らずにお菓子とジュースを用意している。これはこれで楽しそうだ。金もかからないしな。

俺達フェンリル組は少し報告をしてからそれぞれのクラスに向かったが、

「どうせならAクラスとFクラス、一緒に打ち上げせえへん？」

と、偶然会ったはやて達に言われたのでAクラスも混ぜて打ち上げている。

おかげでFからは「よくやった!」「ナイスだ!」「俺達にはできないことをよくやってくれた!」「そこに痺れる憧れるううううううううううっ!!!」と言われた。

最後の誰だ？

とりあえず、ただいまF、Aクラス混合の打ち上げをしている。

Fクラスのテンションはかなりハイになっている。
いい忘れていたけどヴィヴィオ達も参加している。

「ねえ、リュウト。Fクラスっていつもこうなの？」

「違うぞ優子。Aと一緒にだからだ」

「？ どうして私たちが一緒だところなの？」

そう言っつて優子はジュースを飲む。

「いや、お前らみたいな美人が来たからだろ」

「ブー！」

「うおっ！汚いな！」

いきなりジュースを吹きやがった。

「だ、だって！美人っつていきなり言うから……………／／／／／／／」

最後らへんがよく聞こえなかった。何を言っていたんだ？

「神崎くん！」

「ん？工藤か。どうした？」

「いや、昨日は言えなかったけど、あの時のお礼をね」

昨日？……ああ、誘拐のか……

「気にするな。それよりも、無事で良かったさ」

「一応、何もしていないと三下どもから聞いたけどな。」

「うん。でもありがとうね！ボクの事は愛子でいいよ」

「そうか。じゃあ、俺も名前で構わない。よろしく、愛子」

「うん。よろしくね、リュウト君」

と、言いながら愛子は腕に抱きついてきた。

「何してんだよ……」

「ん〜。何だろうね〜？」

「はあ……もういい……」

「あれ〜、これだけじゃあ満足できなかったかな？じゃあ、実s

」

「だから、そーいづのは本当に好きな奴とやねって。一回目だぞ？」

「うわあ……強敵だね……」

「そつよ、優子」

「うん。お互い頑張ろう、優子」

「そつね……………ところで優子？いつまでリュウトの腕に抱きついてるのかしら？」

「ええ、良いじゃんそれくらい」

「いいわけない！」

「じゃあ、優子もやればいいじゃん」

「へっ！？い、いや、私は……………」

何が強敵？後、どうしたんだ優子？顔を真っ赤にして。

「あ、神崎君。どうぞ」

「瑞希？サンキュー」

瑞希からジュースを貰った。瑞希はこつこつ気遣いがとてもできる。見た目も可愛いし将来いい嫁になるな

「えっ！？そ、そんな……………／／／／／」

「どうした瑞希？」

「途中から声に出たよ」

「そうだったか？」

失敗したな。……………ん？

「瑞希、このジュースはFクラス全員同じか？」

「え？はい、そうですけど」

「わかった。このジュースを今すぐ全部捨てる」

「え？どうしてですか？」

「よく見る。これ……………酒だぞ」

「あつ、本当です」

Fクラスが買ってきたジュース。その商品名は『オトナのオレンジジュース』と書いてある。見事にアルコールが入っている。Fクラスのバカは酒とジュースの区別もできないのか？

とりあえずただいまそのジュースを回収中だ。

「これで全部か？」

「多分ですけど……」

ようやく酒を回収し終えた。

「パパ」

「ん？どうしたヴィヴィオ」

「ジュース、のんでいいよね？」

「おお、いいぞ」

「わーい」

そうやってヴィヴィオはジュースを飲んだ……って！

「オイ、ヴィヴィオ！それを飲むな！」

だが時すでに遅し。

ごくごく……

「んにゅ？あれれ……？めが、まわる……よ……」

ポンッ！

『うおわっ！？』

酒を飲んだヴィヴィオは突然、ヴィヴィオが見えなくなるぐらい大

きな煙を出した。

A、Fクラスの全員はびっくりしている。

「え？ええ〜！？か、神崎君！ヴィヴィオちゃんが煙を出しましたけどー！」

あゝ、マズイ。非常にマズイ。かなりマズイ。マジでマズイ。

煙が晴れてそこに居たのは、

「すう〜、すう〜……………」

『……………はい？』

金髪のポニーテールで大人のような美人の女性だった。

「あ、あれ？ヴィヴィオちゃんはどつしたの？」

「あゝ、優子。アレがヴィヴィオだ」

『え？』

全員が声を上げる。そう、この女性はヴィヴィオだ。（聖王モードです）

「ん〜、んにゆう……………うっん？」

ヴィヴィオは目を覚ました。目はやはりオッドアイだった。

「ん〜？あつ！パパ〜、大人になったよ！」

そう言つてヴィヴィオは俺に抱きついてきた。最近の女性は抱きつ
くのが習慣なのか？

「ね、ねえリュウト。どういうこと？この人がヴィヴィオちゃん？」
と、明久が聞いてきた。

「ヴィヴィオはな……………酒を飲むと大人になる」

『はい？』

そのことについてみんなに説明した。

ヴィヴィオはなぜか酒を飲むと大人になる。その原因は不明。化学
者どもは「研究させてほしい」とかいうが、自分の娘にそんなこと
を刺せるわけがない。榊博士と協力してヴィヴィオは守られた。も
しろん大人モードはしばらくすれば戻る。大人モードでもヴィヴィ
オは今までの思考のまま。ただ、解除された後は大人モードで起き
たことは覚えていない。こんなことは普通は起きないだろう。ちな
みにフェンリル組とセラ達は知っている。

「す、すごいね、ヴィヴィオちゃんって。ボクもびっくりしたよ」

「それにしても……………羨ましいです、ヴィヴィオちゃん……………」

「スタイル良すぎなの……………」

「これは……少々……」

「畜生……どうせあたしなんて……」

女性たちが一斉に落ち込み始めた。いや、お前らまだ十六歳ぐらいだろ。今のヴィヴィオは二十歳だから。

「こ、これがヴィヴィオちゃん!？」

「ガハッ!？」

「お、オイ!大丈夫か!？」

「あの姿を見るだけでご飯15杯はいける!！」

「……!!!(ブバアッ!)」パシャパシャ!!

「見る!土屋が鼻血を出しながらもシャッターを!」

「僕もカメラを貸してくれムツツリーニ!」

男性陣は見事な混沌の出来上がり。明久やムツツリーニまで参加している。

「ねえパパ。みんなどうしたの?」

「うん。なんでもないんだ。だから、離れてくれないか?」

「……ヴィヴィオはいや……?」

「……好きにしてくれ」

「
」

俺は無力です。女性にはどうしても甘くなってしまう。レグルスの時も結局攻撃できなかったし。

「うつ……ヴィヴィオちゃんだと……」

「キツくは言えないの……」

「心は子供だもんね……」

子供じゃなかったら何をする気だ?

「しかし、大人になればここまできれいになるとはな……」

流石の雄二も驚いている。そして、

ブスッ!

「……雄二は見ちゃダメ」

「目が!目があああああああああ!!!」

どこの大佐のような悲鳴を上げて目を抑えながら地面を転がりまわる雄二。犯人は霧島。

「しょうこ姉、ゆうじ兄どうしたの？」

「…ヴィヴィオ。雄二はヴィヴィオに悪い事をしようとしたから罰ゲーム」

「ゆうじ兄！ダメだよ、わるいことをしたら！」

「してねえよ！」

結構言いがかりだよな。

「アキ？何いやらしい目でヴィヴィオを見てるのかしら？しかもカメラまで」

「イ、イエ。アノデスネ、ミナミサマ。ボクハコノヴィヴィオチャ
ンノスガタヲノウナイフォルダニオサメタカツタダケデスヨ」

「言い訳になってないわよ！しかも片言だし！」

言い訳ぐらい思いつけよ、明久。

「つちや兄。なにをしてるの？」

「……公園の景色を撮影中」

どう見てもヴィヴィオを撮ってるだけだろうが。こいつも言い訳がダメだな。

「あゝ、そう言えばリュウト」

「ん？どうしたコウタ」

「ジェイル博士がこれを飲んでみるって」

そう言ってコウタが袋を見せた。その中には缶ジュースが一ダース入っていた。

「なにこれ？」

「ん？あ、説明書がありますよ」

「どれどれ……………」

やあ、リュウト君。いきなりだけど文月学園の誰かにこのジュースを飲ませてくれないかい？別に毒じゃないよ。これは「年齢成長薬5年Ver」って言うんだ。これを飲むとしばらくの間、5歳＋された姿になれるんだよ。ちなみに精神も引っ張られるからね。学園長からも許可はいただいているよ。それじゃあよろしく。

B Y ジェイル・スカリエッティ

P S・私の養子達が今度ご飯を作ってほしいってさ。あと、セツテが病みすぎて暴走しそうだよ。「リュウト分が足りない」とか言うてたし。

「……………（絶句）」

「うわぁ……………」

「じ、ジェル博士って個性的なの……………」

「PSに何気に危険なこと書いてなかった？」

「疲れる……………」

「ところで、そのジュースはどうするのですか？」

「そつだ、誰に飲んでもらうか……………」

「そのころのリユウトラバースの皆様のお考え。」

『（精神も影響されるならリユウト（君）（神崎君）に飲ませた後に自分が飲んで誘惑すれば……………これだー！！！！）（）』

計画を立てていた。

「まずはリュウト君に飲んでほしいの！」

「俺？」

「そうだよー！」

「いいアイデアですね」

「は？ちよ

「というわけで、GO 「！！！」

「おい、愛くムガツ！？」

口にジュースを流し込まされた。何するんだよ愛子！！

ポン！

飲んだ後に俺はヴィヴィオのように煙を出した。

晴れた時には女性陣が皆顔を赤くしていた。

俺には自分がどうなってるかわかんねーんだけど。

「リュウト。はい、鏡」

「サンキュー」

俺はレンから鏡をもらって自分を見た。

おお、顔つきが少し男らしくなってる！よかつた、中性的な顔は嫌だったんだよね。たまに女装をやらされたりするから。

「イケメンは人類の敵じゃ

！！」

「チクシヨオ……俺なんて……」

「仕方ない……こうなったらアステカの魔術で……」

「何！？お前そんなことが!?!」

「できたらいいな……」

「……焼き肉行こうぜ」

「……おう」

皆がいろいろ感想を言っている。

「じゃあ、次は誰が飲みます?」

『ジャンケンポン!』

今回はリュウトラバーズだけではなくルーク、ティア、ライガ、レ

ン、はやて、アッシュ、ナタリア以外全員が参加。

霧島は雄二を誘惑するため。男子組と島田は未来の可能性を信じて。リュウトラバースは計画を成功させるため。女性陣は面白半分に参加。

結果。

瑞希、なのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、愛子、秀吉、ムツツリーニ、雄二、エリオ、キャロ。

「って、いつの間にエリオ君達が!？」

「いや、気になって……………」

「参加していたら勝っちゃいました」

「どうして私だけ全然勝ってないんでしょうか……………」

「同志よ……………」

「セラさんですか……………」

「僕が雄二に負けるなんて……………」

「…負けたのは悔しいけど大人の雄二を見れるからいい」

「ムツツリーニはどんなのだろうな?」

「大人になったら背は伸びてるかな……」

エリオ達も参加してたようだ。

「それじゃあ、飲んでください」

レンが言つと皆一斉に飲む。

ポン！×11

そして煙が出た。煙が晴れた時に居たのは大人になった11人だった。

とりあえず11人全員に鏡を渡す。

ちなみに鏡は等身大でムツツリーニがどこからか持ってきたようだ。本当にどこから持ってきた？

「わあ……これが私ですか……」

「大人になってるの！」

「これが私かあ……」

「むう、こんなものか」

「やった！背が伸びてる！」

「へえ〜、これがボクか〜」

「ワシは女顔のままじゃな……良かったような悪かったような……」

「……大人びてる」

「なるほど。こんな感じなのか……」

「凄い背が伸びてる……」

「私もです！」

皆は見事に変化していた。

まずは瑞希。プロポーションがかなり良くなっている。顔立ちも少し大人びていている。

次になのは。そのままStrikers時になっている。ところでStrikersってなんだ？変な電波を受信したんだけどさ。

次にフェイト。彼女も同じだ。本当にStrikersってなんなんだ……？

シグナムはさらに大人びていてかなり美人になっている。

ヴィータは背が伸びていて見事に大人の女性になっていた。いっただけ伸びたのかが気になる。

愛子は爽やかさが特徴の女性に見える。ボーイツシュさも残っている。

秀吉は背が伸びているがやはりまだ女性に見えてしまうような顔つ

きや体つきである。

ムツツリーニは寡黙ではなくクールなイメージを抱かせるような感じだ。しかも顔もかっこよくなっている。

雄二はワイルドさがさらに上昇。かなり男っぽいしこちらもかっこよくなっている。

エリオの場合俺達ぐらいの年かな？見事なイケメンに変身。背も伸びていて大人びている美少年だ。

キャラも背が伸びておりこちらも可愛くなっている。

五年だけで皆ここまで変わるなんてな……………

「どうですか神崎君？」

「私もどうかな？」

「リュウト、私は？」

「私はどうだろうか？」

「リュウトはどう思う？」

「ボクはどうかな？」

と、一気に六人が詰め寄ってきた。なんか怖いんだけど……………

「あ、ああ。皆綺麗になってるな。これが五年後か」

男の秀吉は恋する乙女に見えるがその恋を実らせるための道のりは遠い。

「うおおおおおおおつ！！榊博士って誰か知らないけどGJ！！」

「ガハアツ！！」

「待て！死ぬなモブ1！俺達は生きてこの理想郷アラガルタから帰ってこの光景を覚えておくんだ！」

「そうだ……まだ死ぬわけにはいかない！」

「瞬きする間も惜しい！」

「クソツ！こんな時にケータイの充電が！！」

「ハツハアア！！ざまあ！普段から充電を怠ってるからそうなるんだよ！！」

「チクシヨオオオオオオ！！！！」

男性陣は再び混沌カオスへ。

その後鼻血の処理や大人騒動を収めて解散となった。

ちなみにムツツリー二が大人になった全員の写真を撮っておりその写真がバカ売れしたのは余談だ。

「……………商売繁盛」

ん？よく見るともう一つ手紙が……………

また薬を作るかもしれないから文月学園で実験してくれないかな？
頑張ってくれ。ちゃんと学園長からは許可を貰っているから問題ないよ。これも仕事と思ってやってくれ。後、セツテが本格的ヤバい
んだけど……………

「……………また、こんな騒動を止めなきゃならないのか？」

正直疲れた……………。

ジエイルSIDE

「……………ふむ……………」

今回の事件。少しおかしいな。

竹原が求めていたのは学園じゃないのではないか？

目的としては学園が一番ありそうなんだけどね。

でも、わざわざ腕輪の暴走なんてさせたなら文月学園は危険視されて学園がなくなるんじゃないのか？

それなら何が目的だ？

土地？違うね。

なんだろう？

まさか……………

召喚システムか？

そうになると不味いね………

「応対策は打っておこうかな？」

「榊。相談があるんだけど」

「これからはどうなるんだろっつねえ？」

第15問 打ち上げ騒動（後書き）

どうなるんでしょうか？

リュウト「それをお前が考えろよ」

一応アイデアはあるよ？でもね、実行したらバカテスじゃなくなる可能性はあるよ？いや、確実かな？

リュウト「どんなのだよ……………」

まあ、シリアスも入れておきたかったしね。

リュウト「そう言えばナンバーズ達やガイ達の出番は？」

これからあるよ。ちゃんと出すけど合宿編では出ないよ。

リュウト「まあ、だろうな」

それでは今回はここまでです。

リュウト「次回もよろしく！」

第16話 性転換薬事件 TSとか日常でなくね？BYリユウト（前書き）

久しぶりの投稿。そして日常編スタート。合宿編はもう少し後になります。

先に行っておきますがテストがすぐにあるので今八月中に投稿はありません。

俺もまだ高校生なのでそこはスミマセン。これからもよろしくお願います！

それでは本編スタート！！

第16話 性転換薬事件 TSとか日常でなくね？BYRユウ

???SIDE

フッフッフッ……………計画通り……………!

出来た!ようやくだ!

これ後は文月学園に持っていけば……………

世界は………私の手につ！！

私は新世界の神となるのだ！！！！

リュウト、リツカ。たとえそうだとしてもいきなりローリングソバ
ツトは痛いよ？

とりあえず私、ジェイル・スカリエッティは少々テンションがハイ
になっている。

なぜなら

「これを文月学園に持って行ってほしいんだ」

「何ですかこれは？見た目はリポ○タンDみたいですけど」

「いや、オロナ○ンCだろ？」

「いやー！リポ○タンDのほうがよー！」

「違うね！オロナ○ンCだな！」

「リポ○タンDを似せて作ったかもね」

「ホラ！」

「なぜだ！」

「……………君たちは何でそこに力を入れるんだい？」

中身は気にならないのかい？

リュウトSIDE

本日、俺、神崎リュウトは核爆弾をもって学校に行っています。

「どつするんですか？」

「セラ。助けてくれ」

「私もそれを飲むのはちょっと……」

セラの言うそれは見た目はオロナ〇ン〇のような形だが中身はジェル作の

性転換薬だ。

なんでジェイルやリツカはこれがリポ○タンDみたいに見えるんだ？俺にはオロナ○ンCに見えるぞ？

実際にリツカと共にガイに飲ませたら金髪の美女になった。ちなみにリツカは爆笑していた。胸もあった。ガイは女性恐怖症の為に即気絶。流石に俺もリツカも可哀想だと思った。すまん、ガイ。お前の犠牲は無駄にしない。

『ま……まだ……生きて……る……』

ガイの声がなぜか聞こえた。

今回は四個だがガイに飲ませたので後三個だ。

さて、どうしよう。

P r r r r r r r r r ! !

ん？電話？

「はい、神崎です」

「神崎かい？」

「学園長？」

「いやね。今回の実験の事だけだね」

既に知れ渡ってたんかい！

教室

明久SIDE

「さて、この時間は本来ならば自習なのだが今回は特別に自由にす

る」

『何い！？』

十一時半。衝撃発言が出た。

自由だと！？鉄人からありえない言葉が出た！

「が、その前に、神崎」

「……………はい」

リュウトがビニール袋らしきものをもって前に行った。

「これを飲んでもらおう」

これ？ただのリポ○タンDにしか見えないけど。

「あゝ、これはな……………性転換薬だ」

『秀吉！飲んでくれ！！』

キタ！これで秀吉が！！

「制限時間は一時間らしい」

『チクシヨオオオオオオオオ！』

一時間だけ！？いや、数は三個ある！

「『いろんな人で試してくれ』と言われたのでそれぞれやってみようから」

『なぜだあああああああ！！』

理不尽すぎる！いいじゃないか別に！！

「というわけだ飲む人を決める為に多数決を取る」

結果

秀吉、リュウト、僕。

って！

「ちょっと待って！！何で僕！？」

「諦める明久。多数決で決まったんだ。しかし、秀吉なんか嬉しそうだな」

「そ、そうかの？」

秀吉も最近女の子みたいな行動が多い。やっと認めてくれたのかな？

「では、まずは秀吉な」

「う、うむ。それでは」

皆が固唾を飲む中、秀吉が薬を飲む。

ポン！

この前のように煙が出て晴れた先には

『アレ？』

「うむっ？」

いつもの秀吉が居た。

「……もしあったらごめんな、秀吉」

「む？何が

っ！……！！／／／／／／／／／／」

ふにゅっ

リュウトが秀吉の胸を触った。

って、今、のはまさか！

『キタ

）。。

！……！！……！！』

キタよ！ようやく秀吉が！

「なんでだ？何で目から塩水が……」

「滝のごとく目から汗がっ！！」

「なんだ、この達成感は……」

「待ち望んでいた光景が今ここにっ！！」

皆も喜んでるようだ！我が同志よ！

「……………っ！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

ムツリーニはシャッターが壊れるんじゃないかと思うほどの勢いでシャッターを切っている。僕も手伝わないと！

「い、いきなり胸を触るではない！／＼／＼／＼」

「あ、ああ。悪かったな……」

「……………その……………責任は取ってもらっぞっ？」

『させるかあああああああ！！』

必死に止めようと叫ぶ女性陣。

さらにつるさくなるFクラス。

「……………次はリユウト」

『……………ハッ！？』

そつだ！次はリュウトだ！秀吉の可愛いとは違つて綺麗だつたな。

「ほれ、早く飲め！」

「くつ……覚えてるよ、ムツツリーニ、雄二」

そつ言つて飲んだリュウト。

ポン！

また煙が出る。晴れた先には

アレ？

『……………誰？』

「……………オイ、コイツは……………」

「……………すうー……………すうー……………」

真つ赤な長髪のリュウトと同じ顔つきの女の子がいた。背はリュウトより少し小さい感じだけだ。

「リュウト。彼女を知つてるんですか？」

「まあな……………」

リュウトの顔は少しうれしそうだった。

「ん？……あれ？……寝てた？」

女の子が起きた。ルビーのような瞳だった。

「僕は寝れないはずなのに……あつ、リュウト」

「おはよう、カエデ」

「うん。おはよう。どうしてここに居るの？君まだ起きてたよね？」

「こっ？どっ？いつのこと？もしかして」どっこもドラマ？

「ああ、取りあえず周りを見る」

「ふえっ？……え？」

カエデと呼ばれた女の子は僕たちを見て驚いている。

「……君は吉井明久？」

「え？うん」

「君は坂本雄二？」

「あ、ああ、そうだけど」

「君は土屋康太？」

「……………（じくっ）」

「……………嘘……………本当に？……………ここFクラス？……………あなたは西村先生
「？」

「あ、ああ。そうだ」

「……………（ポロツ）」

ええええええええええ！？泣き始めちゃったよ！？

「夢じゃないんだ……………皆が居るんだ……………」

「ああ、夢じゃないぞ。ここはあの世界じゃない。現実だ」

「リュウト……………リュウト！…！」

女の子はリュウトに抱きついた。

「よかったな、カエデ」

「うん……………うんっ……………！…！」

何故だろう。いつもならFFF団で攻め立てるはずなのに今はこのままにしてあげたいと思った。

「落ち着いたか？」

「うん……またありがとうね？」

女の子は泣き止んだようだ。

「で？誰なんだ？その子は」

と、雄二が聞く。

「僕は神崎カエデ。リュウトの夢の中の人間だよ」

………はい？

「あゝ、コイツはな昔突然俺の夢の中に現れた人間だ。コイツが来てから夢の中で起きたことは現実に反映するようになった。痛い人に見えるかもしれないが信じてくれ」

リュウトの目は真剣だな。嘘はついてなさそうだし。皆はうなずいていた。

「ありがとな。それでこいつは眠ることができない。ずっと俺から世界を見ていたんだ」

「うん。だから、みんなにこうやって話したりできて僕は幸せだよ」

笑顔で言うカエデさん。

男子の一部が昇天している。幸せそうな顔で。

笑顔が眩しいっ!!

「それじゃあ、最後の一個だ。飲め、明久」

ごまかせれなかった。

「明久くん。飲んでくれないかな？面白そうだから」

ダメだ！カエデさんに笑顔でこんなこと言われても飲んだら最後だ！でも

「体があああああ!!」

脳が僕を操る！ダメなのに!!

ポン！

飲んでしまった……………。

これで僕は笑いものに

「あれ？」

女になっていなかった。胸も触ったてみたけどなかった。

「ん？手紙がもう一つあった」

もう一つ？

「何々？」

言い忘れてたけどそのうち一つはただのリポ○タンDだから。ごめんねー！

……………」

すんごく小さな紙に書かれていた。

「遅いわあああああああ！早く言えやあのマッドサイエンティストがあああああああ！というかあの時に言えやあああああああああああああああああああ！……！」

「ごもつともです！でも、助かった！ジェルさんGJ！」

「と、とりあえずこの授業は自由にする。あー、神崎カエデは本日は学校にいるように。そのことについて学園長に話す」

そう言つて鉄人は教室を出た。

「よし！せつかく外に出たんだし、文月学園を散歩しよー！」

「は？ちよつ！待てつて！！」

リュウトはカエデさんに連れて行かれた。すんごく元気だったな。

「……………はっ！しまったの！皆！早く二人を追いかけるの！」

『はっ！……！』

Fクラス全員でリュウトとカエデさんを追いかけることにした。

「はあ……………はあ……………疲れちゃった……………」

「そりゃあそうだろう」

数分後、カエデさんはものすごく疲れていた。

「夢の中じゃあ運動してないからな」

「そ、そうだよな……………」

なるほど。

「で、もう昼か……………」

「もう?」

「ああ。飯食うか」

「リュウツトの弁当がいい!」

「おっおっ!」

「弁当持ってきてるでしょ!分けて!」

「わかったわかった！わかったから！」

「わーい！リュウトの弁当食べてみたかったんだ〜！」

「そ、そうか……………つて！」

リュウトが突然大きな声を上げた。どうしたんだろう？

「明久！今何時だ！」

「え？今は十二時四十五分ぐらいだけど……………」

「そうか……………どうなってるんだ？」

「どうしたんですか？神崎君」

「いや、あの薬のリミットは一時間きっかりだ。もう使用時から一時間たっている。現に今、秀吉は元に戻っている。それなのにあいつには何も変化はない。どうなっているのかわからない」

「確かに……………」

ちなみに秀吉が戻った瞬間に秀吉と男性陣がテンションダウン。なんで秀吉も？

『神崎リュウト、神崎力エデ、学園長が読んでいます。至急、学園長室へ来てください』

呼び出し？

「僕たち何かしたのかな？」

「いや、何もしていない。とりあえず学園長室へ行くか。皆は教室に戻っていてくれ」

「わかったよ」

・学園長室

コンコン

「失礼しまーす」

とりあえずノックして学園長室へと入る。

そこには学園長だけではなくジェルにリツカ、ガイもいた。

「よく来たさね。それで？彼女がカエデかい？」

「はい。僕がカエデです」

「彼女はリュウトが性転換薬を飲んだら出てきたのに間違いはないかい？」

「そうだけ、ジェル。しかも、使用から一時間を軽く過ぎているのに変化がない」

「顔つきがリュウトそっくりね。髪の毛とか見た目とか以外そっくりじゃない」

「ああ、双子の兄妹みたいだな」

確かにそうかもな。

「ふむ……彼女は君の夢の住人なんだね？」

「今だったら過去形だけだな」

「あり得る可能性は……非科学的だけどね、あの薬でリュウトの『女』の部分である彼女が引きずり出された可能性が高いね」

「……『女』の部分？」

俺とカエデとリックとガイは声をそろえて言った。

「元々、あの薬はそれぞれの『男』や『女』の部分を無理やり引きずり出す薬なんだよ。だから、神崎リュウトは神崎カエデの『男』

の部分であり神崎カエデは神崎リュウトの『女』の部分である可能性がある。本体には神崎リュウトと神崎カエデの二人のうちの神崎リュウトの部分が外に出ているのかな？それでカエデの方は内にいるようになった。それでこの薬でカエデが外に引きずり出されたといったところかな？多分、君たちの夢の世界にはもういけないと思うけどね。こんなところかな？」

そうだとしたら……

「僕は……ずっと現実に居れるの……？」

「そうだよ。よかったね」

「学校に行きたいんなら席を作ってやるさ。Fクラスだけどね」

「カエデ……」

「うん……！これからよろしくお願いします！！」

「こちらこそ、よろしく。Fクラスでいいんだね？」

「はい！」

こうしてFクラスに新しく神崎カエデという少女が加わった。

「そついえば家は？」

俺は今帰り道でセラとユーとカエデと帰っていたがよく考えたらカエデの家がない。

「簡単だよ」

「何か当てがあるのか？」

「リュウトの家に泊まればいいんだよ！」

「ジエイルあたりから借りるか」

「スルーはひどいよ！！」

「いやいやいや。」

「いきなりお前が住み始めたらやばいだろ。いろいろと」

ちなみに戸籍は博士たちがどうにかしてくれたいらしい。国相手にどうやったんだ？

「大丈夫！いとこつて設定にすればいいし！」

「……ほんとにいいのか？」

「うん！」

……こんな笑顔されたら断れないんだけどな。

「仕方ないか。セラたちの部屋で布団を敷いて寝てくれないか？」

「私たちはよろしいですよ？」

『問題ない』

「ありがとう！」

「お父さん」

「彼女は」

「誰なんだよ！」

「かくし」？

「今から説明する。後、ヴィヴィオ。誰からそんな言葉教えてもらった」

「テレビのドラマであつたんだよ？」

どんなドラマを見たんだこの子は！しかもなんでそこをピンポイントで！？

とりあえず説明中……

「そつなんですか」

「なんか日常がぶっ壊れた気がするぞ」

「もう崩れています」

「召喚システムがある」

「あれもある意味普通じゃありませんよね」

「とりあえずよろしくね」

元気だなこいつは……………

クラスだけでなく家族が一人増えました。

「ねむ……………もう寝るか」

夜、よい子の皆様は寝ている時間で俺は予習をしていた。別に俺は悪い子で構わん！

同じ部屋のエリオはもう寝ている。

コンコン。

『ねえ……………リュウト、起きてる？』

「ん？カエデか？起きてるぞ？」

『そ、そうなんだ。お邪魔しまーす』

そういつてセラの寝巻を着たカエデが入ってきた。

「どうした？」

「うん……………一緒に寝てくれないかな？」

いつもの俺ならすぐさま出ていけとか言いつけど、言えなかった。

声が震えている。何かが不安でいるような感じだ。

「何が不安なんだ？」

「あはは……………よくわかったね……………怖いんだ」

カエデは俺のベットに腰かけて言葉を言う。

「もし、これが夢だったらって思うと、寝たらまた一人になってい
るって思うと怖くて眠れないんだ……………せっかく会えたのにまた
会えなくなるのが怖いんだ……………」

カエデは目に涙を溜めて言う。気持ちはわかる。願いがなかったの
にすぐにまた一人になる。それが怖いんだろう。

「お前の不安がそれで取れるならそのくらい構わないぞ？家族だろ
？」

「……………」

「？ どうした？」

「ううん。やっぱり優しいね」

「そうか?」

「自覚無いの? まあいつか。ほら、早く寝よ?」

「そうだな……………」

俺はベッドに寝っころがった。そしてその隣にカエデが寝転がる。

「お休み、リュウト……………ありがとうね」

「お休み、カエデ……………どういたしまして」

そういつて俺達は眠りについた。

これからもよろしくなカエデ。

第16話 性転換薬事件 TSとか日常でなくね？BYリュウト（後書き）

目指せ感想ゲット！最近少ないので……………。

ユ一『不人気』

ぶっちゃけないでくれ。

リュウト「とりあえず文章力を上げる。現国の点数上げる」

うるせえチクシヨオ！

ユ一・リュウト「じ〜〜〜」

な……………なんだその眼は！

二人「じ〜〜〜」

何？何かした？

二人「じ〜〜〜」

うわああああああん！！

リュウト「逃がさん！」

ジャキン！ 神機を構える音。

ダッ！ 駄作者向けて走る音。

再びオリキャラ設定など。

どうも。久しぶり、アナザーです。

ようやくテストから解放されて少々テンションが上がってます。

リュウト「気持ち悪いほどに」

そう言うな。

今回はオリキャラ紹介と原作キャラと今作の違いを書きました。

オリキャラはレグルスとカエデだけでなくリュウトとライガも書き直しました。

リュウト「イメージCVとか有るけどお前の妄想の物だな」

だからそう言うなって。

ではどっぞぞー！

神崎リュウト

身長：175.4？

性別：第四の性別、リユーちゃ「シバくぞ」男（汗）

イメージCV・森田成一

戦国BASARA 前田慶次

BLEACH 黒崎一護

機動戦士ガンダム SEED DESTINY アウル・ニータ

中性的な顔つきで瞳は薄く透き通った水色。髪色はスコールの髪型が蒼くなっている感じだ。しかもサラッサラ。髪を整えていれば長身の美女に見えてしまう。

困った人を見るとすぐに助けに行こうとするいわゆる「ほっとけない病」。体を動かすのが大好きで体育の時はテンションが上がっている。優しさや人なつっこさもあるが仲間を傷つけたりする奴らには容赦がなくなる。鈍感度は病気が呪いか何かと思われるほどのレベル。好意を友達として受け取る。ブチキレるとその対象を殺そうとする。それを邪魔する奴は死にはしないが腕を折られるなど戦闘不能までおいこめられる。誘拐事件のアレはまだ「キレた」レベル。

召喚獣設定

・オリキャラは全てゴッドイーター側ですので武器も神機です。

・服装は原作通りトップス、ボトムスと呼びます。

服装は「ゴットイーターバースト」の黒のスイーパーをトップスと

ボトムス両方着ている

：神機

刀身・バスターブレード「アメノムラクモ 秘」

銃身・スナイパー「シヴァ 絶」

装甲・タワーシールド「ユミル 硬」

腕輪能力

アラガミバレット「ハンニバル種」

原作でハンニバル種を捕食すると手に入るアラガミバレットが使える。点数を消費する。

刀身解放「封印サレシ大剣」「竜殺し」

点数を消費し刀身を一時的に変形させる。

リミットを過ぎればアメノムラクモに戻る。

種類変更は可能。

アラガミ化

?????

村雨ライガ

身長：178・1？

性別：男

イメージCV・置鮎龍太郎

BLEACH 朽木白夜

機動戦士ガンダム SEED DESTINY アンドリュー・

バルトフェルド

Fate/Zero バーサーカー

琥珀色の瞳で髪の毛は「テイルズオブデスティニー」のリオン・マ
グナスの髪型で紫色をしている感じ。

性格は冷静だが面白いこと、スクープに目がない。新聞部に所属。
はやてとコンビを組んでいる。果物が好きではない。基本的に誰か
をサポートするのが得意でまとめ役としてとてもよい。本が好きだ
が以前コウタがどこから手に入れたのか18禁な本をライガに渡し
た瞬間にコウタの母親にばらされコウタは妹と母親にO・H A・N
A・S Iを受けたとか。（本編では出ていない）鋼糸ワイヤなど暗器を得
意とする。めんどくさい相手は鋼糸で拘束させる。コウタ、シユン、
アニスがいい例。フェンリルでは「死神二号」の異名を持つ。「死
神」はソーマ。

召喚獣設定

服装は原作での紫色のパーカーをトップス、ボトムス両方着ている

：神機

刀身・ロングブレード「ヘルサイズ 極」

銃身・ブラスト「バロール 真」

装甲・バックラー「獣装老陽 硬」

腕輪能力

アラガミバレット「シユウ種」

こちらにもシユウ種からとれるバレットが使える。

「死神」

点数が一秒ごとに減っていくが攻撃力がかなり上がる。

ちなみにインパルスエッジは使えない。

アラガミ化

???

レグルス・ベルカイズ

身長：160.4?

性別：女（顔を男っぽく変えることもできる）

イメージC.V・浅野まゆみ

NARUTO 白
ソウルイーター 小椿
銀魂 幾松

ロングに伸ばしている白っぽい水色の髪の毛で瞳の色は青。
最初はリュウトに恨みを持っていたが今では仲良くしている。
性格は恥ずかしがり屋で目立ちたくはない。それでも警察への入隊は彼女なりの強さを求めたから。夏に弱い、冬に強い。趣味は音楽鑑賞。報告書などを担当。コウタ、シユン、アニスのバカ三人衆の報告書の処理で頭を悩ませている。

召喚獣設定

服装はトップス、ボトムス両方F武装のブラック。

：神機

刀身・ロングブレード「グランディオーン」

銃身・アサルト「シレンツィオ」

装甲・シールド「ケーニヒスシルト 堅」

腕輪能力

アラガミバレット「ウロヴオロス種」
以下省略！ダイダルウェ ブー！！……………ゴホン！

「凍結」

氷の矢を撃ち出す。

一本に点数を使うので撃つ分だけ点数を使う。

アラガミ化

ウロヴォロス

神崎カエデ

身長：162.5?

性別：女

イメージCV・門脇舞以

Fate/Stay Night イリヤスフィール・フォン・ア

インツベルン

ストライクウィッチーズ2 サニーヤ・V・リトヴァク

インフィニット・ストリフトス
IS 布仏本音

顔つきはリュウトとそっくり。というか瓜二つ？長く紅蓮のように赤い長髪で瞳の色はルビーのよう。

性格は楽天的で楽しいことが好き。リュウトとは逆に勉強が苦手。

料理は同じなので二人で作れば恐ろしい（おいしい方で）料理と化す。突然リュウトの夢の中に住みついた住人。本人にも生まれた理由は不明。が、性転換役のおかげで現実世界での生活ができるよう

になった。夢の中ではリュウトと話すことしかなかったので今がと
ても楽しい。意外にスバル並に大食い。食べたものは何処へやら。

召喚獣設定

服装はトップス、ボトムス両方赤色のストリート。

神機

刀身・ショートブレード「シュヴァリエ 炎 真」

銃身・スナイパー「フランメバリスタ 真」

装甲・タワーシールド「アンタレス 衛」

腕輪能力

アラガミバレット「クアドリガ種」

以下省略！と言いたいけどスサノオのアラガミバレットは使えない。

「刀身解放」

刀身をルーンエッジに変えられる。

能力の詳細はリュウトと同じだがあまり頭がよろしくないので使え
る機会があるのか不明。

アラガミ化

???

*原作キャラと今作の違い。

バカテス組は瑞希などがリュウトに惚れている以外特になし。

リリカル組で、なのは達は一般人。ジェイル組はフェンリルで犯罪者ではない。ナンバーズは孤児でジェイルが養子にした。ヴィヴィオ、エリオ、キャラも孤児。リュウトが養子にする。ザッフィーは番犬ならぬ番狼？

ゴッドイーター組はリンドウとサクヤが結婚して生まれたのがレンという設定になっている。主人公的立場はリュウト。ヨハネスについては普通の人で立派なソーマの父親。

これはゾンビですか？組はユーに能力は存在しない。セラも吸血鬼者ではない。ハルナも魔装少女とかではない。まだ出てはいないが歩もゾンビではない。

アビス組はアッシュとルークは双子の兄弟。別にガイやティアなどは原作のようなものはない。ヴァンは剣道界ではとても有名。

ヴェスペリア組はユーリはいわゆる不良学生。パティは別にアイフレッドではない。ジユディスもクリティア族ではない。ラピードはペット。エステルは満月の子でもないし王女でもない。

こんな感じかな？

リュウト「一応説明はしてくのね」

さて、今から再び本編を再開します。

実はまだまだいろんな作品からのキャラが来るとか。

リュウト「ネタバレじゃね？それ」

その大半の女性キャラにリュウトはフラグを建設済みだとか。

リュウト「オイ？」

HAHAHAHAHA！では、サラバツ！

リュウト「あっ！逃げんな！待てコラ！」

HAHAHAHAHA！知るか〜！

第17問 色々襲来!?!というより転校生多くないですか?BYレン(前書き)

誰かオラにMGOの強さを分けてくれ!

……………その前にMGOのデータがぶっ壊れました。原因は不明です
……………(泣)

ええい!くじけぬものか!……………またやり直しだ……………(大泣)

と、とりあえず!新しく別作品が参加します!

それでは本編どうぞ!

誰かMGOのコツをオラに)ry

第17問 色々襲来!?!というより転校生多くないですか?BYレン

リュウトSIDE

「と言うわけで、新しくこっちに来たフェンリルのメンバー二人を明日、文月学園に転入させるからね。今日空港に七時半ぐらいに来るから迎えに行つてあげてね。場所はユークリウッド達を迎えに行つた所だから」

「話の冒頭から何言つてんだよアンタはああああああああああああああああ!!!」

いきなりジェイルに呼び出されて関係者の転入宣言。腹立つな、この人!しかも別の警察の所からいきなり来たのか!?!さらにはいきなり迎えに行け宣言!何この人?嫌がらせ?ツッコみ所が満載なんだけど?

「大丈夫だよ。君の両親がいる場所からだから」

「え?」

そうなのか?じゃあ、知り合いかもな……………つて!

「それでもいきなりすぎだろ!なんで前日に言つんだ!そしてなぜ俺!?!他の奴らは!?!」

「そうかもね。じゃあ、君に案内とかの世話を頼むよ」

「今の会話で世話係って言葉が出てくる要素はなかったよな!? 他の奴らは!?!」

案内とかの話じゃなかったよな!? なんで俺が迎えに行くとかの話だったよな!?!

「他の人たちには言っていないよ」

「は?」

「なぜなら……………君に頼みたいからなんだ」

と、真剣な顔つきで言うジェル。

「本音は?」

「リュウトが居たからちよつどいいと思っただけ」

「でしょうね!?!」

今ならスンドを出せそうだ。スター ラチナ クレ ジーダ ヤ
モンドを。

「なんでそんなに怒っているんだい? とりあえず落ち着きたまえ」

バキッ！ドカッ！ボコッ！

「よう、トーレ。今このマッドサイエンティストに鉄拳制裁を行っている所だ」

メキッ！ドシユッ！グチャッ！

「いや、それは見ればわかるが……………」

バキッ！バキッ！バキッ！

「ちょっと、トーレ！？何故止めてくれないんだい！？音も段々残酷で普通殴って出ないような音が出てるよ！？」

「HEY！HEY！HEY！」

ドムッ！バキョッ！ベキッ！

「リュウト！？キャラ変わってないかい！？」

「いえ、ドクターの自業自得な絵が浮かんで……………」

「私のリュウトに対しての突っ込みは無視！？」

「HEY！SAY！JUMP！」

バキッ！バキッ！バキッ！

「まさかの！？」

「ところでリュウト、もうそろそろ止めた方がいいぞ」

「おお、トーレ。助けてくれてありがとう。できればやられてた時に助けてほしかったけどね。そして今のリュウトに対してはツツコむべきと思うよ?」

「このままドクターを殺したら犯罪者になってしまっぞ?」

「私の心配は!?!」

「安心しろ、トーレ。四分の三殺しにするから」

「安心できないよ!?!ほぼ死んでるから!?!」

「それなら安心だな」

「そこ!安心しちゃダメ!」

「では再び!」

バキッ!バキッ!バキッ!

暫くこの部屋では何かを殴るような音が響き、フェンリル七不思議の一つ「謎の打撃音」として広まっていったかどうとか。

てなわけで、仕方なく例の空港へ向かいました。

しかし、誰だろうな。知ってる奴だったらいいな。ジェイルの奴、教えてくれなかったし。

「リュウト？」

「ん？」

誰かに背後から声をかけられた。後ろを向けば

「お前は……………シャルか？」

「うん！久しぶり！」

「久しぶりだな、シャル！元気にしてたか？」

「うん！リュウトも元気そうだね」

かつては共に警察学校で訓練をしていた濃い金髪でそれを首の後ろ

で束ねている女性、シャルロット・デュノアがいた。

彼女とは中学の時から同じ学校だった為三年間の付き合いだな。レグルスの事で落ち込んだ時に見ず知らずの俺を慰めてくれたっけな？あの時は本当にうれしかった。シャルは愛称だ。

「ところで、なんでシャルはここにいるんだ？」

引っ越しか？

「え、僕は今日からこのフェンリルに入るんだよ？」

……………ん？

「なあ、シャル。もしかしてお前さ、今迎えの人を待ってるとか？」

「へ？なんでリュウトが知ってるの？」

ああー、なるほどね。

「俺が迎えの人だ」

「え！？そうなの？」

聞いていなかったのか？

「ジェイルから聞いてなかったのか？」

「うん。誰かとは聞いてなかったんだ」

ジエイルよ……………誰が迎えに来るかぐらい言つとけよ……………。迷子になるぞ？

「ところで二人つて聞いたけどもう一人は何処だ？」

「ああ、もう一人は「すまん、シャルロット。待たせた」来たみたいだよ。」

「ん？そこにいるのは……………おお！我が嫁ではないか！」

「もうツツコまないぞ。慣れたからな。ラウラの嫁呼びは」

「お、お疲れ様です……………」

今、俺を『嫁』と呼んだのはラウラ・ボーデヴィツヒ。

彼女も警察学校とともに訓練をした仲だ。長い銀髪で左目には眼帯をしている。

その訓練で色々ありましてなぜか『嫁』と呼ばれるようになってしまった。

まずなぜ『嫁』と呼ぶかと言うと『日本では気に入った相手を「嫁にする」というのが一般的な習わしだと聞いた。だ、だからお前を私の嫁にするッ！／＼／＼』と言われて何かをされた。その後は覚えていない。気が付いたら救護室のベットにいた。いまだに何をされたかは思い出せない。（されたことはキス。恋愛などに免疫が無い為キスされて気絶。その後、その学校でシャルなどの一部の女性が暴走した。ちなみにリュウトはラウラの嫁発言を「恋人」としてではなく「仲間」として気に入っていると勘違いしていることが

判明。この際、ラウラは結構落ち込んだという)

「久しぶりだな！ところでなぜ嫁がここにいる？」

「ああ。俺が迎えの人だからだ」

「そうか！それでは嫁よ！案内を頼む！」

「はははは……わかったわかったって。じゃあ行くか」

「うん。よろしく」

とりあえず俺は二人を連れてフェンリルへ戻った。

「よく来たね二人とも。ようこそ。まあ、座りたまえ」

「……………質問いいですか？」

「私もあるのですが」

シャルとラウラがそう言う。

「何かな？」

「……………どうしてジェル博士はミイラみたいになっているのですか？」

その通り。ジェルはただ今まさにミイラ男のような状態。包帯で全身ぐるぐる巻きに（顔はかなり多めで）されていた。

「……………まあ、いろいろあるのだよ」

「その通りだ」

「（絶対リュウト（嫁）がやったんだね（な）……………）」

こいつの発言は腹が立つぞ？

とりあえず、俺とシャルとラウラとジェルでこれからについて話した。

そして、仕事について話し終わった。

手抜きとか言わないでくれよ？いろいろな事情があるんだ。

「それで、学校の事なんだけどね？」

あ、もう大体予想はついている。

「そこら辺の県立高校に

」

何！？意外だ。てっきり文月にFクラスで行かせると思っていたけど。

ラウラが来たらしいろまずい気がするし。嫁発言でFFF団にまた追い掛け回されるかもしれないし。

まあ、なににせよ助かったかな？少しさみしいけど。

911

「と、思ったけど文月に行かせるからね。もう手配は済んでるし。ちなみにリュウト達と同じFクラスね」

「まさかのフェイント！」

結構酷くね！？いきなりストレートと思ったらフックだったぐらい！いや、別にそこまで酷くないか。

「えーっと、学園側からの許可とかは？」

「心配しなくてもとってあるよ。後は、住むところだけど……………」

「……………（ウルウルウルウルウル）」「

「……………（滝汗）」

「……………（ニタア）」 ジェイル

ドゴオ！ ジェイルの顔面にリュウトの裏拳がHit！

ドサツ！ ジェイルダウン！

今の俺の攻撃は悪くないはずだ。きっとそつだ。

「……………わかった。セラ達に事情を話す」

「……………！（天使の笑顔）」

この場でムツツリーニがいたらシャッター音でうるさくなるだろうな。

（……………男として当たり前だ）

……………なぜか今ムツツリーニの声が聞こえたような？

「とりあえず、俺達はもう行くか」

「ねえリュウト。……………ジェイル博士は？」

「ほっておけ。すぐに復活するだろう」

さすがラウラ。よくこ存じで。

「と言っわけで帰るぞ」

「え、本当に無視なの？え〜っと、失礼しました」

真面目だな。シャルは。

「おい、ドクター。……………おかしいな。リュウト達だけが出てきたからここにいると思った……………って！？どうしたドクター！なんでぶっ倒れてんだ！？って気絶してるし！！」

その後、ノーヴェが結構焦ったとか。

「なるほど……………それでシャルロットさんとラウラさんがここに住むのですね？」

「はい。おっしゃる通りです。セラ様」

現在、俺の家では和室にてセラ達への弁明会が始まっております。

皆星座で位置は神崎家の俺以外の全員が玄關側で俺とシャルとラウラがまるで説教をされているように見える図です。

「はあ……………元々ジェルさんが無茶苦茶なのは知っていますので今回は不問といたします。ですが、これからは私たちへの相談をお願いします」

「了解！」

「それでは今日はもう解散にします。リュウト、食事をお願いします」

「わかりました！」

俺は今のセラには逆らえませんが。なんか威圧感が。ユ一の視線もなんか怖かったし。

取り合えず、更に賑やかな食事を終えて風呂に入ったりなどをして本日は就寝しました。明日からシャル達もFクラスか……………。FFF団への言いわけでも考えておくか。

翌日！

シャルside

「う、うん！………朝かあ」

いつもより早く起きてしまった。登校時間までにかなり余裕がある。

今日から僕は文月に通うんだっけ？

しかもリュウトと同じクラスで。ジェイル博士と教えてくれたリンドウさんには感謝しないとね！リンドウさんによるとライバルはかなり多いらしい。確かに訓練生の時でもリュウトは人気がかなりあ

ったからなあ。絶対に負けられない！

「さてと……………あれ？」

ラウラの布団には誰もいない。

もう起きたのかな？

……………いや。もしかして！

リュウトside

「ん……………朝だな……………」

よく寝たな。さて、早めに朝飯作って着替えて「ん……………」……………
……………（汗）

今この瞬間に大体予想がついた。もう慣れたから。嫌な慣れだけど
な！

まずはベッドを確認。

膨らみはなぜかいつもより少し大きい。

布団の足先になぜか足が四つあり。

二つは俺。残り〃？

エリオは別のベッドで寝ているので可能性はない。

そして、エリオの声ではなく違う声が俺の布団から聞こえる。

布団からは銀髪がはみ出ている。

よし、犯人確定。間違いないな。

ガバツ！

布団をめくると予想通りの人物が寝ていた。

「……………何してんだラウラ」

昨日からこの家の住人となったラウラが寝ていた。しかも全裸で。

「ん……………なんだ……………？朝か……………？」

「ああ、朝だ。いつの間に入ってきた？そして何か着ろ」

「夫婦とは包み隠さぬものと聞いたぞ？」

「間違つた知識を組み込みやがったクラリツサの処刑は捨てといてとりあえずなぜここにいる？そして何か着る」

「夫の私が嫁のベッドにいるのは当たり前だろう」

「まず俺はお前の嫁じゃない。ってか、それを言うなら婿だろ？そして何か着る」

「いいではないか。別に」

「色々とよくないだろうが。そして何か着る。もう四回目だ」

「日本ではこういう起こし方が一般的だと聞いたぞ？将来結ばれる者同士の定番だと」

「やっぱりクラリツサ殺す。そして何か着る。頼むから」

「それじゃあ、私と『聞かせられないよ！』や『聞かせられないよ！』をしてくれないか？／／／／／／」

「交換条件のランクが違いすぎないか！？」

いろいろ間違つてるだろ！

ガチャ！

「やっぱりラウラ！ここにいた！」

ここで怒りの形相をしているシャル選手の入場。

「何だ？どうしたシャルロット」

「何だ？じゃないよ！どうしてラウラがリュウトのベッドにいるの！？布団をもらったじゃん！」

「夫婦とは」

「もういい。無限ループになるから。とりあえずラウラ。エリオが起きるまでにとっとと着替える。俺は朝飯を作るから」

そう言つて俺は部屋を出た。逃げ出したでも可。あいつの寝るときに裸になる癖は直しておくべきだと俺は思う。

「最初の頃の嫁は慌てていたが最近リアクションが冷たいんだが

……………」

「それ、多分慣れたんだと思うよ？」

「そうか。なら朝、私が嫁の『聞かせられないよ！』を

」

「わああああああ！ダメダメダメダメ！絶対にダメ！／／／／／

／

「二人とも女子だ」

『今度こそ俺達の時代だああああああああああ！！』

テンションMAXへ。つてかうるさい。

「うるさいぞ！では、入ってくれ」

ガラッ。

はい。予想通り。シャルとラウラが入ってきた。

モブ達よ。顔がにやけているぞ？ぶっちゃけ気持ち悪い。後、明久とムッツリーニも。

「シャルロット・デュノアです。生まれはフランスです。日本についてはもう慣れていきます。これからよろしくお願いします」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。生まれはドイツ。これからよろしく頼む」

ラウラも自己紹介がすっかりしてきたな。あいつ、自己紹介で名前しか言わなかったからな。今ではすっかり丸くなってくれた。いいことだな。

「ちなみにそこにいる神崎リュウトは私の嫁だ」

「やめてくれない！？別に嫁じゃないし！！」

『リユーちゃんとのユリキタアアアアアアアアアア！！』

「アレ！？お前らにとって俺はもう男としての認識は無し！？」

FFF団が来ないのはいいが複雑だ。と言っかなぜリユーちゃんが広まっているんだ？

「黙れ！うるさいぞ！ではこれでHRを終わる！」

ちなみにリユーちゃんが広まっていたのはムッツリーニが清涼際の時のリユーちゃんの写真を広めていたからである。

「……………今までで一番の売れ」

『リュウト（君）（神崎君）！！どづいづこと（だ）（ですか）（なの）！！…』

「説明するから落ち着け。そしてなんで愛子と優子とレグルスまで来ているんだ？ライガとはやてまで」

「面白そうだから」

理由がおかしい。というか、Aクラスまで聞こえていたのか？

「とりあえずラウラ、説明」

「うむ。日本では気に入った相手は「俺の嫁」とか「自分の嫁」言うそうだ」

「と、俺の知り合いのバカが間違った知識をこいつに吹き込んだせいであろうな。友達として気に入ってくれるのはうれしいんだがな……………」

『（き、気づいてない…？）』

改めて恋愛感情が皆無のリュウトである。

「ところでリュウト。二人とは知り合い？」

「ああ。警察学校での仲間だな。三年間一緒に訓練して仲良くなった。楽しかったな」

「う、うん……………／／／／／」

「そ、そうだな……………／／／／／」

「ん？どうした？」

「「何でもないよ（ぞ）！／／／／／／／／／」」

『（ああ、またオトしたんだ……………）』

がんばれリュウトラバース。

「そういえば他にも知り合いがいると聞きましたか？」

「ああ、レン。一夏達のことか。シャル、あいつらは元気か？」

「うん。元気だよ」

「こっちに来るかどろかは知らないがな」

「来たらまた賑やかになりそうだな」

そう皆と談笑していたら、

キイイイイイイイーン！

ん？何か近づいてくる感じが……………。

窓を向くと。

何かが迫ってきている…！

「なっ！？全員伏せろっ…！！」

『…！』

『えっ！？』

フェンリル組は気付いたらしく皆もすぐにしゃがんだ。

パライイイイイイイイイーン！！

謎の物体がFクラスの窓をぶち破って入ってきた。幸い全員怪我はないようだ。

ガラッ！

「何が起こった！？また吉井が何かしたのか！？」

アイアンマンが気づいて教室に入ってきた。と言っか、なぜすぐに明久が思いつくんだ？

とりあえず、物体を確認する。

「……………人参？」

そう、物体は人参でした。まさか……………。

『あっはっはっはっはっはっは！サプライズはどうだったかな、リユー君？』

プシューウウウウウウウウツ！！

煙を立てながら人参はパカッと二つに割れて笑い声と共に長い紫色の髪をしてまるで不思議の国のアリスのような格好をし、更にウサ耳のカチューシャをした女性。

篠ノ之束が出てきた。

「では早速久しぶりの再会を祝ってキスをしよ　　！！」

ピョン！　リュウトに向かって飛んでくる束。

ガシィ！　即座に束の顔面にアイアンクローをするリュウト。

「何がしたいんだよ束。ってか、普通に入ってこれないのか？」

「ぐぬぬぬ……相変わらずちーちゃんみたいに容赦がないね、リュウ君はっ」

と言いつつその拘束から抜けるお前はどうなんだ？

『……………』

他の皆様はポカーンとしてるし。そっか、この中で束知ってるのは俺だけか。

「も〜、相変わらずキスぐらいいいじゃないか〜。私たち夫婦でしょ？」

「違っだろうが。しかも俺はまだ十六だから」

「じゃあ婚約者でいいよね〜」

「お前なら俺じゃなくても他のいい男を取れるだろうが。自分の容姿を鏡で見ている。十分なほど美人だろうが」

「うわぁ〜いい！うれしいことを言ってくれねリュウ君は　でも私はリュウ君以外の男なんて興味ないよ！」

「はあ……………」

まったく……………こいつは損してると思うんだが……………

「あー、神崎。そろそろ説明してくれんか？話に追いつけん」

アイアンマンの言う通りだな。自己紹介ぐらいさせとくか。なんで来たかは知らんけど。

「束。自己紹介はしとけ」

「ええ、めんどくさいな」

「や・れ・よ・?」

「はいはい。私は天才の篠ノ之束だよ。はい、自己紹介終わり」
オイオイ。簡単すぎて明久たち固まってるぞ？フェンリル組は名前ぐらい知ってるそうだな。

「篠ノ之束って……………確か、警察内だけでなく世界一の天才と呼ばれていたのにもかかわらず自由奔放に世界を回っている「天災」篠ノ之束ですか？」

「レン正解。何でここにいるかは知らねえけどな」

「私は愛しのリユー君に会いに来たのだよ！」

「よし、今すぐその窓から飛び降りるか何処かへ行くか選べ」

「じゃあここにいる！」

「今すぐどこかへ行け！」

「い・や・」

でしょうね。さすが自由人。

「あー、すまないがここは学校なので

」

「えー、めんどくさいから嫌だよー」

「東、俺達のフェンリルに居る。たまに遊びに行くから。お人よしも多いし。何よりジェルや榊博士もいるしリンドウさんは優しいからな」

「うーん。リユウ君がそういうなら仕方ないな。後で来てよねー」

そう言つて束はさっきの人参に乗って、

バシユウウウウン！

また突き破った窓から出て行った。だから普通にできないのか？

「……………ねえ、リユウト。さっきの人は？」

「篠ノ之束。自己紹介通りの天才であり天に災害の災と書いて「天災」でもある」

「て、「天災」？」

「そうだ。神出鬼没で興味ない人間にはまともに相手しない。さっきの鉄人みたいにな。あまり悪く思わないでくれないよ？いろいろあるんだ」

「そ、そうなんだ……………」

「す、すごい特徴的な人なの……………」

「天才、か……………あれがか？」

「シグナムの言う事ももつともだと思いがあいつは本当の天才だ」

「そ、そうなのか？」

「そうなんだよ、ヴィータ。現に入ってきたときにガラスの飛び散り方が変わる？」

「え……………あ！ホントだ。あまりこっちへ飛んでない……………」

「そう。結構速かったけど急激にスピードを緩めていたんだ。じゃないと俺達に激突してるからな。それに急な減速なんて普通そんなの飛行機でも無理だ。が、あいつの作った人參はそれをやった。しかも着陸も綺麗にだ」

「それに人が三人ぐらいしか入れないような物で」

「これがあいつが天才だという証拠だ」

天才はともかくあんな性格になってしまったのには理由があるんだよな。

「ところで神崎君は篠ノ之さんとは知り合いなんですか？」

「ん？ああ。中学の時に会ってからなんで知らねえけど懐かれた」

『（と、年上まで！？）』

さすがフラグ建設士。大人までオトしています。

「まあ、癖のあるやつだけだな。とりあえず鉄人。俺はガラスの後片付けするんで」

「あ、ああ。わかった。もうすぐ授業だから早めに終わらせるように」

これからあいつには普通に入ってくるようにキチンと説教しておかないと……………。

「てなわけで束さんはリユウ君の家に住むことになりました！」

「フェンリルに来てみれば、いきなり何言ってるんだよ！」

学校からフェンリルへ来ていきなりのお泊り宣言。アレ？俺の周りの人ってまともな性格した奴いないような……………。

「いいじゃん、いいじゃん！他の人も泊めてるんでしょ！じゃあ、束さんもいいじゃん！」

「もう腹いっぱいなんだよ！と言うか狭すぎるだろうが！」

「ぶ〜！」

「ぶーたれるな！」

ここまで腹が立つと逆に清々しい。

「まあまあ。いいじゃないか」

「榊博士。今の会話では普通束が止まるのを防ぐべきと思うのですが!？」

「面白そうじゃないか」

「ジェイルの二の舞になりますか？」

「それは勘弁してほしいね。束、こちらの用意した部屋に泊まってもらいたいんだが」

それならシャル達もそこに泊めるよ。

「え〜、サー君も反対なの〜？」

「だからサー君はやめてほしいんだけどね？とりあえずここにいるメリットはいつでもモリユウトを襲えるということだよ。彼の家には養子がいるからね。部屋には強力なカギに音が外に漏れないように防音装置も付けてるから」

「おお〜！それは名案！ナイスアイデア！」

「おお〜！それはダメ！バットアイデア！」

「え〜。いいじゃん。東さんと言う美女が抱けるチャンスだよ？」

「そんなチャンスは焼却炉で燃やす」

「つれないな〜」

「はあ……………」

自由人過ぎる……………

「仕方ないな。じゃあ、これからここに泊まるからたまに遊びに来てね〜。あ、ちゃんと許可はもらってるから」

「……………まあ、それくらいならいいか。じゃあな束。飯作ってやんないといけないから」

「じゃあね〜！また会おう！」

束も少しは柔らかくなったかな？いいことだ。

榊SIDE

「さてと、それじゃあさっそく。遊びに来たリユー君を襲って既成事実を作るっ！」

「うん。やっぱりやめといたほうがいいと思うよ？」

「え、どうして？」

「彼にそんなことをするのはやっぱりやめた方がいいと思うよ」

「じゃあどうするのさ。すごい鈍感なんだよ？リユー君」

「その鈍感を克服するのが面白いんじゃないか。誰がリュウトの心を掴むかが気になってね。正々堂々勝負して勝てば彼も認めると思うよ？」

「うん。じゃあそうする」

さて、ライバルはかなり多いね？確か千冬も彼に恋していたような気が………強敵ぞろいだね？

フエンリルでもいろんな人がリュウトに恋してるからね。勝つのは誰かな？

たまには彼女達にサポートしてあげるかな。ジェイルには期待できそうにないけど。

リュウトSIDE

ゾクッ！

「あ、あれ？」

「どうかしたか、嫁よ」

「あ、ああ。なんかこれから忙しくなる感じが」

「仕事かな？僕たちもそうなるのかな？」

「いや、なんというか……………忘れよう。ネガティブはイカン」

「そうですね。リュウトは明るいのがいいんですから」

『常に明るくいてほしい』

「明るくないリュウトなんてリュウトじゃないからな！」

「パパはたのしいひとだもんね！」

「そうですね、お父さん！」

「明るいお父さんに僕はあこがれているんですから！」

「ははははは……………ありがとな。それじゃーいただきます！」

『いただきます!』

これからリュウト争奪戦はさらに激化する恐れがありそうだ。

鈍感リュウトはどんな風に攻略されるのか!

「しかし、東が来たら千冬も来そうだな。……………ツバキさんと千冬の訓練を合わせてみると……………(ガクガクブルブル)」

その前に主人公が問題アリかな?

第17問 色々襲来!?!というより転校生多くないですか?BYレン(後書き)

ISからの参加です!今のところの参加はシャルとラウラと束です!

リュウト「またマッドタイプが増えた……………しかも、千冬が出るような気が……………」

HHHHHHHA!さらに騒がしくなるぞ!千冬は何時だそうかな?

リュウト「束のせいで俺の気苦労が絶えないんだが……………」

頑張れ主人公!

リュウト「んで?次回は?」

おうよ!次回からは少し現実の季節では遅いがプールの話だ!

リュウト「投稿する時期を考えたら遅いな。それに人数がかなり多くなるような気が……………」

ま、まかせんしゃい!(汗)

リュウト「……………期待はできないな」

う、うるさい!誰かオラに文才とアイデアを

リュウト「他人に頼るのはやめい!ってかそのネタさっきやった!」

次回もよろしく！

リュウト「無理やり終わらせた！」

では、サラバッ！

リュウト「無茶苦茶すぎるー！」

PVアクセス100、000突破キタ

！ってなわけでアンケート。

はい！タイトル通りPVアクセスがようやく100、000突破しました。

リュウト「よく頑張ったな駄作者」

レン「これからもがんばってください駄作者」

否定はしないさ！でも頑張った甲斐があったと思う。

リュウト「んで？アンケートって何だよ」

うん。これからもさ、いろんな作品を入れ込もうと思うんだけどね。

レン「あ、まだ入るんですか？」

リュウト「ほとんどむりくり入れてるけどな」

そこでアンケート！どの作品のどんなキャラクターを入れて欲しいかです！

二人「読者に頼るな！」

いや、なんか自分勝手に入れてるとぶっちゃけ読者に不人気になりそうで、アンケートの結果なら皆様納得してくれると思うって。

リュウト「もうすでに不人気だろ。しかも何に納得するんだ？」

シヤラップ！辛い現実から目を背ける俺に現実を突きつけるな！

レン「現実逃避ですね」

と、とりあえずアンケートの内容はどんな作品のキャラクターを入れるかです！（半泣）

ただし私、アナザーは知ってる作品とあんまり知らない作品だってありますのであんまり知らない作品については無効にさせていただきます。中途半端だと変な感じがするので。投票は2作品希望までOKです！

リュウト「今でも十分中途半端だぞ？」

………と、とにかく！よろしく願いします！そのキャラクターの登場シーンに希望がある場合はそれを書いてくだけでも構いません！期限は10月になるまでです！キャラの位置や設定、女性キャラの場合誰のヒロインにするかなどもOKです！感想で出てきている「作品」に投票してくれてもOKです。「作品」に設定の注文を追加しても構いません。大体2、3作品は無理やり出そうと思います。

オリジナルキャラの注文もOKします！その時はそのキャラについて詳しく説明をお願いします。

ではサラバッ！

リュウト「こんな駄作者ですが。どうかよろしく頼む」

レン「それでは僕達も失礼しますね」

第18問 買い物ではメモを忘れるな。忘れたことないけどな B Yライガ(前)

ユニークアクセス10000突破したZE!

リュウト「ようやくか」

今までこの作品を見てくれた皆様!ありがとうございます。

リュウト「なんか最終回みたいな言い方だな」

んなわけあるか!まだ続くぞ!目指せ第100問!

リュウト「1年以上かかりそうだな」

それでは本編どうぞ!

リュウト「無視かよ……………」

第18問 買い物ではメモを忘れるな。忘れたことないけどな B Y ライガ

明久SIDE

平穏な週末の夜。ただ今僕の家には雄二とコウタとルークが泊まりで遊びに来ている。

本当はリュウト、レン、村雨君も来るはずだったんだけどリュウトはフェンリルで色々、レンは父と母の手伝い。村雨君ははやてさんとの新聞製作で来れないらしい。

「あれ？三人とも何か買ってきたの？」

「食い物だ。お前の家にはロクな物がないからな」

「よくあの冷蔵庫で生活できたな」

「ってか、何もなかったぞ？」

「失礼だな。何にもないってことは無いよ？ちゃんとカロリーになるのはあるよ？」

「それが油とか砂糖とか普通は食べないような物しかないんだろうが」

「サラダオイルを飲む趣味は無いぞ。冷蔵庫空っぽって」ガチャッ。

「失礼だな。空っぽじゃないよ」

「今冷蔵庫にあるこの保冷剤で頭を冷やせ」

僕はルークに保冷剤を投げつけられた。

保冷材の水は飲めるかな？（注意：絶対にしないように！）

そう告げて三人はテーブルの上にビニール袋を置く。

「へえ」。差し入れなんて、ずいぶん気が利くね」

で、中身は

- ・コーラ
- ・ファンタ（グレープ）
- ・スコール
- ・爽健美茶
- ・カップラーメン
- ・カップ焼きそば
- ・ざるそば
- ・冷やし中華
- ・おにぎり（梅干し）×2
- ・サンドウィッチ×2

おお、いろいろあるね。飲み物は一つで食べ物は二つかな？

「それで、みんなはどれにするの?」

「俺はコーラにラーメンに焼きそばにサンドウィッチだ」

と、雄二。

「俺は冷やし中華とおにぎりに爽健美茶にスコールな」

と、コウタ。

「んじゃ俺はフアントとサンドとざるそばで」

と、ルーク。

…………… って! ちょっと!

「貴様ら! 僕に割り箸しか食べさせない気だな!」

「」「」割り箸食う気が!」」「」

「無機物のレジ袋よりは食べ物に近いよ!」

「割り箸はやらん。俺達が素手でラーメンやそばを食う羽目になる」

それは確かに結構シユールだ。

「ほら、ちゃんとおまえの分も買ってある」

「え? そうなの?」

「もう一つの袋を見るよ。そこにあるぜ」

あ、ホントだ。どれどれ……………？

・こんにやくゼリー

・ダイエットコーラ

・ところてん

「全部カロリーゼロじゃないか!!」

「……メタボにならないように俺達からの気遣いだ」「」

「僕の食生活のどこにそんな心配があるんだよ！」

「いやいやいや、糖分と脂肪ばっか取ってるんだろ？」

「コウタ！僕はそれしか取ってないんだよ！」

「よく生きてたな」

「うるさい！もう怒った!!」

僕はダイエットコーラを取り出して構える。

「何だ？やる気か？」

「俺に勝てるのか？」

「いいぜ、相手してやるよ」

「なめるなよ！まだいける！」

「ここからが本気だ！」

「僕だって負けるもんか！」

「Yeah! Let's Party Time!!」

「

しばらくお待ちくださいm()m

「……なあ」

「……一時休戦にしないか？」

「……コウタに賛成」

「……………そうだな。この戦いはあまりにも不毛だ」

気が付けば全身ゼリーやところてんやコーラやなぜかおにぎりやサンドウィッチまみれだ。ちなみにサンドウィッチはタマゴだった。

「明久く。シャワー借りるぜー」

「うん。タオルは適当なのを使ってもいいよ」

「言われなくてもそうさせてもらっけどな」

僕にそう告げるとコウタは気持ち悪そうに來ているシャツを摘みながら脱衣所へと消えて行った。

あーそういえば。

「言い忘れてたんだけどさ」

『なんだよ』

ギユイ 蛇口をコウタがひねる音（温水）

「ガス止められてるから水しか出ないからね」

『ぎゃあああああ（。。。）ああああ！?』

ガチャッ！

「先に言えよ！温水回して冷水が出たからビビったぞ!？」

腰にタオルを巻いているコウタの肌には鳥肌が立っていた。それにしても帽子を取ると少し印象が変わるね。学校でも常に帽子をかぶってたから。

「ごめんごめん。言い忘れてたよ。えっとね、心臓に近い位置にいきなり冷水を当てると体に悪いから」

「誰が冷水シャワーの浴び方説明しろって言った!？」

「なに熱くなっているのさコウタ。そうだ!冷たいシャワーでも浴びて冷静に」

「浴びたから暑くなってんだよコラ!」

「あー、この様子じゃあシャワーは無理だな」

「やれやれ……。仕方ない。明久、コウタ、外に出るぞ」

「どこに行くの?」

「ちゃんと温水の出るところに行く」

僕たちは雄二の後をついて行った。

「……………なるほど」

今僕たち四人の目の前には懐中電灯でただでさえトラウマ物になるような顔を下から照らしている鉄人がいる。

「それで勝手に忍び込んでシャワー浴びてついでにパンツ一丁で泳いでたというわけだな！何か言い訳はあるか！？」

「……………こいつが悪いんです！！」「……………」

僕と雄二とルークとコウタが一周するようにそれぞれの頬に指を指す。

「雄二がまともな差し入れ持ってこないからだろ！？」

「差し入れをこれにしとけって言ったのはルークだろうが！」

「コウタが金がねえから明久はこれにしとけって言っただろ！」

「元と言えば明久がガス代払ってないのが悪いんだらうが！」

「水が出るだけマシじゃないか！」

「……………水すら出ないことがあるのか！？」「……………」

「……………もういい。よくわかった」

「わかってもらえましたか」

「よかった、わかってくれたんスね」

「それじゃあ、そろそろ帰るか」

「そうだね。それじゃあ失礼しま

」

ガシッ！x2

ドムウ！x2

「……………ぐえっ！？」

僕と雄二は頭を押さえつけられ、コウタとルークは足で腹を押さえつけられる。

あれは酷くない？

「お前らが底抜けもバカだということが分かった！罰として来週末はプール掃除をするように！」

「……………はい……………」

「……………って！イタイイタイイタイ！腹筋が粉々に砕け散りそうです……！」

ルークとコウタがやばいんですけど!?!?

「それは災難じゃったのう……………」

「いや、普通に三人のうちどこかの家に行けばよかったじゃん。不法侵入だぞ?」

気遣うように柔らかな表情を浮かべてくれている秀吉とあきれたようにため息をつくりユウト。

二人は第三、第四の性別疑惑が出ている張本人だ。

「何か言ったか明久?」

「な、なんでもないよ?」

「いや、その反応は絶対何か言った時の反応ですよ?」

レンからの冷静なツッコミ。

「プール掃除なんて考えただけで疲れるぜ……………」

「……………重労働」

「だよな……………あんな広いところの掃除だぜ？気が滅入りそうだし……………せめて褒美でもねーかなー」

「ルーク。褒美というほどじゃないが、『掃除をするならプールを自由に使ってもいい』と鉄人に言われたぞ」

「ん？そうなのか？」

つまり、今週末のプールは僕らの貸切状態ってこと？

「ああ、だから秀吉やリュウト、レンやムツツリーニも行かないか？」

せつかくの貸切だもんね。僕たち四人だけじゃ勿体ない気がする。

四人にはぜひ来てほしい。

まず最初にムツツリーニが頷こうとした。

「ただし、ムツツリーニには掃除を手伝ってもらっけどな」

「……………」

すぐさま動きを止めた。

重労働のプール掃除だから迷うのも無理はない。

「ちなみに姫路や高町達、ようはFクラス女子にも声をかけるつもりだ」

「……ブラシと洗剤を用意しておけ！」

ここで即答するのも無理はない。僕だつてこのFクラスの子供たちの水着が拝めるならなんだつてするだろう。どこぞの借金執事並みの力を発揮してみせる。

「貸切プールねエ……こんな時じゃないとなかなか体験できないからな。暇だし行きますか。あ、ヴィヴィオ達もいいか？」

「別にいいぞ。お父さんが子を置いて遊びに行くなんてずるいだろうな」

確かにそれは酷い。子思いのリュウトはそんなことをしないとと思うけど。

「僕も行きます。フェンリルの仕事も早めに終えていて暇でしたので。掃除も手伝います」

「ワシも相伴させてもらおうかの。ワシも手伝おう」

「あ、俺も掃除手伝うからな」

リュウトと秀吉は水着姿を見せてくれるのだから掃除をする必要はないのに、なんていい人たちなんだろう。

「んじゃ、後は女子たちだな。おい、姫路、高町達も来てくれー」
持ち前のよく通る声で雄二が叫ぶ。

「どうしたの坂本君？」

「何か用か？」

まずやってきたのは高町さんとシグナムさん。

その後皆がやってきた。

「全員来週末は暇か？学校のプールを貸切で使えるんだが、よかつたらどうだ？」

『え……？』

プール、と言う単語に全員が一瞬ビクンと反応する。

「もしかして皆さん予定があつたりしますか？」

「え？い、いや。別に用事は無いんだけど……その、どうしようかな……」

「プ、プールと言えば……水着ですし……」

「そ、そうだよな……水着だし……」

女子はそれぞれ自分の体へ視線を送っている。

「まあ、お前らにはお前らの悩みがあるんだろうが……。一つ言っておくと、リュウトと秀吉は来るぞ。秀吉はリュウトに、リュウトは明久に水着を見せに、な」

『卑怯です（だぞ）（よ）秀吉（木下君）！』

「は、早い者勝ちじゃ！／＼／＼／＼」

「卑怯よ神崎！自分には自信があるからって！」

「いや、俺男だつてば。そして今の雄二の言葉に違和感はないのか？」

僕はリュウちゃんが男なんて認めはしない。

「で、どうするんだ？お前らは」

『行く！（行きます！）（行くの！）』

「う、ウチも行くわ。その、いろいろ準備して……」

『準備………』

複雑そうな顔をしていたが全員OKのようだ。

「いいのか？ティア」

「え、ええ。ちょうど暇だもの。たまには休みも必要と思って」

「そうか。ならいいか」

これで来るメンバーは僕、雄二、コウタ、ルーク、リュウト、カエデさん、レン、秀吉、姫路さん、美波、高町さん、ハラウオンさん、シグナムさん、ヴィータちゃん、シャマルさん、セラさん、ヘルサイズさん、グランツさん、デュノアさん、ポーデヴィツヒさん、リュウトの養子たちとなった。

バンツ！

「私たちも行くで！」

「はやて、落ち着け」

「え！？はやて！？なんでここにいるの！？」

突然、はやてさんと村雨君が入ってきた。ハラウオンさんの質問ももっともだ。

「私たちも行つてええか？」

「アレ？俺もなのか？」

「当たり前やん！」

「ああ、別にいいぞ」

「よっしゃ！そうと決まれば水着を買いに行くで！」

「だからなんで俺まで？」

「ええやんええやん！Fクラスはおもしろい人たちの集まりやからこんなイベント逃したらアカンで！」

「はいはい……………」

……………とりあえず、はやてさんと村雨君も来ることになった。村雨君は強制のような気がするけど。

と言うか、どこから聞いてたんだらう？

「そー言えば水着をそろそろ新調しないと……………」

「そ、それならワシと行かぬか？」

「ん？秀吉もか？ちょうどいいな。買いに行くか」

「わ、わかったのじゃ！／＼／＼／＼（デートじゃな！？デートじゃ！……）」

「あー、リュウト？僕もここに来ただけで荷物に水着がないんだ。だから僕もいいかな？」

「嫁よ、私もシャルロットと同じ意見だ」

「ん？別にいいぞ」

「ありがとうね、リュウト（よし！デートのほうがい計画阻止成功！）」

「助かる（抜け駆けは許さんぞ秀吉）」

「（しまった！読まれておったか！）」

おお、四人は新しい水着を披露してくれるようだ！なんでだろう。すごく気分が高揚してきた。

「わ、私も新しい水着を買いましょうか……………」

「え？セラはもう水着を買ってなかったか？」

「あ、はい。そうでしたね……………（不覚です……………）」

「わ、私も水着を……………」

「シグナム？あなたも水着はもういらないうっていませんでしたか？八神家全員」

『うっ……………！（釘刺された！）』

「（そう簡単にいくとは思わないことです！）」

なぜか彼女たちは凄い心理戦を繰り広げている感じがする……………。

「あ、そうだ坂本君。きちんと翔子ちゃんにも声をかけてあげるんだよ？」

「……………言われなくてもそのつもりだ」

と、雄二は高町さんの質問に答える。

意外だ。雄二なら声をかけずに済ませると思っていただけ。

「雄二もとうとう認めたか」

「いや、ルーク。そんな問題じゃない」

「どういうことですか？雄二」

「いいか、想像してみろレン。俺の立場で、後々になってからこのことが証拠に知られるという状況を」

想像中……………

963

「確実に死に至りますね……………」

「樹海の奥…………いや、湖の底……………」

「ちがうな……………焼却炉だろ」

「俺の死体の処理方法まで想像する必要はないが、まあそんなところだ」

僕としては霧島さんの水着姿も見ることができのだから、僕とし

ては願ったり叶ったりだけど。

「とにかく全員OKのようだな。んじゃ、土曜日の朝十時に校門前で待ち合わせだ。水着とタオルを忘れるなよ」

リュウトSIDE

と言っわけで放課後なんだが。

『ゴメンね！フェンリルの仕事が入って今日は来れないんだ……………』

「あゝ、そうか。わかった。んじゃあな」

PII！

「どうしたんだ？待ち合わせにシャルロットが来ないと思ったら」

「あゝ、シャルき。仕事が入ったらしいんだ。多分書類だな」

「そうじゃったのか……………」

「仕方ないか……………よし、行くか」

まだ日にちはあるからな。今度買いに行くか。

「と言うわけで、着いたんだけどさ……………一ついいか？」

「「なんだ（なんじゃ）？」」

「……………なぜ俺まで女性の水着売り場まで行かなきゃならんだ……………」

そう、俺は自分の水着を選んだ後に秀吉とラウラによって女性の水着売り場まで連行された。

「嫁に私の水着が似合うか聞きたいのだ……………／／／／」

「そうか……………ところでなぜ秀吉も？お前は男売り場で買っただろ……………」

「そ、そうじゃが演劇で女性用の水着もはくかもしれんから……………」

…」

「そんな演劇は嫌だぞ？俺は」

なぜ男が女の水着をはかなくてはならないんだ？

「と、とりあえず嫁よ！選んでくれ！」

「は？俺が選ぶのか？」

「あたりまえだ！行くぞ！！／＼／＼」

「ちよっ！ラウラ！引っ張るなって！」

「ま、待つのがじゃ！ワシも選んでほしいのじゃ！」

「秀吉もかよ！」

結局水着選びには一時間かかった。俺はあまりそういうセンスは無いんだけどな。

「ただいま。今帰ったぞ」

「お帰り〜！リュウト！今度土曜日にプール行くんだろ！セラから聞いたぞ！」

もうハルナまでに伝わってたか。早いな。

「ああ、そうだ。ヴィヴィオ達も来るか？」

「ヴィヴィオもいきたい！」

「えっと……………僕も久しぶりにお父さんと遊びたいです」

「私もエリオ君と同じです」

「うん。んじゃあ、行くか。土曜日だからな」

後からシャルも帰ってきてきて皆で晩飯を食べた。

「そー言えばシャル」

「どづしたの？」

「お前さ、水着ないんだよな？」

「うん。荷物になくてね」

「そうか……………よし」

「？」

「今度二人で水着でも買いに行くか？俺は食材も買わなきゃいけないからな」

「え？……………二人で？」

「おう。一石二鳥だろ？あゝ、それとも一人の方がよかったか？女子だし」

「う、ううん！行くよ！行こう！」

「お、おう。じゃあ、明日行くか！」

「うん！（やったああああ！二人っきりだ！これってデ、デートだよね！！！！！！）」

な、なんかテンション高いな……………。

と言っわけで次の日の放課後。ただ今シャルとシヨッピングモールに居ます。すっ飛ばしすぎとかは言わないでほしい。

「よし、行くか！」

「う、うん。そ、それでね……………／／／／」

「ん？どうした？」

「えっと……………手、繋いでくれないかな？／／／／／」

「手？」

あ、そうか。確かに今は人がいつもより多いな。逸れるのも嫌だからな。

「わかった。はい」

「あ……………うん／／／／／」

シャルは俺が差し出した手をぎゅっと握りしめた。

「よし、行くぞーっと」

「う、うん！／＼／＼／＼（わゝ！わゝ！リュウトと手、手を握ってる……………えっと、こういう時は少し大胆になった方がいいのかな？／＼／＼＊パニック中）」

第三者SIDE

シャルロットとリュウトが手をつないで歩いているときにそれを隠れてみる五人の影が。

「ねえフェイトちゃん……………」

「なに？なのは……………」

「あれって……………手を握ってるよね？」

「そうですね……………なのは」

「アリスちゃんにもそう見えるんだよね？」

「そうだよな、やっぱりそうだよな。アタシたちの見間違いじゃなくて白昼夢でもないんだよね？」

「そうだよヴィータちゃん……………」

「二人とも笑顔ですね……………」

「そうだよね瑞希……………」

『……………よし、O・H・A・N・A・S・Iなの(だね)(ですね)(だね)』

なのは、フェイト、アリサ、ヴィータ、瑞希の五人の瞳は単色でハ
イライトがない。

何とも恐ろしい恋する乙女である。

「何をしてるんですか……………」

「セラちゃんの言う通りですよ？みなさん怖いんですけど」

それを落ち着かせるセラとシャマル。

「じゃあシグナムさんやラウラちゃんや秀吉君やカエデちゃんにユ
ーちゃんはどのなの!？」

「私だつてこらえているんだ……………」

拳を握りしめうらやましそうに二人を見るシグナム。

「私はもうすでに出かけたからな。嫁に水着を選んでもらったぞ」

「わ、ワシもじゃぞー!」

ラウラと秀吉は余裕そうに言う。

「僕は少し我慢だね。家でもあえるしね」

『泊りがけ』

『つらやましい……!』

カエデとユーの言葉で二人とセラとラウラ。最後に遠くにいるシャルをつらやましそうに見つめる女性陣。

「あつ!二人が水着のところへ向かいました!」

「どこの店ですか!シャルさん!」

「その右から三番目のところです!」

『スリーキングミッシェンスタート
追跡開始!』

ちよつとしたソッド・スーク気分の女性陣であった。

「！」

リュウ：ん？

「どうしたんだシャル？」

「えっと………ちょっと来て！」

「は？ちよっ！？」

リュウ：水着を見ていたシャルだがいきなり俺を引っ張って店の奥にある試着室まで連れて行かれてそのまま一緒に入ることになった。なんで？

(うつつ、勢いでこんなことしちゃったけど、どうしよう……)

シャ：僕、シャルロットは気付いていた。リュウトに好意を寄せている彼女たちが後をついてきていたことを！リュウトは気が抜けていて気づいてなかったみたいだけど。

「何してんだよシャル！」

(へ、変な子と思われてないよね？)

「え、えーっと、水着を見てほしいかなーって」

「そ、それなら俺は外に」

「だ、ダメ！」

リュ：いや！ダメって言われてもな！？試着室に男女二人で入るなよ！

シャ：とりあえず僕は試着室のドアを少しだけあけて外を覗く。

「クツ！見失ったの！」

「探して！絶対どこかにいるはず！」

「この店を中をくまなく探してください！」

シャ：なのは、フェイト、アリサの的確な指示でこの店は完全に包囲されているんだよね。と言うか、なのはとフェイトって統率力がすごいね。

とりあえず、彼女たちに見つかったら絶対に邪魔されるッ！

それだけは嫌！

「外に誰がいるのか？」

「え？だ、誰もいないよ！とにかくここにいて！すぐに着替えるから！」

「はっ！？！ちょっと！！」

リュ：…そう言うなりシャルはいきなり上着を脱ぎ始めやがった。俺はとっさにシャルに背を向けた。

シャ……うっ……どっしよっ。／／／／

リュ：なんだ！？シャルは何がしたいんだよ！理解できない！ホントに何がしたいんだ！？

シャ：うわぁん！もう！やっちゃえ！／／／／／／／

シュル……………

リュ：んなつ！ホントに脱ぎだしやがった！イカン。何も考えるな。落ち着け！落ち着け俺！宇宙は俺の一部であり俺は宇宙の一部でもある！着くずれの音とか聞こえるけど気にするな。気にしてはイカン。甘い香りがするけど　　ってすごく気にしてるじゃん

か！失せよ煩惱！爆ぜよ想像！耐える理性！別のことを考えるんだ！え〜つとえ〜つと……………そうだ！元素記号だ！（パニック中のため早口です）水素、ヘリウム、リチウム、ベリリウム、ホウ素、炭素、窒素、酸素、フッ素、ネオン、ナトリウム、マグネシウム、アルミニウム、ケイ素、リン、硫黄、塩素、アルゴン、カリウム、カルシウム、スカンジウム、チタン、バナジウム、クロム、マンガン、鉄、コバルト、ニッケル、銅、亜鉛、ガリウム、ゲルマニウム、ヒ素、セレン、臭素、クリプトン、ルビジウム、ストロンチウム、イットリウム、ジルコニウム、ニオブ、モリブデン、テクネチウム、ルテニウム、ロジウム、パラジウム、銀、カドミ「も、もう、いいよ……………／／／／／／」「え！？」

リュ：思わず声が出てしまった。恐る恐るシャルの方を振り返る。

セプレートとワンピースの中間のような水着で上下に分かれているそれを背中でクロスしてつなげるという構造になっている。色はイエロー。シャルに似合っている。

(な、なんでリュウトは黙ってるんだろ。み、水着が変だったかな？あ、改めて見ると、これって結構大胆な水着だね……………／／／／)

リュウ：い、いかなんて反応すればいいかわからん。

(ちなみにラウラの水着を見た時もこのような反応でした。秀吉は男と思っているので女物を着ても特に何もなかったBYアナザー)

「あ、あの、一応もう一つあって」

「い、いや！シャルにすごく似合ってる！俺はそれがいいと思う！」

(そ、そうなんだ！似合ってるんだ……………／／／／／)

(は、恥ずかしくてつい思ったことが全部出ちゃった！恥ずかしいセリフじゃんか！)

(あなたがいつも無自覚に言ってる方が恥ずかしいですBYアナザー)

「じゃ、じゃあ、これにするねっ！／／／／／」

「あ、ああ。それじゃあ俺は出てる(ガチャっ)は？」

シャ：今ここで僕は致命的なミスに気が付いた。少しドアを開けて外の様子を見たとき。ドアを閉めた後に鍵を閉めてなかった。さらに靴は中に入れているので当然はたから見たら誰もいない試着室。

入ってきたのは

「か、神崎君にデュノアさん!？」

「「た、高橋先生……………」」

リュウトSIDE

「水着を買いに来たからと言っても試着室に二人で入るのは感心しません。教育的にもダメです。それに」

「「す、すみません」」

高橋先生に見つかりただ今店の中で正座させられ説教を受けています。

やっぱり二人で試着室に入ったのがまずかったんだよな。

すぐに出ておけばシャルも怒られなかったよな。俺のせいだな。

「はあ、今日はこれで終わりにしますから次から気を付けてください」

「はい」

「それでは失礼します」

高橋先生は去って行った。先生も水着を買いに来たのか？

「ん？あゝシャル、そろそろ買い物に行ってもいいか？」

「え？あ、うん。いいよ。僕も手伝うよ」

「そうか、サンキユ」

俺達は説教を受けた後今度は食品売り場へと向かった。

ギョッ

「ん？」

気が付いたらシャルが俺の手を握っていた。

あー、逸れないようにね。

「ダメ……………かな？」

「いや、別に。行くか」

ちなみに女性陣は

「水着店に居ないのならいったいどこに!？」

「くまなく探すの!」

「なのはちゃんの言う通りです!探し続けてください!」

「嫁よ……………いったいどこへ!？」

「このままじゃマズイな……………クッソ!どこに行ったんだ!」

リュウトとシャルが行った方向と逆の方向を探していた。

と言っわけでただ今食品売り場にいます。

「今日はどうするの？」

「ん〜。そうだな……………カレーかサラダにするか」

「カレーの方がいいと思うよ。多めで」

「エリオは一体どこにあの量の食い物が入るんだ？」

「あ、あれは凄いやね。見てるこっちが辛いんだけど……………」

「それでも太らないというのもすごいよな」

「……………太ってないよね？」

「ん？何か言ったか？」

「う、ううん！なんでもないよ！」

「そうか？じゃあ次は……………」

二人で話しながら買い物をしている。本当にエリオはあの量をどいにしまっているんだろうか？謎だ。

ちなみに買い物中に

「何だあいつら？付き合ってたんのか？」

「ケツ！リア充が！モゲロ！」

「ハゼロ！」

「最近の高校生は進んでいるのねえ、奥さん」

「そうですね。最近の子は皆あんな感じなのかしら？」

「うらやましス！」

「これは夢だ！そつだ夢なんだ！」

「俺の嫁がつ！」

などいろいろ聞こえてきた。テンション高いな。そして何人かは俺に対して危険な発言。

「ねえ、リュウト」

「なんだ？」

「僕たちさ……………つ、付き合ってるように見えるのかな？……………」

「他の皆様方にはそつ見えているらしいぜ？」

「そ、そつなんだ……………／／／／ねえ、僕と付き合えたら嬉し

い？」

「当たり前だろ？シャルみたいな美人に付き合えたらうれしいに決まってるだろ。まあ、シャルは俺みたいな奴よりほかの奴の方がいいだろ？」

「……………みたいな奴なんて言わないで」

「へ？」

「リュウトは自分のことを過小評価しすぎだよ。リュウトはいい人だよ。優しいし一緒にいると楽しくなるし明るくなる。だから自分のことをみたいいな奴なんて言わないで」

「シャル……………善処する。ありがとな」

「ううん。気にしないで。じゃ、行こう？早くしないとみんな待ってるかもよ？」

「そっだな。少し急ぐか」

シャルが俺のことをそう言ってくれたのが少しうれしかった。ありがとな。

シャルSIDE

「当たり前だろ？シャルみたいな美人に付き合えたらうれしいに決まってるだろ。まあ、シャルは俺みたいな奴よりほかの奴の方がいいだろ？」

リュウトがそういったとき僕は少し腹が立っている言ってしまった。

なんでリュウトが自分を過小評価にするかはわからない。癖なのかもしれない。

でも、僕はリュウトが、自分の好きな男の子がそんな自分を悪く言うのが我慢できなかった。

でも、僕はそんな性格を含めてリュウトを好きになった。多分他の人も同じだろう。

それでも僕は譲る気はない。リュウトを独り占めしたい。

ねえ、リュウト。僕はこう見えて独占欲が大きいんだよ？覚悟していてね。

君を必ず僕に振り向かせるから。

リュウトSIDE

その後、家に帰って皆でカレーを食べた終えたが、

「リュウト？」

「せ、セラ様？何故そんなに黒いオーラを出しているのですか？そしてラウラ様にカエデ様はなぜ俺の腕をつかんでいるのですか？」

「自分の胸に聞いてみなよ」

「私の嫁であることを再認識させる必要があるな」

「は？ちよつと！？なんで引きずってんだ！？オイ！放せ！ちよつ！？」

「「「O・H A・N A・S I・「「「

「な！？なんで！？俺何かし

「

第18問 買い物ではメモを忘れるな。忘れたことないけどな B Yライガ(後

リュウト」……………」

返事が無いただのリア充のようだ。

レン「次回まではこのようですね」

ちなみ学園でリュウトはどうだった？

レン「……………O・H A・N A・S Iされた後隅っこで無茶苦茶震えていました」

覆う……………すごい効果だな。

レン「高町さん達も「やりすぎたの……………」と言っていました。オ
ーバーキルですね」

ホントに怖いな……………では、また次回で！

レン「アンケートにもよろしく願います」

では、サラバッ！

・9月7日に以下の文章を書きました。

どうもアナザーです。

私の通っている学校では一か月に一回テストがあります。今回もテストがあるので9月15日まで投稿はお休みさせていただきます。これからもまた休みがあるかもしれませんが学生なので赤点などは不味いので申し訳ありません。それでは失礼します。

第19話 5月のプールだけと季節が早いとかそういうのは無しでBYE BYE

HAHAHAHAHA! テストなんてハドロン砲や無限拳で消し飛ばしてくれるわ!

もう疲れました……

それでは本編どうぞ!

第19話 5月のプールだけと季節が早いとかそういうのは無くてBYE BYE

秀吉SIDE

いよいよ明日はプールじゃ！

フッフッフッ……………！実はリュウトと水着を買った時に「演劇用」と言っ買って買った女物の水着。これで……………フッフッフッ！（若干
壊れ気味）

「何気味の悪い笑顔を浮かべてるのよ」

「ぬお！？姉上！？……………い、いつからそこに？」

「アンタが気味悪い笑いを始めた時よ」

そんなに気味が悪かったのかのう？

「で？なんで女性用の水着を片手に笑っていたの？」

「それはじゃな、明日リュウト達と学校のプールを貸し……………き……………り……………」

ヤツチヤツタ

……すまぬ。どこぞの天使の台詞を少し改造したものじゃ。忘れてほしい。

「ふうん。リュウトとプール、ねえ………まあ、いいわ」

「ふえっ?」

思わず変な声が出てしまった。折檻かと思ったのじゃが。

「あんたはリュウトに中々女として扱われなかったからね。少しは男でも女としてみてほしい。その気持ちはわかるわ。だけど!」

「だ、だけど?」

やっぱり折檻?

「あたしも行くからね!平等に勝負しなさい」

「………そうじゃな。わかった。皆にはワシが伝えておくのじゃ」

「ありがと、秀吉。それじゃごはんで来てるから降りてきなさい」

「わかったのじゃ」

姉上はワシの事をわかってくれた。なんだかんだで喧嘩してもやっぱり姉弟だからかのう?心が通じるというか……とりあえず、ありがと、姉上。

アリサSIDE

「はぁ……………」

今、私は仕事を終えてフェンリルのロビーで椅子に座って少し休憩している。

明日はプール……………だけど……………

「自身ないなあ……………」

正直今いるメンバーに勝てるか不安です。

なのはさん、フェイトさんはスタイル抜群。性格もあってとても良い。

シグナムさんと瑞希さんとセラさんは……………その……………大きい……………

シヤマルさんは優しいし大人みたいな人でプロポーションもいい。

ヴィータさんとユーさんは……………どうだろうか？

今来るメンバーにとてもかなう気がしません。

どうしよう……………

「どうしたの？」

「あ、レグルスさん」

「うん。アリサ、さっきからボーっとしてどうしたの？」
「どうやら少し惚けすぎたみたいですね。」

「いえ、明日のリユウト達とのプールで……………あ
やってしまった。」

「へえ……………楽しそうだね？」

「え、いや、その……………」

「私も行くからね？」

「え？ちょっと、いきなりすぎかと」

「私も行くからね？」

「……………どう？」

「ありがとう」

あの威圧感には勝てません。どうしよう……敵を増やしてしま
いました……………

明久side

「おはよー。絶好のプール日和だね」

週末。雲一つない透き通るような青空の下、僕は校門の前に立つコ
ウタ、ルーク、レン、グランツさん、姫路さん、高町さん、シヤマ
ルさん、シグナムさん、ヴィータちゃん、はやてさん、村雨君に挨拶
した。

「おはようなの吉井君」

「おはようございます明久。良い天気ですね」

挨拶をしているともう一人の人影に気が付いた。

あれは……………ムツツリーニ？

「ムツツリーニ。おは」

「……………！！（カチャカチャカチャカチャ）」

鬼気迫る表情でカメラの整備をしていた。手の動く速度が速すぎて見えない。

「あ、あのさ、ムツツリーニ」

「……………今、忙しい」

「ムツツリーニ。準備はいいけど、無駄になっちゃうんじゃないかな」

「……………なぜ？」

「いや。だって、ムツツリーニはどうせ鼻血で倒れちゃうじゃないか」

「……………甘く見てもらっちゃ困る」

『(アリサ……………?)』

「(すみません……………油断していました)」

「すまぬ、少し遅れたのう……………」

「あ、おはよう秀吉……………ってアレ？隣の人は……………秀吉のお姉さん？」

「おはよう吉井君。木下優子よ」

「なんでいるんだろう？」

「昨日秀吉から聞いたの。暇だったしちよつどいいかなって」

「さらに追加。今日は楽園だ！」

「木下君？どう言う事ですか？(ぼそぼそ)」

「うむ……………少しの……………(ぼそ)」

「……………わかりました(ぼそ)」

「アレ？リュウト達は？」

「ん？もうすぐ来るんじゃないか？」

まだ来てないようだけど……

「悪いな、待たせた」

「遅れてゴメンね？」

「すみませんでした」

あ、リュウト達、神崎家が来たみたいだ。

「遅かったね、リュウト。何かあったの？」

「何か顔がやつれとるけど……」

「いや……色々とね……O・H・A・N・A・S・Iが辛かった

……（ガクガクブルブル）」

あ、この前のね……あんなに怯えているリュウトは初めて見たよ。

「お、お父さん？」

「だいじょうぶ？ パパ」

「あ、ああ。何とか」

でも膝がガクガク言ってるけど？

この上無いほど頼りない感じがするよ？

KO寸前のボクサーみたいだよ？

タタタタタッ！

「バカなお兄ちゃん、おはようですっ！」

「わわっ！？」

後方から足音が聞こえて、急に背中に何かが飛びついてきた。

「もう葉月ってば。アキがびっくりしてるでしょ？」

少し遅れて聞こえてくる憶えのある声。これは美波の声だから、そうなると今僕の背中に乗っているのは

「やっぱり葉月ちゃんだ。おはよう」

「えへへー。二週間ぶりです」

葉月ちゃんの言う通り本当に二週間ぶりだ。

「バカなお兄ちゃんは冷たいですっ。どうして葉月は呼んでくれな

いんですかっ?」

「あ、うん。ゴメンね葉月ちゃん」

けど、呼んだらきつと君のお姉ちゃんは僕を八つ裂きにしてたと思っただ。

いや、確実に。絶対。

「家を出る準備していたら葉月に見つかっちゃって。どうしてもついてくるって駄々こねて聞かないもんだから………ってアレ?坂本はまだ来てないの?ウチが最後と思っただのに」

「いえ。もう来ています。今は職員室に鍵を借りに行っ………戻ってきたようですな」

噂をすれば何とやら。レンが説明していると、校舎の方から雄二と霧島さんが歩いてくる姿が見えた。

「よっ、雄二に霧島。ルークにグランツ」

「おう、きちんと遅れずに来たみたいだなリユウト」

「…おはよっ」

「結構遅かったみたいだな」

「いつも早いあなたが珍しいわね」

「……………（ガクガクブルブル）」

あー、また思い出しちゃってる……………

それにしても……………はぁ……………なんで霧島さんは雄二の事を好きになっただらう。男を見る目がないのかな？

「お兄さん、真っ赤なお兄ちゃんおはようです」

「ん？チビツ子も来たのか」

「チビツ子じゃないですっ。葉月ですっ！」

「そうだぜ雄二。ちゃんと名前と言ってやらねえと。な、葉月」

「そうですっ、真っ赤なお兄ちゃん！」

「それもそうだな」

やっぱりルークと雄二は仲がいいな。二人とも赤い髪の毛で性格も同じようだね。

「んじゃ、さっそく着替えるとするか。女子更衣室のカギは翔子に預けてあるからついて行ってくれ。着替えたらプールサイドに集合だ」

雄二の言葉通り男女に分かれてそれぞれの更衣室へと歩く。

……………って

「……………」
「……………」
葉月ちゃんと秀吉とリニューちゃんは女子更衣室でしょ

「えへへ。冗談ですっ」

「俺と秀吉は冗談じゃないんだけどな……………」

一緒に着替えたりしたらムツツリー二は皆の水着姿を見ることなく天に召されるだろう。友人の死を見過ごすわけにはいかない。

葉月ちゃんと女子はもういっちゃったからなあ……………」

「仕方ない……………」リュウト、秀吉、空き教室で着替えてくれ。じゃないと死亡者が出る」

「はあ……………」なんでこんな目に……………」

「わ、ワシは別によいぞ……………／／／／／（恩に着るぞ雄二よ！）

「よし。決まったならさっさと行こうぜ。時間が勿体無い」

こうして僕らはそれぞれの更衣室へと向かった。

秀吉 side

「はぁ……………なんでこんな目に合っただ？」

「さ、さぁのう……………」

今ワシは空き教室でリュウトと二人つきりじゃ！

着替えておるのじゃがリュウトに「できれば見ないでほしいのじゃ」と言ったのでお互いに背を向けて着替えておる。

「なぁ秀吉」

「んな！？ななな、なんじゃ！？」

「お、おい？大丈夫か？」

あ、焦つて変な声を出してしまったのじゃ……………不覚。

「だ、大丈夫じゃ」

「そうか？ところで秀吉。お前、最近女子と思われても何も言い返さなくなったな。どうしたんだ？」

！！！

「そ、それはじゃな……………」

い、いや！ためらわないで！今言わないと後悔する！

「りゅ、リュウトに私の事を女の子としてみてもほしいから！／／／
／／／」

「は？」

「私はリュウトに女としてみてもよかった……………ずっとずっと……………
……………」

……………え？

「いや、だから演劇で女子の役の練習だろ？この前の水着もその為だろ？」

し、しまったあああああああ！

リュウトが病気レベルに鈍感なこと忘れてたあああああああ
ああ！

「よし！これから秀吉は女子と言つ設定だな。任せろ！だから女子の水着を今着てるんだろ？」

え？

「リュウト……………今……………見てるの？」

「おう。話は向かい会って言わないとな。お前は背を向けたままだけどな」

私はまだ水着の上を付けていない……………

「ちよっ！？あっち向いて！／＼／＼／」

「は？」

「私は今女の子なんだから着替えを覗かないで！」

「あ、ああ。すまん……………つか、俺も着替えたから先行くな？」

「う、うん……………」

そう言ってリュウトは教室を出た。

でも、これはこれで結果オーライかな？

リュウトSIDE

秀吉がなぜか女っぽくなった。そしてただ今プールにいる。

「しまった……………リュウちゃんはリュウトが髪を整えないとならないんだった……………！」

「……………ワックスを忘れた……………不覚……………！」

明久、ムツツリーニ。お前ら後でシバくからな？

「そういえばそうだったな。あの時リュウトは髪をまっすぐに整えていたな」

「そつだ！水にぬらせば……………」

「あ、リュウトの髪って意外に丈夫なんで濡れたぐらいじゃ形は崩れませんか？」

「神は死んだ！」

むしろお前らが死ぬゴラ。そして神のハードルを下げるな。

最後にレンナイス！

と言っか……………」

「女子遅いな……………」

「そーだな……………コウタ、暇だからしりとりでもしないか？」

「あ、僕もやっていいですか？」

「エリオもか？よし、やるか！」

今プールにいるのは俺、明久、ムッツリーニ、レン、雄二、ルーク、ライガ、コウタ、エリオだ。

ルークとコウタとエリオはしりとりスタート。

レンとライガは雑談。あいつらは以外に雑談が好きなのだ。

ムッツリーニは撮影機材の準備。どれだけ大がかりなんだよ。

明久と雄二は準備体操。泳ぐ気満々だな。

俺は持ってきた小説を読んでいる。歴史小説だ。意外に面白いぞ？ テレビやゲーム、教科書とか以外の知識があるからな。でも読み続けるのと事件とかいろいろなことがごっちゃになってどれが本当かたまにわからなくなるがな。

ちなみにムツツリー二は今回の事でイメージトレーニングを15432パターン済ませているらしい。どんなパターンがあるかを聞いてみたい。そしてその15432パターンでの出血を確認したらしい。致死率は100%だな。葬式には出てやる。

「お、誰か来たぞ」

雄二がつぶやく。顔を向けるとそこには小さな人影が3つ駆け寄ってくる。

「はい！ここでアナザーです！わたくし！とても服などの表現が苦手なのでイメージを教えておきます！

一人はヴィヴィオ。ヴィヴィオの水着は「とある」で初春が着た水着とお考えください。

二人目はキャロ。こちらも「とある」で美琴がこっそり着た水着とお考えください。

最後に葉月は……………まあ、わかる人はわかりますよね？」

なんか今駄作者の表現力のなさのせいで解説が入った気がした。

「ちょ……………（・汗）……………」 アナザー

「え〜っと…………ギリシャ神話に登場する女神の名前です。たしか
…………大地の女神でした。原初神でカオスの娘と言う説もあります」

「……………」

「あ〜、ショートしてるな」

「よくエリオはそんなことを知っていますね」

「テレビで見て気になってお父さんに聞きました」

「それでもよく覚えてるもんだ」

エリオが規格外の技を發揮。自分の息子に言うのもなんだが小学生
とは思えない。

「あ、エリオくん！」

「パパ〜！」

「お兄ちゃんたち、お待たせですっ」

……………とりあえず一言。

葉月よ……………胸がおかしくね？

小学生とは思えないぞ？

「懲役は2年ほどで済みそうだね」

「……実刑はやむをえない（ボタボタボタ）」

「冷静なフリをしているだけです……」

「エリオ……君はあの二人のようににはならないように心掛けてください」

「いざつて時は俺達があの人を締め上げる」

「レンさんにお父さん。なりませんから殺傷沙汰はやめてくださいよっ」

悪い。エリオたちに危害が加わるなら多分俺は遠慮なく二人にO・H A・N A・S Iをするだろう。なのは達ほど威力は無いがトラウマは植えつけれるだろう。

そう考えていたら更衣室から別の気配がやって来た。

「こ、こら葉月っ！お姉ちゃんのソレ、勝手に持って行ったらダメでしょ！？返しなさいっ！」

胸元を隠してこちらへ走ってくる島田。どうした？

「……パッド」

「はい？」

ボソリとムツツリーニが呟いた。よく見ると葉月の腹部が膨らんでいる。

「あう。ずれちゃいました」

葉月は自分の水着の中に手を入れてゴソゴソと何かをいじっている。するとパッドが出てきた。あゝ、なるほどね。

「ん？ってことは、今美波が返しなさいって言っていたのは、葉月ちゃんの付けていた胸パツ　「この一撃に、ウチの全てを賭けるわ……！」だ、ダメだよ美波！その一撃は僕の記憶どころか存在まで消し去りかねないから！」

明久、今のはお前が悪い。そして消えるのはお前の存在じゃない。お前の命だ。

「あゝっと……………」 「アルキメデス」！

「スコール」

「ルアー」

「またかよー！」

「コウタ弱いですね……………」

「いや、俺には二人が組んでいるように見えるぞ？」

お前らはまだしりとりをしていたのか。

「パパ……。どつっ？」

俺の前で1回転して水着を見せるヴィヴィオ。うん。

「似合ってるぞ〜。よしよしっ」と

とりあえず撫でる。かわいいからだ。猫とかかわいいから何故が自然に撫でてしまう。癖だな。

「えへへ〜 ありがとう〜!」

元気がいいな。こうして笑顔でいてくれるとこっちもうれしくなる。

「え、エリオ君。どうかな……………?」

「え、えっと……………す、すごく似合ってるよ、キャロ!」

「あ、ありがとう……………」

「ど、どうも……………」

「ふ〜ん……………キャロよ、頑張れよ」

「ちょ、ライガさん!??」

「ライガ。あまりおちよくらない」

「そうだな(ニヤニヤ)」

「うう〜……………ライガさんのバカあ〜」

「バカは酷いな」

「いや、お前の方が十分酷いぞ？」

エリオたちもいろいろあったようだ。ちなみにコウタは

「……………（泣）」

端っこで泣いている。結局「あ」攻めにより敗北した。エリオは意外にしりとりが強いようだ。

そして更衣室からまた人が来た。

「リュウト〜！」

「ん？シャルか。それにヴィータにアリサに……………何だそのミイラは」

シャルとヴィータとアリサと謎のバスタオルを纏っているミイラがいる。

誰だ？

「はい！またしてもアナザーです！

シャルの水着は原作通り。

ヴィータは「とある」でインデックスが着ていた水着のカラーを赤にした物。

アリサは赤と黒のストライプのビキニです。

バスタオルミイラは……………わかる人にはわかります。

それにしても水着考えるの疲れますね」

また駄作者が現れたような気がした。

「とりあえずそのミイラは誰だ？」

「わ、私だ。嫁よ」

「ラウラ？何してんだ？」

「い、いや……少し、は、恥ずかしくてな……」

「なんで？」

どっちかっていうと全裸で俺の布団に入る方が恥ずかしくないか？

「し、仕方ないだろう……！（いざ見せるとなると緊張するんだ……！）」

「ラウラ。出てきた方がいいですよ？大丈夫ですから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める………！！」

アリサの説得も聞かずミイラ状態のラウラ。よく見たら銀髪が少し左右にはみ出ている。意外にホラーじゃね？

「ふ〜ん……じゃあ、アタシはリュウトと遊ぶからな」

「じゃあ、僕もね」

「な、なに？」

「さー、行くうぜリュウトー！」

「うん、そうしょ。リュウト、行くっ」

ヴィータとシャルは俺の手を取ってプールに向かう。

「ま、待てっ！わ、私も行くっ」

「その格好のままですか？」

「うっ……ええい！脱げばいいのだろう。脱げば！」

ラウラは自分の体を包んでいたバスタオルを殴り捨てた。

「はい、しつこいでしょうがアナザーです！」

ラウラも原作通りです。

また来ます！」

なぜか駄作者死ねと言つべきかと思つたんだが……。

「おかしなところなんてないだろ、リュウト？」

「ヴィータの言うとおりだぞ？おかしなところなんてないじゃん。むしろ似合っているぜ」

「なっ……！しゃ、社交辞令ならいらん……」

「世辞じゃないんだけどな。十分かわいいぞ？そうだろ、シャルに

アリサ

「うん。僕たちがかわいってほめてるのに全然信じてくれないだよ」

「ラウラの髪は私がセットしました。折角ですからおしゃれぐらいはしないといけませんしね」

「か、かわいい…………… / / / /」

ラウラが突然顔を真っ赤にして俯いてしまった。どうした？

「あ、そういえば三人とも、水着似合ってるぞ」

「う、うん、ありがと…………… / / / /」

「あ、ありがとうございます / / / /」

「ありがとな、リュウト！ / / / /」

ん、そういえば……………」

「シャル。それ、錆びたりしないか？」

それ、とはこの前の買い物時にシャルに買ってやったブレスレットの事だ。

「大丈夫だよ。来る前にちゃんと保護コートしてあるしね」

「そうか、それならいいや…………… って、なんだ？二人とも」

なぜかアリサとヴィータが睨んでくる。

「……ずるい」

あゝ、そう言う事が。

「二人にも今度何か買ってやるよ」

「え！？本当か！？」

「だ、ダメですよ！リュウトはお金が……」

「大丈夫だ。榊博士がお小遣いって言って金をくれるから。あまり使わないし。折角の使い道だからな」

「そ、それなら……今度お願いします」

「むう……」

今度はシャルが不機嫌になってしまった。負のスパイラルだ。スパイラルカオスだ。いや、これは違うな。

そしてまた更衣室から誰かが来た。

長い黒髪を翻しながら来たのは霧島だった。

まるでモデルのように歩いてくる。女子も男子もそんな彼女に見入っていた。

そして、霧島は自然なしぐさでこちらに歩み寄り

ドスッ！

「……………雄二。他の子を見ないように」

「ぐああああっ！目が！目があっ！！！」

・流れるような動作で雄二に目潰し。

「凄いわ……………坂本の目を潰す仕草まで綺麗だなんて……………」

「うん……………そうだね……………」

「あの姿を見れるのなら、雄二の目なんて惜しくもなんともないな……………」

「……………」
「……………」
「いや、それはお前らに実害がないから言えるんだ（や）」

俺、レン、ライガ、ルーク、はやてのツッコミ。

……………って。

「何普通に来てツッコんだ？優子に秀吉、ハルナにユーもいつ来た？……………オイはやて、なんだその意外そうな顔」

「はやてと今さっき来たのよ」

「私も今来たところ」

「そつや。それで……………」

はやては顔を赤らめてライガを見る。

「ん？どうした？」

「わ、私の水着……………どや？似合っとするか？」

「はい！しつこいようですがまたまたアナザーです！
はやての水着は白色が基準のビキニです！

秀吉は原作通りで優子とはあるで泡浮（黒髪の長い方）が着ていた
ものです。

ハルナとユーはアニメの原作通りです。

大佐！俺もう疲れたよ！スネークと交代してくれ！」

なんか駄作者が弱音を吐いているのが聞こえた。根性無しが。

「あれ？俺の存在に気付いているんじゃないかね？）。汗」アナ
ザー

気にするな。

「やっぱりばれてる…！」アナザー

うるせえ。

「ああ。似合っているぞ、はやて」

「そ、そうか。よかった……ありがとう／＼／」

「……………村雨君の裏切り者めっ……！」

明久が親の仇を見るような目でライガを見ている。たまに明久たちからとんでもない殺気が出るんだが……………

「ね、ねえ、リュウト。わ、私の水着……………どうかな？」

「ん？似合ってるぞ？ちゃんとな」

「う、うん……………ありがとうね／＼／」

「ぬう……………私はどう？」

「もう見ただろ？似合ってるけどな。あと口調はどうした？」

「う、うん。しばらくはこれでいようと思っの」

「そうか。がんばれよ」

演劇好きは練習を欠かさないみたいだな。

「リュウト！あたしはどうだっ！」

触覚みたいなアホ毛がピコピコ動きながら俺に感想を求めてくるハルナ。

そのアホ毛、やっぱり生きてるんじゃないね？

「似合ってる。かわいいぞ、ハルナ」

「そ、そうか。あ、ありがとな！／＼／＼」

どうでもいいけどアホ毛はハルナの感情で動いているのか？へこんだ時はシュンとへこむし元気な時は凄いピコピコなるし。今はゆっくりピコピコなっている。

トントン

「ん？」

誰かに後ろから肩をたたかれたので振り向く。

『どじっ？』

と書かれた紙を見せるユーがいた。

水着の事が。

「ちゃんと似合ってるぞ。心配するな」

『ありがとう。うれしい』

顔を赤くしてそう言う？ユー。家以外では本当に喋らないな。

「とりあえずだ。雄二？何か霧島に言う事があるだろ？」

ルークが雄二の背中をドンと押した。

「翔子……………」

「……………」

「ティッシュをくれ……………涙が止まらない」

「他に言うべきことがあるんじゃない?」

「ルーク!視界を奪われて何を言えと!?!」

その通りですよね。

「ったくよ。雄二にも困ったもんだよな、ムツツリーニ」

しかし、呼びかけられたムツツリーニは何も反応せずによそを向いて固まったままだった。

どうしたんだ?みんなの水着を見て鼻血を出してると思ったのに。

「……………すまない、皆」

……何？

「……先に、逝く……」

バタンッ！

そして、ムツツリーニはその場に大量の出血と共に前のめりに崩れ落ちた。

「なっっ！？ムツツリーニ！？」

俺達エリオも含む男性陣はすぐさまムツツリーニへと駆け寄る。

クッ！どこから出血しているんだ！？

腹部か！？どこだ！？くそ！！どうして……！

とりあえずムツツリーニが向いていたところに全員が視線を向ける。

「す、すいません。背中の紐を結ぶのに時間がかかって……」

「すまない。私も同じだ」

「遅すぎたわね……」

「遅れましたね」

「あ、リュウト君！」

「遅くなってごめんね、リュウト」

「遅くなりました。すみません」

「ごめんなさい。遅れました！」

「遅れてゴメンね？」

上から瑞希、シグナム、グランツ、シャマル、なのは、フェイト、セラ、レグルス、カエデが来た。

「「あぶるばあっ！？」」

明久とコウタが鼻血を噴射させた。

レンとライガは納得。

ルークは……グランツに見惚れているな。

エリオは顔を赤くしている。

俺はムツツリーニが倒れた理由を理解した。

あの九人は胸がでかい。ちなみにレグルスとカエデは着やせするタイプのような。

さらに犠牲者が二人増えた。

「はい！最後かどうか知らないけどアナザーです！
瑞希、セラ、ティアは原作通りです！

シグナム、シャマル、なのは、フェイト、レグルス、カエデはそれぞれ赤、緑、ピンク、黒、青、オレンジを基準としたビキニです。
はあ………疲れました。では、サラバツ！」

さらば駄作者。永遠に。

「まだ終わらないからな!?」 アナザー

ん？なんかはやて、ヴィータ、ハルナ、島田、ラウラがプルプルと小刻みに震えだした。

「……この、巨乳軍隊がああああああ……!」「」「」「」

「ちょ!?五人とも目がマジになってるの!?!」

「は、はやて!ヴィータ!落ち着け!」

「これで落ち着くと思つなや！シグナムやシャマルのみならずティ
アやレグルスまでうらやましいモン胸にひっさげよって……！」

「あ、あまりいいものではありませんよ？」

「そ、そうですね？肩もこりますし」

「セラに瑞希はシャラップや！」

「ちくしょう……あたしだって……同じ高校生なのに！」

「教えるよ！どうやってたらそんなに大きくなるんだよ！」

「お、落ち着いてハルナ！」

「レグルスにカエデは仲間と思っていたのに！」

「み、美波？私たちが悪いの！？」

「僕たち関係なくない！？」

「貴様ら……覚悟するがいい！」

「ラウラ怖いよ！？」

「黙れフェイト！もう許しはしない！」

「「「「「天誅ううううううううううう！」「」「」「」

「「「「「「散開!」「」「」「」「」

女性陣の一部はプール全体を使った鬼ごっこスタート。

「ぼ、僕も……一応大きいよね?」

「うっう……」

「泣かないで秀吉。私も同じ気持ちだから」

「……うらやましい」

「……エリオ君も大きいのが好きなのかな?」

「……(グスツ)」

「ユー姉?どうしたの?」

「何か……すごいことになったな」

「そうですね……」

次回に続く!

「あ、次回モノなんだ」

第19話 5月のプールだけど季節が早いとかそういうのは無くてBYE BYEウタ

次回！いろいろカオスなプールが幕を開ける！

リュウト「犠牲者が出たぞ？」

気にするな。ギャグパートでは次回には復活している。

リュウト「ギャグパートって……………」

そして！とうとうティルズオブエクシリア発売！

リュウト「金が無くて買えない作者」

HAHAHAHAHA！ちくせう……………

リュウト「ヴェスペリアを売る気が無い作者」

ユーリ達を手放してたまるか。

リュウト「ジュード達かどちらかにしろよ……………まあいいけど」

アンケートも段々と溜まってきました。

リュウト「こんな駄作者の提案に参加してくれてありがとう」

まだ投票や案提供は続いています！

リュウト「そしてまた駄作者が報告があるとか」

おうよ！え〜、実は文化祭が近いんです。それで色々準備やらあるので更新が大幅に遅れます。多分10月1、2日ぐらい次の投稿までにかかると思います。

リユウト「駄作者の都合でスミマセン」

しかし、感想とかはチェックしてるのでそこは問題ありません。

それでは、サラバツ！

以下の文章は9月25日に追加しました。

どうもアナザーです。

執筆を再開できる日が判明しました。9月30日です。

あくまで執筆を再開するだけなのですぐに出せるとは限りませんがアイデアはあるのですぐに書き始めます。

意外につらいですね。文化祭の準備。

それでは、サラバツ！

第20問 プール遊びは凄く疲れる。明久君たちは楽しすぎて鼻血を出さないよ
久しぶりです！

高校生で初めての文化祭を楽しみました。

結論・フィーバーしすぎに注意。

こつこつ浮かれる日に限って窓のガラスを割ってしまったりなどがある
ので文化祭は普通以上に気を付けるべき日だと思います。

それでは本編をどうぞ！

あ。あとがきにアンケートの結果を書きました！投票などをして
くれた方々。どうもありがとうございます！

第20問 プール遊びは凄く疲れる。明久君たちは楽しすぎて鼻血を出さないよ

リュウトSIDE

「ねえ、リュウト君」

「ん？どうした、なのは」

一部の人による鬼ごっこが無事に終了後、少し疲れて明久とプールサイドでのんびりしていたらなのはが声をかけてきた。

「リュウト君は水泳が得意なの？」

「まあ、それなりに。一応子供のころに水泳やったことあるし。明久は？」

「僕は人並みだけだね」

たまにツバキさんの訓練でも泳がされた。あれは……………死ぬかと思った。

「え〜っとな、実はね、私あんまり泳げないの」

「そうなのか？」

「ちよつと意外だね」

ああ、意外だ。運動はできると思っていた。

「あ、私もです」

「瑞希ちゃんも？」

「はい。恥ずかしいんですけど、水に浮くくらいしかできなくて…」

瑞希には悪いけど速く泳げるってイメージないからな。

「ん？二人とも水泳苦手なの？」

「意外だな。なのはが水泳を苦手だと」

「そうだよな〜。あたしも最初は驚いたぜ」

今のは上から島田、ラウラ、ヴィータの台詞だ。三人とも結構泳いでたりしてたな。

「そう言う事なら、いつも二人には勉強教えてもらっているし、お礼にウチが二人に泳ぎ方を教えてあげよっか？ラウラやヴィータもどうっ〜」

「私も手伝おう。折角だし泳げて損は無いはずだ」

「あたしも手伝うぜ！」

こう見るといつもと少し逆だな。実はヴィータはテストでFクラス並みではないが……得意でCの上位で苦手なEの中間ランクだ。

だからたまになのはや瑞希に教えてもらっている光景がある。

「こうして見ると、美波とボーデヴィツヒさんとヴィータちゃんがAで姫路さんと高町さんがFみたいだね」

「……寄せて上げればBくらいあるっ（わよっ）！！」「」

バキョッ！！x3

「ぐぐあっ！？」

おい、飛んだ飛んだ。島田の某超次元サッカーのような蹴りとラウラのアッパーにヴィータの明久の腹めがけてのストレート。すごいコンボだな。あ、プールに落ちた。

「………来年には、きつと」「」

あゝ、そう言う事ね。

「おゝい、三人とも。多分明久は文月での勉強クラスの事を言うてるぞ」

「え！？そうなの！？」

「そうだろ。内容的に」

「た、確かに……………」

「いきなり胸の話になったりしねーよな……………」

難儀だな……………」

「とりあえずわかったことがあるわ……………アンタたちの泳げない理由」

「え？なんですか？」

「二人ともそんな大きな浮き輪をずっとつけているからいつまでたつても泳げないのよ！」

「「それだ！！」」

いや、それだ！じゃないだろ。ラウラにヴィータ。

「二人ともそれを外して私たちに寄越せ！」

「そつだ！それさえなければ泳げるんだぜ！？だから寄越せ！」

やばい。三人とも目がマジだ。

「み、美波ちゃん！ラウラちゃんにヴィータちゃん！落ち着いてください！」

「そうなの！三人とも目が怖いの！」

とんでもないほど怖いぞ？イル・ジョーでも睨むだけで倒せるんじゃないか？

「二人にはわかるまい！」

「そうだ！水の抵抗が少ないおかげで速く泳げるというあたし達の悲しみがっ！」

必至すぎて逆に見て悲しくなるぞ？

「じゃ、じゃあ！シグナムさんやレグルスちゃんはどうなるの！？」

「そうです！カエデちゃんやセラさん達も！」

「そう！あれを見るの！」

「「「ん？」「」」

なのはの指差した方向を見ると。

「はあ……………」

「どうした？セラ」

「いえ……………実は、私はあまり泳げないんです。クロールぐらいならできるのですが」

「そうか……………」

「シグナムもですか？」

「悔しいが早く泳ぐことができない」

「僕は泳いだことが無いからね……………レグルスは？」

「え？私は泳げますよ？」

「いいな。今度教えてよ！」

「私も手伝おつか？」

「フェイト？ティアも？」

「私もある程度は泳げるから。泳ぎ方ぐらいなら教えれるわ」

「……………（泣）……………」

あ、イカン。泣き出したんだけど。

とりあえず泣き止まさないとな……………

これ以上は胃に穴が開きそうです。

「プハア！……いきなりどうしたんだろう？」

「それはこっちの台詞ですよ、明久。何があつてここまで飛んできたんですか。とりあえず……一発、いや、三発ぐらい顔面を殴らせてください」

「ちょっと！？レンってそんな性格だつたっけ！？」

「ストレスは時に人の性格さえも変えます！」

イライラが収まらないんですよ！

「不思議なお兄ちゃん。どうしたんですか？」

「葉月ちゃんですか？……はあ……なんでもないです」

「？　そうですか？」

ダメだ。明久を殴つてもただの八つ当たりですね。

………実際にコウタを殴りましょう。

あ、不思議なお兄ちゃんとは僕につけられたあだ名だそうです。

何故かよく不思議とかミステリアスとか言われるんですよね。

「あ！そうだ！バカなお兄ちゃんと思議なお兄ちゃん！葉月と遊

ぶですっ!」

子供は元気が一番。リュウトが良く言っていましたね。たしか、お世話になった保育園に行ったとき子供たちに囲まれたリュウトを見たときは面白かったですね。その子供たちにも「おにいちゃん、なんだかふしぎ」とか言われました。何故でしょうか？

「僕はいいですよ。明久はどうします？」

「僕もいいよ。何して遊ぼうか？」

「じゃあ、『水中鬼』をしますっ!」

「水中鬼……ですか？」

「水中でやる鬼ごっここの事？」

普通の鬼ごっこよりも別の面白さがありますね。もぐったりすれば戦略が広まりますし。

「違うですっ」

「どうやら違うようだ。じゃあなんでしょうか？」

「水中鬼は、鬼になった人がそうでない人を追いかけるです。それで！鬼が他の人を」

「アレ？明久のと同じじゃありませんか？それで鬼が他の人にタッチ

「鬼が他の人を水中に引きずり込んで溺れさせたら勝ちですっ！」

「鬼だ！それは確かに鬼だ！！」

道理でごっこが無いわけです！リアル鬼ごっこですか！？2では電気ショックときたら次は溺死ですか！？

無印は…………… 忘れました。なんでしたっけ？

とりあえず純粋な葉月ちゃんにこんなことを教えたのは誰でしょうか？同じ小学生でしたら小学校に命の大切さを教える授業に行くように父さんリンドウに頼もうと思っています。本気で！

「ダメですよ、葉月ちゃん。その遊びは危険です」

「あう……………ダメですか？」

悲しそうな顔をしてダメです！そんな遊びが小学生に広まっちゃったら大問題です。

「いい、葉月ちゃん？その遊びはとっても危険なんだ。今からそれを教えてあげるね？おーい！霧島さん！」

え？どうして危険性を教えるのに霧島さんが必要なの？（パシャ）……………何？「うわっ！？」

霧島さんが突然水中から顔を半分だけ出して出てきました！忍者ですか？

とりあえずなぜ霧島さんと呼んだんでしょうか？

「雄二と水中鬼っていう遊びをやって見せて欲しいんだ」

ちよ……………？

「ルールは簡単で、雄二を水中に引きずり込んで、溺れさせた後で人工呼吸をしたら霧島さんの勝ち」

「……………行ってくる」

「ちよつと！？霧島さん！そんなことしたら「チャポン！」ちよつと！？聞いてます！？そんな殺人未遂になるような行動は……………
…明久。なんて惨いことを……………！」

「葉月ちゃんを健全な小学生にするための犠牲だよ、レン」

「いや、そうですね！？下手すれば「おわあああああああ
！？」あ……………」

隣で泳いでいた雄二が突然悲鳴を上げて沈んでしまった……………。

「グっ！」

あ、上がってきた。

「だ、誰だ！？誰が俺を水中に……………！？」

ザパン！ 雄二が再び水中に引きずり込まれる音。

「…雄二。早く溺れて」

………止めさせようと思う気が最近失せてきた。雄二。無力な僕を許してください。

（諦めんなよ！）

はい？

（どうしてそこで辞めるんだそこで！）

ちよー！？何故か脳内で何か声が！？

（もう少し頑張ってみるよ！）

いや、何を頑張るんですか？

（ダメダメダメダメ諦めたら！）

いや、ですからね？

（周りのこと思えよ！応援している人達のことを思ってみろって！あともうちよっこのところなんだから！）

すみません。周りは誰ひとり雄二のこの惨状に気を取られていませんよ？あともうちよっこの何がですか？雄二の生命活動の停止がですか？

（俺だつてこのマイナス10の所でシジミが獲れるって頑張ってるんだよ！??）

何故シジミ！？

(絶対やってみろ！必ず目標達成でき

)

グチャっ！バキ！ゴリッ！ボリボリムシャムシャ！

………とりあえず脳内にいる熱い何かを神機プレデターフォームの捕食形態で捕食しました。味は熱いです。辛いつか甘いつかではなく熱いです。作りたてのグラタン並に熱いです。

「あれ？プールを使ってるのはだれかと思えば代表だったの？」

心の中で何かと格闘していたらこのメンバーではない声が聞こえた。

「………愛子？」

声の主は工藤さんだった。

「愛子？どうしてこんなところにいるんだ？」

工藤さんに気が付いたのかリュウトもこっちへ来ていた。

「ボク？ボクは水泳部だから」

「そうなのか？アレ？でも………今日って確か水泳部は休みになっていたはずじゃなかったか？」

「はい。今日は休みのはずですよ」

「うん。すっかり忘れていて学校に来てやっと思い出したんだけど人の声があったから寄ってみたんだ。それにしても……………」

工藤さんは言葉を区切った。

「あれ？愛子？…どうしてここに？」

「フエイト。愛子は水泳部なのよ」

「でも、今日は水泳部は休みではありませんでしたか？」

「そのはずだよ？…ってどうしたの、愛子？そんなに僕たちを見つめて」

工藤さんに気が付いてハラウオンさん、木下さん、シャマルさん、デユノアさんがこちらに来た。そして四人をジト目でみる工藤さん。

「ふ〜ん……………もしかして、皆で抜け駆けしたんだ？（黒笑）」

「え？い、いや？そんなことないわよ？」

「そ、そうですよ愛子ちゃん！今日は水泳部があると思って……………」

「あれれ〜？シャマルさっきさ、「今日は水泳部は休みではありませんでしたか？」って言ってたよね？」

「うっ……………」

「え、え〜っと。ゴメンね？愛子」

四人がデュノアさんを筆頭に謝る。

「まあ、ボクもそこまで怒ってないけどね？ だけどさ……ねえ、リュウト。ボクも混ぜてもらっていい？」

とリュウトに聞く。と言うか完全に怒っていたような気が……さつきは結構怖かったのは内緒です。乙女の嫉妬は本当に怖いですね。

「別にいいだろ。俺達のプールってわけじゃないし。それにすでに一人増えてるからな」

そう言いながらどこかを見るリュウト。リュウトの目線の方向を向いてみると。

「お姉さまっ！ プールで遊ぶのならどうして美晴に声をかけてくれないのですか！？」

「どうしてアンタがいるのよー！」

「美晴にはお姉様を害虫から守るための特別な情報網がありますからー！」

確か……見覚えがありますね。Dクラスの……清水さんでしたか？

そして二人は鬼ごっこを開始した。

そう言えば清水さんは百合でしたっけ？

「え？愛子さん？どうしてここに？」

「……瑞希になのは。シグナムや、ヴィータにセラにユーやアリサ、レグルスにカエデにラウラまでいたんだ……（怒怒怒怒怒怒怒怒 効果音でもある）」

こ、怖い。工藤さんがかなり怖いです。黒いオーラが見えます！

「な、なあティア。俺の目がおかしくなっちゃったのか？工藤の後ろから真っ黒なオーラが見える」

「大丈夫。私にも見えるわ」

「あー、やばいなはやて。俺はとうとう幻覚が見えるらしい。工藤の後ろにヴィーナスが見える」

「大丈夫や。アラガミが見えるのは私もやから正常やで」
なぜ、アラガミが？

『すみませんでした！』

そして皆様綺麗に頭を下げています。礼儀作法の試験で百点満点取れるぐらいです。

「いいよ、別に。それじゃ、水着に着替えてくるね。……あ、覗くなら、バレないようにね リュウト君は大歓迎だよ？」

「遠慮する」

「つれないね」

工藤さん、犯罪ですから。

「（……これは本人公認と言う事……男として、行かないわけには！）」

……とでも明久は考えているんでしょうね。顔が凄くシリアスになっています。

だから犯罪ですって。それに……

「アキ？生きて家に帰りたくないの？」

島田さんも顔が違うのですが。シリアスすぎです。

「霧島、落ち着け！」

「そうだよ、翔子！坂本の目を突こうとしない！」

「……雄二が覗きをする！」

「させないから！俺警察！」

「それにそれ以上に坂本君の目を突くとにでと翔子ちゃんを見れなくなっちゃうの！」

「……それは困る」

「わかつてくれたか……………」

「すまん。三人とも助かる。これで失明しなくて済む」

「さすがにそれはシャレにならないからね……………」

リュウトと高町さんとハラウオンさんが霧島さんの雄二に対する目突きを止めた。さすがに失明の恐れがありますしね。最初の時は止め損ねましたが。

「（くっ！なんだ、この美波から放たれる強烈な殺気は！仕方ない！こうなったらムツツリー二のカメラに期待を！）」

と、考えてるような顔ですね、明久。顔に出すぎですよ？

（注：顔だけではそこまで読めないはずですがレンはなぜかそこまですで読めます。これがレンが「ミステリアス」など呼ばれる理由でもある。本人は気が付いていない）

なぜか今新しい設定が追加された気が……………」

後、明久。ムツツリー二には期待できませんよ？

「あれ？そういえばムツツリー二は？」

彼は異常な妄想力を持っています。つまり……………」

「あれを見る、明久」

ルークが指を指した方向には。

「……………気のせいか？血の池で倒れているように見えるぞ？」

「シグナム。大丈夫だ。アレは鼻血でどうせ変な妄想してぶっ倒れたんだろ」

「納得すべきでないことに納得できるのは彼だからこそなのか？」

「ラウラ。僕もそう思う」

「ものすごく気持ち悪いです」

カメラを構える余裕もなく血の池に沈んでいたムッツリーニでした。何を想像したのですか？そしてセラさんはそんなゴミを見るような目はやめてあげてください。さすがにかわいそうです。

「はあ、泳いだらお腹すいてきたな」

「僕もです……………」

「エリオもか？俺もだよ……………コウタは？」

「さすがにな……………腹減ったぜ」

「アタシも腹減ったな」

それから愛子も含めて皆と遊んで今は全員でプールサイドにいる。さすがに遊びすぎて腹が減ったか。

「しまった……………弁当持ってくるの忘れたんやけど……………」

「とうかみんな持ってきてるの？」

みんな持ってきていないような顔してるな。

「あ、大丈夫だよ！僕とリュウトで皆の分を作ってきたから！」

「え？そうなの？」

「ん？まあな」

多分遊び疲れるだろうと思って全員分の弁当を用意した。

「じゃあ。俺が取りに行ってくるな」

「行ってらっしゃい〜!」

で、戻ってきたら……

「……………何してんだ、お前ら？」

「……………第一回最速王者決定戦ガチンコ水泳対決」
「……………」

とりあえず今の状況を軽く説明。

このプールの全8コースには1から順にムツツリーニ、明久、秀吉、コウタ、雄二、ルーク、レン、ライガが並んでいて飛び込む体制でいた。

「……………アリサ。状況説明を頼む」

「わかりました」

てなわけで数分前に戻る………

第三者SIDE

「ところでだけどカエデ」

「何、フェイト？」

「カエデって料理できるの？」

そう、そこが疑問だった。

カエデは大抵がリュウトと真逆なのだ。

まずは勉強だがこれは酷く明久より少し上なレベルである。

そして掃除が苦手である。

とどめは運動が×なのだ。

こう見ると料理もできないと思える。

が………

「それが凄いんだ！カエデはリュウト並みに料理がうまいんだ！」

『何いいいい！？』

「え？そこまで驚くの？結構悲しいんだけど」

神崎家にお住いの方々以外は驚いている。

まあ、そりゃあそつだ。

ちなみに最初は神崎家の皆様もリュウトも含めて先ほどではないが驚いていた。

「え？でも、どうしてなの？」

「ふっふっふっ！なのは、僕はね、リュウトの目線ですつと過ごしていたんだ。だからリュウトが料理している所を見ているから大方どんなふうになればいいか覚えてしまったのだ！……まあ、それでも実際にできるか不安だったけどね？」

この時のリュウトハーレムの心境。

『（料理も完ぺきな巨乳美女………マズイ！）』

いろいろ焦っていた。

そして、もう男性陣では、

『（アレ？確かリュウトは全員分と言っていたが多分木下さんや工藤さん、清水さん、ベルカイズさんの分は無い。となると………！）』

【すまん。俺は抜きでいいけど男性陣で誰か抜いてくれないか？】

『（そんな高級料理を簡単に手放してたまるか！！）』
リュウトと同じ腕をしている人が協力して作ったものは激ウマである。

と、言うわけで……

「第一回！」 ルーク

「最速王者決定戦！」 コウタ

「目指すは高級料理！」 レン

「ガチンコ水泳対決！！」 明久、雄二

「イエエエエエイ!!」 明久、雄二以外全員

始まったのだ。高級料理を巡る聖戦^{ジハード}が。料理と言つ名の宝石を手放すのは三人!

「秀吉も参加しろ!」

「なんで!?!」

「お前を男だろうが!」

「そつだよ秀吉!」

「ルークや村雨はともかく明久はいつも女扱いしているくせに!」

「……逃がしはしない!」

「強制参加だ」

「くっ……!!まさかのムツツリーニまで!」

秀吉も半場強制的に参加させられた。

「と言っわけです」

「何だそのめんどくさい鬭争は」

まあ、空腹は抑えきれないだろうけどな。

ルールは簡単でこのプールを往復してワースト3は飯を食えないというルールらしい。まあ、俺の分はレグルスたち上げるつもりだけどな。

「ちょっとまってください」

「ん？どうした、清水」

突然清水が話しかけてきた。

「なぜ美晴があなたの制作した弁当をいただくことになっているのですか？」

「いや、アンタも腹減っただろ？」

「豚野郎なんか作った弁当なんて食べたくなんか（ぐう）……」

「ほら。腹減っただろ？いいから食えって。な？」

「づぐつ……し、しかし」

「いいから美晴。食べて見なさいって。本当においしいんだから」

「……………お姉さまが言うなら仕方なくいただきますよ」

「おっ」

空腹で倒れられても困るからな。それにみんなで食べた方がいいだ
る。

「は〜い、それじゃあ行くよ〜！」

お、工藤が審判か。さて、誰が速いかな？

明久や雄二は体育会系だから早いだろうな。ムツツリー二は鼻血の
出しすぎでピンチか？秀吉は体力がそこまでなかった気がするな。
ルークは体育が得意だしな。コウタ、レン、ライガはフェンリルで
訓練受けてたな。でもレンとライガはそこまで早くない。これはコ
ウタが有利かな？

「よ〜い……………スタートっ！」

「……………くたばれえええええっ！！……………」

『はっ？』

・今起きたこと

ルークとコウタ、明久と雄二がそれぞれに向かって全力で跳び蹴り
を放った。

何してんだ？

「雄二！卑怯な真似を！」

「その言葉、そのまま返してやる！」

「コウタ、テメエ！」

「同じこと考えてやがったなルーク」

そして取っ組み合いを始めた四人。

「ルーク……………水泳勝負なのに何をしているのかしら」

『趣旨が変わってる』

「ユーの言う通りですね」

「あいつらはバカを通り越しているんじゃないか？」

「ねえお姉ちゃん。水泳なのに、どうしてお兄ちゃんたちはまだプールに入らないのですか？」

「ねえ、パパ。どうして？」

「「みちやダメだ（よ）。バカが移るから」

「間違っではないけど……………」

「二人とも酷いと思うの……」

「甘いわよなのは、フェイト」

「そつだ。この純粋な子供たちに悪影響を及ぼさないようにしているんだ」

あのバカを移すわけにはいかない。

「取っ組み合いもいいけど四人ともそろそろ折り返しだよ？」

「……え？」「」「」

あ、本当だな。今のところはライガが速いな。次に秀吉。そしてレンにムツツリーニだ。やはり出血で弱ってるな。

「マズイ！このままじゃ！」

「じゃあねえ！俺はライガを潰す！ルークはレンを！」

「明久！俺はムツツリーニを沈める！お前は秀吉を！」

「OK！」

だから水泳だつて。あと沈めるとか潰すとか物騒な言葉を出すな。

「秀吉！ここは通さない！」

「な、なに明久！？隣のレーンでしょ！？？」

「逃がすかあ！」

秀吉にしがみつくと明久。だから水泳だろうが。

「そこをどいてくださいルーク！」

「うるせえ！宝石は渡すか！」

「どけ！コウタ！」

「シヤラップ！ここで沈んでな！」

「……雄二。邪魔だ！」

「そっはいくか！」

「お前らもう水泳関係なくね！？ただの水の上プロレスになってるじやねえか！」

水泳はどうした！！皆してプロレス始めたぞ！

「な、何かすごいことになってますね」

「シヤマル、すごいってレベルじゃないで？アレは」

「ふむ……………中々やるな。一般人であれ程とは。坂本……………侮れんな」

「……………さすが雄二」

「ラウラに霧島はツッコみどころが違つと僕は思つよ。」

「シャル……………もう、諦める」

ズルツ

ん？なんだ？今の音は。

「…アレ？なにこれ？」

そう言つた明久の手には緑色の布のようなものがあつた。

おい、それって…………

「あれ？ちよつと……………これってまさか……………秀吉の！？」

「あれ？……………ツ！？／／／／／」

秀吉の上の水着が取れていた。

『……………ッ！（ブバアアアアア！）』

明久とムツツリーニの鼻から噴水のごとく血が発射された。

あゝあ、プールが血に染まっていくぞ？

『リュウト（神崎君）！後ろを向いて！』

「お、おう！」

突然放たれた瑞希たちの気配に押されて俺は背後を向いた。

「……………死して尚、一片の悔い無し……………！！！」

この状況でムツツリーニが死にかけていることが判明した。

「あはははは……………こりゃお掃除大変そうだね」

そんなレベルじゃないぞ、愛子。

アナザー「まだプール篇は続く！」

え？まだ続くのか？しかも終わり方がggdggdだぞ？

アナザー「いつもの事じゃね？」

第20問 プール遊びは凄く疲れる。明久君たちは楽しすぎて鼻血を出さないよ

はい！ここでアンケートの結果を発表します！

リュウト「本当にこんな駄作者の駄文のイベントに参加してくれてありがとうございます」

あれ？お前が敬語なんて珍しい。

リュウト「当たり前だろ。手伝ってくれたんだから」

そうか。では、いちいち隠すのも面倒なのでサラッと結果を発表します！

リュウト「何作品出すんだ？」

2作品です！

出すのは……

「とある魔術の禁書目録」と「ハヤテのごとく！」に決定いたしました！

リュウト「不幸少年と借金執事か」

どんな感じで出すかはお楽しみください！

では、まだまだプール篇は続きます！

リュウト「プール篇ってことは……………アレか？」

はい！では、サラバッ！

第21問 風呂で暴れるな！ B Y ルーク そして理由……………（前書き）

はい、アナザーです。

今回は風呂ですね。

さあさあ、どうなるかな？。

では、本編どうぞぞー！

第21問 風呂で暴れるな！ BYルーク そして理由……

リュウトSIDE

「面白かったですね」

「うん！」

「また来たいの！」

「男性陣は掃除が辛そうだったがな……」

「血を落とすのに苦労していましたね」

「全員で協力して何とか落とせたね」

あ後に全員で協力して二人の蘇生（死んでないけどな）と血を落とす作業をして掃除はちょうど今、夕方ごろに終わった。

「……でもなんだかすごく疲れた気が……」

「明久とムツツリー二は貧血でしょうね」

あんなに鼻血が出ればそうなるな。ってか、あれって出血多量で死ぬレベルじゃないのか？

いくら表面上と言ってもプールが三分の二以上赤く染まっていたぞ。

「そうだな。それじゃ、風呂でも行くか」

「ん？そいつはいいな」

「僕も疲れたからね。ちょっとゆっくりしたいかも」

「うむ。シャルロットに賛成だ」

他の皆も疲れてるっばいな。

「確か……ここらへんには……はやてちゃん、フェイトちゃん」

「うん。スーパー銭湯があったよね」

『スーパー銭湯？』

なのは、フェイト、八神家以外全員は頭に？を浮かべているだろうな。

「なあ、リュウト。スーパー銭湯ってなんだ？」

「あー、スーパー銭湯ってのは普通の銭湯に温泉やら露天風呂やらサウナやら設備が見事な銭湯だ。食事スペースや休憩所もあるしな」

「へえ、行くこうぜ！リュウト！」

「んじゃ、皆はどうする？」

……どうやらみんなも行くみたいだな。

「それじゃ、行くか」

「はい！」

と言うわけでスーパー銭湯に到着して風呂の前で問題発生。

「……秀吉をどうするか……」

そう、レンの言う通り、秀吉だ。

今のところ何故か俺たち以外誰も来ていないようだが明久とムッツリーニはプールにて秀吉の半裸で撃沈している。風呂だと死亡する恐れがある。（出血多量で）それに公共施設を汚すわけにはいかない。

「リュウト。別に大丈夫だぞ」

「なんでだ？雄二」

どう見ても危険要素が満載だろ。

「あれを見る。ほら」

雄二はそういつて風呂の入り口を指差す。

あるのは左に女湯の入り口。右には男湯の入り口だけだ。

解決策は「バサツ！」……………

今起きたことを話そう。

真ん中にあつた巨大な布が吹き飛びそこからは「秀吉」と書かれたのれんがかかっている風呂の入り口があつた。

この時の俺達の考え

『……………世間に認知されてるんだ』

この世界に「秀吉」と言う名の性別を持つ人はいるのだろうか？

「……………ねえ、なのは」

「大丈夫フェイトちゃん。私も考えてる事同じだと思つたの」

「私もそうやと思つた」

「……………あんなのあつたっけ？」

つい最近に作られたのか!?

「……とりあえず。入るとしますか」

ライガの言うとおりだな。時間が勿体無い。

と言うわけで

それぞれ男子女子と別れた。

「……お父さん。僕はなぜか今感動しています」

「エリオ。安心しろ。ここは家とは違うんだ。肩身は狭くないんだ」

俺とエリオは今、脱衣所でなぜか風呂の男女が分かれていることに感動していた。

「リュウトにエリオ君はどうしてそんなに感動しているの?」

「いいか、明久。俺の家には誰がいる?」

「えーっと、リュウトにエリオ君にヴィヴィオちゃんにキャロちゃんにセラさんにヘルサイズちゃんにハルナちゃんにボーデヴィツヒさんにデュノアさんにカエデちゃんに……… コロス! 異端審問界に」

「落ち着け。そしてよく考えろ。俺とエリオは一応同じ部屋だ。だ

がな、風呂ではエリオはキャロとかが普通に入る。俺が入っている時にはラウラやカエデ！しかもラウラに至っては朝気が付いたら全裸で俺の布団に侵入してる！たまに束も入ってきてるし！その他もろもろ色々あるし！こっちはもう精神がズタズタなんだよ！俺はっ！俺達は！特に束のヤロオオオオオオオオオオオオ！！！」

「お父さん！気を確かに！」

「皆、リュウトを押さえつけてください！」

「ちよつと！？村雨君！ワイヤーは！？」

「無理だ。多分傷つきながらも引きちぎる」

「恐っ！」

「ムッツリーニも手伝え！」

束ああああああ！絶対に千冬が来たら制裁してやる！

その頃フェンリル。

「ハックシユン！うう？風邪かな？」

「大丈夫っすか？」

「うん。多分ね。ところでウエンちゃん」

「何っすか？」

「ちーちゃんこっちに来る予定ある？」

「突然どうしたんすか？」

「いや、たまに会いたくなっちゃってね？」

「どうやら東はウエンディと仲が良いようだ。他にも仲が良いひとがいるがそれはまだ秘密。」

「そしてもう一方では。」

「！」

「ど、どうしたんだ？千冬姉」

「いや……………なぜか今リュウトと共に東に制裁をしなければいけないと感じた」

「なんじゃそりゃ……………」

「……………今度リュウトに飯を作ってもらおうとしよう」

「千冬姉は本当にリュウトにベタ惚」

「ばっ！何を言うか！／＼／＼」

「ちよっ！？どこから出席簿なんて持ち出したんだ！？ここ家だぞ！？しかも教師じゃないのに！」

織斑家は平和であった。

「どこが平和！？」

「待てー夏ー！」

「やべっ！戦略的撤退！」

その頃、女子更衣室。

ピキイイイイイン！

『ハッ！』

突然リュウトラバーズが何かの反応を感じた。

「どうしたの？」

『またライバルが駄作者の都合で出てきたような気が！』

「駄作者って誰？」

島田様。わからないでください。と言っかリュウトラバーズは俺の事がわかるのか？

『アレ？駄作者って誰？』

知らずに言っていたのか！？

ライガSIDE

何とかリュウトの暴走を抑えることに成功した俺達は風呂へ入って

いる。

「あゝ、いい湯だ」

「あつたまるねえ」

雄二と明久はまったりとしている。

「ホントにいい湯だな。これで今までのストレスを微塵も残さず消し去ろう」

「お、おつかね。リュウト」

「僕は馬鹿バカトライアングラー三角形の始末書の事を忘れましょう。ねえ、コウタ？」

「うう……す、すまん。レン」

「お父さんにレンさん。本当に苦労してるんですね」

リュウトとレンは嫌なことを忘れようとしている。レンは色々お疲れ様だな。しかし、その程度ではあの三人は反省しないと思うがな。

「……………」

ムッツリーニは何処かをじっと見ている。どうした？

「どつたの？ムッツリーニ？」

「……………この向こう……………女湯」

「「何い!？」」

あ、明久とコウタが反応した。

どれだけスケベなんだ？工藤の時も行こうとしていたが俺がワイヤ―をつら突かせて止めたがな。お前、一応警察だからな？

『お姉さま、洗いっこしましょ。お風呂なら何があっても合法です』

『何があってもって、何する気よ?』

島田、俺の気持ちの代弁ありがとう。そして何があってもってわけじゃないから。

「よしっ、そろそろ髪でも洗うか」

「そうですね」

んっ?リュウトの言つとおりだな。そろそろ洗うとしよう。

『きゃあああああああ!』

『え、えっつと、大きくてもいいことないですよ?』

『そうだぞ、美波。肩が凝って大変だぞ？剣道でも邪魔なだけだ』

『巨乳はみんなそう言うわ！！そしてシグナム！あんたは全世界の
アタシと同じ悩みを持つ人を敵に回したわ！』

『シヤマルもデカいし！うらやましいんだよ！』

『ちよっと！？目が怖いですよヴィータ！』

『なのは！その胸についている巨大な脂肪を寄越せ！ティアでも構
わん！』

『ラウラ！？ちよっと！？』

『落ち着くのラウラちゃん！』

『…………アタシ、大きくなるかな？』

『だ、大丈夫だよ、ハルナ。まだ成長期だし』

『そういうシャルロットも結構デカいじゃん！』

『ううん。セラやカエデに比べたら……………僕なんて』

『大丈夫や。私も……………周りが。な？』

『愛子……………』

『言わないで優子……………ボクも意外に結構悲しくなるから』

『……エリオ君も大きいのがいいのかな？』

『ラウラママにヴィータママはどうしたんだろっ？』

『今から結論を言っわ！』

『『『巨乳は敵だ！』』』

最後の島田、ボーデヴィツヒ、ヴィータの叫びはかなり魂がこもっていた。

(注意：この話での男性視点の時には男湯女湯で分かれているためユーの文字が見えませんがユーが少々空気と化します。)

ユー『解せぬ』

ネタは自重すべきですよ？

REN SIDE

今僕達は髪や体などを洗っています。

「それにしてもしリュウト。お前、本当に髪の毛手入れしていないのか？」

「ん？ああ。めんどくさくてな」

「それでこのサラッサラ感は凄くないか？」

「ルークはワックスで疎の髪なんだよな？」

「おう。普通になるとこんな感じだ」

「うわ、印象変わりますね」

「そうか？エリオ」

「はい。少し変わります」

ルークの今の髪型はペタンとなっていて見た目では父さんに近い髪型になっていた。

「明久、シャンプー」

「はい」

髪を洗っている明久は雄二に小さい何かを渡した。

「……………これは俺が勝った石鹸だろ」

「これなら泡が出るからわざわざ買わなくてもいいかなーと思って」

「お前に頼んだ俺が馬鹿だったよ……………」

明久に失礼かもしれませんがその通りです。（思いつ切り失礼です）

「コウタ、どうした？」

「あゝ、悪いな、ライガ。シャンプー切れた」

「こっちもか……………」

どうやらライガ達もシャンプーがないようだ。

シャンプーや石鹼はどうやらちよつど少なくなっているらしい。タ
イミングが悪かったかな？

僕たち男はシャンプーと石鹼を二人一組でかるうじて使っている。
僕とムツツリーニのは二人で使ったらちよつど無くなった。

「おゝい、翔子。シャンプー貸してくれ」

「すまん、はやて。こちらにもシャンプーを貸してくれないか？」

「ええよゝ」

ポイツ！

まずは雄二に向かってシャンプーが投げられた。

次にライガに向かって投げられた。

「サンキュー」

「助かる」

どうでもいいですけど霧島さんと八神さんはコントロールがいいですね。見事に二人の所に投げましたし。

「……雄二。石鹼貸して」

「ほらよ」

「ライガも貸してくれへんか？」

「了解。ほら」

ポイツ！

二人が今度は石鹼を無効に投げた。

どうやら無事に届いたらしい。

『なんだか坂本君と霧島さん、村雨君とはやてちゃん、もう夫婦みたいですね』

『息もぴつたりだったよね』

「な！？余計なこと言つな姫路！その気になると面倒」ガン！ドゴ！ベキ！etc」

「……………」

今起こったことを説明します。

突然女湯から大量のおけが投げられすべて雄二にヒットしました。

霧島さん……………あなたはどうやって全て雄二にあてたのですか？

『ふえ！？ちよ、ちよっと！？わ、私が……………』

「バカ言つな姫路にハラウオン。俺みたいな奴がはやてと付き合えると思ってるのか？」

『……………』

一同絶句。と言つかりユウトや明久は絶句する資格はありませんからね？と言つかライガまで鈍感だとは……………

『そ、その……………ドンマイ！はやて』

『ありがとな……………ヴィータ……………そっちもがんばりや？』

女性たちに少し絆が結ばれたようだ。

髪や体を洗い終えた俺達は再び湯船につかっている。

明久や雄二、ムツツリーニやコウタはシャワーを浴びたりしている。

『ねえーええー知ってる?』

突然愛子の声が響く。

『銭湯の湯船つてつながってるんだよね』

「「「!」「」」

何か、覚醒したような顔をする明久とムツツリーニとコウタ。

その視線は女湯と男湯の境界線の壁の近くの湯船にあった。

『潜ったら何か見えたりして?』

「「「秘儀!ルパンダイブ!」「」」

と、ルパンダイブで風呂へと飛び込む三人。

「「「あつつあああああああ!?!」「」」

体を真っ赤にして飛び出してきた三人。

「あ、あそこは鬼しか入れない高温地帯だ!」

「が！正体がわかれば対策を撃つべし！」

「……水でよく冷やしてから！」

水をかぶりまくるバカ三人。

「『再チャレEEEEEEEEエンジンッ！』」

再びルパンダイブを行うアホ三人。

「『目が！目がああああああ！？』」

今度は目をやられたマヌケ三人。

と言つかコウタ。お前は警察だろうが。

「あはははははは！残念だったみたいだね！」

愛子………知っててやってたな。

その時、

ガララララッ

突然男湯の扉があいた。

「オイオイ。風呂では暴れるな。常識だぞ？」

そこには………

「リンドウさん？」

そこには大量の石鹸やシャンプーを持ってレンの父、雨宮リンドウが入ってきた。

「と、父さん？何してるんですか？」

ごもつともだ。第一部隊の隊長がなぜシャンプーやらを持ってきてるんだ？

「んあ？バイト」

『はあ？』

一般組はわけがわからないという感じだな。

とつかまたなのか？

「あー、父さんはビールが大好きなんです」

「でもよ、サクヤが制限を付けるから制限超えた後は自腹で買えつて言うからたまにバイトしてるんだ。今回は友人からシャンプーやらを届けてくれて言われたんだ。もうすぐ女湯に来るはずだ」

また制限超えたんだ………さすがはフェンリル1のビール好き。よく仕事中にビールを息抜きで飲んでいる。あ、ちゃんと飲酒運転とかは守ってるから。

「で？何してんだ？その3人」

「父さん。この3人は覗きをしようとしています」

「ほお、若いのに元気がいいな」

おじさんみたいな言い方はやめた方がいいですよ？

「まあ、とりあえずコウタには……………姉上からのO・S・I・O・K
Iでいいか」

「いやだああああああ！リンドウさん！どうか慈悲を！」

「うん。いやだ」

「……………神は死んだ」

だから神のランクを勝手に下げるな。

「それで？あとの二人は……………ああ。例の関係者ね？確か……………吉井
明久と土屋康太か」

「は、はい」

「ああ、なるほど。西村に教えてもらっている奴らか。たまに西村
が愚痴ってたぞ？」

は？

「あの……………父さん？西村先生と知り合いですか？」

「おう、昔の旧友だな」

『ウソオ!?!』

い、意外だ。初めて知った。レンも驚いている。

「そつだ」

と、リンドウさんは携帯を出して誰かにメールを始めた。

「……………よじつと」

その瞬間

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!

ボタン!

¥「リンドウから連絡を受けたぞ!吉井!土屋!覗きは犯罪だぞ!
今からみっちり反省文を書かせてやる!」

突然西鉄襲来。そして明久とムツツリーニを脇に抱えて連行を始めた。

「は、放してください!僕たちは覗きをしたわけではありません!」

「……………その通り!」

「では何だ!?!」

「……理想郷へ行こうとしたんです!」「」

「反省文を100枚書かせてやる!」

どんないいわけだ。

結局二人は連行されてコウタもシャンプーなどを置き終えたリンドウさんに連れて行かれた。

ああ、ツバキさんの教育的指導か……生きて帰れよ?コウタ。死んでも骨ぐらいは拾って犬の餌にしてやる。

「そろそろ上がるか」

「ん?そうか?」

「リュウト?もう結構時間がたってるぞ?」

そうなのか?

「雄二、ルーク。リュウトは長風呂が好きなんですよ」

「そうなのか？」

「ん？まあな。ゆっくりしたいって感じだな。先に帰っていてもいいぞ？その時はシャル達に伝えておいてくれ」

「わかった。じゃあ、先に出とくぞ？」

男性は皆風呂を出た。

しかし……………うん。疲れが取れる。

そう言えばここには露天風呂があるんだっけか？

行ってみるか。

と言っわけで露天風呂。

夜で冬でもないのに意外に煙が結構出ている。奥が見えない。

とりあえず入ってみるか。……………うん。いい湯だ。

「あ……………それにしても、安らぐなあ」

「え？」

……………え？なんだ？誰かいるのか？

「えっと……………神崎君ですか？」

「その声……………瑞希か？」

「は、はい」

少し煙が晴れてそこにはタオルを巻いて風呂に入っている瑞希がいた。ちなみの俺もタオルは巻いていた。

そう言えば混浴だったな……………つて！

「悪い！今すぐ出る！」

「あ！ま、待ってください！」

何で止める！？

「えっと……………一緒に……………入りませんか？／／／／」

「は？」

「お、お願いします……………」

……………なぜそこまで頼むかはわからない。

「……………わかった」

そこまで頼まれると心が痛む。

仕方なく入ることにした。

とりあえず瑞希に背を向ける形で入っている。

「……………」

スッ

ちよー！？突然瑞希が隣に寄って来て肩に頭を預けてきた。

「……………少し……………いいですか？」

「……………どうした？」

「……………どう言つのは失礼かもしれませんが……………神崎君は……………家事の時
……………どうして私を助けてくれたんですか？」

「は？」

何言ってるんだ？しかもどうい言う意味だ？

「見ず知らない私を命を懸けてどうして助けたんですか？しかも小
学生なのに。死ぬかももしれなかったんですよ？」

……………そうだな。

「俺さ……小学生の時、ヒーローに憧れてたんだ。まさに子どもだろ？」

俺は戦隊ヒーローや仮面ライダーやアニメの主人公に憧れていた。いつでもどこでも駆けつける正義のヒーロー。それを目指していた。

「それでき。仮面ライダーの映画を見た帰りに瑞希の家が火事だったんだ。その時に俺は見て見ぬふりをしようとした。でもな、どうしても……見捨てれなかった」

「どうしてですか？」

「……心かな」

「心……ですか？」

「ああ………どうしてもな………」

「………恐くなかったんですか？」

「恐かった。逃げたかった。でもな、俺はどうしても逃げなかった………俺の爺ちゃんさ………」

……… 火事で死んだんだ」

「え………?」

回想

そう、確か……… 5歳だっけ？

俺は爺ちゃんの家泊まりで遊びに行ったこと何回もあった。レンやアリサ達も一緒にな。

婆ちゃんはすでに病気で死んでしまっている。

それで爺ちゃんの家ではいろいろして遊んだ。みんな笑顔だった。

が、

ある日だ。俺達は家の中でかくれんぼをしていたんだ。それで2回のベッドの布団の中に隠れていたんだ。

それで疲れてたんだろうな。寝てしまった。

んで、気が付いて布団を取った。

目の前には

火

火、炎、火焰があつた。

幸いベッドにはまだ引火していなかった。

しかしドアが燃えていた。

恐かつた。

死にたくない。

死にたくない。

助けてほしかった。

そう願つた

ドガァン！！

ドアが突然大きく開いた。

爺ちゃんだった。家具をぶつけてドアを開けたのだ。

そのまま爺ちゃんに手をつながれて2階から降りようとしたが

俺は突然爺ちゃんに投げられた。

その時見えたのは爺ちゃんの上から屋根が落ちてきたのだ。

爺ちゃんは下敷きになった。

助けたくても投げられた痛みが走って動けない。

俺はただ爺ちゃんの名前を呼ぶことしかできなかった。

泣きながら叫ぶことしかできなかった。

が、爺ちゃんは言った

「ワシはもう助からん……………諦める」

諦めれるわけがない！

こんなところで家族を殺させてたまるか！

絶対に生きて帰るんだ！

「神崎リュウト。最後のお願いじゃ」

最後じゃない！

まだ！まだ

「人を助けよ。おぬしはヒーローになれる」

「たとえ助けたせいで恨まれても救い続ける。目の前にいる助けられる人たちを」

救済してみせろ」

その言葉を最後に爺ちゃんはピクリとも動かなくなりそれを見た俺は意識を失った。

回想終了

「その後気が付いたら病院にいた。結果、火事の原因は放火魔。そ

いつは逮捕された。そして死亡者は爺ちゃんだけ。家で他の皆は一階にいたからな。それで俺は決めた必ず助けると。つまり今の人助けをしたがりな「俺」がいるのは瑞希のおかげなんだ」

「お前の両親が必死に泣きながら救助隊をどかしてまで瑞希を助けようとするのを見たときに思った。「もしかしたら俺の家族もこんな感じだったんだな」って。瑞希を助けてたい。俺と同じ人を作りたくない。そう思って俺はお前を助けた」

「でも、これは爺ちゃん言葉もあるけど一番なのは

笑顔が見たいからだ。

これは嘘偽りない本当の気持ちだ。人の笑顔が見たい。泣き顔なんて見たくなかった。だからレグルスを泣かしたときには凄く自分を責めた。でも、いつかは笑顔を取り戻すと決めたんだ」

「……………つまり、神崎君は……………人が好きなんですわね」

「ああ、好きだ。人が好きなんだ。でも、悪人は嫌いだ。矛盾して
ると思うけど俺は
そんな人間なんだ」

俺は……………

瑞希SIDE

「……………ありがとうございます。ようやく、神崎君がどうして人を
助けたがるかわかりました」

「そんな俺が生まれたのはお前がいたからだけだな」

「ふふっ……………神崎君。私はどんな理由であれ神崎君に感謝して
います。もし、褒められたいからと言っててもです」

絶対に言わないと思いますけどね？

「感謝とか求めて助けたわけじゃない。俺は今でもお前を助けられてよかったと思う」

「ありがとうございます……………神崎君。お願いがあります」

「ん？なんだ？」

「名前で呼んでもいいですか？」

「そんなことか？いいぜ」

「はい！よろしくお願いしますね！リュウト君！」

私は神崎リュウト君の事が好き。どんな状況でも人を助けようとす
るリュウト君が好き。人が好きでも悪人が嫌い。矛盾しているけど
リュウト君の事が好き。

この気持ちは変わらない。

ずっど、ずっど……………

ライバルは多い。でも

その中で一番になって見せます。

第21問 風呂で暴れるな！ B Y ルーク そして理由……………（後書き）

はい、瑞希のターンでした。

そして女性陣がほぼ空気でした。

この文を書いて恥ずかしくなる自分がいました。

リュウトが救済するきっかけは祖父の言葉と瑞希の火事です。

笑顔が見たい。泣き顔を見たくない。人が好きだけど悪人は嫌い。様々理由でリュウトは救済します。

レグルスは責任を感じていましたがこれは救済関係なく仲直りしようとは何度も話していますがアノ「悪人」を家族と言いつけるレグルスと気が付いたら対立してしまったという訳です。

警察に入った理由はリンドウのあこがれもあります。

俺には分かりませんがもし矛盾点があったとしてもスルーしてください。修正に時間をかけるどころかまた最初から書き直さないといけなくなるパターンになると思うので。

それで、私アナザー。別の作品も投稿してみようと考えています。

とりあえず、出すのは確実です。いつかはわかりませんが。

いろんな「もしも」を取り込んだ作品になっちゃって「意味不明」だと思われます。

大丈夫かな？人気出るかな？ぶっちゃけ不安です。投稿ペースも含め。

でも、せっかく設定を書いたんだし納得がいく形になったら出してみようかなと思います。

では、次回！ようやくアンケートに選ばれた新参加作品を出せます！

では、サラバッ！

第22問 久しぶりに会っても意外に覚えていない時ってあるよな？ b y かん

はい、アナザーです。

先に言っておきますがテスト期間に入りましたので執筆は20日から28日まで休みますので結構更新が遅れます。

いつも遅いだろ？とか言わないでください。

なんかこのペースだと新しいのだったらさらにピンチになりそうです……

まあ、出しますけどね？

では、本編どうぞ！

今回から新しい作品が入ります！

第22問 久しぶりに会っても意外に覚えていない時ってあるよな？ b y かん

リュウトSIDE

「神崎。お前宛に電話が来ているぞ」

「西鉄。その時点でおかしいと思わない？」

ただ今、朝の一時限目の途中、西鉄が授業中に一本の電話を持って来た。

おかしい。おかしすぎる。急展開過ぎる。と言っか今授業中なんだけど。

とりあえず電話をもらって廊下に出た。

「はい。もしもし？」

「もしもし？え〜っと、リュウト君ですか？」

「ん？はい、そうです……っって」

聞いたことのある声だな？

「……………あ、もしかして、マリアか？」

「はい。三千院家に仕えているマリアです。お久しぶりですね」

本当に久しぶりだ。最近ナギとも会っていないからな。親がナギと知りあいだまに遊んだっけな？明久やレンたちとは会ったことが無いがな。

「んで？どうして俺に電話したんだ？」

「ええ〜っですね？今日、学校なんですけど、あの子弁当を忘れて言ったので届けてもらおうかと」

「なん……………だと……………？」

まさか……………まさか……………！

「ナギが……………学校に行っているだど！？」

「驚くとこるはそこですか？」

「いやいやいやいや！普通に考えてみる！あの！引きこもりのナギが！学校に登校だぞ！？」

「まあ、ナギは基本引きこもり体質ですが、そこまで驚かなくても……………」

いや、普通に驚くだろうな。明日は槍かアラガミバレットでも降るのか？

「とりあえず。人が授業をほったらかしてまでやることが弁当運びっておかしくね？」

「そうなのですが…………… 榊さんからも許可をいただいでるので」

「榊エ……………！」

ホントあの人は…………… 人を損は風に使うのが普通と言うかさあ！

「と言うか、命令らしいですよ？」

「うん。もう諦めがついてるから。わかった。今からそっちに向かうから待ってるよ」

「わかりました。それではよろしくお願いしますね」

PII！

とりあえず後で榊博士はボコす。

その頃、

ゾクウ！

「おお？何故だろうか？後で誰かにボコボコにされる予感が」

「どうしたんですか？風邪ですか？」

「やあ、フェデリコ。何故か後で誰かにボコボコにされる気がするんだよ」

「……………代替の見当は付きますけどね」

「え？誰なんだい？」

「知ってもすぐにボコボコにされますから意味ないですよ」

「どつしよつかな？まあいいか」

「ああ……………榊博士、冥福を祈ります」

榊に死亡フラグが立った。

「と云うわけで俺、授業抜けます」

「……………榊博士は本当に破天荒だな」

廊下にて西鉄に事情を説明した。

あの破天荒な性格はどうにかならないものか。

「んじゃ、行ってきますよ」と

と言っわけで、ただ今三千院家の門の前にたどり着いた。

「……………あいかわらずにデカいな」

さすが金持ちだな。確か昔にはコンの銅像やなぜかゴツム銅像があつた。普通にガダムでよくね？

「お待ちしていました、リュウト君」

と、門が開き、そこには一人メイド服を着た女性がいた。

彼女はマリア。このデカイ屋敷の持ち主、三千院家に使えているメイドである。

彼女は勉強、掃除、料理など性能が凄すぎるなんでもござれの超人美人メイドである。多分彼女に勝るメイドはいないのではないか？

「んで？弁当運びだっけ？あからさまに警察のする仕事じゃないけどな。後で榊博士ボコす」

「はいはい。榊さんの処刑についてはまた後でお願いします。それで、これが弁当です」

で、渡された弁当だが。

「……………重箱？」

「お気になさらずに。本当ならハヤテ君にやってもらうはずなんですけどね」

「ん？ハヤテ？誰なんだ？」

「あ、言い忘れていましたね。今、三千院家に仕えている執事の綾崎ハヤテ君の事です」

へえ、執事ね。

「で、どんな奴なんだ？」

「え、え〜つとですね？驚かないでくださいよ？」

「警察は言っただマッドサイエンティスト三人に色々やられてんだちよつとやそつとのことだ驚かないって」

「時速80キロで暴走する車に自転車を追いついて、そのままゴミのようにひかれても平気だったり、300キロもある虎タマを首投げしたり、メカを退けたり、ヤクザを蹴散らしたり、どこから持ち出したのか巨大ロボ相手に首都警特機隊ケルベロスから借りた重火器を経験者のように上手に乱射する人です」

「すまん、前言撤回。信じれん」

「大丈夫です。私でもさすがに信じれませんから」

「と言うかそいつ確実に人間じゃないだろ。人外過ぎるだろ」

「まあ、人外なのでしょうけどね？」

俺はそいつを人間とは絶対に考えれない。第一車ひかれて平気って
どついう肉体してんだよ。そしてタマ、何故首投げされた？

「とりあえず、弁当ですがよろしくお願いしますね」

「ああ。ところで、どこへ向かえばいいんだ？」

「そういえば言っていないませんでしたよね。ナギが通っているのは白
皇学院です」

「うん。あいつが頭いいのは知ってるから別に驚かないぞ」

白皇って金持ちが大量に通っておりさらには瑞希や霧島並みに頭が
いい奴ばかり通っている名門校だ。あのヒッキーは頭だけはい
いからな。

まあ、あいつが引きこもりになるのもわからないこともない。環境
が環境だからな。

「じゃあ、行ってくるな。暇になったら遊びに行くから」

「その時はお待ちしております。では、お願いします」

と言っわけで。今度は白皇の校門前まで来ている。

しっかし……………本当に立派な学校だな。特にここからでもデカい時計台が見える。まさにシンボルだな。

この中でナギを探すのは中々至難の業だな。

まあ、とりあえず入ってから考え「お待ちなさい!」……………はい?

「あなた、この学校の生徒じゃないわね。いったい何者? 正体を明かしなさい!!」

そこには昔見たことのある顔がいた。水色の髪をして額にはホクロのような瘤がある。

「……………久しぶりだな。雪路」

桂 かつら 雪路 ゆきじ。確か……………こいつともナギと同じ時期で出会った「誰だアンター! (スパアン!)」……………オイコラ。なんでいきなり出席簿で殴る。千冬かお前は。

「何馴れ馴れしく幼馴染のように名前呼んでるのよ！私の記憶の中にはあんたみたいなお人よしは見たことないわよ！」

アレ？忘れられてるパターン？と言うかお人よしで悪かったなオイ！

「いつてて………とりあえず。俺は依頼でこの弁当を三千院ナギに届け「いい加減な事を言うなー！！（ズガン！）」ぐおっ！？」

「そんなすぐさまユニセフ募金とかで大量に金を使って自分のお小遣い減らすようなお人よしの奴がナギちゃんの知り合いなわけないでしょ！むしろそのお金を私にプリーズ！」

出席簿で再び殴られた。と言うか何故知っている！？確かに募金見て自分の小遣いめっちゃ減らしたけど。しかも昔同様に金の亡者だな。

「私には不審者から学校を守る使命があるの。多少、勢いであなたを二回もぶつとばしてこれで不審者じゃなかったらマズいなくと思っっているけど私は使命を果たさねばならないの！！なぜならこれ以上お給料を減らされるわけにはいかないから」

マズイと思うのなら殴るな！不審者じゃないし！しかもその使命は結構自業自得のような部分が見える気がする。

「だから………不審者ってことで帰れ！！」

結構アバウトだな。

「ま、そういうわけにはいかないけどな。依頼は完遂しないといけ

ないし」

それにこれを届けなかったらあいつ餓死する気がするし。

「なるほど……使命対使命のぶつかりあいね」

使命っていうか命令なんだけどな。

「ちなみに私がこの使命を帯びているのは私の遅刻が多い事とは無関係よ」

関係絶対あるな。やっぱ自業自得じゃん。と言うか雪路教師やってたのか。

どうせ給料は酒に消えると思うがな。

「一応……名前を聞いておこうかしら……」

「……自分で思い出せ」

「いや、だから会ったことないってば」

いや、普通に会ったことあるだろうが。

「とりあえず！観念しなさい……あなたではこの私を抜いて校内に入ることはできなくてよ！？」

……仕方ない。

本来なら使いたくはなかったが……………

内ポケット内の麻醉銃用意！

ハンドガンはいいよね。結構携帯できるサイズばっかだからな。

（注：彼は警察ですが普通に銃刀法違反です。よい子はマネしないでね。悪い子も真似しないでね）

知り合いに使うべきではないがこれも依頼の為だ。

(意外に依頼完遂のためには容赦がないリユウトである)

さて、どうやって校内……………

読者の皆様、とりあえずまず最初に俺と雪路の目的を言おう。

俺：白皇に入ってナギに弁当を届ける。

雪路：俺を不審者と勘違い、(給料の為)白皇に俺を入れない。

で、最初の雪路と俺の立ち位置は俺が校門外で雪路が校門内だった。

暫くするとアラ不思議。

俺が校門内で雪路が校門外になっているのではありませんか。

……よし。

「グッバイ！」

「しまったあ！！いつの間にか入れ替わってたあ！！」

侵入成功。

「覚えてらっしゃい！！この借りは必ず返してあげるわ！てか私の給料減ったらあなたのせいだかね！！聞いてる！？ねえ！減ってるかな！？減ってたらちよっと貸してくれる！？ねえ！ねえっでは！！」

むしろこっちがお金欲しいんだけど！意外にカエデがエリオ並みに食うから食費にさらなる負担がかかってるんだよ！しかも太らないという全世界の女性を敵に回すような体質だ。

ナギSIDE

「え？今日お弁当がいる日だったのか？」

「ええ、午後から特別授業だから」

「あーそうなんだ、しまったな」

今日は弁当を持ってきていないのだ。どうしようか……………結構腹減
ってるんだがな……………

そう考えていると、

P r r r r r r r !

ん？こんな時に誰だ？……………マリアか。

P i !

「はい、もしもし？」

『もしもし？ナギですか？』

「そうだが、どうしたのだ？」

『はい、今日の事です。ナギ、お弁当忘れていますよね？それでリュウト君が今お弁当を届けに行っているはずですが彼からもらいましたか？』

「いいや……って、リュウトが来てるのか!？」

『はい、本当に久しぶりですけどね』

アイツとも会うのも久しぶりだな。しかし……

「まだ、来ていないが……」

『話から察するにそうですね。どうしたのでしょうか？』

何かあいつに関する情報は無いものか……

と考えていると、

「ねーねー聞きました？校内に不審者が入ったんですって」

「まー恐ろしい……」

「なんでも、とってもお人よしそうな顔で青い髪の毛が特徴の不審者で今、桂先生が必死で追いかけてるって……」

「早く捕まるとよいですねー」

……情報ゲット。

「ナギ。もしかしてリュウト様に来ていらっしやるのですか？」

「ああ、不審者とされているがな」

「大丈夫でしょうか？」

「さあな……」

………どうするか。折角お弁当を持ってきてくれたんならもらわな
いと申し訳ないからな。

不本意だがヒナギクにでも協力してもらおうか？

それと、今度リュウトにハヤテの事を紹介するか。

リュウツSIDE

一言言わせてもらう。

迷った。

迷子は伊澄の特権のはずなんだがな。

誰かに聞こうと思っても授業が始まってここら一帯さすがに人気が
なくなるからな。

これでようやく落ち着いて事務室を探せる。ってか、逃げる必要性
はあったのか？

別に本当の不審者なわけじゃないし。

「しっかし、ホントデカいな、あの時計塔。折角来たんだしな、一
番上から景色を見まわしてみたいもんだな」

どうやら俺は気が付いたら独り言をつぶやいていたらしい。

「ダメよ。時計塔の一番上は生徒会のメンバーしか入ることは許されないんだから」

「……………聞き覚えのある声だな。と言うか白皇って意外に知り合いが多いような気がするんだが？」

とりあえず声が聞こえた方向を向くと、

「……………」

「……………」

「……………木の上で何してんだよヒナ」

「……………」

「いや、そんな「ツッコまれたくないところをツッコまれた！」みたいな顔されてもな？」

こいつは桂^{かつら} ヒナギク。ピンク色のロングの髪に左前髪に黄色のヘアピンを付けている。

こいつも昔ナギと一緒に出会った。喧嘩も強く、頭もよし、運動もできる。こいつもある意味最強である。

「さ、さすがはリュウト。いきなり核心をついてくるわね」

「で、何してんだ？白皇では木登りでも流行ってんのか？」

「これが遊んでいるように見えるのかしら？」

まあ、見えないな。

「でも、危ないぞ？お前高所恐怖症だろ？」

「そんな事、言われなくてもわかってるわよ！」「…これは要するに……えーと、えーと」

無理に言い訳を考えるなよ。

「ま、状況からして平たく言えば上ったのはいいが怖くなって降りられなくなった、と」

「ひ！平たく言わないでよ！なんか私、バカみたいじゃない！」

結構バカだろお前は。

「それで……その……ちょっと、お願いがあるんだけど……」

「ん？どうした？」

「だからその……えっと……う…受け止めてね」

「はい？」

と言った瞬間、

「えいー！」

「ちよつ!？」

いきなり木から飛び降りやがった!

クソツ!

「キャッチ!」

何とか飛び降りてきたヒナを受け止めることに成功。と云うかいきなり飛び降りるなよ。

「ったく、大丈夫か？」

「え、ええ。それで…………… / / / / /」

なんで顔を赤く…………… ああ、そう言う事か。受け止めるときに抱きしめるようになっていたので今俺は緋名を抱きしめているようになっていたのか。配慮が足りなかったな。

とりあえず抱きしめていたヒナを離す。…………… なんてそんな残念そうな顔してんだよ。

「ったく、高所恐怖症のくせになんであんなとこにいたんだよ。第一、女の子がスカートで高いところに上るな」

FFF団なら喜びそうだな。

「別に平気よ?下、スパッツだし」

「はいはい、スカート捲って見せない。恥じらいを持って。それにあ

ん時言っただろ？」「言ってくればいつでも助けに行ってやる」「ってさ」

「……………そうだったわね。まだ、憶えていてくれたんだ（ボソッ）」

「何か言っただか？」

「え、ううん！別に！／＼／＼」

「大抵そういう時は何かあるんだけどな。で？どうして木に登ってたんだ？」

「しょうがないじゃない、あの子ったら巣から落ちて泣いてたんですもの」

あの子？ヒナの目線を追ってみると、木の上に巣がありそこに一羽のヒナ鳥がいた。

「まさか今時そんな理由で下りれもしない木に登ったのか？」

「な、何よ！バカにする気！？」

「ううん、いや、どっちかっていうと感心したな。色々言っただか悪かったな」

「ん……………いや、わかればいいのよ」

うん。本当に感心した。

「これであのヒナ鳥も安心……………だ……………な……………」

……皆様、危険です。先ほどのヒナ鳥の近くにカラスが来ました。しかも見事に「ぐうぐ」といかにも腹減っていますよみたいなカラスです。もうヒナ鳥涙目だ。

………つて！

「わー！バカバカ！なんなのよあのカラス！」

「マズイ！小さな命が風前の灯だ！」

「もー！バカカラスー！どっかいけー！」

「オイ！石投げようとするな！お前が投げるとヒナ鳥に当たるから！」

「ノーコンって言うてるわよね！？」

ピーッ！

「ん？アレを見る！」

こちらに二匹の小さな鳥が接近してきている！

「アレは………親鳥だわ！」

「美しき親子愛がヒナ鳥を救うんだな！」

ギロツ！ カラスがヒナ鳥の両親を睨む。

ピタッ 両親がストップする。

ピー！ピー！（パタパタパタパタ） 逃げる両親。

オイイイイイイイイイ！

「えー！？見捨てちゃうのー！？」

薄情な！なんて薄情な！

「だ……！ダメよ！ダメよそんなの！お父さんやお母さんが……子供を見捨てるようなことをしちゃ！そ……そんなのは……！そんなのは絶対……ダメなんだから……！」

ヒナ……………クソッ！

「だめえ！そんなのは絶対「どけ、ヒナ」え！？」

俺はすぐさまバッグに隠している麻醉銃、「MK22」を取り出し、

パシユン！

カラスとヒナ鳥の間に弾丸を発砲した。

あ、ちなみにナギ達もだけどヒナも俺が警察だってことは知っているから問題ない。サブレッサーを装着しているから発砲音に関する問題ない。

「さて、カラス？引いてくれない？じゃないとさ」

「次は脳天な？」

まあ、麻醉銃だからよほどの所にヒットしないと死なないと思うけど。

バサッ！

おお、ちゃんと話し合えば理解してくれた。(話し合い？)

「よし、一件落着」

「じゃないわよ！何いきなり銃弾発砲してるのよ！」

「大丈夫、麻醉銃だから」

「そういう問題じゃないわよ！それにもしヒナに当たったらどうするの！？」

「大丈夫、絶対にあてない自信があるから」

「……まあそうでしょうけどね？」

あ、そこで理解するんだな。

「まあ、いいわ。それでリュウト。さっき時計塔に登ってみたいって言っていたわよね？」

「ああ、そうだけどさ？あれって生徒会の人じゃないと入れないんだろ？」

「大丈夫よ……その生徒会長は……私だから」

……………マジDE？

「まあ、確かに委員長的な超生真面目な人間だけだな。お前は」

「悪かったわね、超生真面目で。別にいいけどね。じゃ、行きましょよ？」

俺はヒナに時計台に連れて行ってもらった。

アレ？何か忘れてるような？

はたしてリュウトは依頼を完遂できるのか！？

といつかその前に思い出せるのか!?

次回へ続く!

第22問 久しぶりに会っても意外に覚えていない時ってあるよな？ b y かん

はい！まずはハヤテのごとくを入れました。

介入方法が結構むりくりな気がしますますが気にしない気にしない。

そして前書きで言ったとおりさらに執筆が遅れます。

それまでは気合で出来る限り書きますけどね？

ととモノ。の新作を買いきたいけどお金が無くて半泣きです……………。

というか今年はなぜか欲しいソフトが大量に出ている気がします。

武装神姫やティルズやモンハンや……………皆様も財布には気を付けてください。

では、サラバッ！

先に言っておこうと思ひまして……………あ！凍結ではありません！新作について
どうもー！アナザーです

リュウト「で、バカとテストとアノ人達の主人公にされた神崎リュウトだ。で？新作ってどういうことだ？」

いや、妄想でできたのをたまに書いてみたら結構できてさ、せっかくだし何個かは投稿しようと思つてさ？

リュウト「ちよつと待てコラ。お前…………ただでさえこの作品の投稿遅いのには別の作品を作って投稿したらどうなると思つてるんだよ！」

うん、でもさ、さすがに一作品だけじゃ寂しいかなつて？

リュウト「んで？何作品だすつもりなんだ？」

今のところは二作品だ。まあ、どんなのかは秘密だけだね。

リュウト「どうせ駄作だろ」

駄作で結構！ちなみにすべて設定？何それ？食えるの？状態のご都合主義だと思われませう！

リュウト「そんな堂々宣言されても……………」

多分更新速度にさらなる遅さが追加すると思われませんが新作を先ほど言ったとおりに二つ出してみます。もちろん駄文です。」

リユウト「というかそのためだけにバカテスに投稿したのか？」

いやさ、活動報告に書いても見ない人はいるんだからさ。確実に見てくださいと「オイコラ、何してんだよ駄作者。更新遅すぎだろワレエ」とか言われそうだし。」

リユウト「そもそもこの作品楽しんでくれている読者がいるかどうかだ。最近めつきりgdgdだし。誤字脱字は消えないし」

それでは報告はここまでです！二作品を同時には出しませんよ？まずは一つ出してみようと思います。いつ出すか不明ですが。

よし！今日からテスト勉強しなければ！成績ギリギリだ！

では、サラバッ！

第23問 なあ、最近終わり方が無理やりじゃね？BYリュウト

しっ！そや

簡単な前回のあらすじ

マリア「あなたは頭がいいのもう勉強なんてどうでもいいでしょう？だから白皇に行ってナギに弁当届けてください。ちなみに榊さんの命令です」

リュウト「あれ？あらすじなのに嘘入ってね？勉強なんてどうでもいいわけなくね？持って行くけど」

白皇にて

雪路「不審者帰れー！」

リュウト「四五年で忘れられてる！？とりあえずエスケープ！」

白皇内にて

ヒナギク「銃刀法違反で逮捕」

リュウト「確かに警察が麻酔銃持つのはおかしいけど、って！こんなシーン前回なかったよな！？」

と言っわけで本編へGO！

リュウトSIDE

なんか変なあらすじが出てきた気がするが気にしない。

「にしても……………すごい景色だな、こいつは……………」

今俺はヒナに白皇の時計塔のてっぺんにいる。ここから見渡す景色は凄いな。白皇全体も見渡せる。夜に来てみたいな。

「ふ……………どっ？素晴らしいでしょ？この時計塔からの眺めはまさに絶景……………あまりの美しさに瞬きすら忘れてしまいそうになるでしょ？」

「ヒナ、そんな奥からじゃ見えないと思うんだけどさ」

ヒナは窓から背を向けているソファに座ってミルクティを飲んで
いた。

「私はいいの。心の目で見てるから」

高所恐怖症だろ、って言ったら殴られそうなのでやめておく。

「しっかし本当に校内の様子がよく見えるな。グラウンドや廊下を
歩いてる奴まで。あ、廊下で転んでメロンパン台無しにした奴発見。
三秒じゃなくて六秒たって食べたな」

「よくそこまで細かく見えるわね。でも、ここに生徒会室があるの
はそこまで細かくじゃないけど生徒の様子をしっかりと見つめるため
なんだから」

「ヒナ、お前はここから見たことあるのか？」

「私はいいの。目ではなく心の声を聞くことにしてるから」

こいつはホントに高いとこ嫌いなんだな。

「ってかさ、もう授業始まってるっばいけどヒナは出なくていいの
か？」

「……………」

……………なぜ黙るんだ？ヒナ。

「……………ヒナ？」

「あーもあーうるさいうるさいだまれー！仕方ないじゃない！チャ
ー坊助けてるうちに授業が始まつちゃったんだから！途中からなん
て恥ずかしくて入れないでしょ！」

「まー、その気持ちは分かるけどさ。ところでチャー坊って何？」

「さっき助けたヒナ鳥」

「命名理由は？」

「茶色のスズメだからチャー坊」

「……………」

「何よその「うわっ！単純！」みたいな目は！こういうネーミング
って無理に考えるよりも単純さが大切なのよ！無理に無駄にかっこ
いいような名前を考えるよりいいじゃない！主人公の名前だつて一
般的な鈴木とか山崎とか単純な奴でもいいじゃない！」

「うん。まあ、無理に考えてヘンテコな名前になるのも嫌だからな
神崎って一般的かな？どうだろうか？」

「って、少し話しすぎたな。俺の目的はナギに弁当届ける事だったな。
イカンイカン。忘れていた。」

「じゃあ、俺そろそろ行くから。ナギに弁当届けるのが依頼だし」

「あなた、それ警察の仕事」

「ヒント1 榊博士」

「うん。納得した」

さすが榊博士。ヒナとは一度しか会っていないのに一発でどれだけ無茶な人か見破られてる。

「ま、とりあえず暇になったり仕事できたりするかもしれないからな。大金持ちの依頼でな」

「ホントに警察とは思えないわよね」

「最近俺もそう思ってきた。けど、結構いい奴ばっかだし楽しいんだ。気に入ってるぜ」

一部は覗く。榊博士やジェルや榊博士やジェルや……………

もうすぐエレベーターが来るな。この時計塔、エレベーターあるからいいな。

……………っ

「ヒナ、下がれ」

「え？」

俺はMK22をエレベーターに向けてヒナと共に距離を取る。

ちよつとばかり感じたんだよな……………殺気をな。

「不審者発見！」

つて雪路かよ！

「お！お姉ちゃん！？」

そう言えばヒナは雪路の妹だったな。

「くつくつくつ！不審者め！ここで会ったが百年目！まあ実際は百年なんてたつてないけど……………人間の寿命から考えてこのセリフを言葉通りの意味で使った奴なんてきつといないから大丈夫！」

「いたらどうするんだ？まあ、実際はそうかもしれないけどさ」

「てことで今スグデストロイ！」

「会話の流れがおかしくないか！？」

何故いきなりデストロイさらなきやならんだ！？

「待つてよお姉ちゃん！お姉ちゃんリュウトのこと知ってるでしょ！？」

「そんなもの私の記憶にないわ！あるのは諭吉と酒のみよ！」

「俺の存在は酒にも劣るのか！？」

結構ショックだぞそれ！？飲み物に負けたんだぞ！？

「とりあえずくたばれ不審者！」

雪路は近くの鎧から剣を取りこちらに襲い掛かってきた。と言うかそれマジ物だから！危ないからな！

反射的に引き金を引いてしまったが、

カチッ！

あ、あの時が最後の弾だったんだな。リロードしていないからマガジン内空だな。しかも今日マガジン全部空だな。点検してないからこうなったのか。

って、さすがに知り合いを銃や拳で殴るのには気が引けるんだが……
……気絶させるしかないか。仕方な「ガキーン！」ん？

「ぬーヒナー！」

「ヒナか……？」

ヒナがどこから出したのかサーベルで雪路の剣を受け止めていた。

と言うか本当にどこから出したんだ？言っとくけどお前ら銃刀法違反だから、それ。明らかにフェンシングのレイピアでもないマジ物のサーベルなんだけど。人の事言えんけど。

「まったく……訳のわからない事して……しかも！リュウトの事まで忘れて……だいたいお姉ちゃん……」

ギリギリギリギリ……ギリツ！

お、ヒナが押してきた。

「私に向かってボケとは何よボケとは……！」

ガンツ！

「ぬっ……！」

おお、はじき返した！

「腕を上げたわねヒナ！けどその程度じゃお姉ちゃんのパッション、若い息吹は止められないわ！給料のプライスダウンも止められない」

両方止めるべきだ。給料は大切だからな。その気持ちはよくわかる。

「よく言うわ。私、お姉ちゃんにケンカで負けたことなんて一度もないじゃん。負けたところがあるのはお姉ちゃんその無駄に重ねた

年齢としの数だけよ

「な!?!」

他にもあるぞ?金の無駄遣いとか。と言っかヒナ、女性に年齢で悪口はやめとけ。

「いくら妹とはいえ……許さないわよヒナ……!」

ほら怒ってる。

「別にお姉ちゃんに許されなくてもいいもん。それより先月化した二万円はいつ返ってくるのかしら?」

「な!?!」

今度は金で攻めて来たか。と言っか雪路、いい加減ヒナから金借りるのやめとけ。

「ひ……卑怯だぞ!諭吉を人質にとるなんて!」

「とってないわよ」

「諭吉は偉いのよ!?!」学問のすすめ「は340万部も売れたのよ!?!」

「知らないわよ」

………なんかさ、俺蚊帳の外だよな。主人公なのに。

最初は俺と明久とルークの三人を主人公として書こうとしていたらしいのに。

アナザー「ちよっと!? 何黒歴史を話してんだよ!」

気が付いたら「オリ主の方が書きやすい」ってなったんだよな。

アナザー「裏話をいちいち引つ張り出すな!」

「あー、あのさ。お二人さん? 俺さ、この弁当ナギに届けなきゃならん」獲った

「!」は?

弁当が一瞬にして雪路の剣によって取られた。

そして雪路は後ろへ飛び、テラスのフェンスに乗った。

「お姉ちゃん!」

「ククク……ヒナ、これを返してほしい?」

雪路……お前、かなり悪役になっちまってんじゃんか。

せこさや大人げなさもかなり上昇してるし。

「でも来れるのかしら? 高所恐怖症のあなたに」

「!」

そう、ヒナが高所恐怖症の事をいいことにこの行動をとっているのだ。せこい。さすが雪路。せこい。

「来れないなら今すぐその不審者をこっちに渡して、二万円をチャラにきなさい」

そしていまだに忘れられている俺。しかもちゃっかり二万円を無しにしようとしている。本当にせこさに磨きかかっているな。

「ヒナ。無茶しなくても「大丈夫」え？」

「バカにしないでよお姉ちゃん。私は白皇学院生徒会長・桂ヒナギク！お客様、それに知り合いを不審者扱いすることなんて断じてさせないんだから！」

ヒナ……………お前の生徒会長としての誇りは凄いな。かなり強くなってる。お前は本当にすごいな。

「……………ふ」

雪路が少し笑った。もしかしてこのために？いや、でも結構忘れられてたのは本当だよな。

「さすが我が妹「ゴオオオオオオオ！」へ……………？」

その瞬間。

テラスに風が強く吹き雪路はフェンスから足場を動かされ空中にいる。

つまり……………マズイ！

「うああああああ！」

「お姉ちゃん!！」

「まったく! こういう時にライガからワイヤー術教えてもらってよかったって思うぜ！」

「俺はすかさずバッグから練習用だが強度は十分のワイヤーを取り出し右手のワイヤーで弁当を掴み左手のワイヤーで雪路を捕縛する！」

「お……お……お……」

「まったく、危ねえだろ。んなとこ登ったら」

「とりあえず雪路を上へ上げ後は弁当を回収する。」

「あ、あははははは。相変わらず規格外ね、リュウトは」

「あ、思い出した？」

「ごめんごめん。本気で忘れてたわ。ホントにゴメンね！」

「ま、思い出してくれたからいいけどさ」

結構傷ついたけどな？あと、ヒナは腰を抜かしていてその場に座り込んでいた。

「あ……ありがとう……リュウト……お姉ちゃんを……」

「気にすんな、ヒナ。それに言っただろ？「言ってくれればいつでも助けに行つてやる」ってさ。もちろん言わなくてもヤバいところは助けるぜ」

「うん……！本当にありがとう！」

こいつの悲しむとこなんて見たくないからな。

「んじゃ、そろそろナギに弁当を届けないといけないんでね。じゃあな」

ミッションは無事に成功。この後ちゃんとナギに弁当を届けることに成功した。

伊澄もいたから少し雑談をしてから帰つたけどな。ハヤテってやつ の事も聞いた。

どうやら約一億五千万の借金を親に押し付けられヤクザに売り飛ばされそうになったところを誘拐されそうになったナギを助けて借金を肩代わりしてくれたからそれを返済するために執事をやっているのか。

にしても………最低な親だな。自分たちが産んだ子供を売り飛ば

す。そんなのは親とは言えない。ただの人でなしだ。出来ればハヤテには幸せを手に入れてもらいたい。

ちなみにナギはハヤテにベタ惚れのようだった。んで、からかったらボコボコにされた。地味に痛いぞ？足を蹴るな。髪を引っ張るな。四十八の殺人技をかけるな。オイ、ロードローラーどっからもってきた。

とりあえず、ミッション終わったし家に帰るか………あ、その前に買い物しとかないとな。あー、でも財布忘れた。いったん家に帰るか。

と言っわけで自宅前。なんかまだ昼なのになんかなり疲れがたまってるんだけど？

とりあえず財布だな。玄関の鍵を開けてドアを開ける。

がちゅ。

「お帰りなさい。ご飯にします？お風呂にします？それともわ・た・し？」

バタンツ！

.....待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て！

疲れてんだ！そうだ！疲れてるから幻覚が見えて幻聴が聞こえたんだ！あいつがここにいてるわけがない！束ならありえてもこいつはあり得ない！あいつは俺が中学のときいたとこに所属していたはずだ！

なんであいつがここにいてるんだ！？なんであいつは裸エプロンなんだ！？

いやいやいやいやいや！イカンイカン！気のせいだ。そうだ。そうだ、気のせいだ。次開けたら誰もいないはず。

がちやつ。

「お帰り。私にします？私にします？それともわ・た・し？」

「オイコラ選択肢が一つになってんだけど？」

なぜだ……

「楯無………なんでここにいるんだよ！しかも俺んち勝手に侵入しやがって！不法侵入だろうが！」

「ふっ………私の前では鍵なんてないのと同然よ？」

「その前に犯罪ってことに気づけ！」

「というかさあ………リュウトくんさあ………私の事」本当の名前」で呼んでよ………すねちゃうよ？」

と、今度は涙目で訴えかけてきやがった。

………はあ………俺も甘いな………

「わかったよ、『薫^{かおる}』？」

「うんうん………よろしい………」

こいつの名前は「更識たてしき 楯無たてなし」

こいつもフェンリルの一員で、ある部隊の隊長だ。

部隊名「反撃カウンター」の隊長だ。

年齢は確か俺より一つ上。中学の時いろいろ世話になった。学校でも警察でも。

そしてこいつの「本当の名前」。

もともとこいつの家「更識家」は警察の特殊部隊所属の指揮者でもあり、フェンリルと直接つながっているのだ。更識家は当主に必ず「楯無」と名付ける。それでこいつは十七代目の「楯無」である。本当の名前が「薫」。家族以外では俺だけ呼ばれることを許されている。理由を聞こうとしたが「ひ・み・つ」でごまかされ続けた。

「んで？なんで人んちでしかも裸エプロンで不法侵入してんだ？」

「そんなの決まってるじゃん！リュウト君を誘惑しに来たんだよ！あ、あと水着来てるから」

「誘惑はいらん。帰れ。とりあえず買い物行きたいから。食料が結構ヤバイ。ラウラ達の分もあるし」

「ん？今、聞き捨てならない言葉が聞こえたんだけど？」

「は？どういうことだ？」

「ねえ、リュウト。この家には誰が住んでるの？」

「へえ、そんなことがあったんだ。 (うん、まあ、束さんが住み行っていない分いいかな?)」

「そ、そうなん、で、す……………」

畜生。関節があり得ない方向に曲がって別次元の生命体みたいなるところだったぞ。

「で、ご理解いただけたでしょうか？」

「うん。わかった、仕方ないもんね」

またO・HA・NA・SIはいやだ。

「んで。買い物行きたいんだけど？」

「それじゃ！私も手伝ってあげるよ？」

うん……………まあ、意見はあった方がいいよな。

「わかった。とりあえず着替えて来い」

「はい」

そう言っただ薫は着替えが置いてあるのかシャルとラウラの部屋へ行った。

「……………アレ？そういえばあんなかわいらしい黄色いエプロンシャルがラウラ買ってたっけ？」

その頃文月、

「くしゅん！」

「どうしたの、シャルロット？」

「うん？どうしたんだろう。風邪かな？」

「大方どっかでなんか言われたんだろう」

「雄二？何を言ってるのさ。シャルロットが何か問題を起こしたみたいじゃないか」

「いや、たとえば……………隠していた何かがばれたとか」

「隠す？うん……………（も、もしかして、リュウトを誘惑するために買っておいた裸エプロンのためのエプロンがばれたとか？いや！リュウトは人の部屋に勝手に入らないし天……………」

楯無の使用方法は間違っていないかった。

はい、薫に着替えて貰って今は買い物に出ております。

「うん、こっちの方がいいと思うよ？」

「でもなー、値段たけーし」

「よく見る！賞味期限や量も！値段も大事だけど、どれくらい持ってどれくらいの量があるかも大切だよ？」

「なるほど……………そんな見方もあるのか……………」

意外に楯無のアイデアは参考になる。あーいうところさえなければいい奴なんだけどな。

「お嫁にしたいくらいでしょ」

「最近俺の周りは超能力者だらけと思う時期があるんだが
心を読む奴らが多すぎだろうが。」

「あら……………？リュウトくん？」

「ん？ああ、マリアか」

「え？マリアさん？」

声をかけられたと思ったたら買い物かごを持ったマリアがいた。マリ
アの隣には水色の髪で黒服を身に纏っている男がいた。

「……………なあ、薫。あれってさ……………」

「(うん、だろうね)」

「(そっだよな、よし……………)」

「薫、向こう行くぞ」

「わかった」

「え？ちよつと？リユウト君に楯無さん？」

「言つなマリア。俺達はもうわかつてるから」

「そうそう デートの邪魔になるし私たちは移動しよう！」

「ちよつと！？／／／／」

「よし、行くぞー薫（棒読み）」

「わかつたよー（棒読み）」

「ちよつと！待ってください！二人とも！ちよつと

！？」

マリア二人を説得中。

「ああああああああああああああああ！？」

と思いきや実はO・H・A・N・A・S・Iであった。

「わかつていただけましたか？」

「はい……………（ガクガクブルブル）」

何があったのかは聞かないでくれたら幸いである。

「んで？そっちのアンタは？マリアの知り合いか？」

とりあえず復活できた。

「あ、はい。僕の名前は綾崎あやさき ハヤテと言います」

ん？ハヤテ？

「マリア。もしかしてお前が言ってたハヤテってコイツ？」

「はい。彼が新しく三千院家の執事になった綾崎ハヤテ君です」

「なるほど……………お前がマリアの言ってた超究極人外生命体なんだな」

「マリアさん？僕の事をどう説明したんですか？」

「時速80キロで暴走する車に自転車で追いついて、そのまま「ミニ」のようにひかれても平気だったり、300キロもある虎タマを首投げしたり、メカを退けたり、ヤクザを蹴散らしたり、どこから持ち出したのか巨大ロボ相手に首都警特機隊ケルベロスから借りた重火器を経験者の

ように上手に乱射する人だと聞いたが？というかどつから重火器盗つてきた」

「ちょっと待ってください！一部マリアさんがいなかったところがあるじゃないですか！なんで知ってるんですか！？」

「ナギがうれしそうに話してましたよ？」

「ね、ねえマリアさん？彼って本当に人間？」

「楯無さん。大丈夫です。一応人間と言う分類に入っていますから」

「一応ってなんですか一応って！」

「「「「いやいやいや、十分怪しいから」」」」

時速80キロの車にひかれても平気とかまずありえないだろ。

「うん。とりあえず置いて。買い物の続きしないとな」

「そうだね。マリアさんは何を買います？」

「そうですね。とりあえずお肉ですね」

「ちょっと！？置いとかないでください！大切ですから！」

とりあえず急いで買い物しないとみんな帰ってくるな。

「え？スルーですか？折角出番なのに？僕こんなオチですか？」

第23問 なぁ、最近終わり方が無理やりじゃね？BYリュウト

しっ！そや

はい、GDGDです。手抜きと見られるかもしれませんがこれでも頑張ってるんです。これを手抜きって言われるのは凄く心が痛いんです。どうやったら他の作者様みたいに綺麗に閉めれるのか……………

リュウト「んで、ハヤテは介入できたわけだが。とあるはどうするんだ」

今書いてるよ？

リュウト「じゃあ、もう一つ質問だ。日常編はどこまで続くんのだ？もう読者飽き飽きしてるだろ」

もう飽きてるって。

リュウト「とりあえずちゃんとバランスは考えて書けよな」

了解ツと。

リュウト「んで？新しく出す作品の2つの内の一つ、「IS」と「創聖のアクエリオン」のクロスオーバーだったっけ？そっちは？」

うーん。多分文章はこれより短くなるとは思っけどまだ納得できない部分や設定があるからね。

リュウト「今年中にちゃんと出せよ？」

わかっていますよ。

では、サラバッ！

第24問 ある日の日常? () ≡ 短編 () 前書き

感想に案が書かれていておもしろそうだったので書きました。コ
ラボや短編案で面白そうだったら書こうと思います。

案送られても全部はやりませんがね？

この案は匿名Xさんにもりました。

本当は「もしも家に帰って玄関を開けたら裸エプロンの美人メイド
がいたら？」なんですが無理な部分があったので一部修正して「も
しも朝起きたら裸エプロンの知り合いがいたら？」ということにし
ました。

匿名Xさん、すみません。どうしても無理な部分があったので。

後、TMNETさんもすみません。とあるは次回から出しますので。

では、短編どうぞ！

第24問 ある日の日常? () 〓 短編 ()

パターン1・村雨ライガSIDE

「……………んっ……………朝か……………」

今日は休みか……………

さて……………まずは朝飯を作らなければな……………

朝を食べなければ力も出ないからな……………

ガチャ

「おはようライガ」

バタン！

「……………疲れてるんだ。俺の家に朝からはやてががいるわけがない」

そっだ、疲れているんだ。次開けた時には誰もいないはずだ。

ガチャ

「ちょっと！ライガ！なんで閉めたんや！結構恥ずかしいんやで！
／／／／」

「ならするな！」

ダメだ。現実を見よう。何故か俺の家にはやてが裸エプロンでいた。

合鍵を返してもらおうか？

「で？何しに来た」

「何って……………ご奉仕に来たにきまつとるやん……………／／／／」

「そうか……………」

とりあえず……………」

「な、なんや？」

ガチャッ！

「へっ？手錠？なんや？SMプレイとか好きなんか？」

「強制わいせつ罪の現行犯で逮捕」

「違う！違うんや！」

「それなら早く服着ろ」

「わかった！わかったから手錠外して！」

手錠を外したらちゃんと服を着てくれた。

本当に何しに来た。

「（なんでや……全然反応してくれへんってことは私には興味が無いのかな？）」

ライガも意外に鈍感である。

パターン2・坂本雄二SIDE

「朝か………」

折角の休みだ。翔子に振り回され「…おはよう、雄二」………
待て。

ちいっと待て。

「おい、翔子。何で俺の部屋にいる。そして何故裸エプロンなんだ?」

「…男の子はみんなこんな格好が好きだって……………」

「おい、誰にそんなことを聞いて」

「…雄二のこの本（エロ本）に書いてあった」

「なぜ見つかった!？」

「バカな!天井裏に隠していたのに!何故わかったんだ!?!俺の聖書が!」

「…………雄二がそんな趣味でも私は受け入れる」

「違う!というかお前にやってほしいわけじゃない!」

「…………雄二のえつち……………」

「違うんだああああああああああああああ!」

パート3・アッシュユSIDE

「……………朝だな」

今日の予定はヴァンとの試合だったな。

その後は自由。ヴァンにまだ勝てるか知らねえけど……………いや、勝つ。

多分とか生半可な覚悟じゃいけねえ。

常に「起きましたか、アッシュ」……………

二度寝するか。

ナタリアが裸エプロンでいるなんて気のせいだ。白昼夢だ。

ガチャ

「おーい、アッシュ……………どうぞ、お楽しみください」

パターン4・リュウトSIDE

俺、神崎リュウトは本日二度寝をした。休みだからこそ休む。ただでさえ色々疲れるようなことばかり起きているのだ。もう体はボロボロだ。

今家には俺以外誰もいない。エリオやキャロ、ヴィヴィオやハルナは遊びに出かけ、シャル、カエデは用事があるとか、ユーとセラ、ラウラはフェンリルへ行っている。

時計をしてみる。よく見るともう13時だ。さすがに起きないとな。

「……………んんっ!……………」

ヤバい。窓から差し込む日があったかい。

つてか、着替えないと……………

ガチャ

『おはようございま

ボタン

「お休み」

まだ寝ぼけてるみたいだな。そういえばまだ目がしばしばする。

誰も薫、なのは、フェイト、アリサ、シャル、カエデが裸エプロン

でいたのを夢と思っているわけではない。

とどうか夢であってくれ。

「もー、起きてよ、リュウト」

頼む薫。もう疲れて眠たいんだ。とどうか休みの日ぐらい休ませろ。

「むー。いいよ。起きてくれないのなら

「

は、布団を取るつもりか？そんなんで俺が起きるとでも」「リュウトの「自重」を皆で」「自重」するよ？」「おはようございます。皆様

「おはよう、リュウト」

薫頼む、その笑顔やめる腹が立つ。

「とどうかためえら何しに来たんだよ

「え、えつとね？リュウト君？／／／／

「私達は……………その……………／／／／

「はい……………えつと……………／／／／

「ぼ、僕たちね？／／／／

「えつと……………ね？／／／／

「リュウト君を襲いに来たんだよ？」

「「「「サラッとばらした!?!」「「「「
なるほど……………」

「わかった」

「「「「「え!?!」「「「「「

「着替えてくるから待ってる」

そう言つて俺は部屋を出て、

着替えて、

「^{エスケープ}逃走!」

逃げた。

「「「「「あ!?!逃げた!」「「「「「

「皆!早く着替えて!追撃するよ!」

「「「「「了解!」「「「「「

チツ、さすが薫。指示が早い。しかし!

折角の休みだ!フェンリルに連行されてたまるか!

パート4・明久SIDE

「うん……………ハッ！」

あ、悪夢を見た！突然朝起きたら姉さんがいきなりキスをしてきたのだ……………

夢にしてはリアルだったからヤバいと思ってたけど夢でよかった……………

「って、もう13時かあ……………」

寝すぎたかな？まあ夜更かししてたしね。

それじゃ、起きようかな。

ガチャ

「おはようございます、アキ君。今日の朝ごはんは私で

ボタンッ！

「よし、リユウトに電話だ」

姉さんは僕の家の鍵は持っていない。だから不法侵入だ。

って！

「アレ？電波がおかしい」

なんで圏外？

「甘いですね、アキ君。すでにこの部屋には電波妨害装置を設置しているんです」

「いつの間に!?!」

部屋の主の許可も得ずに!?!

「というかどうやって作ったのさ!」

「アキ君を思う気持ちがあれば姉さんはアラガミを素手で殺してみせましよう」

「姉さんって何者!?!」

というかその設定初めて聞いたよ!?!

「というかなんで裸エプロンなのさ!」

「もちろんアキ君と」「自重」をする為です」

「今回下ネタ多すぎ！」

「いいじゃないですか」

「よくないよ！色んな意味で！」

「隙あります！」

「しまっ！？」

そして僕は姉さんにベッドに押し倒された。いろんな意味でヤバイ！

「というか姉さんいつ返って来たのさ！」

「いいですか？姉さんが返ってきたのには理由があります」

「理由？」

姉さんはとても真剣な顔をしている。何かあったのだろうか？

「この作品にR18のタグをつけて投稿できないような描写を付けるためです」

「理由が最悪すぎる！」

「では、アキ君？覚悟してくださいね？」

「ちょ！ダメダメダメ！アナザーはこれでも頑張ってるんだからこ
んなところで終わらしちゃ
」

「ダメだああああああああああ！ハッ！」

……夢か……危なかった。あと少しでこの作品がとても危な
いことになるところだった。

よかったよかった……

第一姉さんがこっちに来るはずがないよね……一人暮らし最高！

が、明久はしばらくしてから姉がこちらに来るなんてこの時は夢に
も思っていなかった。

第24問 ある日の日常? (＝短編) (後書き)

はい、今回で出た玲さんの設定は全部ウソですからね?素手でアラガミとかムリですし、アラガミは召喚獣以外いませんし。

これから暇になったり面白い案が来れば書いてみようと思います。

そして!

何と!今回は初めてプレゼントをいただきました!

リュウト「おお……………マジでか……………(息絶え絶え)」

……………どうしたの?

なのはたちから逃げてきたんだよ!

そ、そうですか……………では!プレゼント報告です。レン君!お読みなさい!

レン「わかりました。え〜っと、裂やん様からで神崎家に米を100?、そしてじゃが芋、人参、きゅうり、大根、玉葱を各種段ボール2箱ずつです」

リュウト「おお!裂やん様!ありがとうございます!これで財布に少し余裕が……………!」

レン「まあ、エリオだけでなくカエデも大飯ぐらいですからね」

リュウト「本当に助かる！」

レン「あ、あともう一つ。肉体年齢操作薬です」

リュウト「……………何それ？」

レン「実験中の物らしいですが……………えっと、橙夜さんからは「服用方法は、この丸薬を呑むだけ。効力は、赤いので10歳引き上げ、青いので10歳引き下げる。維持時間は服用から24時間。時間が過ぎれば10分ごとに1歳分ずつ本来の肉体年齢に戻っていく。それと副作用はないが、連続服用はおススメしない。その辺はまだ実験してないからな」ということらしいです。後、年齢引き上げは成長率を自動計算しているらしいので現在から計算された十年後の自分になるそうです。確かに女性は服用しないほうがいいですね」

リュウト「未来に絶望したらアレだもんな……………」

はい！ありがたくプレゼントいただきました！

リュウト「これからもプレゼントは受け付けるらしい」

レン「駄作者への攻撃でも構いません」

え？死亡フラグ！？

リュウト、レン「では、サラバッ！」

それ俺の台詞！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1213t/>

バカとテストとアノ人達

2011年11月2日02時14分発行